

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU MAE TA
坂長前田遺跡

2011

財団法人 鳥取県教育文化財団



坂長前田遺跡（西から大山を望む）



1 坂長前田遺跡出土鉄製品



2 坂長前田遺跡出土小札
(左：表 右：裏 実寸)

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところではありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成20年度および21年度に調査を行った坂長前田遺跡では、縄文時代後期の土坑をはじめ、古墳時代以降の多くの溝が発掘され、土器、石器、木製品のほか鉄製の本小札など多彩な遺物が出土し、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。そして、このたび、それらの調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 井上善弘

例 言

1. 本報告書は、鳥取県の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団が、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成20・21年度に行った坂長前田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
坂長前田遺跡：鳥取県西伯郡伯耆町坂長字前田2342番地ほか
調査面積：9,519㎡
3. 本報告書で示す標高は、3級基準点3－9を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。真北は、座標北に対し、約32' 19" 東偏する。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2,500地形図「岸本町全図」、および国土地理院発行の1/50,000「米子」を使用した。
5. 本調査にあたり、調査後航空写真撮影、調査前測量、出土遺物の放射性炭素年代測定・蛍光X線分析・植物珪酸体分析、保存処理を業者委託した。
6. 本報告書に掲載した遺構・遺物の実測・浄書は財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所で行った。
7. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は文化財主事が撮影した。
8. 本報告書の執筆は第2章・第5章第3節、石器の記述を高橋、それ以外を野口が行った。編集は野口が行った。
9. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導・御協力いただいた。明記して深謝いたします。

（五十音順 敬称略）財団法人米子市教育文化事業団、鳥根県古代文化センター、西部土地改良区、鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センター、伯耆町教育委員会

凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には「マエタ」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号」を記入した。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SK：土坑、落とし穴 SD：溝、自然流路
3. 発掘調査時における遺構名・番号、包含層名と報告書記載時の遺構名・番号、包含層名を一部について変更したものがあある。新旧の遺構名・番号対照表は下表に示した。
4. 遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。
土器・土製品：1/4、石器：2/3・1/2、鉄製品：1/2、木製品：1/4、1/8
5. 本書における土層色調・土器色調は、基本的には『新版 標準土色帳』による。
6. 遺構図・遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
■：土器赤彩、石器研磨・再加工 ■：木製品漆塗布、被熱痕
7. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、瓦質土器をトーンをとし、それ以外のものは白抜きで示した。
8. 遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
9. 本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記参考文献に基づいており、時期区分及び文章中の表記は下表に従っている。

参考文献

- 柳浦俊一2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年—中津・福田K 2 式土器群、縁帯文土器群の地域編年—」
『島根考古学会誌』第17集
- 清水真一1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編一』木耳社
- 牧本哲雄1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
- 田辺昭三1981 『須恵器大成』角川書店
- 巽淳一郎他1983 『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会
- 八峠 興1998 「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中近世土器の基礎研究』
Ⅷ日本中世土器研究会
- 乗岡 実2008 「備前焼の編年について」『備前焼』山陰中世土器検討会

遺構・包含層名新旧対照表

新	旧	新	旧
SD13	近代溝5	7層	B・D区黒色土
3層	A区4層		C区4層
4層	A区6層	8層	B・D区黒灰色土
5層	A区7層	9層	C区5層
6層	B・D区耕作土2層	10層	C区6層
	C区3層	11層	C区7層

目次

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯……………1

第2節 調査の経過と方法……………2

(1) 調査区の名称と調査方法……………2

(2) 調査の経過……………2

第3節 調査体制……………3

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境……………5

第2節 歴史的環境……………5

第3章 坂長前田遺跡の調査成果

第1節 調査の概要と層序……………9

第2節 縄文時代の調査……………15

第3節 弥生時代の調査……………24

第4節 古墳時代の調査……………29

第5節 古代の調査……………31

第6節 中世の調査……………47

第7節 近世および時期不明の遺構の調査
……………51

第8節 遺物包含層の出土遺物……………53

(1) A区……………53

(2) B～D区……………53

(3) 遺構外出土石器……………63

第4章 自然科学分析の成果

第1節 放射性炭素年代測定……………71

第2節 坂長前田遺跡出土鉄製小札の表面に
見られる赤色物の蛍光X線分析……………75

第3節 坂長前田遺跡の植物珪酸体……………79

第5章 総括

第1節 調査のまとめ……………83

第2節 坂長前田遺跡出土の小札……………85

第3節 紀成盛について……………86

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

插图目次

第1图	調査地位置图	1	第40图	SD 3	37
第2图	遺跡位置图	5	第41图	SD12	39
第3图	周辺遺跡分布图	7	第42图	SD12出土土器	40
第4图	坂長前田遺跡基本層序	9	第43图	SD12出土石器(1)	41
第5图	第4遺構面遺構配置图	10	第44图	SD12出土石器(2)	42
第6图	第3遺構面遺構配置图	11	第45图	SD12出土遺物	43
第7图	第2遺構面遺構配置图	12	第46图	SD14・18	43
第8图	第1遺構面遺構配置图	13	第47图	SD14出土土器	44
第9图	SK 1	14	第48图	SD14出土石器	45
第10图	SK 1出土土器(1)	15	第49图	SD14出土遺物	46
第11图	SK 1出土土器(2)	16	第50图	SD 9出土遺物	47
第12图	SK 1出土石器	17	第51图	SD 9	47
第13图	SK 3	18	第52图	SD 9出土石器	48
第14图	SK 3出土土器	18	第53图	SD10	48
第15图	SD 4出土土器	18	第54图	SD10出土遺物	49
第16图	SD 4	19	第55图	SD10出土石器	50
第17图	SD 4出土石器	20	第56图	SD11	50
第18图	SD 5・6断面图	20	第57图	SD13出土遺物	51
第19图	SD 5・6	21	第58图	SD 7	52
第20图	SD 5出土土器	22	第59图	SD13	52
第21图	SD 5出土石器	23	第60图	A区包含層出土土器	53
第22图	SD 6出土土器	24	第61图	2層出土土器	54
第23图	SD 6出土石器	25	第62图	2層出土木製品	54
第24图	SD 8出土遺物	26	第63图	2層出土金属製品	55
第25图	SD 8	27	第64图	6層出土土器	56
第26图	SK 2	28	第65图	6層出土金属製品	57
第27图	SD15・16・17・19	30	第66图	6層出土遺物	58
第28图	SD15出土土器	31	第67图	7層出土土器	58
第29图	SD15出土木製品	31	第68图	7層出土遺物	59
第30图	SD15出土石器	32	第69图	8層木製品出土狀況	60
第31图	SD16出土土器	33	第70图	8層出土遺物	61
第32图	SD17出土遺物	33	第71图	8層出土木製品	62
第33图	SD19出土土器	33	第72图	9層出土遺物	63
第34图	SD 1	34	第73图	10層出土遺物	64
第35图	SD 1出土石器	35	第74图	石鏃(1)	65
第36图	SD 1出土遺物	36	第75图	石鏃(2)	66
第37图	SD 2出土遺物	36	第76图	削器等	67
第38图	SD 3出土石器	36	第77图	楔形石器・石核	68
第39图	SD 2	37	第78图	磨製石斧・石鋤	69

第79図	凹石・砥石	70
第80図	暦年較正結果	74
第81図	暦年代の分布	74
第82図	鉄製小札表面の赤色物の蛍光X線分析(1)	77
第83図	鉄製小札表面の赤色物の蛍光X線分析(2)	78

第84図	坂長前田遺跡の機動細胞珪酸体分布図	80
第85図	坂長前田遺跡の機動細胞珪酸体	82
第86図	小札名称	85
第87図	平安時代末の遺構・遺物と紀成盛に関連する伝承地	90

挿表目次

表1	測定試料及び処理	71
表2	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	72
表3	試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数表	79
表4	中世甲冑の小札寸法	85

表5	土器・土製品観察表	93
表6	石器観察表	98
表7	金属製品観察表	102
表8	木製品観察表	103
表9	歯骨観察表	104

巻頭図版目次

巻頭図版1	坂長前田遺跡(西から大山を望む)
巻頭図版2	1 坂長前田遺跡出土鉄製品

2	坂長前田遺跡出土小札 (左：表 右：裏 実寸)
---	----------------------------

文中写真目次

写真1	紀成森長者之塔碑	89
写真2	クサイ公の墓	89

写真3	聖観音座像(東照寺)	89
-----	------------	----

図版目次

PL.1	B・C・D区全景(上が西)
PL.2	1 遺跡全景(北西から)
	2 A区完掘状況(南西から)
PL.3	1 SD5・6検出状況(西から)
	2 SD5・6完掘状況(南西から)
	3 A区第2遺構面土器出土状況 (南西から)
	4 SD1～3検出状況(東から)
	5 SD1～3完掘状況(東から)
	6 A区第1遺構面完掘状況(北から)
PL.4	1 SK1上面土器出土状況(北東から)

2	SK1土器出土状況(北から)
3	SK1完掘状況(北から)
4	SK2完掘状況(北から)
5	SK3完掘状況(東から)
PL.5	1 B・C・D区SD14～19完掘状況(東から)
	2 B区SD14・15完掘状況(東から)
PL.6	1 C区SD15・16完掘状況(北東から)
	2 C区SD15土層断面(東から)
	3 SD8完掘状況(北から)
PL.7	1 B区SD12完掘状況(北東から)

	2	SD12土層断面（南から）		2	8層出土土器
	3	D区SD12完掘状況（西から）		3	8層出土土器
	4	C区SD12完掘状況（東から）		4	8層出土土器
PL.8	1	SD1完掘状況（北から）		5	8層出土土器
	2	B区SD11完掘状況（東から）	PL.26	1	9層出土土器
	3	B区SD9完掘状況（北東から）		2	9層出土土器
	4	B区SD10完掘状況（北東から）		3	9層出土土器
	5	D区SD9・10完掘状況（西から）		4	10層出土土器
	6	SD7完掘状況（南から）	PL.27	1	包含層出土金属製品
PL.9		SK1出土土器		2	包含層出土金属製品X線写真
PL.10		SK1出土土器	PL.28	1	包含層出土鉄製品
PL.11	1	SK2・3出土土器		2	包含層出土鉄製品X線写真
	2	SD2・4出土土器	PL.29	1	包含層出土鉄製品X線写真
PL.12		SD5出土土器		2	土馬
PL.13		SD6出土土器		3	127内面
PL.14	1	SD5出土土器	PL.30	1	木製祭祀具
	2	SD5出土土器		2	舟形木製品
	3	SD6出土土器		3	板状木製品
	4	SD6出土土器	PL.31	1	曲物
	5	SD8・16・17・19出土土器		2	容器
PL.15		SD15出土土器		3	漆器椀
PL.16	1	SD15出土土器	PL.32	1	木製生活具
	2	SD15出土土器		2	下駄（表）
	3	SD1出土土器		3	下駄（裏）
	4	SD1出土土器	PL.33	1	板状木製品
	5	SD1出土土器		2	SD13・2層出土木製品
PL.17		SD12出土土器		3	W21（左：表 右：裏）
PL.18		SD14出土土器	PL.34	1	SK1出土石器
PL.19	1	SD12出土土器		2	SD4出土石器
	2	SD14出土土器	PL.35	1	SD5出土石器
	3	SD14出土土器		2	SD6出土石器
	4	SD13出土土器	PL.36		石鏃
PL.20	1	SD9・10出土土器	PL.37		石鏃
	2	SD13出土土器	PL.38	1	石匙・削器等
PL.21		A区包含層出土土器		2	楔形石器・石鏃未成品
PL.22	1	2層出土土器	PL.39	1	石錘
	2	2層出土土器（表）		2	磨製石斧
	3	2層出土土器（裏）	PL.40	1	凹石・敲石
PL.23		6層出土土器		2	砥石・硯
PL.24		7層出土土器	PL.41	1	使用によって破損した石鏃
PL.25	1	8層出土土器		2	初心者が製作した石鏃

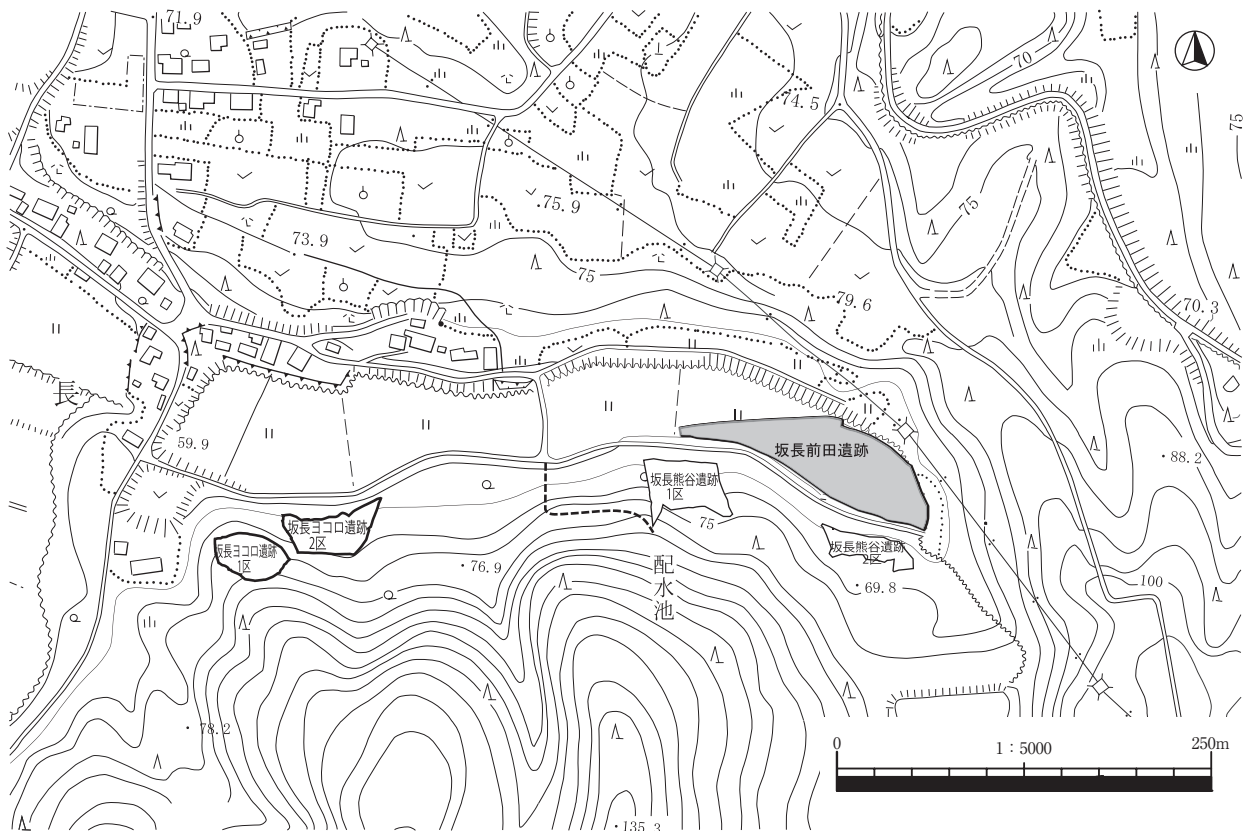
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、平成20・21年度に一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴って実施した西伯郡伯耆町坂長の工事予定地に所在する坂長前田遺跡の発掘調査である。

坂長前田遺跡は「周知の埋蔵文化財包蔵地」ではなかったが、周辺には会見郡衙に関連する遺跡をはじめ、多くの周知の遺跡が存在する。そのため、道路建設工事に先立ち、伯耆町教育委員会が国（文化庁）及び県の補助金を受けて、平成20年度に試掘調査を実施した。その結果、溝などの遺構が検出されたほか、土師器、須恵器、弥生土器や黒曜石の石鏃、剥片などの遺物が出土したことから、遺跡であることが確認された。

この結果を受け、鳥取県県土整備部および西部総合事務所県土整備局は鳥取県教育委員会事務局文化財課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、現状保存は困難であり記録保存を行うとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県は西部総合事務所長名で、文化財保護法94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出し、事前発掘調査の指示を受けた。そのうえで、鳥取県は発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託することとした。そこで、当財団理事長が鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出したうえで、当財団調査室が平成21年2月から調査を実施した。



第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

(1) 調査区の名称と調査方法

坂長前田遺跡は、越敷山から派生する丘陵に挟まれた谷部の遺跡である。標高約60mに立地する。調査地には、昭和50年代に行われた圃場整備による畦畔、水路が存在したことから、便宜的にこの畦畔、水路を境に、東からA区、B区、D区、C区に調査区を分け調査を行った。

調査地の基準点及び方眼測量については、世界測地系公共座標第V系に載るように、調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東杭名の名称である。座標は、東端のH18杭(X: -68760m、Y: -84480m)、西端のC3杭(X: -68710m、Y: -84630m)などとなった。

表土は、重機によって除去した。遺構及び遺物包含層などの掘り下げは人力で行い、排土はベルトコンベアーを用いて、隣接地、及びA区の調査終了後はA区に集積した。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判カメラにより地上又は写真用組み立て足場上から行った。また、遺跡完掘状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影(ブローニー判カメラ使用)も併せて行った。遺物写真撮影は、ブローニー(6×7)判及び4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用するとともに、デジタルカメラも適宜使用した。

(2) 調査の経過

調査は、平成21年2月23日から3月17日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、それと併行して3月6日から業者委託により基準点の打設と方眼測量を行った。

発掘作業員の稼働は、3月9日に開始し、3月11日からA・B区の遺物包含層の掘削を行い、3月18日からA区、3月23日からB区の遺構検出作業を行った。平成20年度の調査は3月26日をもって終了し、平成21年度の調査を4月7日から開始した。4月9日にはB区でSD1、4月10日にはA区でSD1～3を検出し、遺構の掘り下げ作業に入る。また、B区では縄文時代後期の土坑、SK1も検出した。

5月29日からC区、7月14日からはD区においても作業を開始する。B区を含めC・D区の北側は古墳時代から中世後半までの3層4面の遺物包含層、遺構面が確認され、6月24日にSD10・11、7月6日にSD12、9月8日にSD14～17などの溝状遺構を検出した。10月21日まで確認された遺構の検出、掘削作業を行い、10月23日に調査後航空撮影を実施した。その後、遺構実測を行い、10月28日に現地でのすべての作業を終了した。

調査結果は、縄文時代から近世までの落とし穴1、土坑2、溝15、自然流路4などの遺構を確認した。延べ調査面積は9,519㎡となった。

このような調査成果を知っていただくために、10月24日に、一般の方々を対象とした現地説明会を開催し、74名の参加をいただいた。

現地調査終了後、直ちに報告書作成作業に移り、平成23年3月に本報告書を刊行した。

調査日誌抄

2月23日(月)	表土剥ぎ開始	6月3日(水)	A区作業終了
3月6日(金)	調査前地形測量・方眼測量開始		B区SK1遺物取り上げ
3月9日(月)	発掘作業員稼働	6月25日(木)	SK1完掘
3月11日(水)	A・B区遺物包含層掘削	7月14日(火)	D区検出作業開始
3月18日(水)	A区検出作業開始	8月19日(水)	D区SD10検出
3月23日(月)	B区検出作業開始		伯耆町ふるさと探検隊(児童ら25名)遺跡見学
3月26日(木)	平成20年度の調査終了		
4月7日(火)	平成21年度の調査開始	10月23日(金)	調査後航空撮影
4月24日(金)	B区SK1検出作業	10月24日(土)	現地説明会
4月30日(木)	A区SD5・6検出作業	10月28日(水)	現場撤収
5月29日(金)	A区SD5・6完掘		
	C区遺物包含層掘削開始		

第3節 調査体制

平成20年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局 長 中村 金一

事務職員 岡田美津子(兼務 調査室事務職員)

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 久保穰二郎(本務 県埋蔵文化財センター所長)

次 長 石本 富正

文化財主事 大川 泰広(鳥取県教育委員会 派遣)

事務職員 岡田美津子

福田早百合

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄

文化財主事 高橋 浩樹(財団法人米子市教育文化事業団 派遣)

高橋 章司(鳥取県教育委員会 派遣)

坂本 嘉和(鳥取県教育委員会 派遣)

平成21年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充
事 務 局 長 中村 金一
事 務 職 員 岡田美津子（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）
次 長 石本 富正
事 務 職 員 岡田美津子
福田早百合

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄
文 化 財 主 事 湯原 敬雄（鳥取県教育委員会 派遣）
高橋 章司（鳥取県教育委員会 派遣）
野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣）

平成22年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘
事 務 局 長 漆原 貞夫
事 務 職 員 岡田美津子（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 松井 潔（鳥取県教育委員会 派遣）
次 長 石本 富正
事 務 職 員 岡田美津子
福田早百合

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室 岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄
文 化 財 主 事 高橋 章司（鳥取県教育委員会 派遣）
野口 良也（鳥取県教育委員会 派遣）
馬路 晃祥（鳥取県教育委員会 派遣）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

坂長前田遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町坂長に所在する。

周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変える。日野川の右岸は主に、大山のさまざまな火山噴出物からなる緩やかな台地で、第四紀更新世に形成された。一方、今回調査した遺跡が位置する日野川左岸は主に、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山碎屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部はやはり大山上中部火山灰で覆われている。この他に、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形も見られる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になった。

調査対象の坂長前田遺跡は、越敷山から派生する丘陵に挟まれた谷部に立地する。この谷は湧水が豊富で、坂長前田遺跡の上方には現在も水源地が存在する。この谷の北側には長者原台地が広がり、多くの遺跡が分布する。

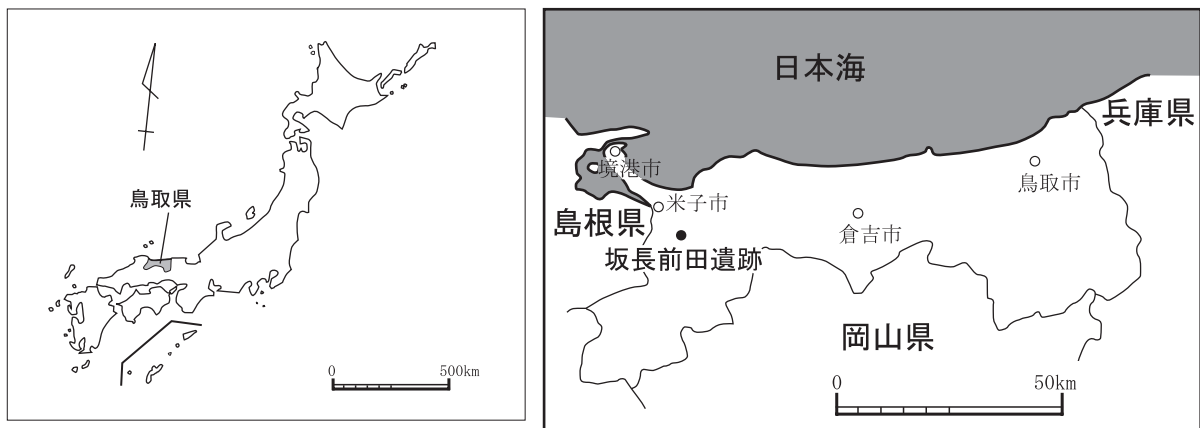
第2節 歴史的環境

旧石器時代

長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、ナイフ形石器がローム層中から出土した。2点のナイフ形石器はともに珪岩製で、小型の石刃を二側縁加工したものである。坂長村上遺跡（50）からも、黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。この他に、泉中峰遺跡（79）と小波原畑遺跡（80）からナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。

縄文時代

坂長村上遺跡からは、多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする草創期の石器群が出土した。他に、貝田原遺跡（61）、奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器が見つまっている。



第2図 遺跡位置図

早期後半から、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られ、上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成され、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期になって新たに出現する遺跡は少なく、後期になると再び増加する。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多く見つかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が発掘されていて、妻木晩田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後・晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は内部に竪穴住居等をもたない点で注目される。

中期後葉以降は遺跡数が増加し、丘陵上には、妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区・仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）は環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代

主要な前期古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。墳丘規模20m前後の比較的小さな古墳が多い。

中期古墳としては、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。他には画文帯神獸鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。

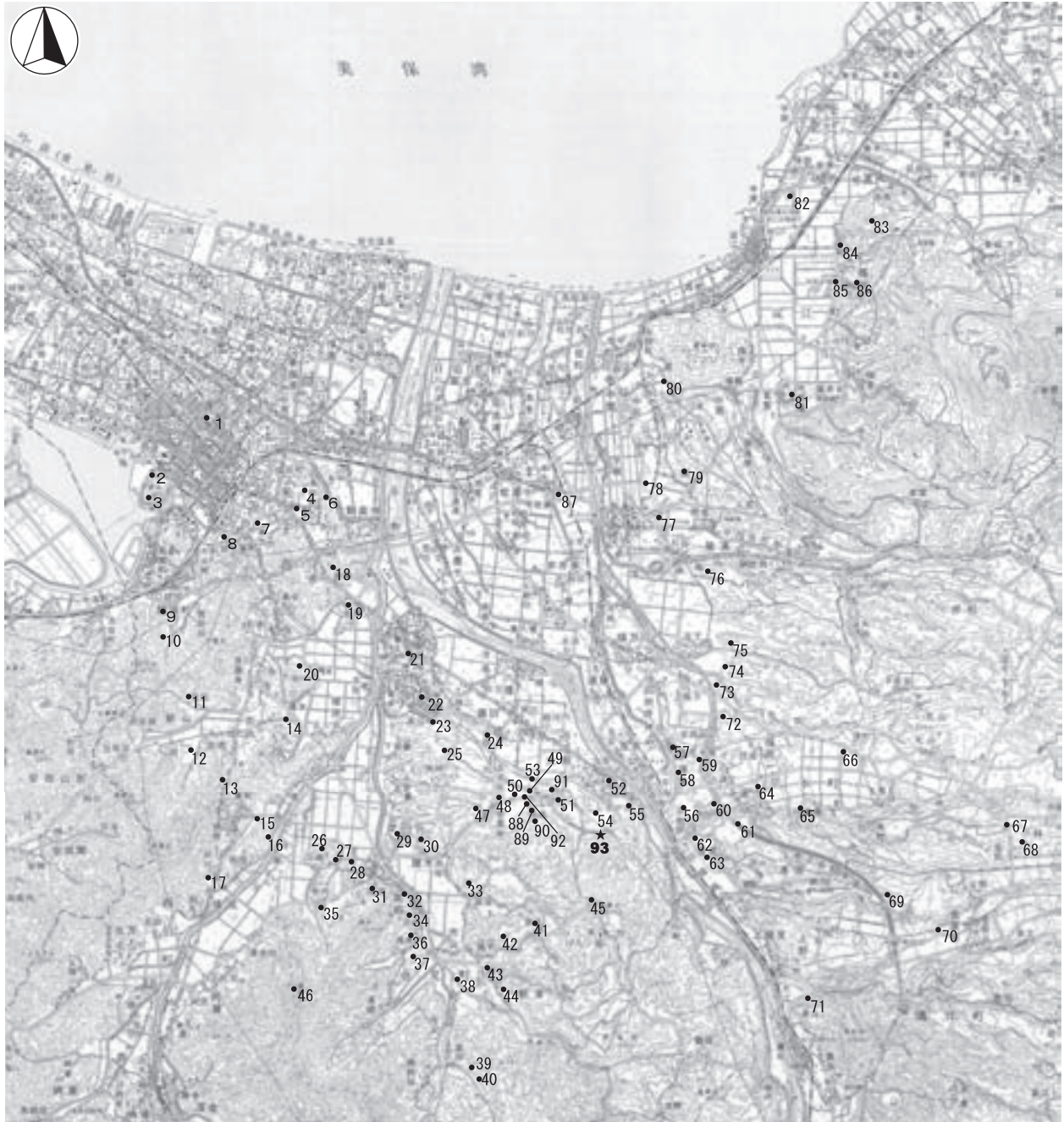
後期に入ると古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが縁辺部に、丘陵地帯には越敷山古墳群が形成される。吉定1号墳（63）の割石小口積みによる持送り式横穴式石室や、東宗像5号墳（18）の横口式箱式棺などは、九州地方との関連性を窺わせる。終末期には、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営される。

この時代の集落遺跡は、主に台地上や丘陵上に分布し、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものが多い。坂長第8遺跡（89）では中期中葉の竪穴住居跡が3棟発掘されていて、付近に比較的規模の大きな集落跡が存在する可能性がある。

古代

白鳳期には、大寺廃寺（52）が創建される。東向きの法起寺式伽藍配置を取り、金堂の瓦積基壇と三段舍利孔を持つ塔心礎が確認されている。石製鴟尾は全国に他に1例しかない。創建時の瓦と同一文様の瓦は金田瓦窯（39）からも出土したという。長者原台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残る。奈良末から平安初めの瓦が散布しているが、伽藍配置等は明らかでない。

『和名類聚抄』によると律令制下において周辺地域は伯耆国会見郡にあたる。長者屋敷遺跡（48）や坂長第6遺跡（92）などでは大型の掘立柱建物跡が確認され、会見郡衙の施設である可能性が高い。



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|------------------|
| 1 錦町第1遺跡 | 17 清水谷遺跡 | 33 田住古墳群 | 49 坂長下屋敷遺跡 | 65 番原遺跡群 | 81 井手勝遺跡 |
| 2 久米第1遺跡 | 18 東宗像古墳群 | 34 宮前遺跡 | 50 坂長村上遺跡 | 66 須村遺跡 | 82 今津岸の上遺跡 |
| 3 米子城 | 19 日原古墳群 | 35 普段寺1号墳 | 51 坂中廃寺 | 67 真野ブナ遺跡 | 83 妻木晩田遺跡 |
| 4 長砂第1・2遺跡 | 20 奈喜良遺跡 | 36 浅井11号墳 | 52 大寺廃寺 | 68 藍野遺跡 | 84 晩田遺跡 |
| 5 長砂第3遺跡 | 21 福市遺跡 | 37 浅井土居敷遺跡 | 53 長者原古墳群 | 69 林ヶ原遺跡 | 85 向山古墳群 |
| 6 水道山古墳 | 22 青木遺跡 | 38 天王原遺跡 | 54 坂中第5遺跡 | 70 下山南遺跡 | 86 上淀廃寺跡 |
| 7 池ノ内遺跡 | 23 樋ノ口第4遺跡 | 39 金田瓦窯 | 55 岸本大成遺跡 | 71 長山馬籠遺跡 | 87 今在家下井ノ原遺跡 |
| 8 目久美遺跡 | 24 諏訪西山ノ後遺跡 | 40 両部太郎窯 | 56 岸本古墳群 | 72 石州府古墳群 | 88 坂長第7遺跡 |
| 9 陰田遺跡群 | 25 別所新田遺跡 | 41 荻名遺跡群 | 57 岸本遺跡 | 73 上福万遺跡 | 89 坂長第8遺跡 |
| 10 奥陰田遺跡群 | 26 三崎殿山古墳 | 42 田住松尾平遺跡 | 58 岸本要害跡 | 74 日下寺山遺跡 | 90 坂長下門前遺跡 |
| 11 新山遺跡群 | 27 天萬土居前遺跡 | 43 朝金古墳群 | 59 岸本下の原遺跡 | 75 日下古墳群 | 91 大殿狐谷遺跡 |
| 12 古市遺跡群 | 28 宮尾遺跡 | 44 朝金小チャ遺跡 | 60 久古第3遺跡 | 76 尾高浅山遺跡 | 92 坂長第6遺跡 |
| 13 吉谷遺跡群 | 29 諸木遺跡 | 45 越敷山遺跡群 | 61 貝田原遺跡 | 77 尾高城 | 93 坂長前田遺跡 |
| 14 橋本遺跡群 | 30 後谷山古墳 | 46 手間要害跡 | 62 口別所古墳群 | 78 尾高御建山遺跡 | |
| 15 福成石佛前遺跡 | 31 天万遺跡 | 47 荒神上遺跡 | 63 吉定1号墳 | 79 泉中峰・前田遺跡 | |
| 16 福成早里遺跡 | 32 宮前3号墳 | 48 長者屋敷遺跡 | 64 久古北田山遺跡 | 80 小波原畑遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図

坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）からも円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土した。なお、相見駅家も付近にあったと考えられる。北方の台地上では諏訪西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺が、樋ノ口第4遺跡（23）で石帯が出土している。

古代山陰道は、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通して、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されている。

『延喜式』等によれば、古代にはこの地方から鉄が貢納されていたことが知られる。坂長第6遺跡（92）では、多くの鉄滓や羽口などが出土し、郡衙に伴う官営製鉄工房として注目される。坂長村上遺跡や長者原18号墳（53）周溝上層などからも多くの鉄関連遺物が出土しており、この地方での製鉄の開始が、文献に記された年代よりも大きく遡ることは確実である。

中世

平安時代には各地に荘園が発達し、遺跡周辺は八幡荘に含まれていたとされる。

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承が残る。

南北朝時代には大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年（1565）に、杉原盛重に焼き討ちされた。坂中地区の旦那寺である普門寺は、元はこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長4年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世

西伯耆は、吉川広家・中村一忠・加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡・伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

坂長村は、明治11年（1878）に、坂中村と長者原村が合併して成立した村である。『伯耆志』の記載によれば、安政頃の坂中村は67戸280人で、長者原村はわずか2戸12人であった。

長者原台地では、石田村吉持家により佐野川用水の開削事業が実施された。事業は元和4年（1618）から数回の中断を経ながら約250年にわたり、文久元年（1861）にようやく完成を見た。これにより、荒蕪地であった長者原台地は水田・畑地となり、現在に至っている。

【参考文献】

地質調査所 1962『5万分の1地質図幅説明書 米子』（岡山一第18号）

山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』

岸本町 1983『岸本町誌』

会見町 1996『会見町誌 続編』

米子市 2003『新修 米子市史』

第3章 坂長前田遺跡の調査成果

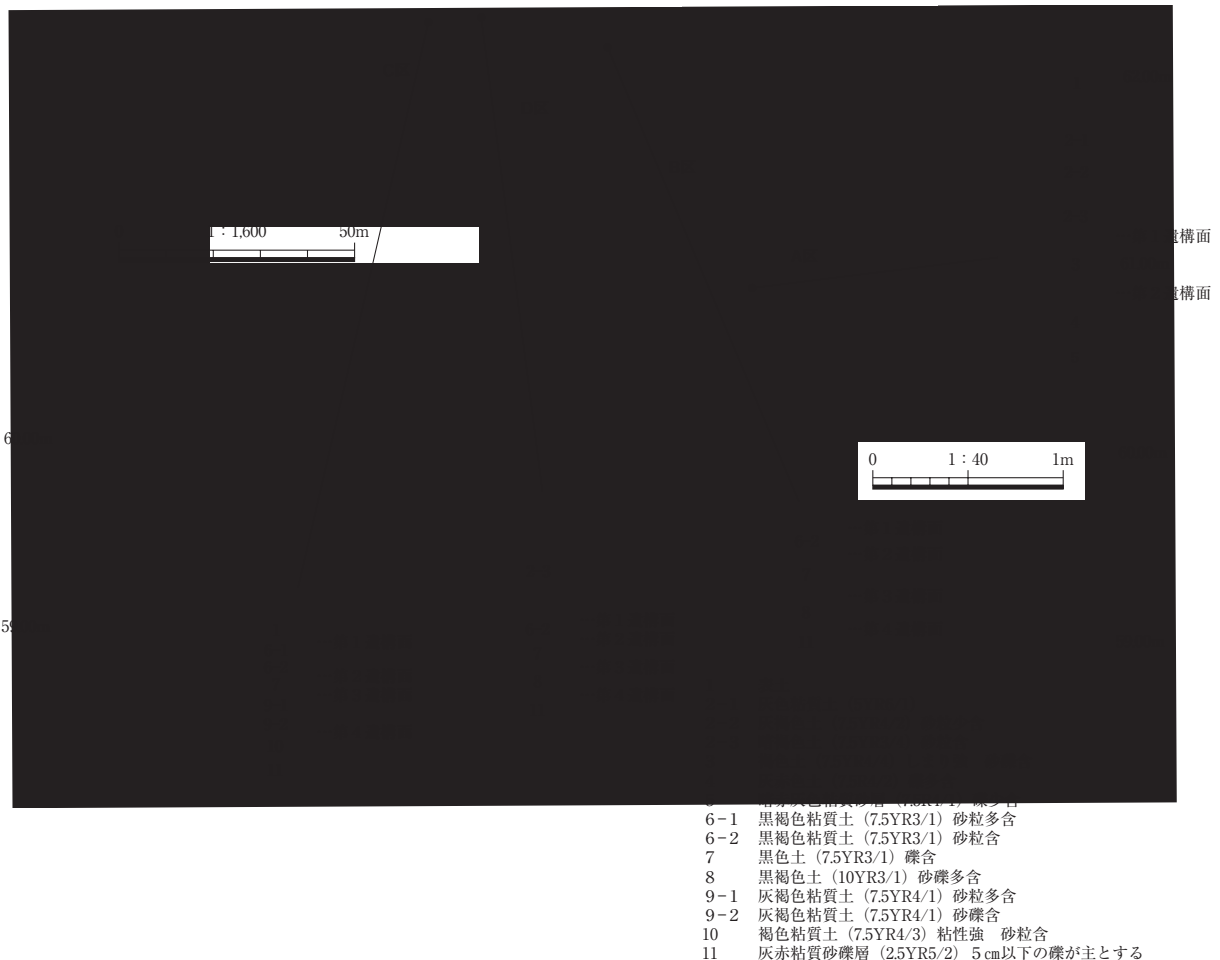
第1節 調査の概要と層序

坂長前田遺跡の調査は、調査区内に昭和50年代に行われた圃場整備の畦畔が存したことから、便宜にこの畦畔を境に、東からA区、B区、D区、C区と調査区を分け、A・B区の調査は平成21年2月23日から表土剥ぎを行い、3月9日から作業員を稼働して調査を始めた。

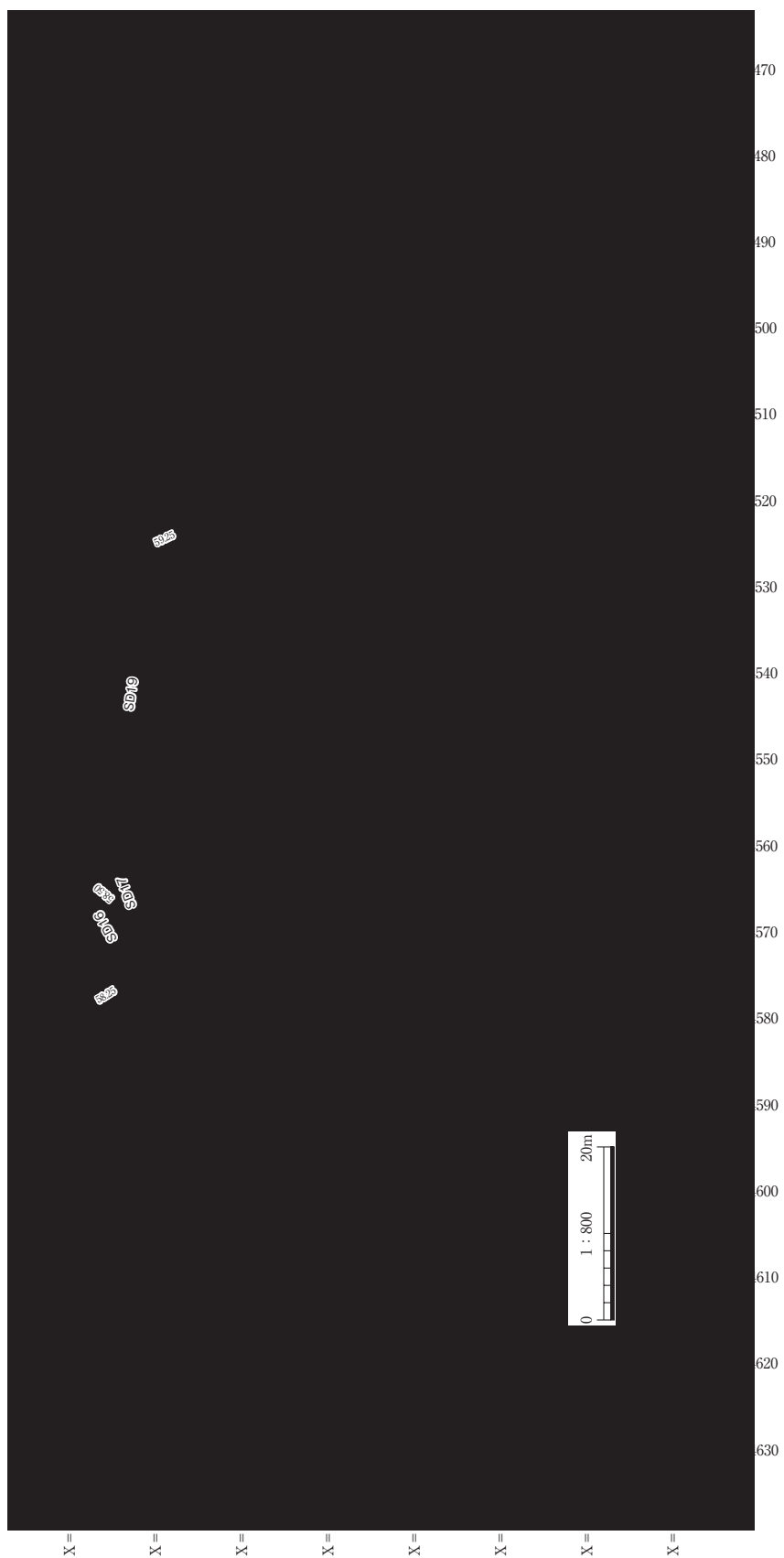
A区の調査は部分的に2面遺構検出面が認められ、縄文～古代の自然流路、平安時代の溝が確認された。

B区の調査は、その大半を地山が占めることから遺構面1面とする。この遺構面1面の範囲では縄文～中世の土坑や溝が検出された。なお、C16～H16グリッドの範囲では、自然河川によって堆積した礫、黒褐色土層が見られたが、トレンチにより一部掘削したところ、黒曜石の剥片が数点認められるのみであったため、掘削等の調査は行わなかった。また、調査区北側には弥生～中世にかけての堆積土が認められ、弥生～古墳、奈良、鎌倉、室町時代の4面の遺構面から溝が確認された。

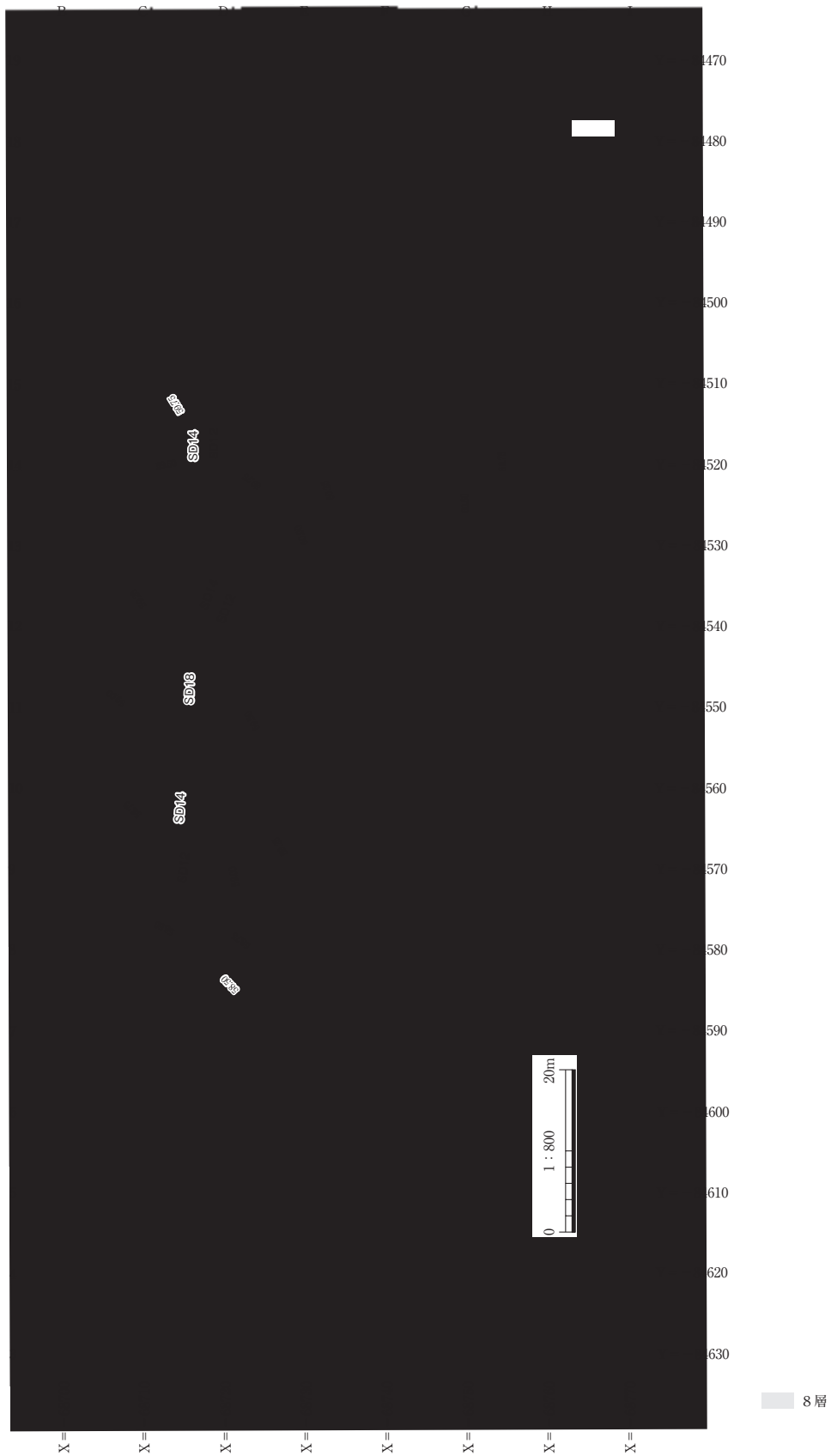
C・D区は調査当初同一区としており、西側から調査を進めていたが、調査の過程で中央部分に存在した暗渠で二分したため、東をD区、西をC区とした。C・D区の状況は、B区と同様、南側に地山、北側に弥生～中世にかけての堆積土が見られ、弥生～古墳、奈良、鎌倉、室町時代の溝が認められる。地山面での遺構の状況は近世の溝SD13が認められる以外は、いずれも近年の攪乱であった。



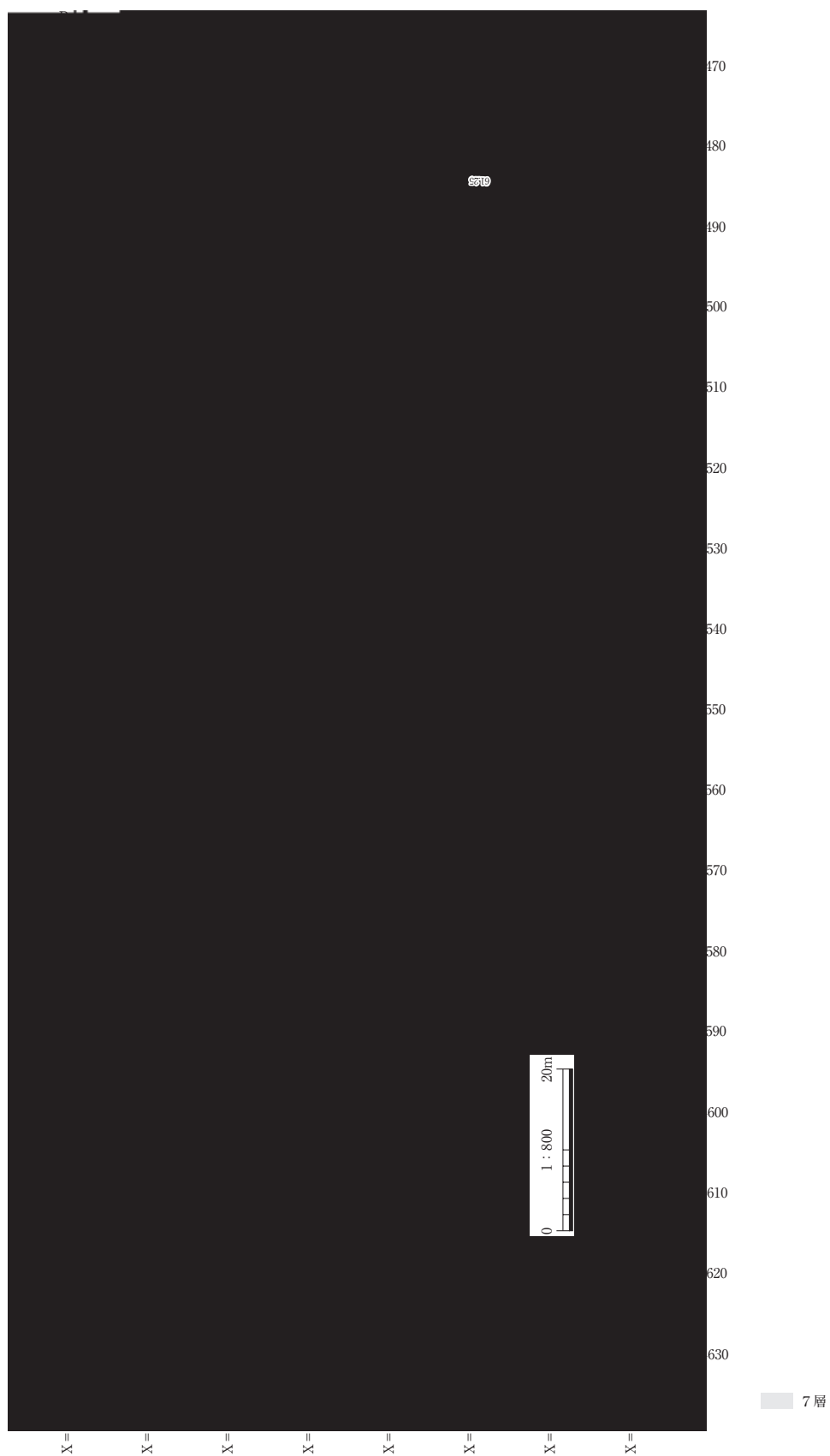
第4図 坂長前田遺跡基本層序



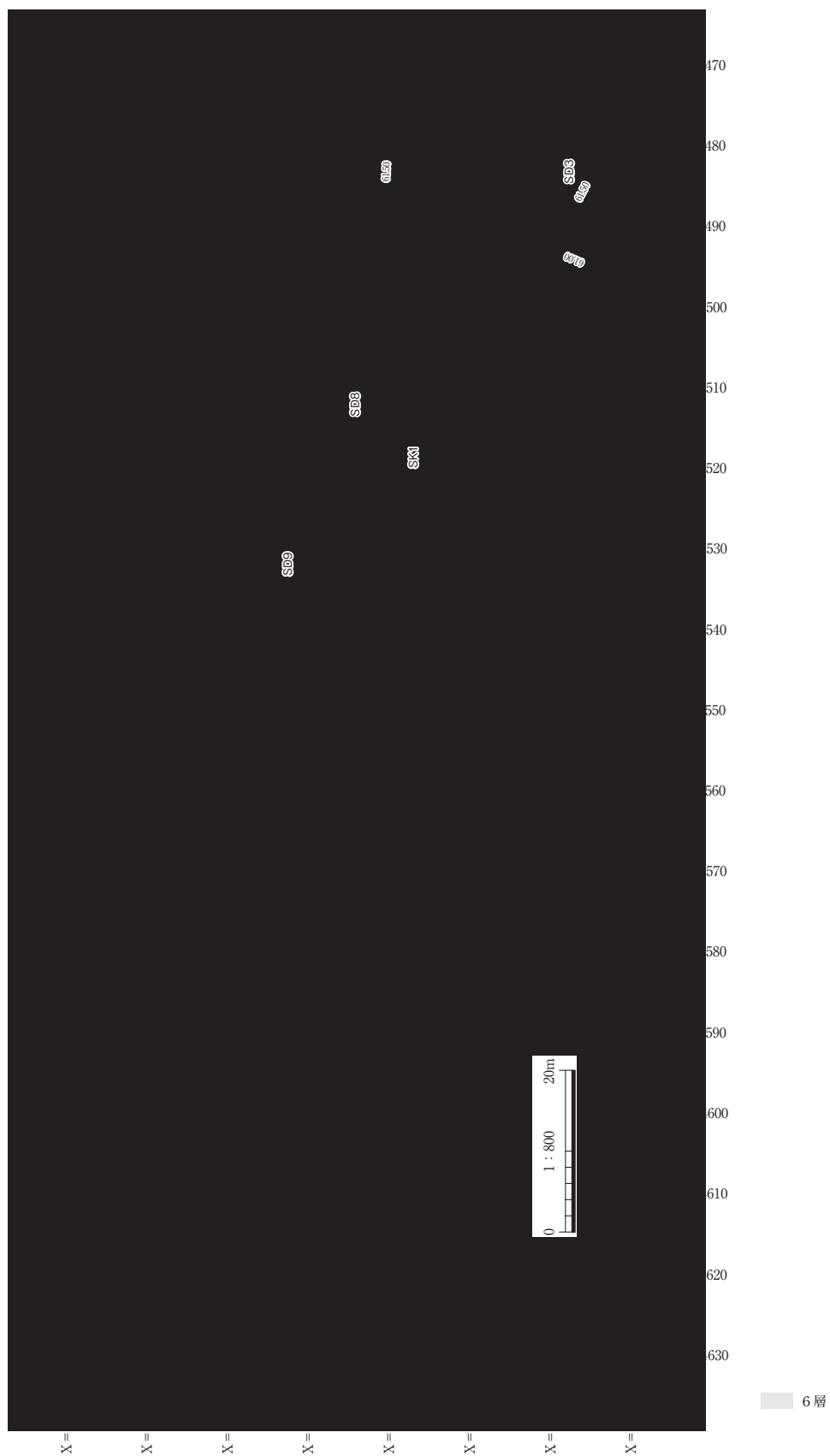
第5図 第4遺構面遺構配置図



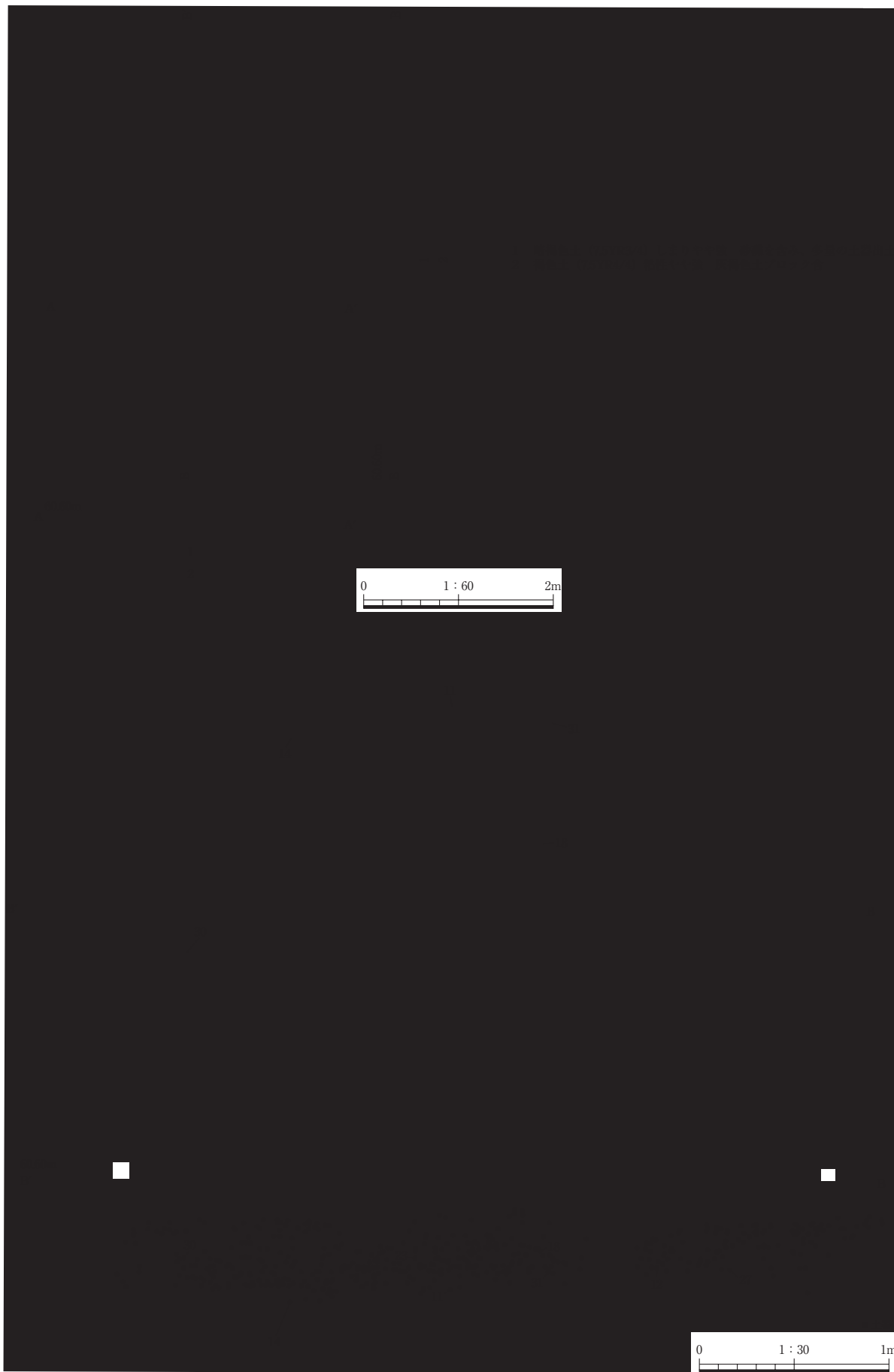
第6図 第3遺構面遺構配置図



第7図 第2遺構面遺構配置図



第8図 第1遺構面遺構配置図



第9図 SK1

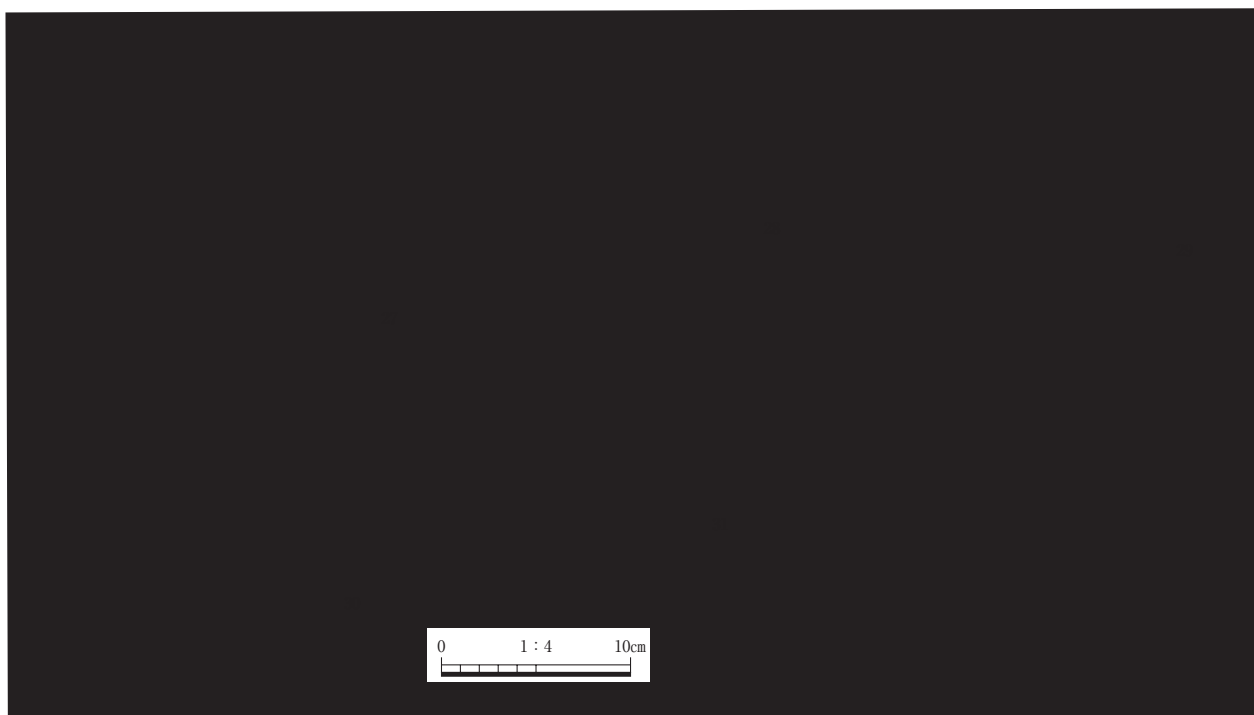
第2節 縄文時代の調査

SK1 (第9～12図、PL4・9・10・34)

B区F15グリッドで検出された平面長方形を呈する土坑で、規模はおよそ長軸4.1m、短軸2.35m、検出面からの深さは50cmを測る。底面の形状は南北方向をほぼ水平とするが、東西方向はU字形を呈しており、床面は作られていない。また底面でのピット等の検出もなかった。



第10図 SK1出土土器(1)



32

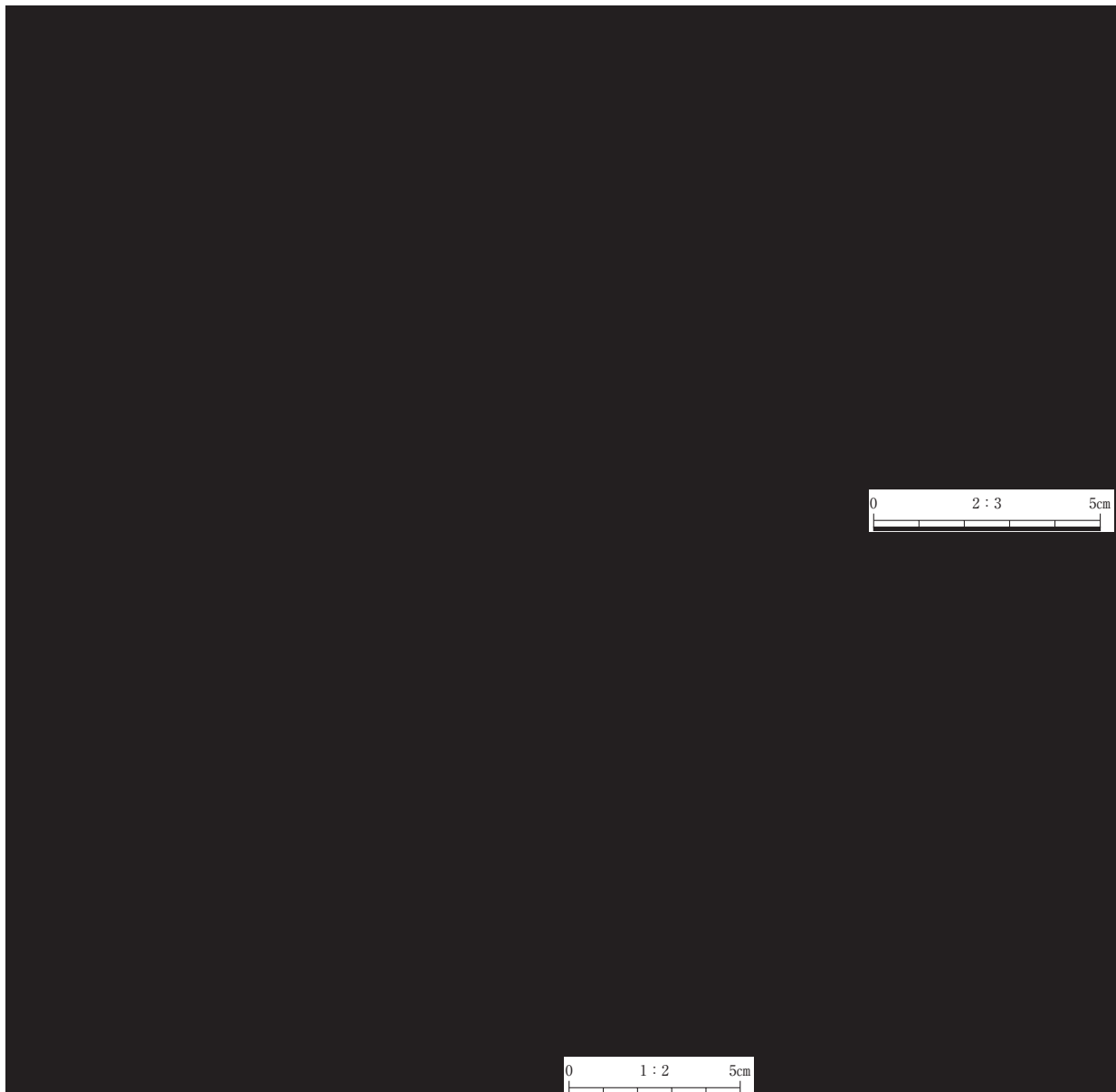
第11図 SK1出土土器（2）

埋土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、上層の暗褐色土中からは多量の土器片が出土した（第9図）。しかし、出土した土器は多量であったものの、接合する資料や同一個体と思われる資料はほとんど見られないことから、これらの土器は廃棄されたものではなく、土坑が埋没していく過程で周囲から混入したものと考えられる。

出土土器は有文土器と粗製無文土器が認められる。このうち有文土器1は、口縁部を肥厚させ、頂部を沈線による入り組み文、口縁部外面を沈線で鋸歯状に区画し、斜線文を充填する。また頸部は外反させ、3本の沈線による斜線文が施される。3はわずかに外反した波状口縁に平行した沈線から縦方向に沈線を垂下させる。口縁部を肥厚させた6～9のうち、6は1と同様に鋸歯状に沈線で区画したなかを斜線文で充填させ、9は円柱状の周囲に弧文を施す。そのほか内面を肥厚させ、渦巻文が施される11や巻貝による擬縄文が施される26など後期の縁帯文期の土器を中心とする。

出土石器は多くはない。S1とS2は石鏃で黒曜石製である。S3は黒曜石の尖頭削器。厚い打面部をもつので石鏃などの未成品とは考えにくい。S4は頁岩の石核。S5は切目石錘で一側縁をほぼ欠失する。S6は磨製石斧の破片で、刃部側を中心に敲石として再利用した痕跡がある。S7は台石。長さ1.2cm、幅0.4cmほどの工具痕が一面の中央に認められる。使用がさらに進むと凹石になるのかもしれない。この他に図示しなかったが、磨石およびその破片が2点と、黒曜石と玉髓の剥片や破片が若干出土した。

本遺構の時期であるが、埋土上層からの出土遺物を中心とするが、縁帯文期の土器が集中して認められることから、縄文時代後期中葉に近い時期が考えられる。



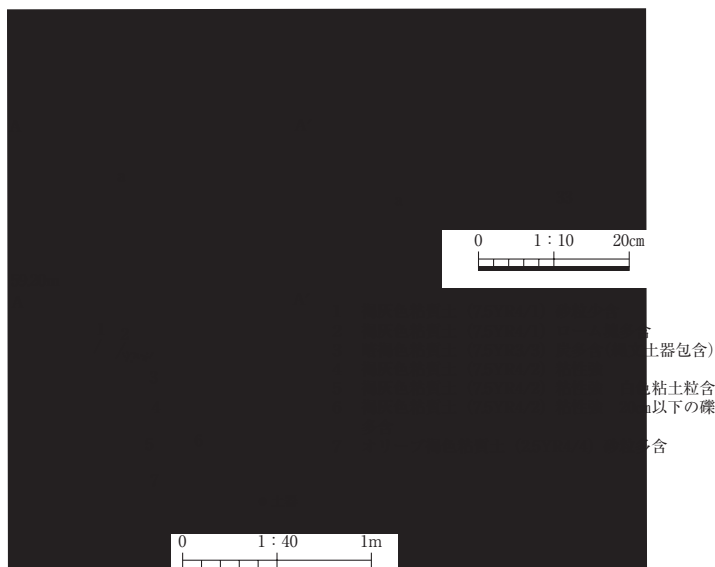
第12図 SK1出土石器

SK3 (第13・14図、PL4・11)

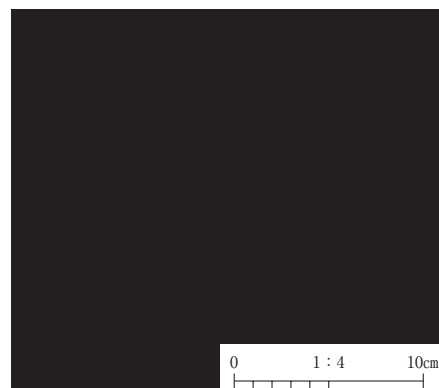
C区D9グリッドで確認された平面隅丸方形を呈する落とし穴で、規模は長軸92cm、短軸84cm、深さ92cmを測る。また底面では長軸28cm、短軸22cm、底面からの深さ12cmの底面ピットも認められた。

埋土の状況は、下層の5・6層が混入物の違いから分層はできるものの、他の特徴は近似する土層であることから、レンズ状に自然堆積した状況が窺える。また、上層の3層は炭化物を多く包含するほか、粗製無文の深鉢33が出土する。

本遺構の時期は、埋土上層からの出土ではあるが、出土土器33から縄文時代後期ころの年代が考えられる。



第13図 SK3



第14図 SK3出土土器

SD4 (第15～17図、PL11・34)

SD4はA区第2遺構面、G18グリッドで確認された、南東から北西方向に歪に走行する溝状遺構である。確認できた範囲では長さ25m、幅1.2～10m、深さは5～30cmほどで、最深部では65cmを測る。埋土は20層に分けられるが、その状況から中央部分が埋まったのち、北側と南側が埋まった状況が窺われ、埋没の最終段階である2・3層以外の層には、砂や礫が含まれる。

出土土器は、縄文時代後晩期の土器が出土する。34は内面を肥厚させ、波状口縁の頂部には円柱状の突起を作る。35は晩期の突帯文期の甕口縁部、36・37は凹線文段階の浅鉢の破片と思われる。38は頸部の資料であるが、内面調整に条痕が見られ、突帯文期のものと思われる。

石器は石鏃が11点と削器が1点出土した。石鏃は8点が黒曜石で、3点がサヌカイトで作られている。4点が片脚を欠失しており、S16には先端にも衝撃によると考えられる舌状部を伴う折れが認められる。S14は不整形で厚く、押圧剥離が不十分なため鋭い刃部を形成できていない。初心者の作品であろう。S19は黒曜石製の削器で、先端が折れている。この他に磨石の破片が1点出土している。

本遺構は確認された形状や埋土の状況から自然流路の可能性が高い。年代は出土土器から縄文時代晩期と思われる。



第15図 SD4出土土器



第16図 SD4



第17図 SD4出土石器

61.20m



- 1 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 砂粒多含
- 2 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 砂粒、5 cm以下の礫含
- 3 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)
- 4 灰赤褐色粘質土 (2.5YR4/2) 砂粒含
- 5 灰赤褐色粘質土 (2.5YR5/2) 砂粒多含
- 6 灰赤褐色粘質土 (2.5YR5/2) 炭含
- 7 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4) 粘性やや強 小礫含 砂粒多含
- 8 赤褐色土 (10YR5/3) 粘性やや強 砂粒多含
- 9 赤褐色粘質土 (5YR4/6) 粘性やや強 砂粒多含
- 10 褐色砂礫層 (7.5YR4/3) 5 cm以下の礫含
- 11 橙色粘質砂層 (7.5YR6/8)
- 12 にぶい褐色砂礫層 (7.5YR5/3) 5 cm以下の礫含
- 13 灰赤色砂礫層 (10YR5/2) 20cm以下の礫含
- 14 にぶい橙色粘質砂礫層 (7.5YR7/4) 1～50cmの礫含
- 15 褐色土 (7.5YR4/3) 小礫含
- 16 褐色土 (7.5YR4/6) 2 cm以下の小礫多含
- 17 褐色砂層 (7.5YR4/6) 粗粒
- 18 灰赤色粘質砂層 (7.5YR4/2)
- 19 灰赤色砂層 (7.5YR4/2) 小礫多含
- 20 黒褐色土 (7.5YR3/2) 砂粒、小礫多含
- 21 黒褐色砂層 (7.5YR3/1) 小礫少含
- 22 礫層 (3 cm以下) 暗褐色砂 (7.5YR3/3) 含
- 23 礫層 (20cm以下) 暗褐色砂 (7.5YR3/3) 含
- 24 暗褐色土 (7.5YR3/4) 砂粒、小礫多含
- 25 灰赤色土 (2.5YR4/2) 小礫含
- 26 礫層 (5 cm以下) 暗赤灰砂 (2.5YR3/1) 含
- 27 礫層 (20cm以下) 暗赤色粘質砂 (2.5YR4/1) 含
- 28 褐色土 (7.5YR4/3) 砂粒、小礫含
- 29 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 2 cm以下の礫少含
- 30 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性やや強 砂粒少含
- 31 褐色土 (7.5YR4/6) 2 cm以下の礫少含
- 32 灰赤粘質砂層 (7.5YR4/2) 20cm以下の礫多含
- 33 褐色土 (7.5YR4/4) 砂粒多含
- 34 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 砂粒含
- 35 極暗褐色土 (7.5YR3/2) 粘性やや強 礫多含
- 36 暗赤灰色粘質土 (7.5YR4/1) 砂粒含
- 37 暗赤灰色粘質砂礫層 (7.5YR4/2)
- 38 灰赤色粘質砂礫層 (7.5YR4/2)
- 39 灰赤色砂礫層 (7.5YR4/2)
- 40 明褐色粘質砂礫層 (7.5YR5/6)
- 41 黒褐色粘質砂礫層 (7.5YR3/2)

第18図 SD5・6断面図



第19図 SD5・6



第20図 SD5出土土器



第21図 SD5出土石器

第3節 弥生時代の調査

SD5・6 (第18～23図、PL3・12～14・35)

SD5・6はA区第2遺構面、H18グリッド、SD4の南側で確認された溝状遺構である。SD5は南東から北西方向に、SD6は東西方向に走行し、途中で合流する。

規模は、SD5が長さ24m、幅3.7～9.5m、深さ5cm～1mほど、SD6は長さ22m、幅3.7～8m、深さ20～50cmほどを測る。埋土は、下層を中心に砂層、礫層、砂礫層が堆積し、上層にも砂礫を含んだ埋土が認められる。

出土土器は、SD5、SD6とも弥生時代中期から縄文時代後晩期の土器が出土するが、SD5からは口縁部を逆L字状に屈曲させた39～41、頸部に指頭圧痕された貼付突帯がつき、口唇部に格子文を施した42、口縁部に凹線文を施した43など、Ⅱ～Ⅲ、もしくはⅣ-1様式の弥生土器が多く出土する。SD6からも52などⅢ-3もしくはⅣ-1様式の土器が出土するが、55～64など縄文時代後晩期の土器がやや多く認められる。





第23図 SD6出土石器

石器ではSD5からは石鏃や石匙等が出土した。S20は黒曜石製の尖頭器の破片と考えられるが、風化は進んでいないので、縄文時代以降のものであろう。石鏃は6点が出土し、4点が黒曜石、2点がサヌカイト製である。片脚を欠失するもの4点、先端を欠くものが1点ある。S27はサヌカイトの石匙で、刃部は比較的急である。S28は黒曜石の二次加工剥片。S29は黒曜石の石核で、両極技法で割られたものである。

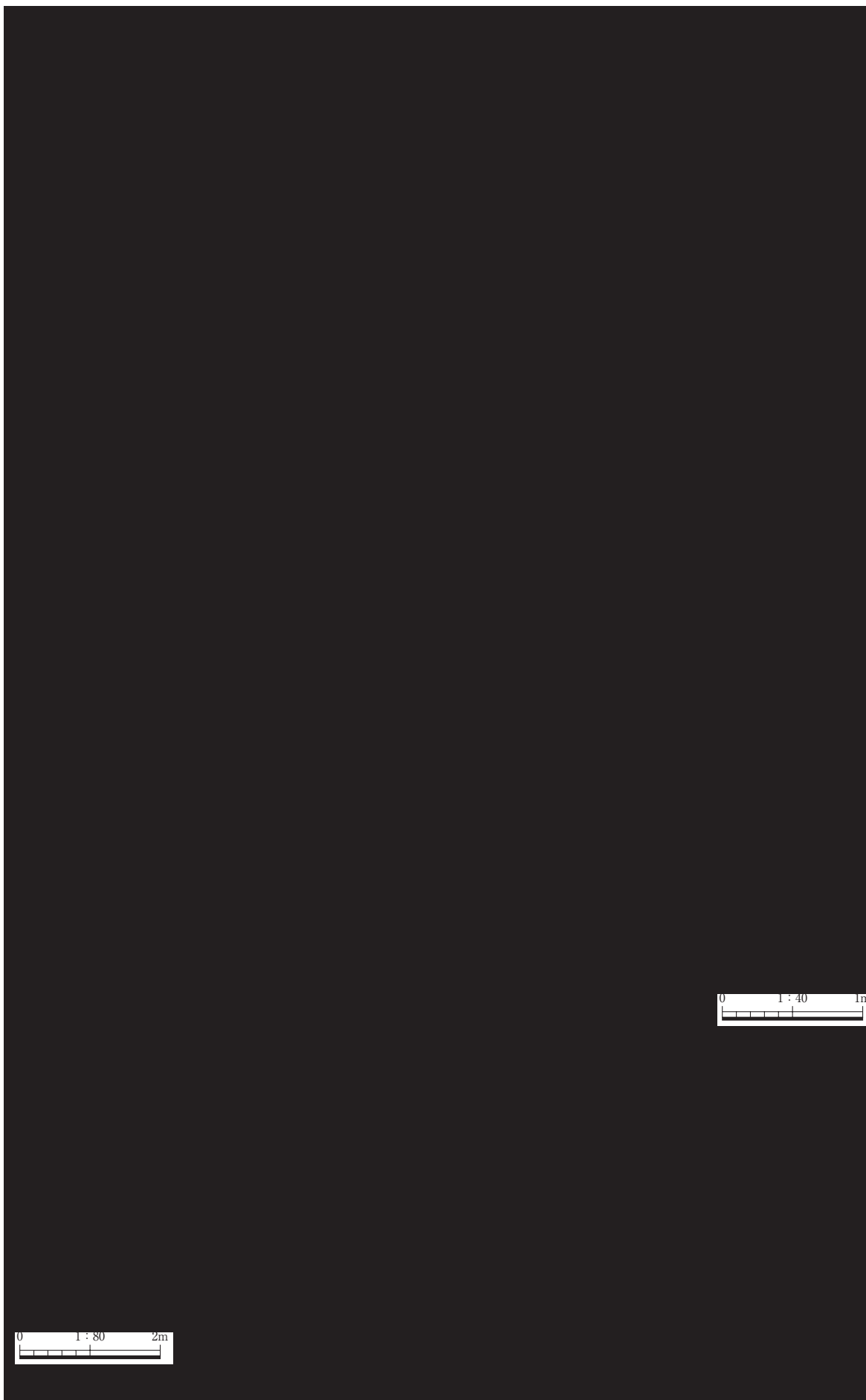
また、SD5-2からは6点の石器が出土している。4点の石鏃は、サヌカイト製が1点、黒曜石製が3点で、いずれも先端または基部を欠く。S34はサヌカイトの搔器。S35は二次加工剥片で、刃縁を残す。ナイフ形石器のようでもあるが、背部の整形は雑である。風化は進んでいるので、旧石器時代のもの可能性がある。

SD6からは石鏃や削器等が出土している。石鏃は12点出土した。石材はサヌカイトが3点、黒曜石が9点で、先端を欠くものが5点、片脚を欠くものが1点ある。S40は断面四角形で厚く、押圧剥離が施されていないため、実用には向かない。S46～S48は石鏃の未成品。S46は素材が厚すぎ、S47は薄すぎるため放棄されたのだろう。S48は製作中に折れた事故品である。S49とS50は楔形石器で、玉髓製と黒曜石製。厚みがあり大きめの剥片が取れているので、両極石核の可能性はある。S51は黒曜石の削器。S52とS53は黒曜石の剥片。S52のような大型のものは本遺跡からはほとんど出土していない。石核素材として持ち込まれたもので、割られずに残されたのであろう。図示しなかった遺物に、凹石1点、磨石破片2点、磨製石斧破片1点がある。

本遺構は確認された形状や埋土の状況から自然流路の可能性が高い。年代は出土土器から弥生時代中期中葉から後葉ころに最終的に埋没したものである。



第24図 SD8出土遺物



しまりやや弱
11層よりも
しまりあり
しまりやや
しまりあり

しまりあり
味が強い

第25図 SD8

SD8 (第24・25図、PL6・14)

SD8はB区E15グリッドで確認された溝状遺構である。規模は、長さ20m、幅80~325cm、深さはおよそ40cmを測り、南北方向に走行するが、確認できた上面形状は歪で、底面の状況も北半部は底面中央に高さ20cmほどの高まりが認められ、2条の溝が上部で連結したような形態を呈する。

埋土は21層に分層することができたが、中央から北半部は黒褐色、褐色、黄褐色系の埋土が多く、南半部は灰褐色系の埋土が主であった。また上層を中心に砂礫を含んだ土が堆積する。

出土遺物はわずかであったが、65~68などの弥生土器の甕の細片が出土する。様式を窺うことができる65~67の口縁部資料は、いずれも口縁部に凹線文が施されることからⅢ-3~Ⅳ様式のころのものである。

出土石器S34とS35は黒曜石の石鏃で、S35は製作途中で折れたもの。S56は凹石で、両面の中央に複数の凹みが残されている。

本遺構は確認された形状などから自然流路と思われる。出土土器はわずかであったが弥生時代中期中葉から後葉ころのものと思われる。



第26図 SK2

第4節 古墳時代の調査

SK2 (第26図、PL4・11)

B区F16グリッドで確認された平面隅丸方形の土坑で、およそ長軸2.9m、短軸2.7mの規模である。深さは北側で44cmを測るが、南側は徐々に浅くなり、南壁は認められない。

埋土には混入する砂礫の量に多寡があるものの、多くの層に砂礫の混入が認められることから、水成堆積による埋土と思われ、周囲からの氾濫等によって埋没したと考えられる。

出土遺物は土師器の細片が少量認められたが、図化できたものは69～71などいずれも単純口縁の甕破片である。

本遺構の年代については、出土遺物は少量であったが、第26図に示した通り、古墳時代前期から中期のものであることから、このころの遺構の可能性が高い。

SD15・16・17・19 (第27～33図、PL5・6・14～16)

調査区北側に広がる古墳時代終末期を下限とする遺物包含層9層掘削後、最終遺構面で確認された溝状遺構である。SD15を中心にSD16・17・19が分岐、合流する。SD16・19は埋土の色調は異なるが、粘質の土に砂礫が多く混入することなど、一連の溝である可能性がある。このうちSD15は長さ78m、幅2m、深さ50cmほどの規模である。

埋土の状況は、砂礫層が所々に見られるので、水的作用を受けながら本遺構は埋没していったことが窺われる。

出土土器はSD15からは縄文時代晩期～古墳時代前期までの土器が認められるが、72～79といった弥生時代後半～古墳時代前期の土器が多い。SD16、SD17、SD19ではⅢ～Ⅳ様式の弥生時代中期の土器が出土する。

石器はSD15、SD17から出土する。SD15から出土した石器は、いずれも元は縄文・弥生時代の包含層に属していたものと思われる。石鏃は18点が出土した。石材は12点が黒曜石を、6点がサヌカイトを用いる。欠損があるものは11点で、欠損部位は先端2点、片脚4点、側縁1点、複数箇所4点である。S75は、背面全礫面の小剥片の打瘤部に押圧剥離を加えるもので、石鏃を製作するごく初期の段階で放棄したものであろう。S76はサヌカイト製の削器。S77～S80は楔形石器。S80のような大型のものは両極石核の可能性がある。S79のような小型のものは、石鏃を製作する過程で、両極技法によって厚みを除去することがあり、その工程で厚みを取り切れずに放棄したものと思われる。S81は凹石で、両面の中央に1つずつ深い凹みがある。この他に、磨製石斧の刃部破片が1点出土している。SD17からは石鏃2点が出土した。ともに黒曜石製で、S83は片脚を欠く。この他に、磨製石斧表面の破片が1点出土している。

また埋土中からはW1・2といった下端を両側から削った板状木製品も出土し、一部20本あまりが立った状態で検出された(第69図)。これらのうち埋土中からのものであるが1点を放射性炭素年代測定したところ4世紀後半から6世紀前半の年代が測定された(第4章)。

本遺構の年代は、出土木製品では幅の広い年代が測定されたが、出土土器から古墳時代前期頃の可能性が高い。



- 1 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強 5mm以下の砂礫若干含
- 2 褐灰色砂礫土 (7.5YR4/1) 粘性やや強 しまりやや弱 10cm以下の砂礫多含
- 3 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性やや強 しまりやや弱
- 4 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや弱 5mm以下の砂礫含
- 5 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性やや弱 しまりやや強 砂含
- 6 黒褐色土 (7.5YR3/1) 砂含
- 7 褐色砂礫土 (7.5YR4/4) しまりあり 砂礫を主とする
- 8 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりやや強 砂若干含
- 9 黒色土 (7.5YR2/1) 砂若干含
- 10 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや弱
- 11 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや強 しまりなし 砂多含
- 12 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりやや強 砂礫多含
- 13 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強
- 14 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや弱 しまりやや強 砂礫含
- 15 褐灰色土 (7.5YR4/1) 砂礫若干含
- 16 黒色土 (7.5YR2/1) しまりやや弱
- 17 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) 粘性やや弱 しまりあり 砂を主とする

- 18 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや弱 しまりやや強 砂多含
- 19 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 砂多含
- 20 黒色土 (7.5YR2/1) しまりやや弱
- 21 褐灰砂質土 (7.5YR4/1) 粘性やや弱 砂を主とする
- 22 黒褐色土 (7.5YR3/1) 砂多含
- 23 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや弱 しまりやや弱 砂若干含
- 24 褐灰色砂質土 (7.5YR4/1) 粘性やや弱 しまりなし 砂を主とする
- 25 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや強 しまりやや弱 砂多含
- 26 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強 しまりやや弱 砂若干含
- 27 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強
- 28 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや弱 しまりやや強 砂多含
- 29 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強 27層と近似
- 30 黒色土 (7.5YR2/1) しまりやや弱 砂若干含
- 31 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや弱 しまりやや弱 砂多含
- 32 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性あり しまりやや弱
- 33 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強 しまりやや弱 砂若干含
- 34 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性やや強 しまりやや弱
- 35 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや強

- 36 黒褐色砂礫土 (7.5YR3/1) 粘性やや強 しまりやや強 5cm以下の礫多含
- 37 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性やや強
- 38 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) 粘性やや強 砂粒含
- 39 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) 粘性強 砂粒多含
- 40 褐色粘質砂層 (7.5YR4/4)
- 41 黒褐色砂礫層 (7.5YR2/2) 1cm以下の礫含
- 42 黒褐色粘質土 (7.5YR3/1) 砂粒含
- 43 黒褐色砂礫層 (7.5YR2/2) 1cm以下の礫含
- 44 褐灰色粘質土 (7.5YR4/1) 粘性強 砂粒多含
- 45 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 粘性強 砂粒多含
- 46 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 粘性強 白色粘土塊含
- 47 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 粘性強
- 48 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 植物質含
- 49 褐灰色粘質砂礫層 (7.5YR4/2) 5cm以下の礫含
- 50 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) 粘性強 植物質含
- 51 暗赤褐色砂層 (5YR5/2) SD17埋土
- 52 灰褐色粘質土 (5YR4/2) SD17埋土
- 53 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや強 しまりやや弱 砂含
- 54 灰褐色砂礫層 (7.5YR4/2) 粘性やや強 砂礫を主とする
- 55 黒灰粘質土 (5YR3/1) 砂粒多含 小礫少含

第27図 SD15・16・17・19



第28図 SD15出土土器

第5節 古代の調査

SD1（第34～36図、PL8・16）

SD1はA・B区にまたがって、D17～H18グリッドにかかる範囲で検出した。検出面は地山及び自然河川により堆積した黒褐色土である。確認された範囲では、A区の東端から西に30mほど認められたのち、A区とB区の境であるH17グリッドから北に40mほどのびる。E16グリッド付近では南方向から長さ10m、幅2.5～4.5m、深さは20～70cmほどの溝が合流するが、合流地点では30cmほど高低差が認められ、E16グリッドよりも北側は深くなる。

埋土の観察では砂礫や砂、シルト等が堆積した状況が確認されることから、埋没の過程で流水や滞水等があったと考えられるが、E16グリッドの合流地点では切り合い関係が認められた。これによると西側に数層の砂礫層を含む埋土が堆積したのち、東側が掘削・堆積した状況が窺えるが、この切り合い関係と先の分岐地点で確認された底面の高低差からするとSD1はE16グリッドから南西に伸びる溝が古く、その溝が埋没、もしくはその途中で、東西方向から南北方向に曲がる溝が掘り直されたと考えられる。

出土遺物には上記の古い溝の埋土と考えられる層中からは、奈良時代



第29図 SD15出土木製品



第30図 SD15出土石器

の須恵器坏93、古墳時代の土師器甕106が見られ、掘り直された溝中の埋土からは奈良時代の土師器、須恵器坏の破片が多く出土するものの、平安時代の須恵器坏96や甕107などの新しい時期の土器も認められる。

そのほか、石鏃が14点出土した。S92がサヌカイト製である他はすべて黒曜石製である。欠損するものが9点あり、欠損部位は先端2点、上半3点、片脚1点、2箇所以上3点である。S92は先端の欠損部に再調整が施されている。S98は両ポジ面の小型剥片に押圧剥離で尖頭部を形成する途中で放棄したもので、石鏃未成品と考えられる。S99はサヌカイト製の削器、S100は黒曜石製の楔形石器。S101は黒曜石製の石核で、先行する剥離面の末端を叩いて、表裏両面から比較的大きな剥片を取るもの。S102は磨製石斧の基部破片、S103は切目石錘である。

本遺構の年代は、出土遺物から南西から北側にのびる溝が奈良時代、東西方向から北に屈曲する溝が平安時代、およそ10世紀ころの年代が考えられる。

SD2 (第37・39図、PL3・11)

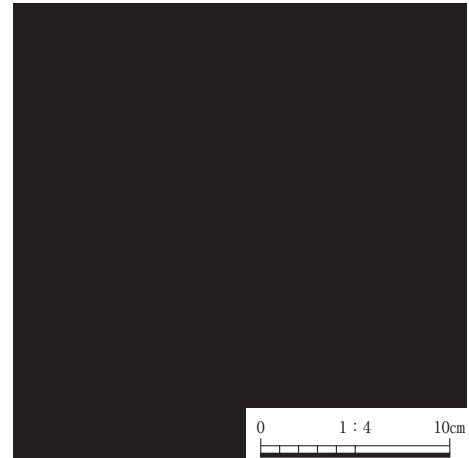
SD2はA区第1遺構面で確認された溝である。南東から北西方向に走行するが南東側はSD1に接続する。確認できた範囲では長さ13m、幅4.4m、深さは20～40cmほどで、最深部では57cmを測る。埋土は上層に暗褐色土、褐色砂礫、下層に黒褐色土が堆積するが、褐色砂礫層以外の層にも砂礫が多く含まれる。

出土遺物はわずかであるが、土器では器種等を判別できるものでは、Ⅲ-3様式、弥生時代中期中葉の無頸壺109が認められた。また、S104はサヌカイト製の石鏃で、周辺のみを加工した雑なつくりのものである。

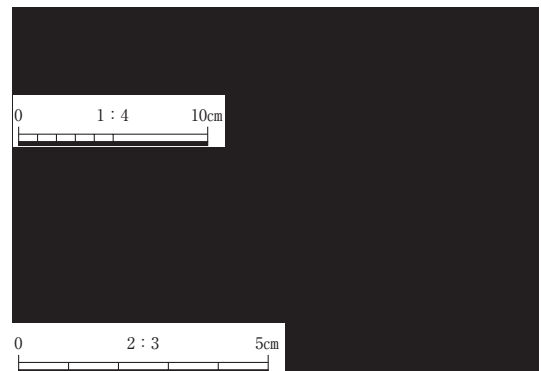
本遺構の年代は109の弥生土器が認められるが、確認面の層位、接続するSD1との関係から奈良・平安時代ころと思われる。

SD3 (第38・40図、PL3)

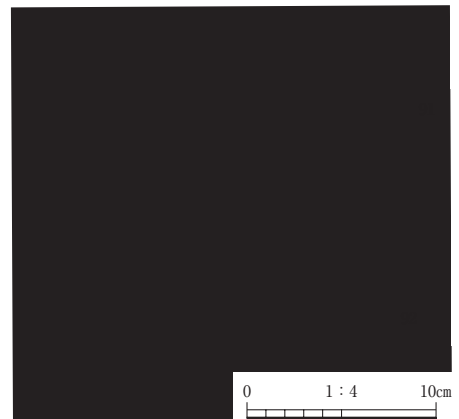
SD3はA区第1遺構面、SD2の東側で確認された溝である。南東から北西方向に走行し、SD2と同様、南東側はSD1に接続する。確認できた範囲は長さ13m、



第31図 SD16出土土器



第32図 SD17出土遺物



第33図 SD19出土土器



第34図 SD1



S103

第35図 SD1出土石器



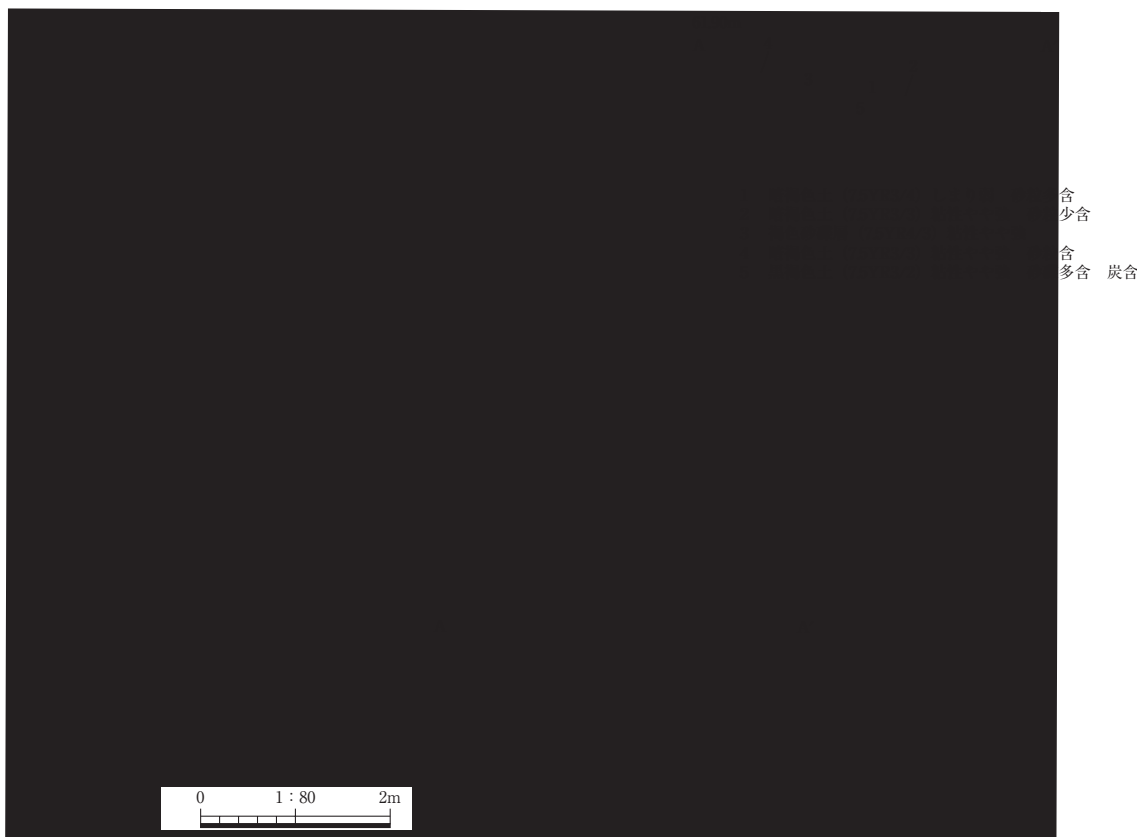
第36図 SD1出土遺物



第37図 SD2出土遺物



第38図 SD3出土石器



第39図 SD2



第40図 SD3

幅2.2m、深さは30cmほどを測る。埋土は小礫を多く含んだ褐色土が堆積する。

出土遺物は土器の細片がわずかに認められたが図化できるものはなかった。石器はS105は黒曜石の石鏃未成品で、押圧剥離時に基部が折れたため放棄されている。S106は黒曜石の横形剥片に両極打撃を加えたもの。S107は石錘で、紐かけは磨きではなく敲打で形成されている。

本遺構の年代は、SD2同様、確認された層位、SD1との関係から奈良・平安時代ころと思われる。

SD12 (第41～45図、PL7・17・19)

調査区中央北側、B5～C15グリッドで検出した東西方向の溝である。調査区西側では地山での検出となったが、確認された大半は鎌倉時代の包含層と考えられる7層掘削後、奈良時代の包含層8上面で確認した。確認面を異にするが前記のSD10の北側にあり、東側の一部を除き、地山と5層堆積範囲の境に位置する。

溝の規模は東端及び西端は調査区外にのびるため確認された範囲に限られるが、長さ115.3m、幅1.2～3.5m、深さは最深部で55cmを測る。また、C8、C9、C14グリッドでは、枝状に幅、深さともに小規模な溝が分岐する。

埋土の状況は、砂礫層が所々に見られるので、水の作用を受けながら本遺構は埋没していったことが窺われる。D15グリッドのB-B'では埋土の切り合い関係が認められ、北側の部分が埋没した後、南側の部分に溝が通ったと判断される。また、枝状に分岐する溝がいつ分岐したかについては、D-D'、H-H'での断面をみると28層、56層とが類似した埋土であることからSD12が埋没していく過程で、一部樹枝状にのびた可能性がある。

出土遺物には古代の土師器や須恵器の坏、甕破片が多く見られるが、底部が押圧される土師器台付坏111、底部に糸切り痕が認められる土師器台付坏112など9世紀、10世紀ころの遺物が新しい。

石器は石鏃27点が出土した。石材は黒曜石が19点、サヌカイトが8点である。20点が欠損をもち、欠損部位は先端(5点)よりも脚部(11点)が多い。S135～S137は石鏃未成品で、S135は押圧剥離の時に、S136は両極打撃で厚みを除去する時にそれぞれ折れたもの。S138とS139は削器で、それぞれサヌカイトと黒曜石で作られている。S140とS141は黒曜石の石核。自然面を背面として、それ以外の面から両極技法で打面を転移しながら小型の剥片を取り、最終的な形態は平坦な直方体になる。S142は玉髓の、S143は黒曜石の二次加工剥片。前者は主剥離面側の周辺を調整し、後者は粗い鋸歯縁を形成する。S144は敲石で、長軸の両端と1長辺を使用する。特に長辺の使用による摩耗が著しい。S145は断面五角形の小型の砥石で、SD12の年代に使われたものかもしれない。

またSD12-3からは石鏃が2点出土した。S146は黒曜石製で、薄い剥片を周辺加工したもの。S147はサヌカイト製で、先端から斜め方向の衝撃による剥離があり、使用によって壊れたことが明らかである。

そのほか、箸W3、漆器椀の底部W4などの木製品のほか、飾り馬の土馬127が出土する。土馬127は、胴部破片であるが、中空で作られており、外面には鞍、立髪の一部が残存する。観察できる範囲では尻側から胴前方に向かって粘土帯を接合して製作したようである。また、首部分の製作は鞍を表現した粘土から一連に作られていると思われ、内面には粘土を補強ためか貼り付けている。

本遺構は確認面の年代、出土遺物の年代が示すように平安時代のものと判断される。

50.40



主とする

若干含

8層による

落した検出

落した検出

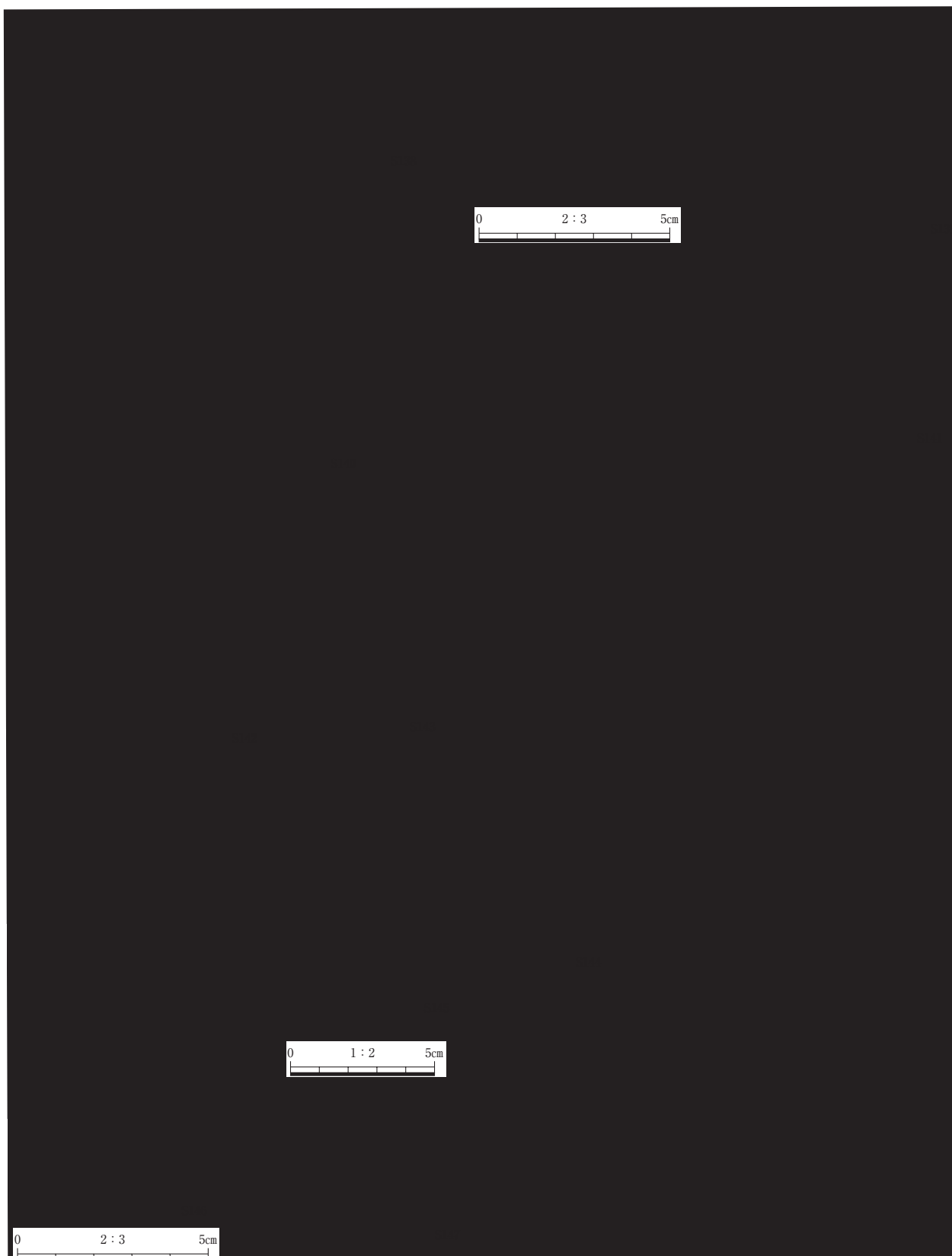
第41図 SD12



第42図 SD12出土土器



第43図 SD12出土石器（1）



第44図 SD12出土石器（2）

SD14 (第46～49図、PL18・19)

SD12の2mほど北側で検出した東西方向の溝である。確認面はSD12と同じ8層上面とするが、切り合い関係により、SD14埋没後にSD12が掘削されたと判断される。溝の規模は東端が調査区外に、西端はSD12に切られることから確認された範囲に限られるが、長さ67.5m、幅1.75m、深さはおよそ30cmを測る。埋土の状況は、A-A'など一部に砂礫層の堆積が認められる。

出土土器は古代の土器を中心に認められるが、内外面を赤彩する土師器坏135、137～140の土師器甕、底部に静止、回転糸切りが認められる須恵器坏128、129といった8世紀代の土器が多く見られた。

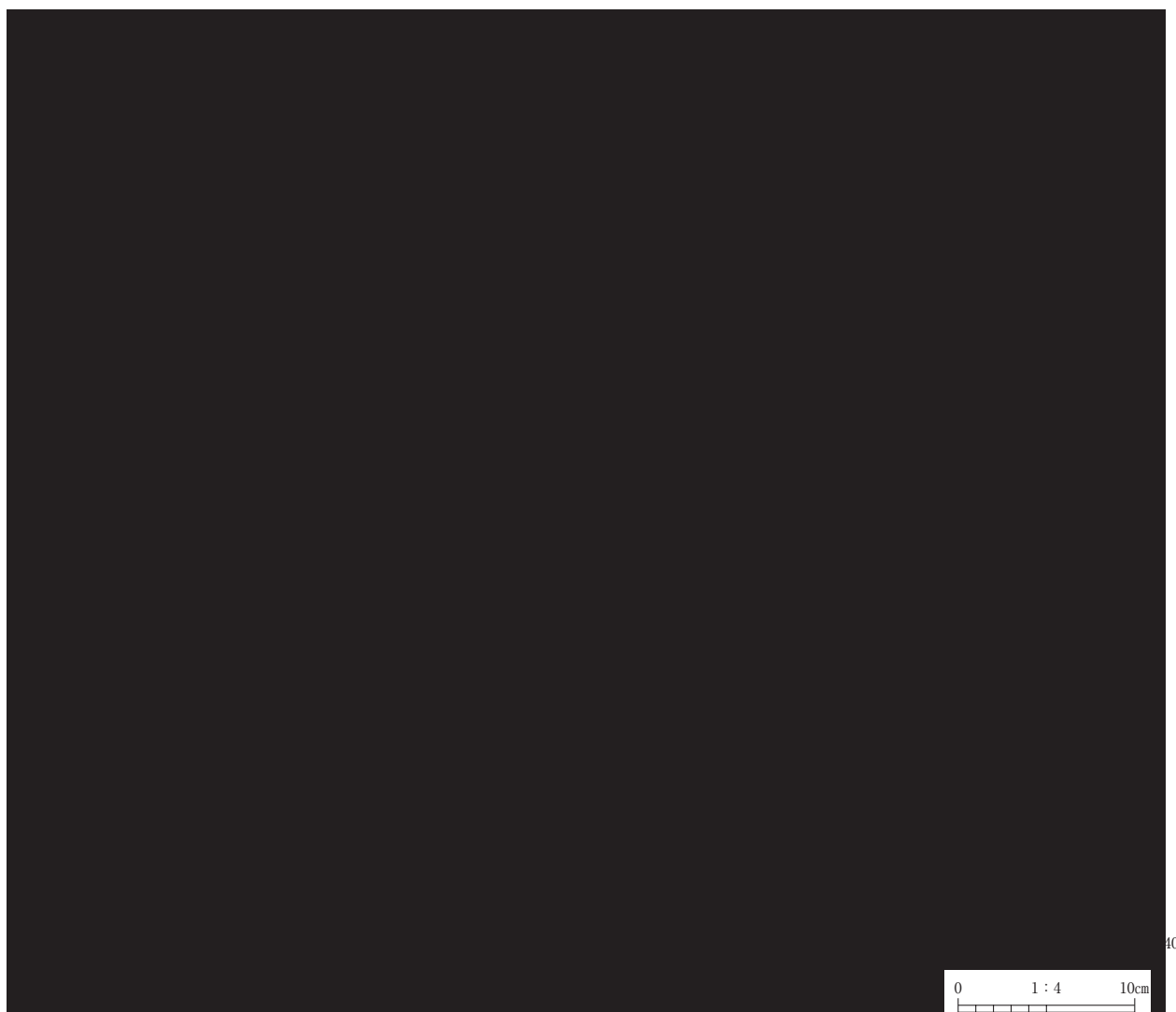


第45図 SD12出土遺物



第46図 SD14・18

やや強
しまりやや弱 3cm以下の砂礫多含
山ロームブロック含
若干含



第47図 SD14出土土器

出土石器ではS148はサヌカイトの尖頭器の先端破片。風化が進んでおり、調整は押圧剥離によるため、有茎尖頭器の先端部の可能性がある。石鏃は13点が出土した。2点がサヌカイト製で、他は黒曜石製である。10点が欠損し、脚部を欠くものが7点と目立つ。S162は黒曜石の楔形石器。S163は磨製石斧で、完形であるが研ぎ直しにより極端に短くなっている。S164は凹石である。

そのほか、木製品W5～10の容器底板や側板、馬の骨と思われるB1なども出土した。

本遺構は確認面の年代、出土遺物の年代が示すように奈良時代のものと判断される。

SD18（第46図、PL5）

SD12と14に挟まれて位置し、C11～13グリッドにかけて確認された。SD12・14と同様主軸を東西方向とするが、切り合い関係により、SD12・14以前に掘られた溝であると判断される。

溝はSD12・14に削られることから、22mの範囲で部分的に確認され、幅は最大で1.5mを測るが、深さは15cmほどと浅い。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物は、土器の細片がわずかに認められたが、図化できるものはなかった。本遺構は遺構検出面の層位、SD12・14との切り合い関係により、奈良時代の遺構と判断される。



第48図 SD14出土石器



第49図 SD14出土遺物

第6節 中世の調査

SD9 (第50～52図、PL8・20)

SD9は調査区中央の地山と6層の境に確認された東西方向の溝である。規模は長さ34m、幅は部分的に歪になるがおよそ20～80cmを測る。深さは約25cmである。

埋土は黒色土で、下層に砂礫を多く含む。また東側の一部では溝壁の保護に打たれたものと思われる杭が6本、底面北側に沿うように確認された。出土遺物はあまり認められなかったが、鍋142、143や瓦質の鉢144ほか、内外面黒色で外面に赤色の菊文を入れた漆器皿W1などの破片が認められる。

石器は石鏃3点が出土している。黒曜石製の1点は完形で、サヌカイト製の2点はいずれも先端を失っている。S168は石鏃未成品で、末端が反転した黒曜石の小剥片に押圧剥離を加える途中で、先端を尖らせる前に放棄したものである。

本遺構の年代は、6層上面で検出されたことから、室町時代後半、15世紀後半以降に掘削されたものである。

SD10 (第53～55図、PL8・20)

SD10は調査区中央で6層掘削後、7層上面で確認された東西方向にのびる隣接した2本の溝で、南側をSD10、北側をSD10-2とした。

SD10、SD10-2はほぼ同形態であり、部分的に重なり合う。後述する埋土には切り合い関係も認められ、SD10-2埋没後、SD10が掘り直されたと考えられる。

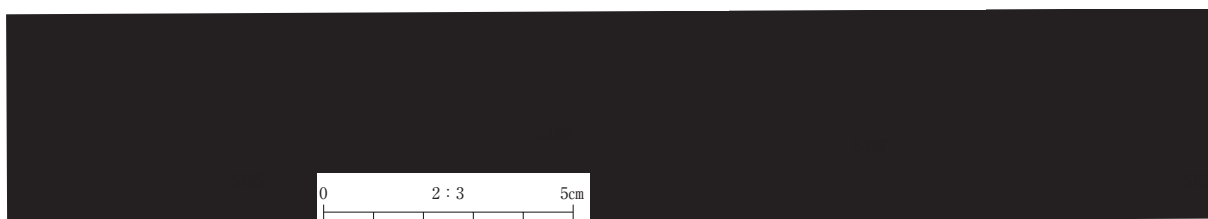
規模はSD10が長さ37.5m、幅は60～200cm、深さおよそ20cm、SD10-2が長さ35m、幅40～180cm、深さおよそ20cmを測る。



第50図 SD9出土遺物



第51図 SD9



第52図 SD9出土石器



第53図 SD10



第54図 SD10出土遺物

埋土の状況はSD10、SD10-2とも黒色土、黒褐色土が主となっている。また、SD10、SD10-2とも砂礫を含む層が多く認められることから埋没の過程で、流水等の作用があったと考えられるが、底面付近の埋土には砂礫の堆積は少ない。

出土土器は、古代の土器片が多く認められるが、須恵質の捏鉢145など中世のものも見られる。

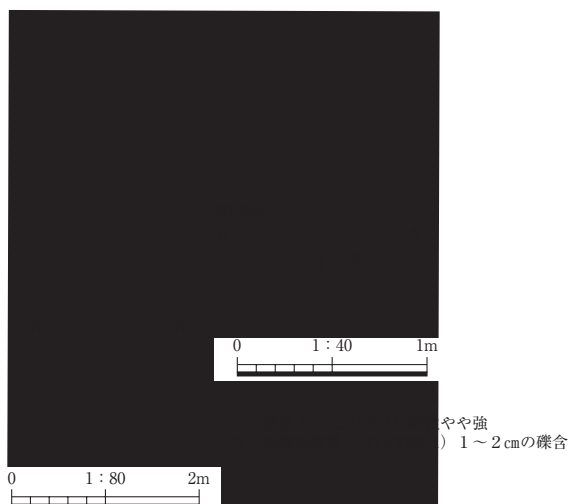
石器はSD10から石鏃4点が出土し、黒曜石とサヌカイト製が2点ずつである。先端を欠くものと片脚を欠くものが1点ずつある。石鏃未成品は2点で、S173は素材剥片打面部の厚みが除去できずに放棄したもの、S174は両極打撃で厚みを取る際に割れた事故品である。S175は黒曜石の楔形石器だが、両面から比較的大きな剥片が取れているので、石鏃などの素材剥片を取った両極石核とするほうがよいかもしれない。S178は磨製石斧で基部側の損傷が激しい。単純な折損ではなく複数の剥離面が認められるので、鑿のように再利用されたものと考えられる。SD10-2からは2点の石鏃が出土した。ともに黒曜石製で片脚を失っている。

また、板状の鉄製品F1のほか、下層に位置する遺物包含層8層から巻きあがったものが多いと思われるが、馬、もしくは鳥形と思われる木製祭祀具W14、漆器碗の底部W15、曲物の底板W16、墨書は認められなかったが、上端に2孔穿孔するW17・18が出土する。

本遺構の時期であるが、鎌倉時代の遺物包含層7層を確認面とし、室町時代後半の6層に覆われることから室町時代前半頃のものと考えられる。



第55図 SD10出土石器



第56図 SD11

SD11 (第56図、PL8)

調査区中央東側のD15グリッドで6層掘削後に確認された東西方向の溝である。溝の東端はトレンチによって掘削してしまったため明確にできないが、確認される規模は、長さ4.4m、幅およそ50cm、深さ10cmほどを測る。

埋土は上層に黒色土、下層に礫混じりの黒褐色砂質土が堆積する。

出土遺物は見られないが、鎌倉時代の7層上面で検出され、室町時代後半の6層に覆われていることから、室町時代前半頃の溝と判断される。

第7節 近世および時期不明の遺構の調査

SD7 (第58図、PL8)

SD7はB区中央、E15グリッドで確認された南北方向に走向する溝である。検出面は地山の褐色土である。確認された規模は、長さ12.4m、幅25～45cm、深さはおよそ5cmを測るが、北側は近年の溝や耕作により削平される。

埋土は褐色の砂礫層が見られる。このことから本遺構は流水等の作用により埋没したと考えられる。

出土遺物は土器細片がわずかに見られるのみで、本遺構の年代を示すものは見られなかった。

SD13 (第57・59図、PL20・33)

C区B4～C8グリッドにかけての地山面で確認された溝である。付近にはD区を含め、近年の圃場整備以降の溝が数条確認されたが、SD13は圃場整備の造成土に覆われている状況であった。

溝は東西方向を軸とし、規模はおよそ長さ40m、幅3.5m、深さ10～50cmを測る。

出土遺物は、内面に砂目の付く唐津焼の碗150や、肥前系の磁器152、153など近世の陶器、磁器を中心に認められる。そのほか、S179は黒曜石の石鏃。急角度の調整を周辺に加えて平面形を作り出しただけのもので、押圧剥離は施されず、鋭い刃部は形成できていない。初心者の作品と思われる。金属製品では楔F2、刀子F3、両側縁に4孔ずつ穿たれた板状の木製品W19などが認められた。

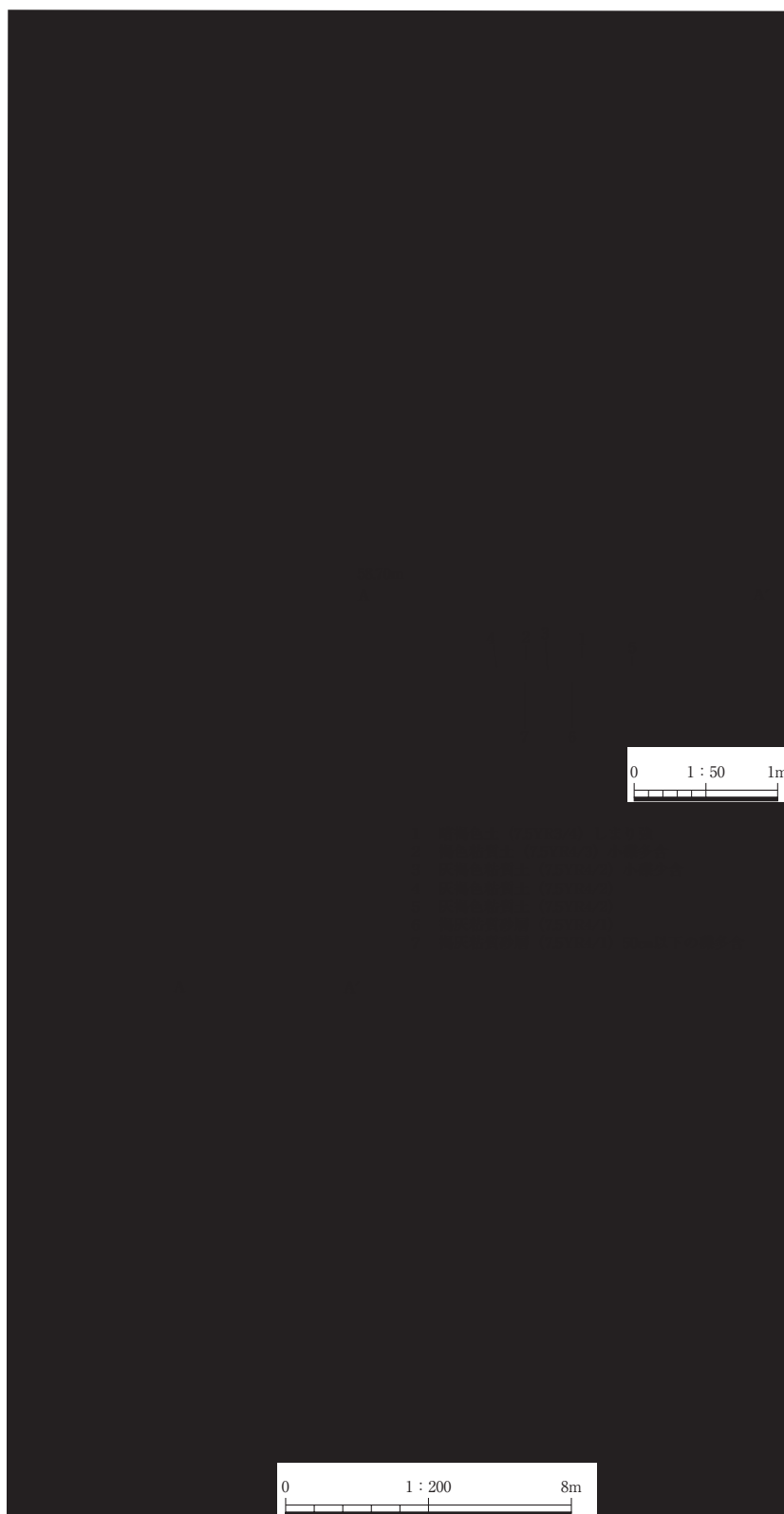
本遺構の時期は152、153などの出土遺物から近世後半のころと思われる。



第57図 SD13出土遺物



第58図 SD7



第59図 SD13

第8節 遺物包含層の出土遺物

A区の土層堆積状況は第4図に示すとおりであるが、B～D区遺物包含層とは包含する遺物の時期が異なるため、ここでは分けて触れることとする。また、石器についても各包含層から出土はするものの、本来は下層にあったものであるため、分けて記述する。

(1) A区（第60図・PL21）

A区では遺構検出面までに堆積する2層遺物包含層中からは157の土師器坏や158の須恵器甕など古墳時代～平安時代ころまでの遺物を見られる。第1遺構面のベース土である3層中からは159～163といったⅡ～Ⅲ様式の弥生土器が出土する。また第2遺構面のベース土である4層中からは外面を条痕調整した晩期の縄文土器167などが出土する。

(2) B～D区

2層出土遺物（第61～63図、PL22・33）

B～D区の土層堆積状況は第4図に示すとおりである。遺構検出面までに堆積する2層遺物包含層中からは中近世の遺物が多く見られる。174の紅皿から19世紀中ごろ、近世末期を下限とする遺物包含層である。土器以外の出土遺物には第63図の金属製品や第62図の木製品が見られるが、W21は表面に「□□□□地」裏面に「□□山壺□□」の墨書を確認することができた。



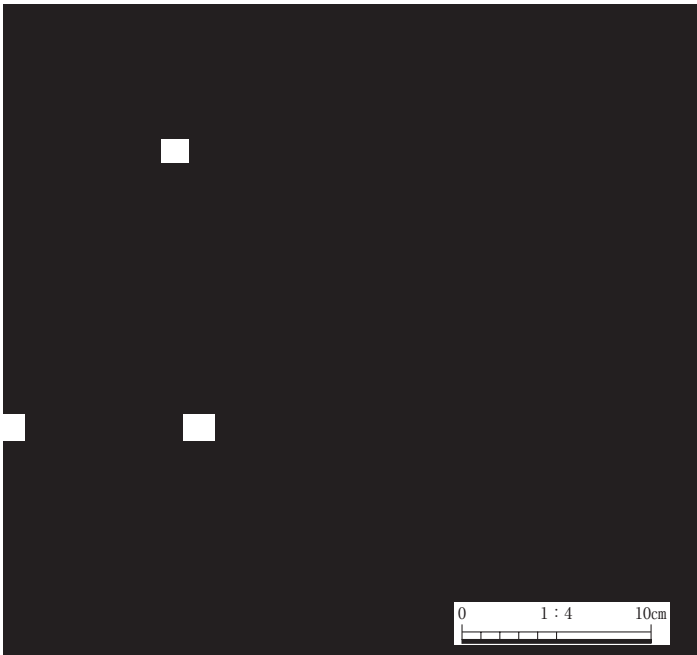
第60図 A区包含層出土土器

6層出土遺物（第64～66図、PL23）

遺跡北側に堆積する6層からは土器、鉄製品のほか、わずかに木製品が出土する。

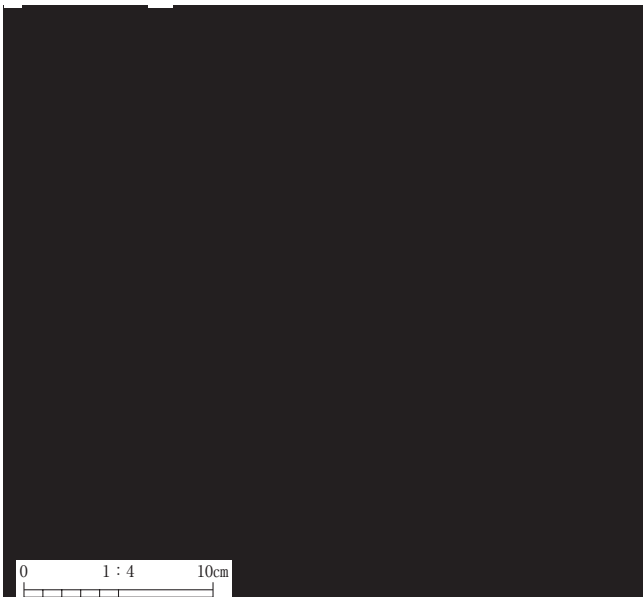
このうち出土土器182の備前播鉢などから15世紀後半、室町時代後半ころの遺物包含層と思われるが、京都系のかかわり179など6層上面近くでは16世紀代のものもわずかに含む。

6層出土の鉄製品には、数は多くないが武器や武具が認められる。F12は定角式の鉄鏃、F13は鉄鏃の茎部分の破片であるが、その特徴から時期の限定は困難である。F11は小札で、札頭（名称は第86図参照）は右端よりもやや左に寄ったところに頂部がある形態で、長さ6.25cm、幅3.2cm、厚さ0.11cm、重さ11.2gを測る。坂長前田遺跡出土の小札はいわゆる本小札といわれるものである。本小札は威し、



第61図 2層出土土器

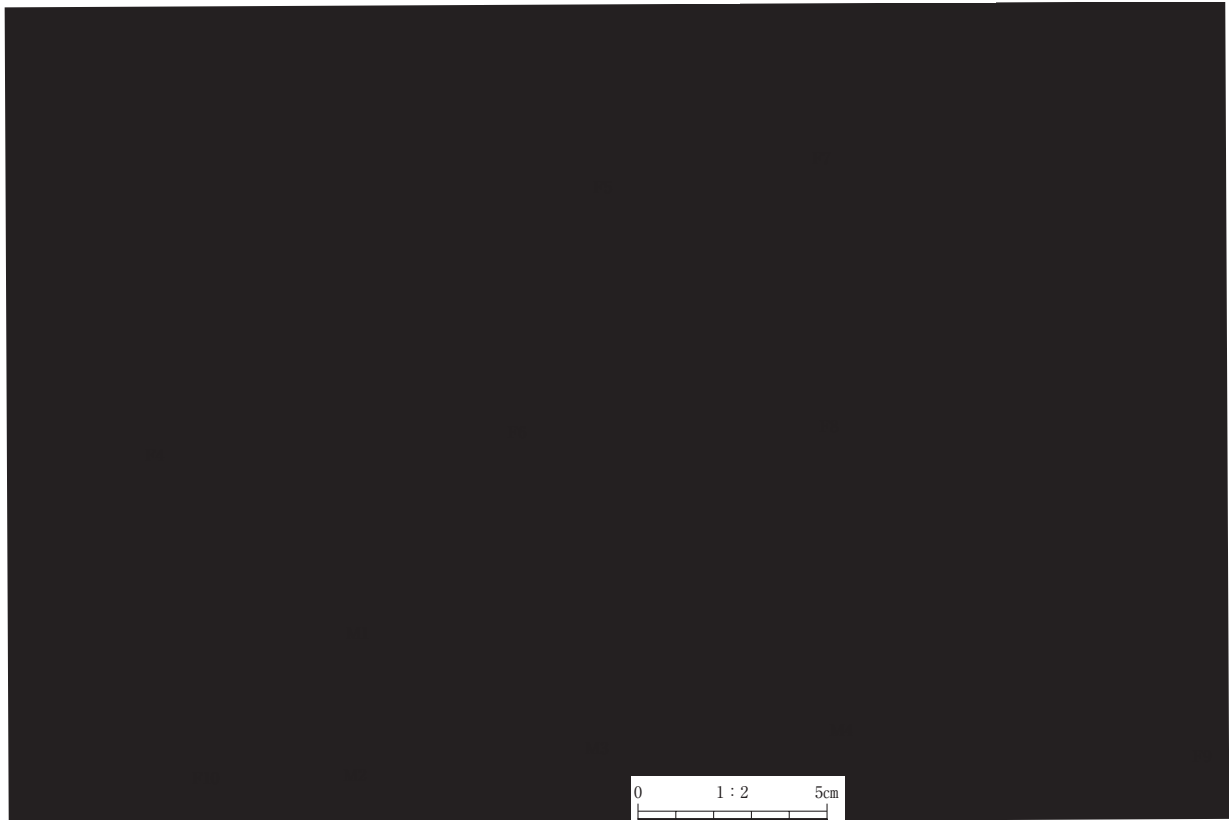
下緘の穴が2列13孔になる並札と呼ばれるものが一般的であるが、本例は2列14孔の四目に分類される。四目の小札は胸板など金具廻と接続する箇所用いられる小札である。小札に穿たれた穴は、上3段は威しのための穴で、さらに1・2段目を緘穴、3段目を毛立ての穴と呼び、下4段を下緘の穴と呼ぶ。威しの穴は下緘の穴に対し大きいものが一般的であるが、本例も威しの穴3～4.5mm、下緘の穴2～4mmと威しの穴がわずかに大きく穿たれている。また小札断面は平坦に作られている。詳細は第5章で後述するが、本小札は平安時代末期から鎌倉時代（12世紀後半～13世紀）の特徴を有するものである。



第62図 2層出土木製品

そのほかの金属製品として、F14は馬具などに用いられたものであろうか環状鉄製品である。F15は紡錘車、F16は鋏、F17は袋状鉄斧、F18は鉄鍋の底、F19は鎌、F20は楔、F21～25は釘、F26～30は棒状鉄製品、F31・32は板状鉄製品である。B3は先部を木葉形にする真鍮製の匙である。

木製品は連歯式の下駄W27や曲物の底板W26のほか、墨書等の文字は見られなかったが、両辺に切込を入れ、右半部に2つの穿孔が施されるW28、下端に被熱痕が認められる棒状のW29～31が出土する。



第63図 2層出土金属製品

7層出土遺物（第67・68図、PL24）

遺跡北側、6層下に堆積する7層では土器、鉄製品、木製品のほか、馬のものと思われる歯や骨が数本分出土した。このうち出土土器は土師器皿192や土師質、瓦質の鍋200～203などから13～14世紀ころの遺物包含層と思われる。

鉄製品は、F33の鑿頭式の鉄鍬が認められるほか、F34の鉄鍋の底、釘と思われるF36、右端部を折り返した不明鉄製品F35が出土する。

木製品には、生活用具等に箸と思われるW32、漆器碗W33・34、容器の側板と思われるW35、糸巻の横木W36、差歯式の下駄W37が認められる。そのほかW38～46は板状木製品で、W38は下端部を両側から斜めに削り、さらに表、裏の両面からも側縁を削って、鋭利な剣先形の形状を呈する。また、W46は被熱痕が認められる。

馬歯、骨と思われる資料は、数本分出土したものの遺存状態は悪く、図化できたのはB2の歯1本のみである。角柱状で、上面ではエナメル質と象牙質が入り組んだ状況が観察できる。長さ53.5mm、幅29.5mm、厚さ25.5mmを測る。

なお7層出土遺物では、W3の下駄、遺存状態が良好でなかった馬歯を放射性炭素年代測定したところ、W3の下駄が9世紀後半から10世紀後半、馬歯が11世紀中頃から13世紀前半の年代が測定された（第4章）。

8層出土遺物（第69～71図、PL25）

7層下に堆積する8層からは土器のほか、D区を中心に木製品が多く出土する。このうち出土土器は須恵器坏204～210、土師器坏211・212など奈良時代の特徴を有する土器を中心とする。



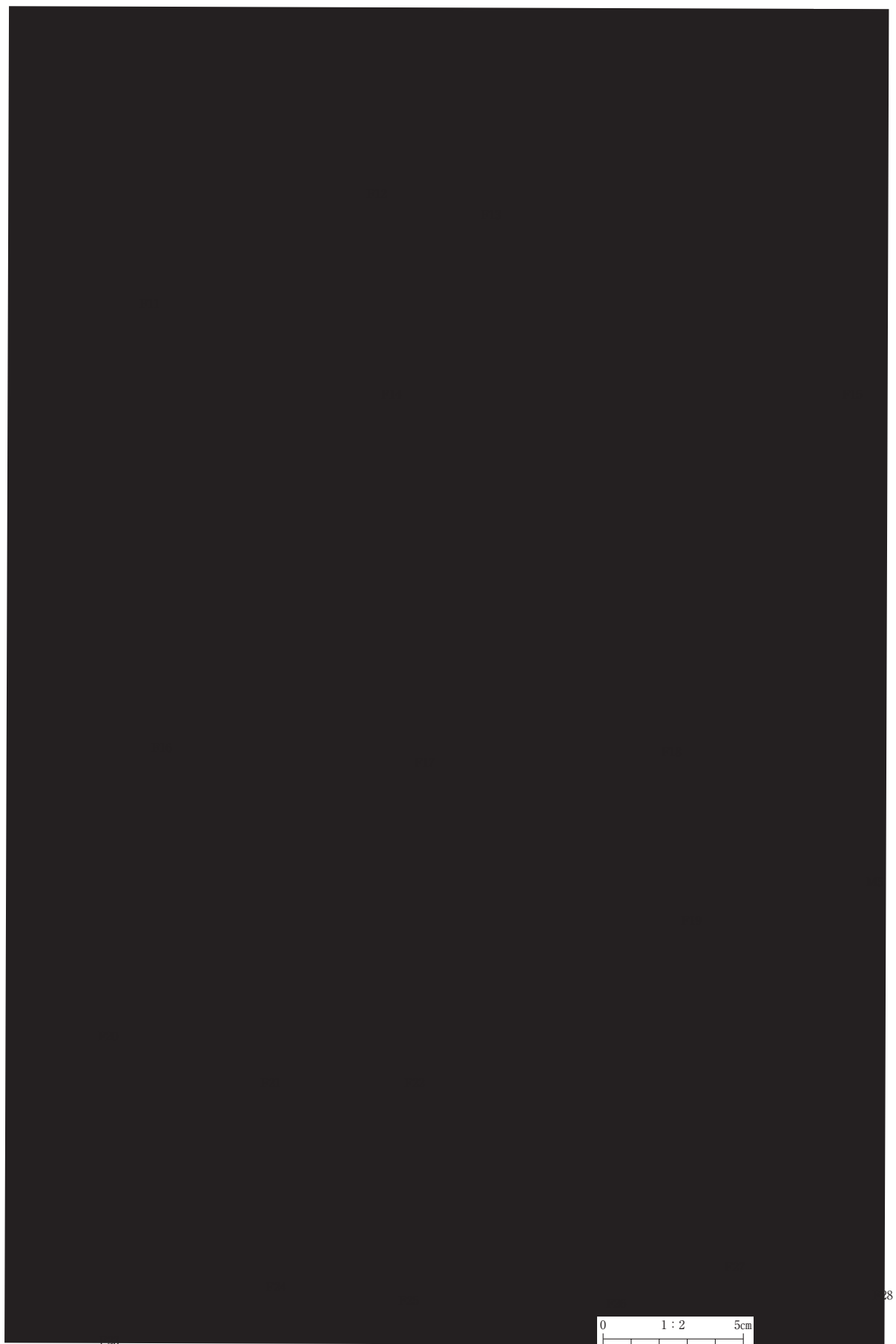
第64図 6層出土土器

金属製品の出土はほとんどなく釘F37が見られた。

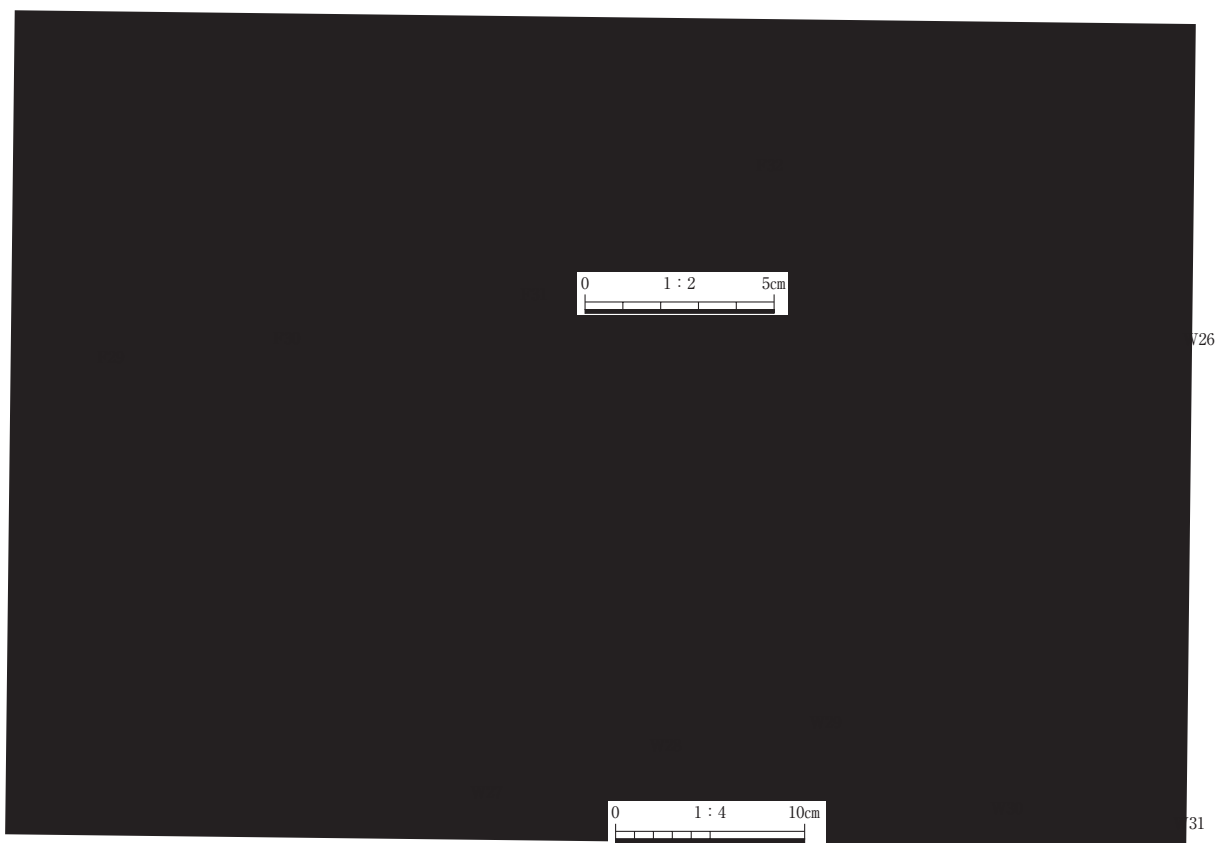
木製品には上端部を両側から台形状に削り、その中央を穿孔した板状木製品W67などが出土するほかは、生活用具と祭祀具が認められる。

生活用具は、曲物が中心で底板W47～52が出土した。このうちW49・50には側縁に穿孔や刻んだ痕、W47には製作のための割付線と思われる線刻が認められる。また、W53は茶杓状の竹製品であるが、8層掘削中、雨天による現場水没後の排水中に認められたもので、正確な出土状況は不明である。祭祀具は人形W54、鳥、馬、蛇等を模したと思われるW55、舳先に波切板を差し込むための切込、後部に穿孔が施される舟形W58などの形代のほか、陽物W56なども見られる。また棒状の上部を削り、頸部を作りだすW57も人形か陽物を模ったものであろうか。そのほかW59～66に代表する板状木製品が多く出土した。これらは下端部が残存するものは両側、もしくは片側から斜めに削られている。

さて、8層中からの木製品の出土状況は第69図の通りであるが、多くは上記の下端部を両側、片側から斜め削ったもの、またはその上半部と思われる板状木製品である。出土地点は8層上面で検出し



第65図 6層出土金属製品



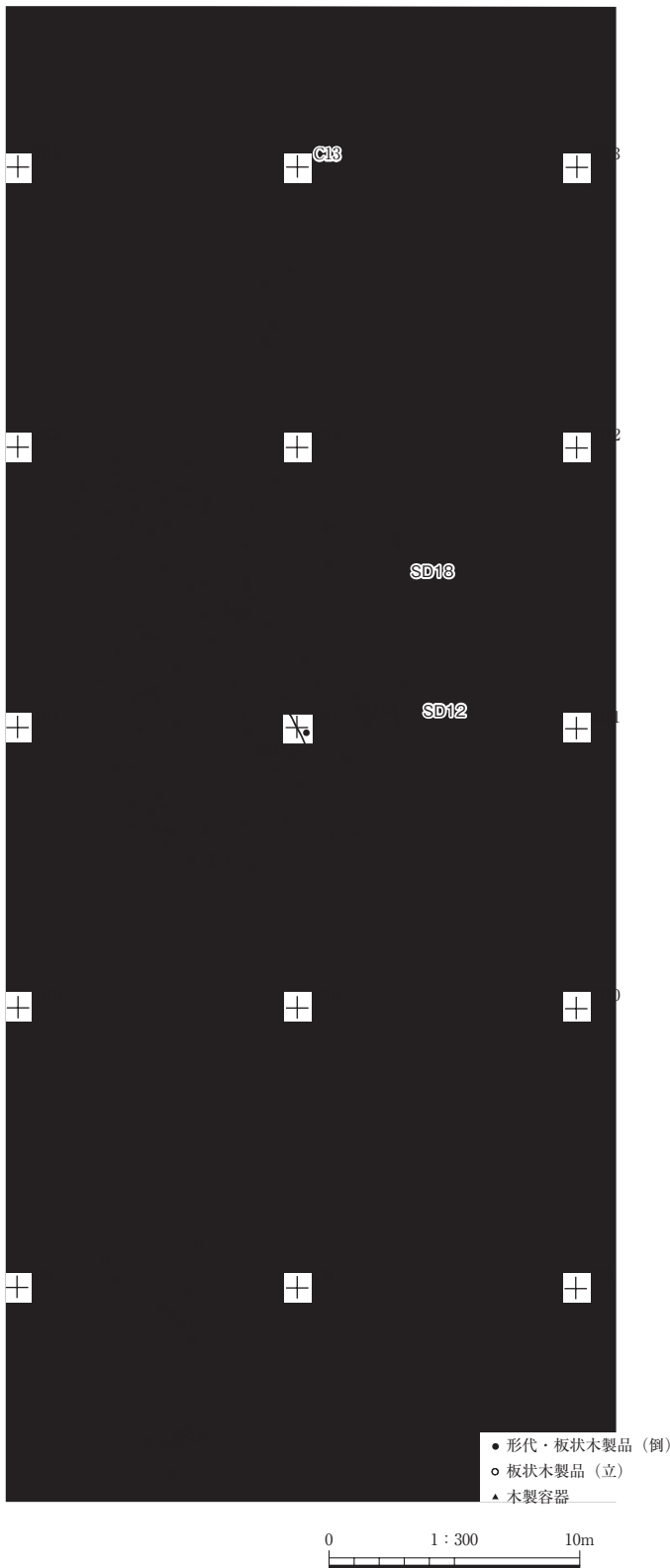
第66図 6層出土遺物



第67図 7層出土土器



第68図 7層出土遺物



第69図 8層木製品出土状況

たSD14、SD18よりも北側でその大半が認められるが、8層掘削後に検出されたSD15上面では地面に刺さり、一部列状に遺存するものも見られた。

これらの板状木製品は、SD15上面で列状に刺さって遺存する状況、埋土中からも同形態の木製品が出土することからすれば、SD15の埋没に伴い地面に刺されたものであり、鳥取市岩吉遺跡（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団1991『岩吉遺跡Ⅲ』）等で認められる古墳時代に遡る木製祭祀具とすることができるかもしれない。しかし、8層中での形代の出土や、その下端部の形状を重視した場合、これらの板状木製品は、奈良時代の溝であるSD14、SD18縁辺で使用された斎串等の祭祀具が遺存したものとも考えられる。この場合、SD15での遺存状況は、8層下面の広い範囲が礫を主とする11層であることから、SD15埋土中のみ深く刺さり、現位置で遺存したものと思われる。

なお、SD15出土の板状木製品を放射性炭素年代測定したところ、4世紀後半～6世紀前半の年代が測定された（第4章）。この年代を木製品の使用時に近い年代と考えた場合、これらは古墳時代の木製品であった可能性が高い。また斎串であった場合は、古木の利用が考えられる。

9層出土遺物（第72図、PL26）

9層はC区を中心に8層下に堆積する。9層中からは土器、土製品、木製品が出土したが、出土土器は古墳時代の土師器、須恵器であり、須恵器坏216から7世紀前半ころが下限と思われる。

土製品には土馬の脚と思われる219、鉄製品では馬具の引手F38が出土する。木製品は曲物底板のW76、陽物W69以外は板状木製品で、前述した8層出土の板状木製品と同様、古墳時代、もしくは上層の8層（奈良時代）から差された板状木製品と思われる。



第70図 8層出土遺物



第71図 8層出土木製品



第72図 9層出土遺物

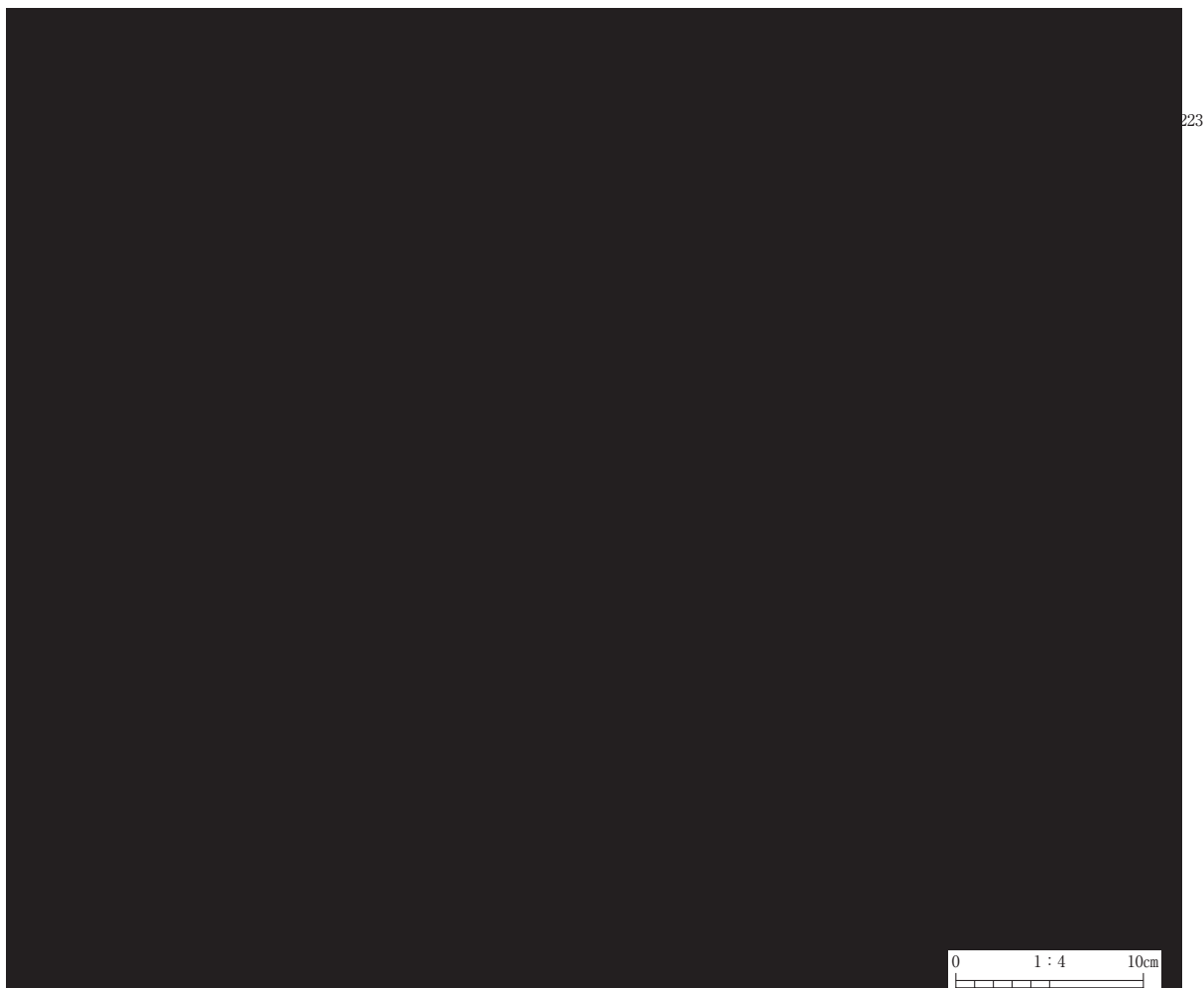
10層出土遺物（第73図、PL26）

10層も9層同様、C区を中心に堆積する。出土土器は年代がわかるものでは、220や221といったⅡ、Ⅲ様式の弥生土器であることから、弥生時代中期の包含層と考えられる。木製品はなすび形を縦に半裁したような不明木製品W77、曲物の底板W78以外は、上部を削り込んで段を作出したW79、板状木製品W80・81など出土土器に比べ、後出のものと思われることから上層からの混入と考えられる。

(3) 遺構外出土石器（第74～79図、PL36～41）

石鏃は60点出土した。石材は黒曜石が51点、サヌカイトが8点、鉄石英が1点である。形態は、有脚（32点）と凹基（24点）で大半を占め、平基と円基は2点ずつしかない。34点が欠損し、欠損部位としては片脚13点、2箇所以上9点が目立つ。S180は先端を、S181は片脚を、S223は右縁をそれぞれ再加工する。S220、S222、S230の3点は十分な押圧剥離が加えられておらず、断面形は四辺形か非対称となる。S240からS243は石鏃未成品で、小型の剥片を押圧剥離する途中で折れたか放棄したもの。

S244はサヌカイト製の石匙で、急角度の刃部をもつ。S245はサヌカイト製の両面調整石器で、片



第73図 10層出土遺物

面の半分ほどが研磨されている。長軸と短軸方向に両極打撃による小剥離面があり、それらは研磨痕よりも新しい。S246からS248は削器で、サヌカイト製。刃部はいずれも両面調整で形成される。S249からS252は二次加工剥片で、二次加工の程度は軽い。S253からS262は楔形石器。S262は水晶製で、他は黒曜石製である。S253とS254は両極打撃の初期のもの。それ以外は顕著な両極打撃痕をもつ。S259は両極打撃で剥がれた剥片に短軸方向からさらに両極打撃を加えたもの。厚みの除去を意図していることが明白である。楔形石器の多くは石鏃製作の初期の工程のものである可能性がある。S263からS266は黒曜石の石核。S263からS265は両極石核で、S263とS265は打面転移を行う。S264は剥片素材で背面側から比較的大きな剥片が取られているため石核としたが、楔形石器とすべきかもしれない。S266は単剥離面打面の石核で、小型で先細りの剥片が取られている。

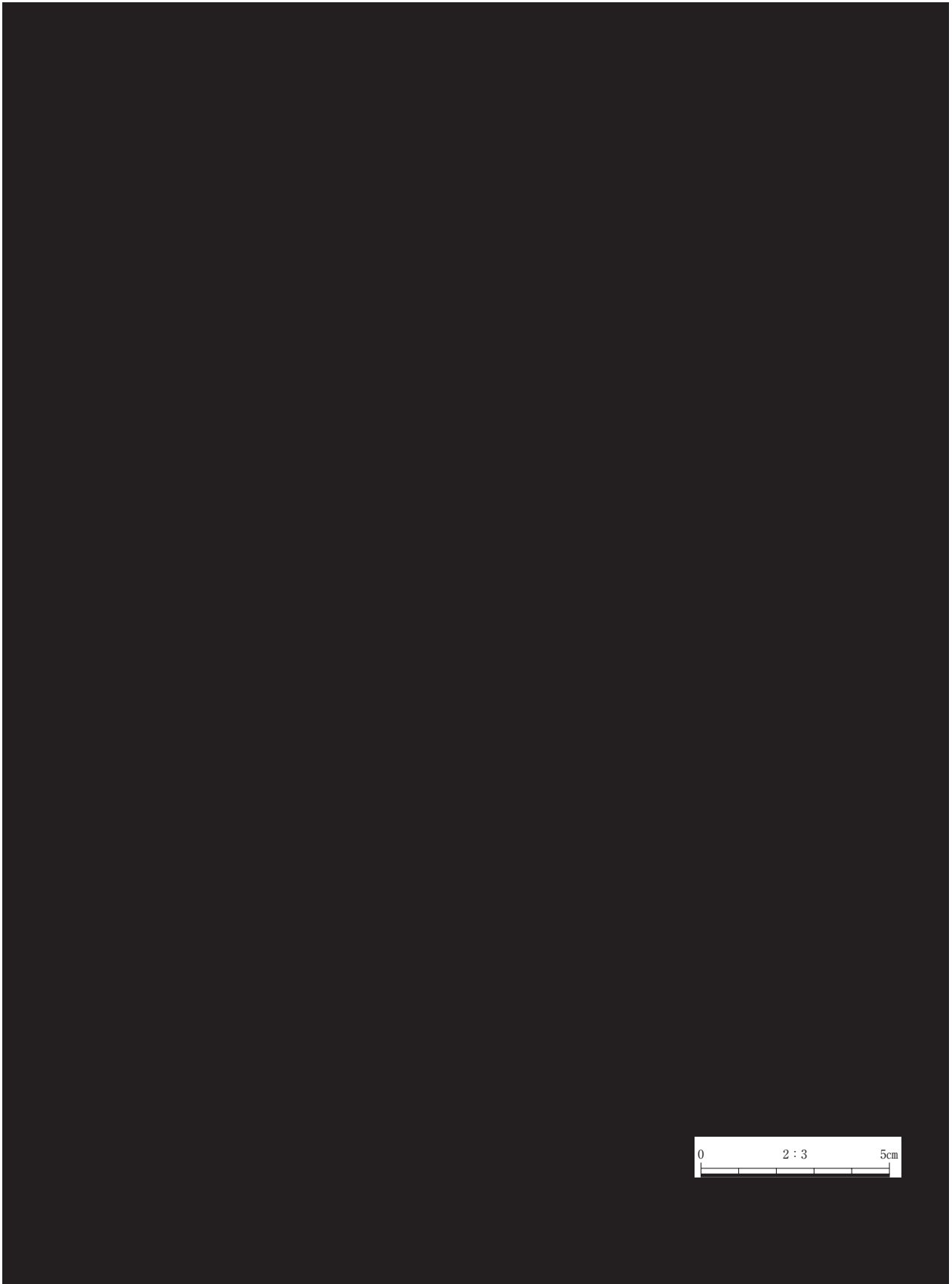
S267から270は磨製石斧。S267とS268は刃部側の破片で、刃部の損耗がほとんどないことから、使用の初期の段階で折損したものと思われる。S269は乳棒状の磨製石斧で、刃部を欠く。全体に敲打痕が残り、研磨は刃部付近に限られる。S270は基部の破片。S271は石鋏の破片。石錘は6点が出土した。S272とS273は擦り切りで、S274からS277は打ち欠きで紐かけを形成する。S278は凹石で両面を使用する。この他に図示しなかったが、石錘と磨石の破片がそれぞれ1点ずつ出土している。S279とS280は砥石の破片で、ともに細粒の花崗岩を用いている。S281は硯の表面の破片。赤色の頁岩製で、山口県で作られた赤間硯であると思われる。



第74図 石鍬（1）



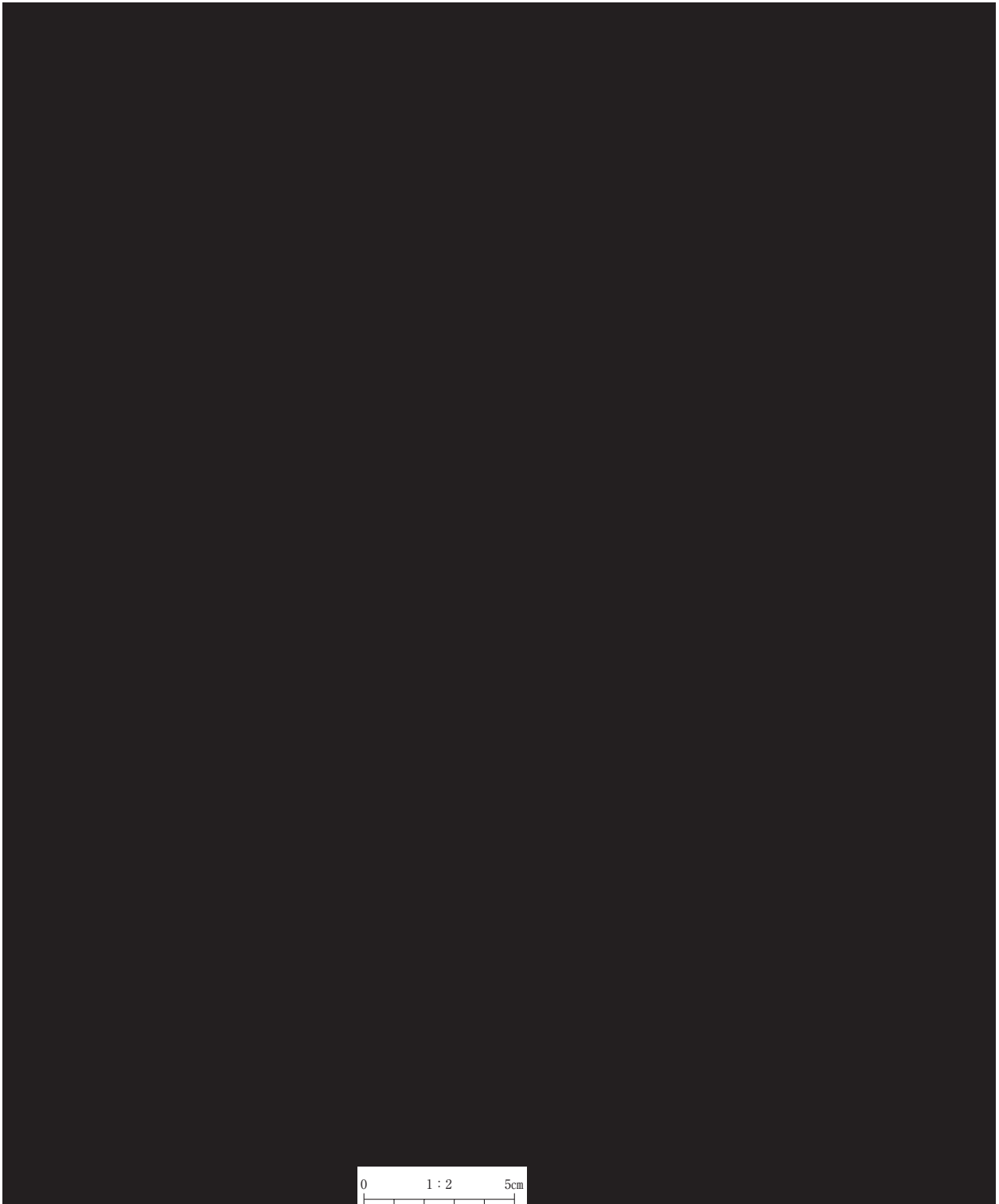
第75図 石鏝（2）



第76図 削器等



第77図 楔形石器・石核



第78図 磨製石斧・石鋤



第79図 凹石・砥石

第4章 自然科学分析の成果

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1. はじめに

伯耆町坂長に位置する坂長前田遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

PLD-15084はSD15より出土した板状木製品である。PLD-15085は7層より出土した下駄である。PLD-15086はSD14より出土した杭で最外年輪が確認されている。PLD-15087は7層より出土したウマの歯である。PLD-15088は8層より出土した桶底である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15084	遺構：SD15 遺物No.2227 その他：板状木製品	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：1.2N）
PLD-15085	遺物No.1388 層位：7層 その他：下駄	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：1.2N）
PLD-15086	遺構：SD14 遺物No.2423 その他：杭	試料の種類：生材 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：1.2N）
PLD-15087	遺物No.1746 層位：7層	試料の種類：歯（ウマ） 状態：wet	超音波洗浄 コラーゲン抽出
PLD-15088	遺物No.1967 層位：8層 その他：桶底	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N、水酸化ナトリウム：1N、塩酸：1.2N）

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第80図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の実験的誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1 (較正曲線データ: INTCAL09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-15084 遺物No.2227	-24.07 ± 0.14	1626 ± 18	1625 ± 20	397AD (61.4%) 434AD 495AD (6.8%) 505AD	386AD (72.3%) 465AD 481AD (23.1%) 533AD
PLD-15085 遺物No.1388	-23.40 ± 0.12	1134 ± 17	1135 ± 15	890AD (13.1%) 899AD 919AD (55.1%) 961AD	879AD (95.4%) 975AD
PLD-15086 遺物No.2423	-26.93 ± 0.16	1298 ± 18	1300 ± 20	670AD (35.7%) 695AD 700AD (7.6%) 708AD 748AD (25.0%) 766AD	665AD (62.2%) 723AD 740AD (33.2%) 771AD
PLD-15087 遺物No.1746	-19.32 ± 0.14	870 ± 18	870 ± 20	1164AD (68.2%) 1208AD	1055AD (5.5%) 1077AD 1153AD (89.9%) 1219AD
PLD-15088 遺物No.1967	-24.58 ± 0.19	1433 ± 18	1435 ± 20	611AD (68.2%) 643AD	595AD (95.4%) 653AD

4. 考察

得られた暦年代範囲の分布図を第81図に示す。

PLD-15084は、1 σ 暦年代範囲で397-434calAD(61.4%) および495-505calAD(6.8%)、2 σ 暦年代範囲で386-465calAD(72.3%) および481-533calAD(23.1%) を示した。PLD-15085は、1 σ 暦年代範囲で890-899calAD(13.1%) および919-961calAD(55.1%)、2 σ 暦年代範囲で879-975calAD(95.4%) を示した。PLD-15086は、1 σ 暦年代範囲で670-695calAD(35.7%)、700-708calAD(7.6%)、および748-766calAD(25.0%)、2 σ 暦年代範囲で665-723calAD(62.2%) および740-771calAD(33.2%) を示した。PLD-15087は、1 σ 暦年代範囲で1164-1208calAD(68.2%)、2 σ 暦年代範囲で1055-1077calAD(5.5%) および1153-1219calAD(89.9%) を示した。PLD-15088は、1 σ 暦年代範囲で611-643calAD(68.2%)、2 σ 暦年代範囲で595-653calAD(95.4%) を示した。

以下主に2 σ 暦年代範囲を元に述べる。

7層の試料は、PLD-15085の下駄が9世紀後半～10世紀後半と平安時代中期、PLD-15087のウマ歯が11世紀中頃～13世紀前半（特に12世紀中頃～13世紀初頭である可能性が高い）と平安時代後期～鎌倉時代に相当する範囲を示した。

8層の試料は、PLD-15088の桶底が6世紀末～7世紀中頃と飛鳥時代に相当する範囲を示した。

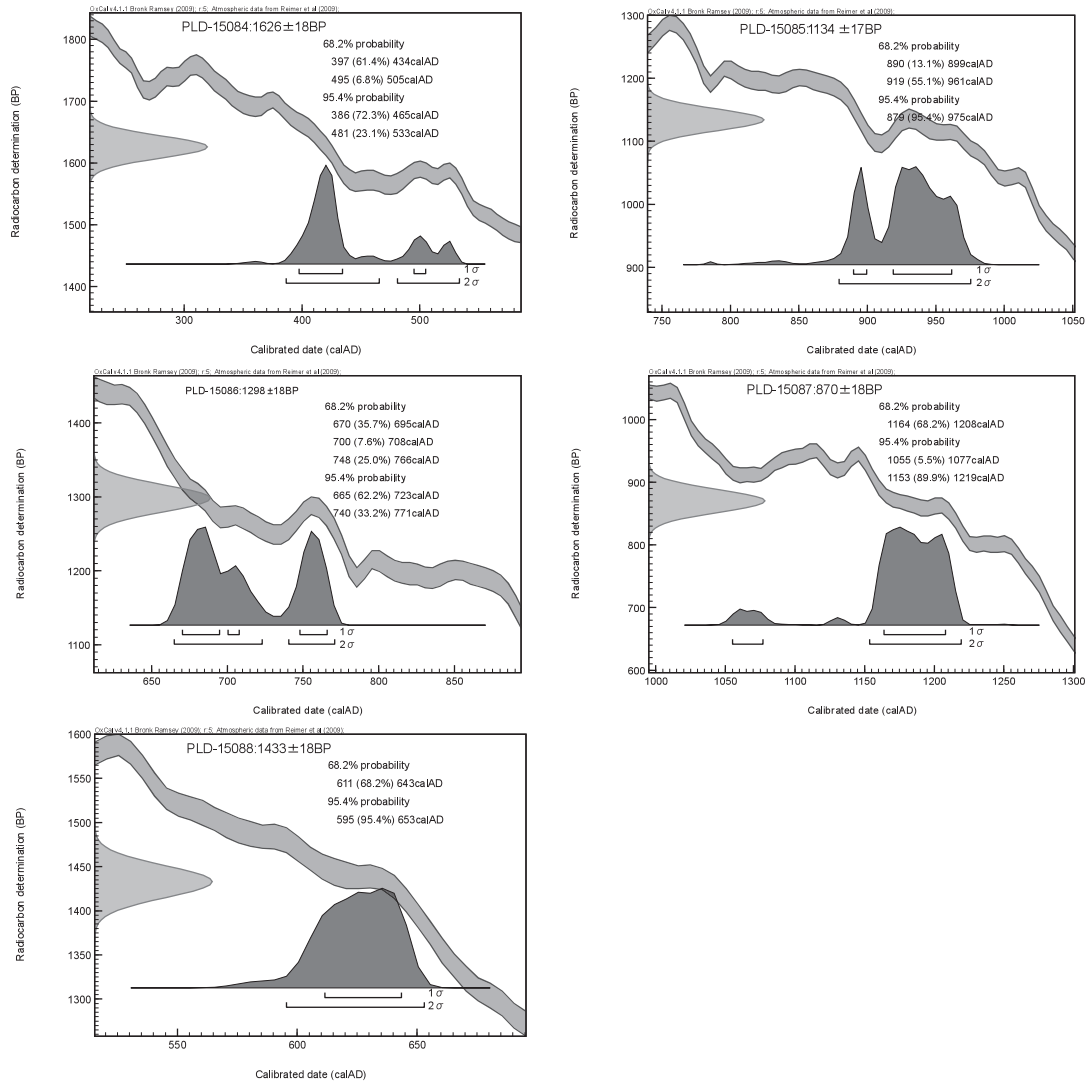
SD15より出土したPLD-15084の板状木製品が4世紀後半～6世紀前半と古墳時代、SD14より出土したPLD-15086の杭が7世紀後半～8世紀後半と飛鳥～奈良時代に相当する範囲を示した。

なお木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の部分を測定すると最外部からの年輪分古い年代が得られる（古木効果）。よって、最外年輪が確認されていない試料である下駄、桶底、板状木製品については、古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

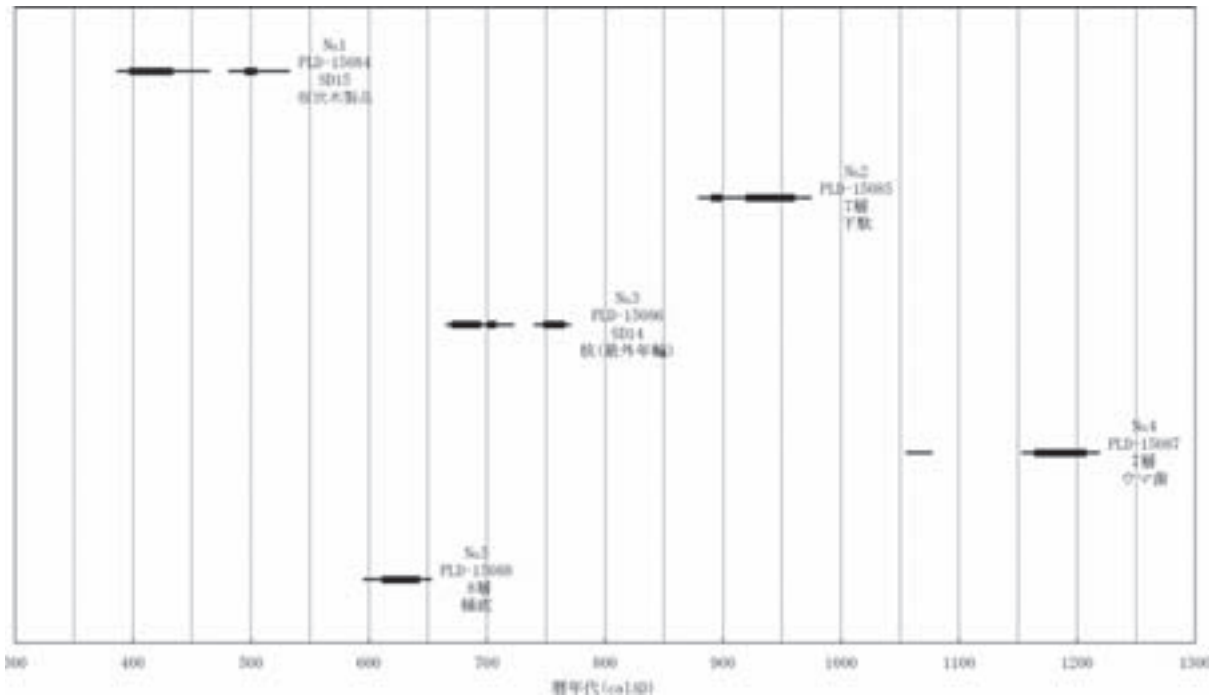
参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

第4章 自然科学分析の成果



第80図 暦年較正結果



第81図 暦年代の分布 (太線: 1σ, 細線: 2σ)

第2節 坂長前田遺跡出土鉄製小札の表面に見られる赤色物の蛍光X線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

伯耆町坂長に所在する坂長前田遺跡では、平安時代末のものとみられる鉄製小札が出土した。この小札の表面に見える赤色物について、蛍光X線分析を行い、材質を検討した。

2. 試料と方法

分析対象資料は、坂長前田遺跡の6層より出土した鉄製小札で、時期は形状や製作技術から12世紀後半から13世紀頃のものと考えられる。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。また、試料ステージを走査させながら測定する元素マッピング分析も可能である。

分析は、元素マッピング分析を小札両面について行い、さらに赤色部のポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が50kV、1.00mA、ビーム径100 μ mで、測定時間は5000sを5回走査、ポイント分析が50kV、0.06mA、ビーム径100 μ m、測定時間500sである。

3. 結果

元素マッピング分析により得られた小札両面のケイ素（Si）、鉄（Fe）、水銀（Hg）、鉛（Pb）のマッピング図を第82図に示す。また、赤色部のポイント分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第83図上段に示す。鉄（Fe）が極めて高く検出され、他にケイ素（Si）、カルシウム（Ca）マンガン（Mn）が検出された。

4. 考察

赤色顔料として考えられるものとして、朱（水銀朱）とベンガラ、鉛丹が挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉍物としては辰砂と呼ばれる。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe₂O₃、鉍物名は赤鉄鉍）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指す（成瀬，2004）。鉛丹は四酸化三鉛（Pb₃O₄）である。

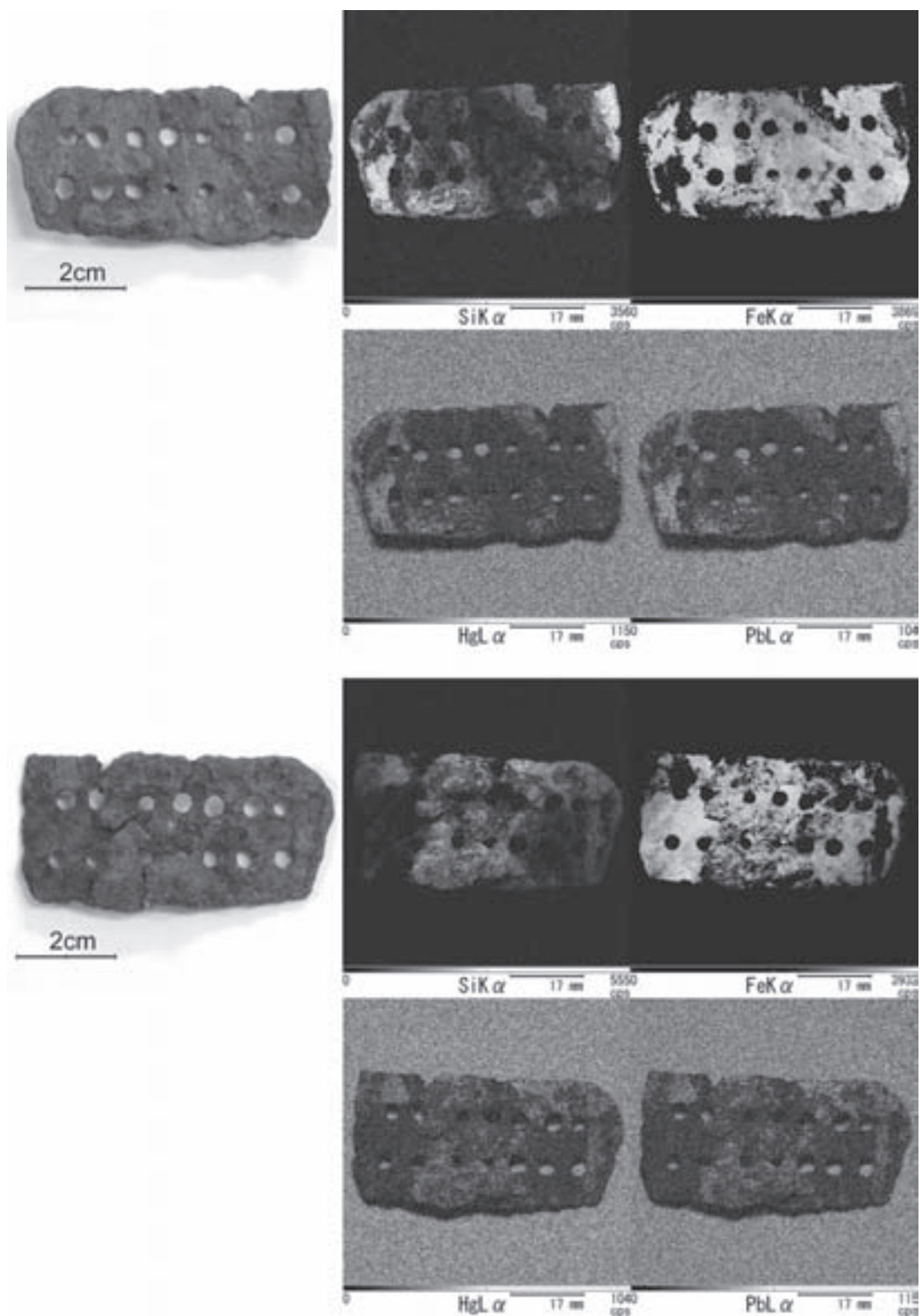
元素マッピング分析の結果、小札表面からはいずれの赤色箇所からも水銀や鉛は検出されなかった。このことから赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料だとするとベンガラにあたりと考えられるが、鉄製品の表面にあるため、元素マッピングでは赤色部分の分布範囲の把握は困難であった。また赤色物が鉄酸化物であったことから、鉄製品より生じた、いわゆる赤錆である可能性も十分に考えられる。実顕微鏡下で赤色部分の表面を観察したものの（第83図下段）、塗布されているというよりも鉄表面に析出しているようにも見え、本質的に赤錆もベンガラも同じものであることから、意図的に使用された顔料であると特定するには至らなかった。

5. おわりに

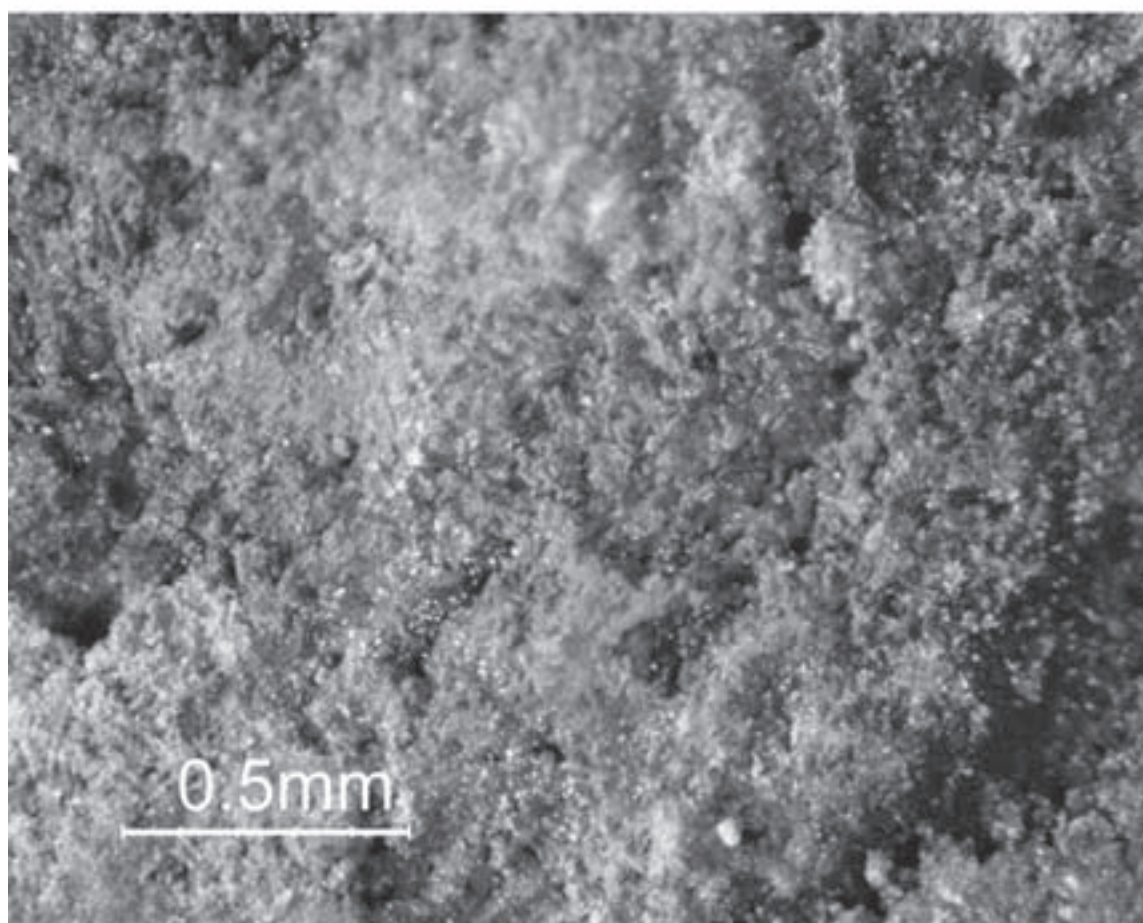
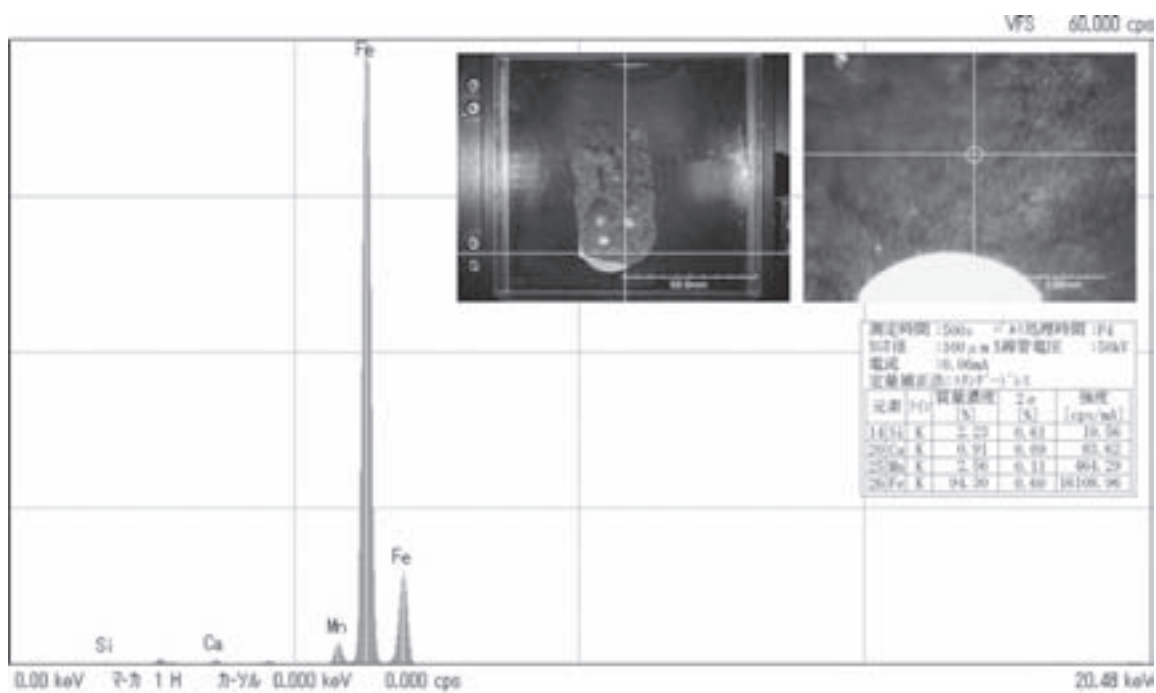
坂長前田遺跡より出土した鉄製小札表面に見られる赤色物について分析した結果、水銀や鉛は検出されず、鉄が多く検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料とするとベンガラであると考えられるが、鉄製品表面の腐食生成物である可能性もある。

引用・参考文献

成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 13-61, 宮内庁正倉院事務所.



第82図 鉄製小札表面の赤色物の蛍光X線分析（1）



第83図 鉄製小札表面の赤色物の蛍光X線分析（2）

第3節 坂長前田遺跡の植物珪酸体

米田恭子・鈴木 茂（パレオ・ラボ）

1. はじめに

坂長前田遺跡は鳥取県西伯郡伯耆町坂長に所在しており、縄文時代から江戸時代までのさまざまな遺物や遺構が出土している。以下に、遺跡が水田として利用されたかどうかを解明するための1資料を得る目的で行なった植物珪酸体分析の結果および考察を示す。

2. 試料と分析方法

試料は、土壌サンプル4試料（試料番号6～9）である。各試料について、試料6（6層：黒褐色粘質土）はやや砂質の黒褐色シルト粘土、試料7（7層：黒色土）はやや砂質の黒色粘土、試料8（8層：黒褐色土）は黒～黒褐色の砂レキ（砂岩）まじりの砂質粘土、試料9（9層：灰褐色粘質土）は黒褐色砂質粘土である。なお、7層、8層より出土した遺物について放射性炭素年代測定が行われており、 2σ 暦年代範囲で高い確立の年代範囲を示すと、試料2（PLD-15085：下駄、遺物No.1388、7層）が、879-975calAD(95.4%)、試料4（PLD-15087：馬歯、遺物No.1746、7層）が、1153-1219calAD(89.9%)、試料5（PLD-15088：桶底生材、遺物No.1967、8層）が、595-653calAD(95.4%)であった（放射性炭素年代測定の節参照）。植物珪酸体分析は上記した4試料について、下記に示した手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g(秤量)をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表3）、それらの分布を図84に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

表3 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数表

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
6	3,800	20,200	181,500	0	3,800	5,000	12,600
7	4,100	27,100	131,500	1,400	4,100	4,100	16,300
8	11,100	16,000	182,500	1,200	2,500	1,200	13,600
9	7,500	26,200	168,400	1,200	3,700	2,500	16,200



第84図 坂長前田遺跡の機動細胞珪酸体分布図

検鏡の結果、4 試料すべてから、イネの機動細胞珪酸体が検出された。個数的には試料8が最も多く、10,000個を超えており、試料9からは7,500個が、また試料6、7からも4,000個前後が得られている。

イネ以外ではクマザサ属型が最も多く検出されており、4 試料すべてで100,000個を超えている。ネザサ節型はおおむね20,000個前後得られている。その他ウシクサ族、キビ族、ヨシ属が観察されている。

4. 稲作について

上記したように4 試料すべてから、イネの機動細胞珪酸体が検出された。ここで検出個数の目安を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原，1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。坂長前田遺跡の試料8と9では、それぞれ11,100個と7,500個のイネの機動細胞珪酸体が検出されており、これらの層準において水田稲作が行われていた可能性は高いと植物珪酸体分析からは判断される。試料6と7では、5,000個に達していないものの、4,000個前後とやや5,000個に近い個数が得られており、水田稲作が行われていた可能性はあるように思われる。しかしながら、稲作の検証としての5,000個に達していないことから、今後、同層準における遺構、遺物の出土状況、同試料を用いた花粉分析結果など、稲作については総合的にみて判断されることが望まれる。

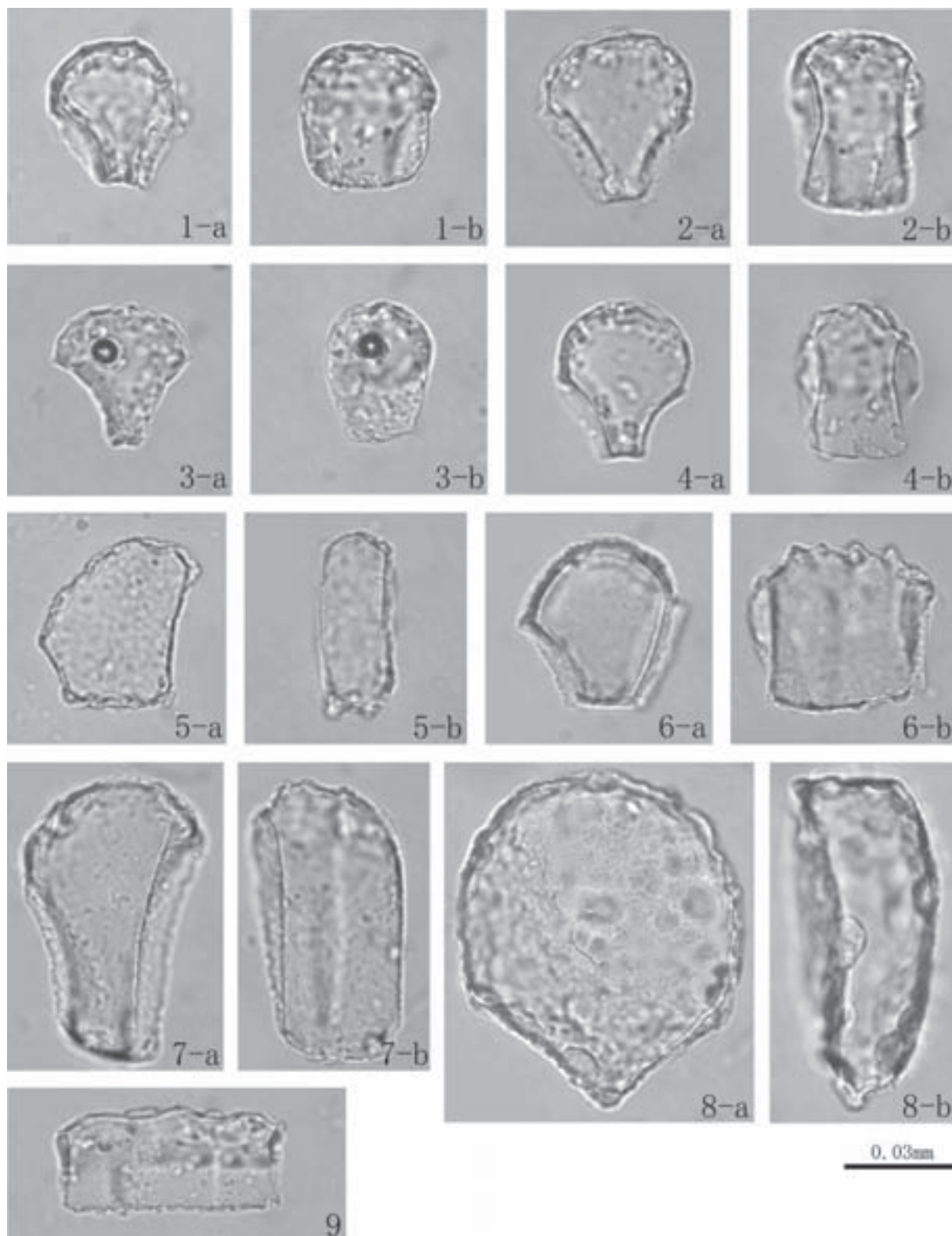
5. 遺跡周辺のイネ科植物

イネ以外で最も多く観察されているクマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下草的存在で生育していたとみられる。また、ネザサ節型については、遺跡周辺の空地や上記森林の林縁部などの日のあたる開けたところにケネザサやゴキダケといったネザサ節型のササ類が生育していたとみられる。ススキやチガヤなどのウシクサ族も同じような所に生育していたと推測され、ススキ-ケネザサ群集といった草地を形成していたとみられる。キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、

スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明であるが、ここでは稲作にともなう雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。またヨシ、ツルヨシといったヨシ属については、水田内や水田周辺の水路などに生育していたと推測される。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル，227，2-7。



第85図 坂長前田遺跡の機動細胞珪酸体

1～4：イネ（a：断面、b：側面）1：No.6、2：No.7、3：No.8、4：No.9、5：クマザサ属型（a：断面、b：側面）No.6、6：ネザサ属型（a：断面、b：側面）No.8、7：ウシクサ族（a：断面、b：側面）No.8、8：ヨシ属（a：断面、b：側面）No.8、9：キビ族（側面）No.6

第5章 総括

第1節 調査のまとめ

坂長前田遺跡では、土坑2基、落とし穴1基、溝15条、自然河川4条が確認された。本章では、これらの確認された遺構、そして出土遺物を中心に、調査成果についてまとめる。

縄文時代

縄文時代の遺構は、土坑1基、落とし穴1基が確認された。SK1は平面方形の土坑で、埋土上層からは多量の縄文土器が出土する。接合資料がほとんど認められないことから廃棄土坑ではなく、周囲からの混入と判断したが、出土した土器は後期中葉ころの縁帯文土器を中心とする。落とし穴SK3からも埋土上層から粗製無文の深鉢上半破片が出土しており、SK1出土の粗製無文土器との類似から近い時期に埋没したものと思われる。

本遺跡周辺では、これまでの調査で坂長下門前遺跡（高橋 2007、2010）、坂長ヨコロ遺跡（高橋 2010）などで、後晩期と思われる落とし穴が多数確認されているが、落とし穴以外の遺構では、本遺跡から北西に1.2kmの坂長第7遺跡（加藤ほか 2009）で晩期の可能性がある掘立柱建物が1棟確認されているのみで、当該期の集落の様相は明らかでない。

しかし、晩期土器が出土する周辺遺跡の状況から、坂長第7遺跡近辺での集落の展開が予想されており（加藤ほか 2009）、本遺跡でも自然河川SD4から突帯文土器など晩期の縄文土器が出土する。

また、坂長前田遺跡では土器以外に当該期と思われる遺物に、多くの石鏃が出土する。石鏃には破損した多くの成品とともに、製作途中で欠損、またはうまく剥離ができずに放棄されたと思われる未成品や、稚拙な技術をもって作られたと判断されるものなどが確認される。

弥生時代～古代

本遺跡で弥生時代に属するものは自然河川3条、古墳時代～平安時代中期に属する遺構は土坑1基、溝10条である。確認された遺構は溝を中心とするが、このうち古墳時代の溝SD15、奈良時代の溝SD14、平安時代の溝SD12の埋土中や溝が検出された遺物包含層中からは多くの木製品が出土した。

木製品には曲物を中心とした生活用具と人形や舟形、動物を模った形代、陽物などの祭祀具が認められる。また、祭祀具と思われるものに、下端部を両側、片側から斜めに削った板状木製品が多く出土する。

下端部を加工した板状木製品は、古墳時代前期ころに埋没したSD15上面で一部列状に地面に立った状態で認められ、埋土中からも同形態の木製品が出土する。また、放射性炭素年代測定によれば、4世紀後半～6世紀前半の年代が測定された。これらのことからすれば、板状木製品は、鳥取市岩吉遺跡（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991）等で知られる古墳時代に遡る木製祭祀具とすることができるかもしれない。

しかしながら、奈良時代の遺物包含層である8層中からの人形などの形代の出土や、板状木製品の下端部の形状、奈良時代の溝SD14やそれ以前の溝SD18よりも北側でそのほとんどが認められる状況から見た場合、これらの板状木製品は、SD14やSD18縁辺で使用された斎串等の祭祀具が遺存したものとも考えられる。この場合、SD15での遺存状況は、8層下面の広い範囲が礫を主体とする11層であることから、SD15埋土中のみ深く刺さり、現位置で遺存したものであることと、放射性炭素年代

測定で測定された年代も古木の利用であったことが条件である。

上記したとおり、調査において祭祀具と考えられる下端部加工の板状木製品の帰属時期は明確にできなかった。しかし、本遺跡周辺の状況を見た場合、先に挙げた坂長第7遺跡においても古代の遺構、遺物包含層より形代などの祭祀遺物が確認されていることから、本遺跡で出土した木製祭祀具も、古代に属する可能性が高いと思われる。

なお6層から9層の遺物包含層は第4章第3節のとおり土壌分析を行った。6層から9層までイネの植物珪酸体が確認されており、うち8層、9層の層準では植物珪酸体分析からは水田稲作が行われていた可能性は高いとされた。調査においては、6層から9層の各層上面において水田に関わる遺構の確認はできなかったため、詳細は明らかにできないが、古墳時代～奈良時代、本遺跡内、または遺跡近隣では水田稲作が行われていたものと思われる。本遺跡内で水田稲作が行われていた場合は、前述の木製祭祀具は、水田稲作、またはそれに伴う溝を対象として行われた祭祀具であったろうか。

中近世

中近世に属する遺構は、中世の溝3条、近世の溝1条であるが、ここでは中世の遺物を中心に触れる。

中世の溝はSD9、SD10、SD11の3条である。SD9、SD10の埋土中や、これらの溝が検出された鎌倉時代、室町時代の遺物包含層中からは土器のほか、鉄鏃や本章第2節で触れる小札といった中世の武器、武具類などの鉄製品とともに、木製品も多く出土する。

木製品のなかには、漆器、曲物、下駄、糸巻などの生活用具、馬もしくは鳥形である祭祀具のほか、端部に被熱痕が見られる不整形の木製品が確認された。

この被熱痕が見られる不整形の木製品は、本遺跡周辺では坂長第7遺跡でも多く確認されるが、中世前期の遺跡から出土した串状木製品を検討した畑大介（畑 2006）によれば、被熱痕が見られる木製品は火付け木であり、祭祀具と見られる木製品と共伴して見られることや、事前に多くの材の用意がされ、未使用品も使用済み品とともに廃棄される出土状況などから、「火付け木の多くは単なる実用品ではなく、何らかの祭祀儀礼のなかで明かりを灯したり、火を移すために用いられた可能性が高い」とされ、なおその用いられ方に検討が必要とするも、祭祀に関連する遺物であった可能性が指摘される。

本章第3節のとおり、平安時代末期、本遺跡が位置する会見郡東部（現在の伯耆町周辺）を拠点とした紀成盛という武士が勢力をもち、東伯耆を拠点とした小鴨氏と争ったことが知られる。中世の一時期、坂長前田遺跡の地もこれらの争乱の場となった可能性があるが、被熱痕のある不整形木製品などの出土が示すとおり、古代に続き中世においても本遺跡内で祭祀が行われていたことが窺われる。

以上確認された各時期の遺構、遺物を概観したが、本遺跡においては、本章第2、3節で触れるように、平安時代末期～鎌倉時代のものと思われる小札の出土など、当該期における本地域の政治的状況を考察する際に貴重な発見があったほか、古代、中世の木製祭祀具の出土が注目される。

古代山陰地方では伯耆西部以西で木製形代が用いられることは希薄であったとされる（松尾 2008）が、本遺跡出土の木製祭祀具には、人形、動物形、舟形などの木製形代が確認された。また、古代に続き中世においても木製祭祀具が出土する。残念ながら調査では祭祀の具体を窺える状況は確認できなかったが、遺跡から出土した木製祭祀具は、古代、中世における本地域の人々の信仰、祭祀を検討する貴重な資料となろう。

参考文献

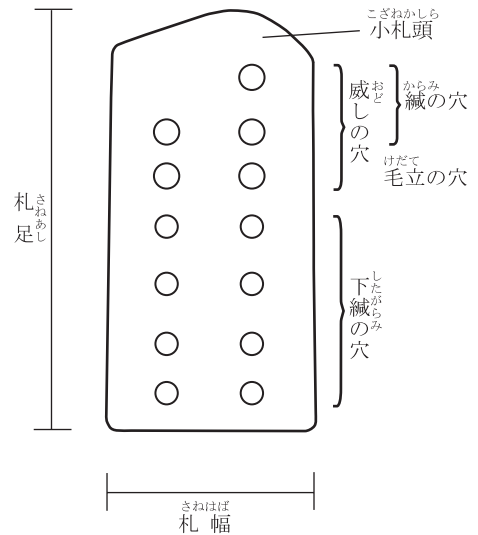
- 加藤裕一ほか 2009『坂長第7遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 高橋章司 2007『坂長下門前遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 2010『坂長下門前遺跡2 坂長ヨコロ遺跡 坂長熊谷遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991『岩吉遺跡Ⅲ』
 畑大介 2006「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』高志書院
 松尾充晶 2008「山陰地方における古代祭祀と木製祭祀具」『石川県埋蔵文化財情報』第19号
 （財）石川県埋蔵文化財センター

第2節 坂長前田遺跡出土の小札

鳥取県内での小札の出土は本遺跡以外では、管見によると西伯郡大山町大山寺僧坊跡^(註1)、東伯郡三朝町三徳山観音寺遺跡（第6地点）（三朝町教育委員会 2006）での出土が知られる。

このうち大山寺僧坊跡出土の小札は伊予札と呼ばれる南北朝末期以降に作られた小札である。また、三徳山観音寺遺跡（第6地点）の小札は上端、下端に欠損があるものの2行13行の本小札^(註2)と思われるが、札幅1.6mmと後述するように札幅から、坂長前田遺跡の小札よりも新しい特徴を有する。

本節では前述（第3章）と重複してしまうが、改めて坂長前田遺跡出土の小札の特徴を挙げ、その時期等について触れたい。



第86図 小札名称

表4 中世甲冑の小札寸法（長側札）（山岸・宮崎 1990）

（単位cm）

所蔵者	甲冑名称	札 足	札 幅	推定年代
大山 祇 神社	逆 沢 瀉 威 大 鎧	※ 6.7	3.0	平安中期
猿 投 神社	檜 鳥 威 大 鎧	※ 7.3	3.5	平安後期
甘 南 備 寺	黄 檀 匂 威 大 鎧	※ 7.9	3.7	平安後期
赤 木 家 伝 来	赤 韋 威 大 鎧	※ 7.4	4.1	平安後期
厳 島 神社	小 桜 威 大 鎧	8.0	4.7	平安後期
御 嶽 神社	赤 糸 威 大 鎧	7.7	3.9	平安後期
厳 島 神社	黒 糸 威 大 鎧	7.7	3.1	平安末期
御 嶽 神社	紫 裾 濃 威 大 鎧	7.5	2.5	鎌倉中期
厳 島 神社	浅 葱 綾 威 大 鎧	☆ 7.2	2.6	鎌倉後期
春 日 大 社	梅 金 物 赤 糸 威 大 鎧	6.8	2.3	鎌倉後期
細 川 家 伝 来	白 糸 妻 取 威 大 鎧	6.9	2.0	鎌倉末期
櫛 引 八 幡 宮	白 糸 妻 取 威 大 鎧	6.2	1.8	南北朝時代
春 日 大 社	竹 雀 金 物 赤 糸 威 大 鎧	☆ 6.2	1.9	南北朝時代
櫛 引 八 幡 宮	菊 金 物 赤 糸 威 大 鎧	6.6	1.8	南北朝時代
林 原 美 術 館	縹 糸 威 胴 丸	6.1	1.8	南北朝末期
防 府 天 満 宮	浅 葱 糸 妻 取 威 大 鎧	6.1	1.8	室町前期
春 日 大 社	黒 韋 威 胴 丸 (二 号)	5.5	1.5	室町前期
櫛 引 八 幡 宮	白 糸 肩 紅 威 胴 丸	5.6	1.7	室町前期
長 谷 寺	紅 糸 威 大 鎧	5.5	1.8	室町前期
太 山 寺	紅 糸 中 白 威 腹 卷	5.7	1.6	室町中期
厳 島 神社	黒 韋 肩 紅 威 大 鎧	5.5	1.7	室町後期
佐 太 神社	色 々 威 胴 丸	5.2	1.4	室町後期
毛 利 家 伝 来	色 々 威 腹 卷	5.4	1.4	室町後期
佐 太 神社	色 々 威 腹 卷	5.2	1.0	室町後期

註 ※印は三目札
 ☆印は長側五段

小札の名称は第86図に示す通りである。坂長前田遺跡出土の本小札は札足6.25cm、札幅3.2cm、厚さ0.11cm、重さ11.2gを測る。札頭は右端よりもやや左に寄ったところに頂部があり、漆下地による盛上は確認できない。威し、下緘の穴は2列14孔穿った四目に分類^(註3)されるが、上3段の威しの穴は3～4.5mm、下緘の穴は2～4mmと威しの穴がわずかに大きく、とくに下緘の穴1・2段が小さめに穿たれている。また小札の左側、下側にまま見られる捻り返しは認められず、平坦に作られている。

上記した坂長前田遺跡の小札の特徴であるが、その大きさについて見た場合、山岸素夫、宮崎眞澄によれば表4のとおり、平安時代後期に札幅が最大になり、平安時代末期以降は製作年代が下るにつれ、札幅が細くなる傾向がある（山岸・宮崎 1990）。これに従うならば坂長前田遺跡の小札は平安時代末期から鎌倉時代頃の特徴を有する。

また、坂長前田遺跡の小札は平坦に作られており、小札左側、下側からの捻り返しは見られないが、捻り返しは11世紀前半、11世紀後半から12世紀前葉、12世紀中葉から12世紀後葉の小札で折り返すものから折り曲げただけのもの、捻り返しをしない平坦なものへの変化の傾向が示されており（津野 1997、1998）、このことから、捻り返しのない本例は、平安時代末期以降のものと思われる。

以上のことから坂長前田遺跡の小札の年代は、平安時代末期から鎌倉時代（12世紀後半～13世紀）のものと思われる。

次に本遺跡小札がどのように甲冑に用いられていたかであるが、四目の小札は胸板など金具廻と小札板を取り付ける箇所用いられる小札である（山岸・宮崎 1990）。しかし、四目の小札は大鎧の場合、下部に段がある棚造の金具廻に小札板を取り付ける所や、段のない平造の脇板に小札板を取り付ける所に、腹巻^(註4)では平造の金具廻に小札板を取り付ける所など、平造の金具廻と小札板を取り付ける際に用いることが多い。このため、小札からは使用箇所は明らかになるものの、大鎧、腹巻のどちらに使用されたものであったのかは詳らかにできなかった。

註

- 1 現地説明会（2009年10月17日）で実見。
- 2 本小札とは後に出現する伊予札、板札と区別するために用いられた名称である。伊予札とは小札の札頭を二つに割るなどして、本小札が2枚重なった状態を1枚で見せる工夫をしたもの。板札とは小札を重ねてできた小札板を1枚の板で簡略化したもの。
- 3 2行13孔を並札、3行19孔が三目に分類される。
- 4 腹巻の呼称は、中世に腹巻とされていたものが近世以降は胴丸に、中世に胴丸とされたものが近世以降は腹巻と呼ばれ、その呼称は混同する。ここでは中世に腹巻と呼ばれた右側に引合わせを持つものを腹巻とする。

参考文献

- 津野 仁1997「西ノ谷遺跡の小札」『西ノ谷遺跡』横浜市教育委員会
 津野 仁1998「古代小札甲の特徴」『兵の時代－古代末期東国社会－』横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
 三朝町教育委員会 2006『名勝及び史跡 三徳山発掘調査報告書』三徳山歴史遺産調査報告書第3集山岸素夫・宮崎眞澄 1990『日本甲冑の基礎知識』雄山閣

第3節 紀成盛について

坂長前田遺跡から出土した鉄製小札は、12世紀後半頃の鎧の部品と考えられる。また、馬歯の1点を放射性炭素年代測定した結果、12世紀中頃から13世紀初頭という値が得られた。調査地内からは、この他にも、複数の馬歯や骨、鉄鏃や馬具類などが出土している。これらの遺物は、坂長前田遺跡の周辺で12世紀後半に戦闘が行われた可能性を示唆する。

12世紀後半にこの地域を拠点としたのは、大山寺の鉄製厨子銘板で名高い、紀成盛である。源平の合戦に名を残し、最盛期に伯耆国西半と美作国の一部までを支配下に置いたとされるこの人物については、これまでも研究対象として取り上げられてきたが、同時代の史料が少ないこともあり、部分的な理解にとどまっている。一方、近年当地域では、発掘調査によってこの時期の遺構や遺物が確認されている。また、成盛についての伝承地や伝承物が存在し、近世文書には当時の口碑を記すものがある。ここでは、これまで主に文献資料から語られてきた成盛を、様々な側面から検討してみたい。

1 文献資料にみる紀成盛

呼び名について 紀成盛の名が出てくる最古の資料は、大山寺の鉄製厨子銘文で、成盛自身によって承安3年（1173）に奉納されたものであるから、成盛が紀氏を称していたのは間違いない。しかし、手向山神社蔵『紀氏系図』には、成盛や周辺人物の名は出てこない。同時代の資料には、『吉記』の「伯耆国住人成盛、称海六」、『玉葉』の「海陸業茂」とある。また、『吾妻鏡』の「伯耆国住人海大（太）成国」は成盛の息子とされる。以上から海六成盛が一般的な呼び名で、錦織勤は海（あまの）成盛というのが正しいと主張する。やや時代は下るが、『延慶本平家物語』には、「むらをのかいろくなりもり」と記され、『伯耆国大山寺縁起』（続群書類従本）には「村尾」として登場する。藤原秀郷が地名と輩行から俵（田原）藤太秀郷と呼ばれたように、成盛も村尾という地におそらく世に出た頃に関係があり、海が付く氏で、輩行が六番目であったことから、村尾海六成盛と呼ばれたのだと考えられる。紀氏は仮冒か婚姻による自称であろう。不思議なのは、江戸時代までの記録や伝承では、いずれも「紀成盛」「紀成森」「木ノ森長者」であり、一つとして「海成盛」とするものがないことである。

村尾については、日南町に中世にあった村尾郷の可能性はある。日南町三栄の村尾城を村尾海六の居城とする伝承が『伯耆志』に載せられている。牛馬市と製鉄で栄えた村尾郷と、馬と鉄にゆかりのある成盛を結びつけることは不可能ではない。

大山寺との関係 鉄製厨子銘文によれば、紀成盛は、承安元年（1171）に焼失した大山権現宝殿を独力で再建し、本尊の金銅製地蔵像と、それを安置する鉄製の厨子を奉納した。一見、有徳の大富豪であったことを示す文だが、その背景では、僧兵による大山寺の内紛に深く関わっていたと考えられる。

14世紀初めの成立と推定される『大山寺縁起』（洞明院本）には、この時期の僧兵同士による争いが度々描かれる。対立の構図は、南光院と美徳山の連合軍対中門院と西明院の連合軍であった。宝殿焼失の前年、嘉応2年（1170）には、大山を追われた南光院別当明俊が、出雲伯耆両国の兵数千騎と謀って、山上で中西両院と合戦している。その中心に成盛がいたことは想像に難くない。おそらくこれより少し前、康治3年（1144）以降のことであるが、中門院の鏡明房と結んで傍若無人に振る舞う小鴨の荘司（小鴨基保）と村尾（成盛）は仇敵となり、村尾は僧兵佐摩党とともに鏡明房を殺している。何より、村尾が師匠と仰いだのは南光院の修禅房（基好）であった。嘉応2年の南光院と中西両院の合戦は、中門院と西明院の焼失という結果になり、南光院に美徳法師が与したことが遺恨となって、中西両院による美徳山の焼き討ちが行われた。承安元年の宝殿焼失は、美徳法師による報復の放火であったとされる。したがって、成盛が宝殿の再建を行ったのは、自陣の責任を取ったからとも考えられる。大山寺側の再建責任者が他ならぬ基好であることもそれを裏付けるだろう。しかし、『大山寺縁起』の宝殿再建に関する記事に、村尾のことが一切出てこないのは不可解である。

宝殿の再建によっても山内の争いは収まらず、養和元年（1181）には、小鴨による修禅房の襲撃が

行われている。この前後、「互いに権を争ひ、所々を城郭に構へ、合戦更に絶えざりけり」（『大山寺縁起』洞明院本25段）というのであるから、大山寺の内紛は、村尾と小鴨による逆代理戦争に発展していた。『吉記』が記す寿永元年（1182）の風聞は、この頃の互いに勝ったり負けたり戦闘についてのことであろう。成盛には「出雲石見備後等国々吾力」し、一時は小鴨基保を追い落とす戦果を挙げている。成盛の影響力が周辺各国にまで及んでいたことが窺える。

源平合戦 成盛についての確かな記事は、『玉葉』寿永3年（1184）2月2日のものである。この前日、後白河法皇のもとに「院御子」を名乗る人物が美徳山から使者を派遣し、法皇から平氏追討の命を受けた。院御子は20歳で、5年前に逐電し、最初大和に、次いで大山に行き、さらに美徳山に移住した人物である。平氏の都落ちの後「院御子」を称し、伯耆半国と美作国の一部を支配下に置いた。海陸業成（成盛）は院御子を奉じたが、小鴨基康（基保）は従わなかったという。

この記事は院御子を中心としているが、実際の主役は成盛であろう。院御子が大山に来た時には、すでに宝殿の再建も終わり、小鴨との角逐の最中という、成盛の最盛期であった。院御子の大山から美徳山への移住には、南光院-美徳山という成盛の同盟者が関係していると推定される。地理的には近い小鴨が院御子に従わなかったのも、大山寺での対立の構図を考えれば当然のことである。

これと相反するかのよう内容が、『平家物語』や『源平盛衰記』の一ノ谷の戦いの項目に書かれている。寿永3年（1184）3月、播磨国一ノ谷に籠もった平氏は、西国・九州の味方と見なした勢力を呼び集めた。伯耆国については、『延慶本平家物語』では「こがものすけもとやす、むらをのかいりくなりもり、ひののぐんじよしゆき」、『源平盛衰記』では「小鴨介基保、村尾海六、日野郡司義行」が挙げられている。最大の問題は、成盛が実際に一ノ谷に参陣したかである。1月余りに院御子を通じて平氏追討を命じられた成盛が、本国での軍事行動を中断して宿敵小鴨とともに平氏方として参戦することは考えにくい。前後の記述を読めば、この平氏方リストは、田口成良が口述した人名を平行盛が書き取ったものに過ぎず、実際に参集した武士のリストではないことがわかる。寿永2年（1183）7月の平氏都落ち後の伯耆国の情勢が、各地を転戦していた成良に伝わっていたかは疑問である。

紀成盛についての記録は、一ノ谷の戦いが最後である。『吾妻鏡』建久元年（1190）6月27日の項には、伯耆国住人海大成国が前年の冬に伯耆国で院の従者等を虐待した罪により和田義盛のもとに囚人として預けられたという記事がある。成国を成盛の長男と考えれば、この頃までには成盛は死去していたであろう。また、成盛の系統は、成国の処分を最後に絶えた可能性がある。

2 伝承上の紀成盛

紀成盛についての伝承を多く記すのは、成盛の子孫を称する進庄兵衛が宝暦11年（1761）に記した『紀氏譜記』である。家中の秘書とされ、昭和になって書写されたものが数種あるが実態は不明である。また、内容的にも「進貝録兵衛尉紀成盛」を代々の名乗りとして記すため、逸話にはどの時代の成盛に関係するのかわからないものがある。成盛の子孫に「紀成盛」を名乗った人物がいた証拠は他にはないので、この内容自体が事実でない可能性がある。それでも、『紀氏譜記』から興味深い記述を挙げると、次のものがある。1) 成盛が七宝を朝廷に献上し、朝廷から長者号を受け、「進貝録兵衛尉紀成盛」を名乗って代々繁栄したこと、2) 承安年号を記す大山権現の開かずの箱2つに書付があり、進貝録兵衛が寄進したこと、3) 長者原から大山寺まで108の燈明を寄進し、その跡が残っていること、4) 進貝録兵衛尉紀成盛長者の廟所は、安曇村の別所辻堂にあり、後に同慶寺へ移したこと。

1については、兵衛尉という官職についての言及が興味深い。同時代の文献では、小鴨介基保や日野郡司義行とは対照的に、成盛については呼び名に官職が含まれていない。鉄製厨子銘文でも「会東郡地主」と自称するだけなので、無位無官であったはずである。兵衛尉は12世紀後半に次々増員された朝廷の武官であるから、誤伝でなければ、平氏追討の命を受けた時のものかもしれない。2については、箱の内容物は鉄製厨子銘板の可能性がある。宝暦年間には開かずの箱に納められており、その銘文は一般には知られていなかった可能性を示す。3と4については、後代の成盛の逸話として記すものであるが、大山寺あるいは長者原台地に実在したものと関係ということで、後代の成盛の実に疑問がある以上、平安末の成盛の伝承と捉えておく。

この他に、文政11年（1828）に記された『伯州六郡郷村帳』には、長者原村には、「木ノ森長者進ノ甲斐緑兵衛」の屋敷跡があり、1丁四平方で約3反の馬場跡などが遺っていることが記される。さらに、木ノ森長者が、屋敷の付近にハンセン病患者を住ませ、馬鞍を製作させて生活を扶助していたという伝承を載せている。「木ノ森長者」が有徳の人物であったことを示唆するものである。

3 伝承地と伝承物

長者原台地を中心に、紀成盛に関係する伝承地や伝承物が存在する。

長者屋敷遺跡：古代会見郡衙関連遺跡であるが、上記の通り、遅くとも江戸時代から紀成盛の屋敷跡と伝えられてきた。『伯耆志』坂中村条には、村の西際の畠を長者屋敷といい、焼けた礎石があることが記載されている。昭和54年（1979）から岸本町教育委員会が行った発掘調査では、3H柱群及び5H柱群と名付けられた2棟の掘立柱建物の柱穴から多数の中世陶磁器片が出土した。しかし、現在遺物の所在が不明のため、詳細な時期は検討できない。

紀成森長者之塔碑（写真1）：平安時代前期の坂中



写真1 紀成森長者之塔碑



写真2 クサイ公の墓



写真3 聖観音座像（東照寺）

廃寺塔跡の東側に立てられた石碑で、高さ約180cmの自然石に、「○南無阿彌陀佛 紀成森長者之塔 八幡庄坂中村」と刻む。八幡庄という表記から、江戸時代初期までに行われた村切り以前のものと考えられる。さらに、月輪を加える型式の名号碑は、近畿地方では室町時代後半に見られるので、この碑も同時期のものの可能性がある。坂中廃寺塔跡を、坂中村では紀成盛の塔と伝承してきたことの証拠と考えられる。

クサイ公の墓 (写真2)：長者屋敷遺跡の西南約600m、米子市別所にある。15×20mの基壇状の高まりの中央に、花崗岩製の地藏立像と安永5年(1776)の石造物が立つ。『伯耆志』には、地元でクサイ公の塚と呼ばれるが、キサイと呼ぶのが正しく、進氏が坂中にあった時の墳ではないかと記す。『紀氏譜記』が成盛の廟所とする別所辻堂とはここで、クサイ公は紀宰公の転訛といわれる。

東照寺の聖観音座像 (写真3)：米子市下郷に所在する東照寺の本尊は、元は上記の別所辻堂にあったもので、紀成盛の守り本尊という伝承がある。米子市四日市の同慶寺本尊聖観音座像にも同様の伝承があるが、『紀氏譜記』写本には、同慶寺のものを東照寺に移したという聞き書きが記されている。同書によれば、像の胸中に由緒を記した金札が納められていたという。同慶寺の観音像は生硬な製作と平板な顔立ちから見て、江戸時代以降の作であろう。一方、東照寺のものは明らかにそれより古いので、『紀氏譜記』写本の書き込みは事実である可能性が高い。問題となるのは東照寺の観音像の年代である。膝頭が大きく開く姿勢、細身で扁平な体部、丸顔、彫眼と思われる三日月形の目、反った耳たぶ、大きく開く裳裾など、平安末～鎌倉期の特徴を備えているようであるが、鼻の形など後出する要素も認められるようである。専門家による調査がまたれる。

4 発掘調査による同時期の遺構と遺物

長者原台地周辺では、近年の発掘調査により、12世紀頃の遺構や遺物が出土している。

坂長第6遺跡 段状遺構SS16：長者原台地の崖面を段状に整地して設けられた鍛冶工房跡で、出土し



1. 坂長前田遺跡(鉄製小札) 2. 坂長第6遺跡 SS16 3. 坂長ヨコロ遺跡SX2
4. 長者屋敷遺跡 5. 紀成森長者之塔碑(坂中廃寺塔跡) 6. クサイ公の墓(別所辻堂跡)

第87図 平安時代末の遺構・遺物と紀成盛に関連する伝承地

た土器から12～13世紀のものと推定される。同じ地点内のSS1からSS15までの官営鍛冶工房が7世紀末～8世紀前半の年代が与えられるのに対し、この遺構だけが後世のものである。工房の製品か見本と考えられる大型の鉄鎌2点が出土した。この時期に会見郡衙に関連する遺構の再利用が行われたことと、兵器の生産が行われたことが注目される。

坂長ヨコ口遺跡 墓SX2：坂長前田遺跡に臨む斜面地に設けられた墓跡。2基の墓壙と貼石をもち、出土した土器から12世紀のものと考えられる。

坂長前田遺跡出土鉄製小札など：詳細は第3章及び第5章2節参照。坂長前田遺跡周辺で起こった戦闘については、想像を逞しくすれば、成盛一族の滅亡に関係することも考えられる。遺跡の所在する場所は、長者原台地に接する谷のつきあたりで、日野川沿いあるいは古代山陰道を通らずに日野方面に抜ける間道の入り口である。本拠地中のこのような場所で戦闘が行われたとすれば、それは最終的なものであった可能性がある。しかしながら、『吾妻鏡』の記事から、成国が建久元年（1190）までは伯耆国で一定の勢力を保っていると考えられることや、成盛の廟所の伝承があることを考慮すると、一族は戦闘で滅んだのではないと考える方が妥当かもしれない。

これまで、紀成盛が長者原台地を本拠地としたことは伝承の域を出なかったが、同時期の、武器・武具類の生産と使用を示す考古資料が出土したことで、その可能性はかなり高まったといえよう。

5 伝世資料

紀成盛の実在を証明する確実な資料は、言うまでもなく、大山寺所蔵の鉄製厨子銘板である。

鉄製厨子銘板は、4枚の薄い鉄板に銘文を陰刻し、銀象嵌を施したもので、承安3年（1173）に紀成盛が金銅製地蔵像や厨子とともに奉納したものである。うち1枚は現存しない。銘文の内容についてはこれまで多くの著作で取り上げられているため、ここでは立ち入らないが、その性格と来歴については検討の余地がある。

この銘板が発見されたのは、大山寺洞明院所蔵の『諸堂舎棟札写』によれば、寛永10年（1633）のことである。それ以前に書かれた『大山寺縁起』や、尼子晴久や毛利輝元の再建時の棟札に、銘文の内容、特に成盛と基好による再建のことが一切触れられていないことから、この時まで衆目に触れることはなかったと推定される。発見時に書写された上で再び秘蔵されたようで、宝暦11年（1761）の『紀氏譜記』には、この銘板から得た情報は記されていない。銘文の内容の一部を初めて記すのは安政5年（1858）に書かれた『伯耆志』である。鉄製厨子本体及び銘板には、連結するための孔があげられているが、厨子では突帯の上、銘板では字の上という、不適切な位置にある孔が複数あり、本来の姿ではないと考えられる。銘板が厨子に取り付けられたのは江戸時代後期で、寛政8年（1796）の火災の前後ではなかったか。銘板は元々厨子とは別に保管されていたため、内部の地蔵像がごく一部しか残らなかった程激しい天文23年（1553）の火災を免れたのであろう。なお、この推定が正しければ、現在ある鉄製厨子は、成盛ではなく毛利家が寄進したものの可能性が生じる。

鉄製厨子に納められていた金銅製地蔵像は、頭部の一部のみが大山寺に保存されている。大山寺でかつて秘密尊像と呼ばれた秘仏で、天文23年の火災で大破し、天正10年（1582）に毛利輝元によって二代目が鑄造された。それも寛政8年に火災に遭ったが大きくは破損していない。銘板の1枚はこの頃失われた。2つを比較すると、毛利家のものは成盛の地蔵像を再現したものと考えられる。

結語

以上のさまざまな資料からは、次のような紀成盛の人物像が浮かび上がる。

紀成盛は、無位無官で低い輩行から、おそらく一代で勢力を築いた人物である。鉄と馬の交易により財を得たであろうことが、産鉄国に多く同盟者がおり、鉄製厨子を作ったことや、馬や馬具との関わりから推測される。また、会東郡地主を自称することから、広大な領地も有していたであろう。その本拠地は長者原台地にあった。かつての会見郡衙に関連する施設の跡を再利用したものが含まれているので、代々の土着ではなく新たに占拠したと思われる。大山寺南光院や美徳山の僧兵と結び、小鴨氏と激しい抗争を繰り広げたように、都にまで聞こえる強大な武力を有した。のみならず、隣国の武士との同盟や院御子の擁立、後白河法皇との関係に、外交が巧みで機を見るに敏な政治的手腕も窺える。一方で、大山寺を始め信仰が篤く、慈善を施した有徳者であったため、後世まで長者として追慕された。

謝辞

本稿を書くにあたり、杉本良巳先生と國田俊雄先生からは、多大な御教示と貴重な文献資料の提供を受けた。大山寺・東照寺・同慶寺には仏像等の調査をさせていただいた。感謝いたします。

引用・参考文献

- 藤原経房『吉記』寿永元年（1182）8月20日（高橋秀樹編2004『新訂 吉記』本文編2）
九条兼実『玉葉』寿永3年（1184）2月2日（図書刊行会1906）
『吾妻鏡』建久元年（1190）6月27日（黒板勝美編2000『国史大系』第32巻）
『延慶本平家物語』第5本15 1309頃（古典研究会1964大東急記念文庫蔵本影印本）
『源平盛衰記』36巻（国民文庫刊行会1910）
『伯耆国大山寺縁起』洞明院本（五来重編1984『修験道史料集』Ⅱ所収）
了阿1398『伯耆国大山寺縁起』続群書類従本（続群書類従完成会1958『続群書類従』巻第815所収）
大山寺洞明院 江戸時代中～後期『諸堂舎棟札写』（米子市立図書館蔵謄写本）
進庄兵衛 1761『紀氏譜記』（『日吉津村誌』下巻1986所収。他に写本2点）
『伯州六郡郷村帳』1828 米子市立図書館蔵
景山肅 1858『伯耆志』（世界聖典刊行協会1982）
沼田頼輔 1903「大智明権現地藏菩薩と成盛長者」『大山雜考』1961所収
足立正 1922「伯耆長者原の遺址と紀成盛」『民族と歴史』第7巻1号
『幡郷村郷土史』第1輯 1935
竹内理三編 1965『平安遺文』金石文編
『鳥取県史』第1巻 原始古代 1972
『鳥取県史』第2巻 中世 1973
岸本町教育委員会1982『長者原遺跡群発掘調査報告書』
『岸本町誌』1983
錦織勤 2002「平安末期西伯耆の有力武士「紀成盛」について」『鳥取地域史研究』4
『新修米子市史』第1巻 通史編 2003
鳥取県教育文化財団 2006『長者屋敷遺跡 坂長下屋敷遺跡』
鳥取県教育文化財団 2009『坂長第6遺跡』
鳥取県教育文化財団 2010『坂長下門前遺跡2 坂長ヨコロ遺跡 坂長熊谷遺跡』

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
1	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △7.7	口縁部	外面 口縁部入組状、鋸歯状に区画し、斜線文を充填。頸部斜線文 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	波状口縁
2	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △4.2	頸部	外面 隆帯の上下に爪形文 内面 ナデ	やや粗	外面 黒褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
3	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △10.8	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ・沈線文 内面 ナデ	粗	内外面 にぶい褐色	良好	波状口縁・外面 口縁部一部黒斑
4	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △3.7	口縁部	外面 瘤状突起・ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 にぶい黄橙色 内面 灰褐色	良好	
5	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △3.4	口縁部	外面 ナデ 内面 ミガキ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	波状口縁
6	第10図 PL9	SK1 埋土	縄文土器 深鉢	— △2.0	口縁部	外面 鋸歯状に沈線を施し、斜線文を充填 内面 ナデ	やや粗	内外面 にぶい黄褐色	良好	
7	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △2.2	口縁部	外面 2条の沈線・ナデ 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 褐色	良好	
8	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	※25.0 △2.5	口縁部	外面 1条の沈線・ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
9	第10図 PL9	SK1 埋土	縄文土器 浅鉢	— △3.7	口縁部	外面 円形突起・同心円状に沈線・ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄褐色	良好	
10	第10図 PL9	SK1 埋土	縄文土器 浅鉢	— △5.0	口縁部～ 頸部	外面 口縁部上面1条の凹線、頸部ミガキ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
11	第10図 PL9	SK1 2層	縄文土器 浅鉢	— △5.4	口縁部	外面 ナデ 内面 肥厚・渦卷文	密	内外面 浅黄褐色	良好	波状口縁
12	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 浅鉢	— △4.0	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
13	第10図 PL9	SK1 北側トレンチ	縄文土器 深鉢	— △3.5	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
14	第10図 PL9	SK1 2層	縄文土器 浅鉢	— △2.8	口縁部	外面 ナデ・1条の沈線・キザミ 内面 ナデ	密	外面 褐色 内面 黄褐色	良好	
15	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △4.0	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 灰褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
16	第10図 PL9	SK1 埋土	縄文土器 浅鉢	— △4.0	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ・口唇部1条の沈線	密	内外面 明赤褐色	良好	
17	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	※19.4 △2.3	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄褐色	良好	
18	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 壺	※16.2 △5.3	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部ミガキ 内面 口縁部ナデ、頸部ミガキ	密	外面 灰黄褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
19	第10図 PL9	SK1 埋土	縄文土器 壺	※18.8 △3.8	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部ミガキ 内面 ミガキ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
20	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △4.6	体部	外面 ナデ・3条の沈線文 内面 ナデ	やや粗	内外面 灰黄褐色	良好	
21	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △5.1	体部	外面 ナデ・3条の沈線文 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄褐色	良好	
22	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 浅鉢	— △5.0	体部	外面 キザミ・ミガキ 内面 ミガキ	密	内外面 褐色	良好	
23	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 浅鉢	※40.0 △5.5	口縁部～ 体部上半	外面 ミガキ・キザミ 内面 ミガキ	粗	内外面 黒色	良好	
24	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 浅鉢	— △4.3	体部	外面 キザミ・ミガキ 内面 ミガキ	密	内外面 にぶい橙色	良好	
25	第10図 PL9	SK1 北側トレンチ	縄文土器 浅鉢	— △3.0	体部	外面 キザミ 内面 不明	粗	内外面 灰白色	良好	
26	第10図 PL9	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △6.6	口縁部～ 体部上半	外面 ミガキ・擬縄文 内面 ミガキ	やや粗	内外面 にぶい黄褐色	良好	
27	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △15.0	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ・粗いミガキ 内面 ナデ	やや粗	内外面 にぶい黄褐色	良好	
28	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △10.9	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	内外面 にぶい黄褐色	良好	
29	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △11.6	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	内外面 にぶい褐色	良好	
30	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △11.1	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 粗いミガキ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 浅黄色	良好	
31	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △7.6	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗	外面 にぶい黄褐色 内面 にぶい褐色	良好	
32	第11図 PL10	SK1 1層	縄文土器 深鉢	— △20.4	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	粗	内外面 にぶい黄褐色	良好	内面黒斑
33	第14図 PL11	SK3 埋土上層	縄文土器 深鉢	— △16.0	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ・一部ミガキ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
34	第15図 PL11	SD4 埋土	縄文土器 浅鉢	— △5.4	口縁部	外面 円形突起・ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	波状口縁
35	第15図 PL11	SD4 埋土	縄文土器 深鉢	※24.0 △7.4	口縁部～ 肩部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
36	第15図 PL11	SD4 埋土	縄文土器 鉢	— △4.0	頸部	外面 ナデ・貼付突帯後刻み 内面 ナデ	密	内外面 浅黄色	良好	
37	第15図 PL11	SD4 埋土	縄文土器 浅鉢	— △6.1	口縁部	外面 4条の凹線 内面 ナデ	密	外面 橙色 内面 灰白色	良好	
38	第15図 PL11	SD4 埋土	縄文土器 深鉢	— △5.6	体部	外面 ナデ 内面 条痕	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
39	第20図 PL14	SD5 埋土	弥生土器 甕	※29.6 △25.2	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、肩部ハケ、体部ミガキ・刺突文 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄色	良好	内外面一部黒斑
40	第20図 PL12	SD5-2 埋土	弥生土器 甕	※31.2 △7.8	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ハケ・ミガキ 内面 口縁部ナデ、体部ミガキ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
41	第20図 PL12	SD5 埋土	弥生土器 甕	※33.8 △10.8	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ナデ・キザミを入れた貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
42	第20図 PL12	SD5 埋土	弥生土器 甕	※27.9 △13.3	口縁部～ 体部	外面 口縁部格子文、頸部貼付突帯、体部ハケ後ナデ・貝殻腹縁文 内面 ナデ	密	内外面 明黄褐色	良好	
43	第20図 PL12	SD5 埋土	弥生土器 甕	— △2.7	口縁部～ 頸部	外面 口縁部3条の凹線、頸部キザミを入れた貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	焼成後外面より穿孔
44	第20図 PL12	SD5-2 埋土	弥生土器 甕	— △17.2	体部	外面 ミガキ・3～4条の沈線 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 浅黄褐色	良好	
45	第20図 PL12	SD5・5-2 埋土	弥生土器 甕	— △14.2	体部	外面 ハケ後ナデ・2列の貝殻腹縁文 内面 ナデ	密	内外面 明黄褐色	良好	
46	第20図 PL12	SD5 埋土	弥生土器 甕	※10.0 △10.8	体部	外面 体部ナデ・ミガキ 内面 体部ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
47	第20図 PL14	SD5・5-2 埋土	弥生土器 壺	— △14.2	体部	外面 ミガキ 内面 ナデ・オサエ・一部ハケ	密	内外面 淡黄色	良好	
48	第20図 PL12	SD5-2 埋土	弥生土器 甕	— △5.6	底部	外面 ミガキ、底面ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	外面一部煤付着
49	第20図 PL12	SD5-2 埋土下層	縄文土器 浅鉢	※21.7 △5.5	口縁部～ 体部	外面 ナデ、沈線、刺突文 内面 ナデ、沈線	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
50	第20図 PL12	SD5-2 埋土	縄文土器 浅鉢	— △5.8	口縁部	外面 4条の凹線 内面 ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
51	第20図 PL12	SD5-2 埋土	縄文土器 深鉢	— △7.7	口縁部	外面 ナデ・2条の凹線 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄褐色	良好	
52	第22図 PL14	SD6 埋土	弥生土器 甕	※26.1 △18.0	口縁部～ 体部	外面 口縁部1条の凹線後キザミ、頸部貼付突帯、体部ナデ・ハケ・貝殻腹縁文 内面 口縁部～頸部ナデ、体部ハケ後ナデ・オサエ	密	内外面 橙色	良好	
53	第22図 PL13	SD6 埋土上層	弥生土器 甕	※18.0 △8.9	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ後ナデ、体部刺突文 内面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ後ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	内外面一部黒斑
54	第22図 PL14	SD6 埋土	弥生土器 甕	— △17.9	体部～ 底部	外面 ミガキ、底面ナデ 内面 ミガキ・ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	内外面赤彩
55	第22図 PL13	SD6 埋土	縄文土器 壺	※21.4 △5.3	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
56	第22図 PL13	SD6 埋土上層	縄文土器 深鉢	— △2.8	口縁部	外面 ナデ・貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
57	第22図 PL13	SD6 埋土	縄文土器 鉢	— △3.2	口縁部	外面 波状口縁、磨消縄文 内面 ナデ	密	外面 黄褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
58	第22図 PL13	SD6 埋土上層	縄文土器 深鉢	— △5.3	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ・条痕 内面 ナデ	やや粗	内外面 褐色	良好	
59	第22図 PL13	SD6 埋土下層	縄文土器 深鉢	— △6.5	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 浅黄褐色	良好	
60	第22図 PL13	SD6 埋土下層	縄文土器 深鉢	— △7.1	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ・条痕	やや粗	外面 灰黄褐色 内面 灰黄色	良好	
61	第22図 PL13	SD6 埋土	縄文土器 深鉢	— △10.5	口縁部	外面 ナデ・口縁部下穿孔 内面 ナデ	密	外面 淡黄色 内面 灰黄褐色	良好	
62	第22図 PL13	SD6 埋土下層	縄文土器 深鉢	— △9.7	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 褐色 内面 明黄褐色	良好	波状口縁
63	第22図 PL13	SD6 埋土下層	縄文土器 深鉢	— △7.4	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
64	第22図 PL13	SD6 埋土下層	弥生土器 壺	— △2.4	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 淡黄色 内面 にぶい橙色	良好	
65	第24図 PL14	SD8 埋土上層	弥生土器 甕	— △2.2	口縁部	外面 ナデ・3条の凹線 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
66	第24図 PL14	SD8 埋土上層	弥生土器 甕	— △1.5	口縁部	外面 ナデ・3条の凹線 内面 ナデ	密	内外面 にぶい橙色	良好	
67	第24図 PL14	SD8 埋土下層	弥生土器 甕	— △1.6	口縁部	外面 ナデ・2条の凹線 内面 ナデ	密	内外面 にぶい褐色	良好	
68	第24図 PL14	SD8 埋土上層	弥生土器 甕か壺	— △2.3	底部	外面 ナデ、底面ナデ 内面 ナデ	密	内外面 黄褐色	良好	
69	第26図 PL11	SK2 埋土	土師器 甕	— △3.1	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
70	第26図 PL11	SK2 埋土	土師器 甕	— △4.0	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 淡黄褐色	良好	
71	第26図 PL11	SK2 埋土	土師器 甕	— △3.6	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
72	第28図 PL16	SD15 埋土	土師器 小型壺	10.5 9.0	口縁部～ 底部	外面 口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 黒色	良好	外面一部煤付着
73	第28図 PL16	SD15 埋土	土師器 甕	15.3 △9.5	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 口縁部～体部上半ナデ、体部ケズリ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
74	第28図 PL15	SD15 埋土	土師器 甕	※19.0 5.1	口縁部～ 頸部	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	外面一部煤付着
75	第28図 PL15	SD15 埋土	土師器 甕	※15.0 △3.2	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
76	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 甕	※13.0 △4.0	口縁部～ 頸部	外面 口縁部4条の平行沈線、頸部ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
77	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △3.6	口縁部～ 頸部	外面 口縁部10条の平行沈線、頸部ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
78	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 甕	※14.0 △3.7	口縁部～ 頸部	外面 口縁部2条の平行沈線、頸部ナデ・ハケ 内面 口縁部ナデ、頸部ハケ	密	内外面 黒褐色	良好	
79	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 甕	※11.5 △6.7	口縁部～ 体部	外面 口縁部3条の平行沈線後キザミ、頸部ナデ、体部ハケ 内面 口縁部～頸部ナデ、体部ハケ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	外面一部煤付着

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
80	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 高坏	※26.0 △5.1	坏部	外面 ナデ、口唇部キザミ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい橙色	良好	
81	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 壺	※26.0 △5.1	頸部	外面 口縁部、体部の境界に突帯、ナデ・ミガキ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	内面一部黒斑
82	第28図 PL15	SD15 埋土	弥生土器 甕	— △8.0	底部	外面 ミガキ、底面ナデ 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄橙色 内面 黒褐色	良好	
83	第28図 PL15	SD15 埋土	縄文土器 深鉢	— △7.0	頸部	外面 4条の沈線・ミガキ 内面 ミガキ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	外面一部煤付着
84	第28図 PL15	SD15 埋土	縄文土器 深鉢	— △5.6	頸部	外面 ナデ・4条のキザミを入れた貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 にぶい橙色	良好	
85	第28図 PL15	SD15 埋土	縄文土器 深鉢	— △5.0	口縁部～ 頸部	外面 ナデ・ミガキ、口縁部下キザミを入れた貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 灰黄色	良好	
86	第28図 PL15	SD15 埋土	縄文土器 深鉢	— △5.9	口縁部～ 頸部	外面 ナデ・口縁部キザミを入れた貼付突帯 内面 ナデ	密	内外面 灰黄色	良好	外面一部煤付着
87	第31図 PL14	SD16 埋土	弥生土器 甕	※26.0 △5.8	口縁部～ 頸部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
88	第31図 PL14	SD16 埋土	弥生土器 甕	— △4.4	口縁部～ 頸部	外面 ナデ、口唇部キザミ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
89	第31図 PL14	SD16 埋土下層	弥生土器 甕	— △2.9	底部	外面 ナデ 内面 ナデ・オサエ	密	外面 黒色 内面 にぶい黄橙色	良好	
90	第32図 PL14	SD17 埋土	弥生土器 甕	※26.0 △5.8	口縁部	外面 ナデ、口縁部キザミ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄色	良好	風化のため不明瞭であるが口縁部に2条の凹線か
91	第33図 PL14	SD19 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △4.8	口縁部～ 肩部	外面 口縁部3条の凹線、頸部ナデ、肩部ハケ 内面 口縁部～頸部ナデ、肩部ハケ	密	内外面 にぶい黄色	良好	
92	第33図 PL14	SD19 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △4.8	口縁部～ 肩部	外面 ナデ、口縁部1条の凹線・キザミ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄色	良好	
93	第36図 PL16	SD1 底面	須恵器 坏	※13.4 4.3	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部静止糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
94	第36図 PL16	SD1 埋土中層	須恵器 坏	※13.0 3.7	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	底部外面「三」字状の墨書
95	第36図 PL16	SD1 下層	須恵器 坏	※13.0 △3.4	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
96	第36図 PL16	SD1 埋土最下層	須恵器 坏	※13.5 △3.3	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
97	第36図 PL16	SD1 埋土上層	須恵器 坏	— △2.4	体部～底 部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
98	第36図 PL16	SD1 底面	須恵器 甕	— △4.7	体部	外面 回転ナデ・波状文 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
99	第36図 PL16	SD1 埋土上層	須恵器 高坏	— △7.1	脚部	外面 回転ナデ・2条の沈線 内面 回転ナデ・シボリ	密	内外面 灰色	良好	2方透かし
100	第36図 PL16	SD1 埋土下層	須恵器 高坏	— △2.9	脚部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
101	第36図 PL16	SD1 埋土最下層	須恵器 壺	※17.0 △2.7	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
102	第36図 PL16	SD1 埋土下層	土師器 坏	※14.0 △3.5	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ケズリ 内面 ナデ・暗文	密	外面 灰白色 内面 灰黄色	良好	内外面赤彩
103	第36図 PL16	SD1 埋土下層	土師器 坏	※14.0 △2.8	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ・暗文	密	内外面 灰色	良好	内外面赤彩
104	第36図 PL16	SD1 埋土上層	土師器 坏	※14.2 △2.7	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部2条の沈線・ケズリ後ナデ 内面 ナデ・1条の沈線	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	内外面赤彩
105	第36図 PL16	SD1 埋土上層	土師器 坏	※15.0 △3.1	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	内外面赤彩
106	第36図 PL16	SD1 埋土	土師器 甕	※14.4 △13.0	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ナデ・ハケ 内面 口縁部～頸部ナデ、体部ケズリ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
107	第36図 PL16	SD1 埋土最下層	土師器 鍋	※27.2 △9.0	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ	密	内外面 灰黄褐色	良好	
108	第36図 PL16	SD1 埋土上層	土製品 土玉	—			密	内外面 黄褐色	良好	直径△2.8、厚さ△1.5
109	第37図 PL11	SD2 埋土	弥生土器 無頸壺	— △2.5	口縁部	外面 ナデ・2条の沈線・鋸歯文、口縁部上面1条の沈線・鋸歯文、 内面 ナデ	密	内外面 黒色	良好	
110	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 高台坏	— △2.8	底部	外面 回転ナデ、底部調整不明 内面 回転ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
111	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 高台坏	— △1.8	底部	外面 ナデ、底部押圧 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	内外面赤彩
112	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 高台坏	— △2.8	底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	外面 灰色 内面 にぶい黄橙色	良好	
113	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	— △2.3	底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
114	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 高台坏	— △3.4	底部	外面 回転ナデ、底部静止糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
115	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	※12.8 4.2	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
116	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	— △1.8	底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 明褐色	良好	
117	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	※13.0 △2.7	口縁部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
118	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	※11.4 2.7	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
119	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 坏	※13.2 4	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
120	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 甕	※26.5 △10.5	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面 明褐色 内面 におい褐色	良好	
121	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 甕	※27.4 △8.7	口縁部～ 体部	外面 口縁部～頸部ナデ、体部ハケ 内面 口縁部ナデ、頸部～体部ケズリ	密	内外面 におい黄褐色	良好	内外面一部黒斑
122	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 甕	※26.0 △5.3	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 におい黄褐色	良好	
123	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 甕	※20.0 △9.0	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ミガキ 内面 口縁部ナデ、体部ケズリ	密	内外面 黒色	良好	
124	第42図 PL17	SD12 埋土	土師器 甕	※19.2 △4.6	口縁部～ 頸部	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 黒色	良好	
125	第42図 PL17	SD12 埋土	須恵器 甕	※21.0 △16.9	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部タタキ後ハケ・刺 突文 内面 口縁部ナデ、体部青海波文	密	内外面 灰色	良好	外面一部黒斑
126	第42図 PL19	SD12 埋土	須恵器 甕	19.4 30	口縁部～ 底部	外面 口縁部ナデ、頸部以下タタキ 内面 口縁部ナデ、頸部青海波文	密	内外面 灰色	良好	
127	第45図 PL29	SD12 埋土	土製品 土馬		胴部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ・オサエ	密	外面 におい黄褐色 内面	良好	尻部→胴下半部の順に粘土を接合、その後は不明瞭であるが鞍や頸、立髪を表をした後、胴上半部を接合したか。長さ△9.9、高さ△6.3
128	第47図 PL19	SD14 埋土	須恵器 坏	12.0 3.2	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部静止糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 におい赤褐色	良好	重ね焼き時の粘土付着
129	第47図 PL19	SD14 埋土	須恵器 坏	13 4.3	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 褐色	良好	
130	第47図 PL18	SD14 埋土	須恵器 坏	△9.4 3.5	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ・底部ナデ 内面 回転ナデ・底部ナデ	密	内外面 灰色	良好	
131	第47図 PL18	SD14 埋土	須恵器 坏	△11.6 3.3	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
132	第47図 PL18	SD15 埋土	須恵器 壺	— △3.1	底部	外面 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
133	第47図 PL18	SD14 埋土	須恵器 甕	— △8.9	体部	外面 回転ナデ・沈線 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
134	第47図 PL18	SD14 埋土	須恵器 提瓶	— △0.9	体部	外面 回転ナデ後掻き目 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 灰色	良好	
135	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 坏	※14.0 3.5	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部ケズリ後ナデ 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	内外面赤彩
136	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 高坏	— △6.9	脚部	外面 ナデ 内面 ナデ・シホリ	密	内外面 におい黄褐色	良好	
137	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 甕	※22.8 △9.3	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	外面 黒色 内面 褐色	良好	
138	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 甕	※28.6 △8.3	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、口縁部～頸部ハケ後ナデ 内面 口縁部ハケ後ナデ、頸部ケズリ	密	内外面 におい黄色	良好	
140	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 甕	※21.0 △6.6	口縁部～ 体部	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	内外面 黒色	良好	
139	第47図 PL18	SD14 埋土	土師器 甕	※39.8 △4.9	口縁部	外面 ナデ・ハケ 内面 ナデ・ハケ後ナデ	密	内外面 におい黄褐色	良好	外面一部黒斑
141	第47図 PL18	SD14 埋土	須恵器 甕	※39.6 △10.4	口縁部	外面 ナデ・4条の沈線間を波状文 内面 ナデ	密	内外面 灰色	良好	
142	第50図 PL20	SD9 埋土	土師質土器 鍋	— △2.8	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 におい黄褐色	良好	外面煤付着
143	第50図 PL20	SD9 埋土	土師質土器 鍋	— △2.4	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 におい黄褐色	良好	外面煤付着
144	第50図 PL20	SD9 埋土	瓦質土器 鉢	— △2.7	体部	外面 ナデ 内面 ハケ	密	内外面 黒褐色	良好	
145	第54図 PL20	SD10 埋土	陶器 捏鉢	※28.0 △7.5	口縁部～ 底部	外面 ナデ 内面 ナデ・ハケ	密	内外面 白灰色	良好	
146	第54図 PL20	SD10 埋土	土師器 坏	— △2.7	体部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	外面 褐色 内面 におい黄褐色	良好	外面一部煤付着
147	第54図 PL20	SD10-2 埋土	土師器 坏	※12.0 2.5	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部調整不明 内面 ナデ	密	内外面 白灰色	良好	
148	第54図 PL20	SD10 埋土	須恵器 高坏	— △6.0	脚部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 白灰色	良好	三方透かし
149	第54図 PL20	SD10-2 埋土	瓦 平瓦	—		外面 縄目タタキ 内面 布目	密	外面 灰黄褐色 内面	良好	長さ△9.7、幅△7.7、厚さ2.1
150	第57図 PL20	SD13 埋土	陶器 皿	— △2.9	体部～ 底部	外面 施釉、体部下～底部露胎 内面 施釉・砂目	密	施釉部 灰色 露胎部 灰黄色	良好	
151	第57図 PL20	SD13 埋土	陶器 溝縁皿	※12.0 △4.6	口縁部～ 底部	外面 施釉、底部露胎 内面 施釉	密	施釉部 灰白色 露胎部 におい赤褐色	良好	
152	第57図 PL20	SD13 埋土	磁器 花瓶	— △6.8	体部～ 底部	外面 施釉、畳付け露胎 内面 露胎	密	内外面 灰白色	良好	
153	第57図 PL20	SD13 埋土	磁器 碗	— △3.8	体部～ 底部	外面 施釉 内面 施釉	密	内外面 灰白色	良好	
154	第57図 PL20	SD13 埋土	磁器 碗	※7.2 3.5	口縁部～ 底部	外面 施釉 内面 施釉	密	内外面 灰白色	良好	
155	第57図 PL20	SD13 埋土	磁器 青磁碗	— △3.1	体部～ 底部	外面 施釉、底部一部露胎 内面 施釉	密	施釉部 草緑色 露胎部 におい赤褐色	良好	
156	第57図 PL20	SD13 埋土	須恵器 坏	※12.6 4.1	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
157	第60図 PL21	H17 2層	土師質土器 皿	— △1.7	体部～ 底部	外面 ナデ、底部回転系切り 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	
158	第60図 PL21	H19 2層	須恵器 甗	— △2.9	体部	外面 回転ナデ後格子キザミ・2条の沈線 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
159	第60図 PL21	H18 3層	土師器 高台坏	— △2.0	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	外面黒斑有り
160	第60図 PL21	H18 3層	弥生土器 高坏	— △5.6	脚部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 黄橙色	良好	透かし有り
161	第60図 PL21	G18・H18 3層	弥生土器 壺	※29.0 △11.2	口縁部～ 頸部	外面 口縁部3条の凹線、頸部ハケ後ナデ・4条の凹線 内面 口縁部ナデ、頸部ハケ後ナデ・オサエ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	外面及び内面の一部赤彩か
162	第60図 PL21	H19 3層	弥生土器 甗	※27.4 △15.3	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	外面赤彩
163	第60図 PL21	H18 3層	弥生土器 甗	※29.0 △5.2	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部貼付突帯後キザミ 内面 ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
164	第60図 PL21	H17 4層	弥生土器 甗	※30.6 △2.9	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、頸部貼付突帯後キザミ 内面 ナデ	密	外面 褐灰色 内面 にぶい黄橙色	良好	
165	第60図 PL21	A区トレンチ 4層	弥生土器 甗	— △9.0	体部～ 底部	外面 ミガキ 内面 ナデ・オサエ	密	内外面 浅黄色	良好	外面一部煤付着
166	第60図 PL21	G18 4層	弥生土器 小壺	— △5.8	体部	外面 ナデ 内面 ナデ・ハケ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
167	第60図 PL21	H17 4層	縄文土器 深鉢	— △6.2	口縁部	外面 条痕・沈線・ナデ 内面 ナデ				
168	第61図 PL22	E15 2層	縄文土器 深鉢	※35.0 △5.3	口縁部～ 体部上半	外面 口縁部2条の沈線、体部ナデ 内面 ナデ	密	内外面 黄灰色	良好	
169	第61図 PL22	B4 2層	陶器 碗	— △2.6	底部	外面 施釉 内面 施釉・7条の陰刻、底部露胎	密	内外面 灰白色	良好	
170	第61図 PL22	C区 2層	磁器 皿	※12.7 △2.4	口縁部～ 体部	外面 施釉 内面 施釉	密	内外面 灰白色	良好	
171	第61図 PL22	C8 2層	陶器 天目茶碗	— △3.1	口縁部～ 体部上半	外面 施釉 内面 施釉	密	内外面 黒色	良好	
172	第61図 PL22	B9 2層	陶器 皿	— △2.0	底部	外面 施釉・露胎 内面 施釉・砂目痕、底部露胎	密	外面 灰オリブ色 内面	良好	
173	第61図 PL22	B5 2層	磁器 皿	※10.0 2.8	脚部	外面 施釉 内面 施釉、畳付け露胎	密	外面 灰白色 内面	良好	
174	第61図 PL22	B5 2層	磁器 皿	※5.1 1.3	口縁部～ 底部	外面 施釉、底部露胎 内面 施釉、底部露胎	密	内外面 灰白色	良好	
175	第64図 PL23	D13 6層	土師質土器 鍋	※27.1 △7.8	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
176	第64図 PL23	D15 6層	土師質土器 鍋	※26.0 △7.0	口縁部～ 頸部	外面 口縁部ナデ、体部ハケ 内面 口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面 黒色 内面 にぶい黄橙色	良好	
177	第64図 PL23	C14 6層	土師質土器 鍋	— △2.0	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
178	第64図 PL23	B11・C11 6層	土師質土器 坏	— △2.8	体部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転系切り 内面 回転ナデ	密	外面 にぶい橙色 内面 にぶい赤褐色	良好	
179	第64図 PL23	C9 6層	土師質土器 皿	9 1.6	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄橙色	良好	
180	第64図 PL23	B9 6層	陶器 播鉢	— △5.0	口縁部～ 体部上半	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ・播り目	密	内外面 青灰色	良好	
181	第64図 PL23	C9 6層	瓦質土器 播鉢	※21.3 △3.5	口縁部～ 体部上半	外面 ナデ 内面 ナデ・播り目	密	内外面 灰白色	良好	
182	第64図 PL23	B6 6層	陶器 播鉢	※30.0 △5.0	口縁部～ 体部上半	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ・播り目	密	内外面 灰色	良好	
183	第64図 PL23	B9 6層	瓦質土器 播鉢	— △3.2	体部下半 ～底部	外面 回転ナデ、底部ナデ 内面 回転ナデ・播り目	密	外面 灰褐色 内面 褐灰色	良好	
184	第64図 PL23	C14 6層	須恵器 甗	— △6.8	体部	外面 格子タタキ 内面 ナデ	密	外面 褐灰色 内面 灰白色	良好	
185	第64図 PL23	B7 6層	須恵器 甗	— △3.9	体部	外面 格子タタキ 内面 ナデ	密	内外面 黒色	良好	
186	第64図 PL23	C9 6層	須恵器 甗	— △2.2	体部	外面 格子タタキ 内面 ナデ	密	内外面 黄灰色	良好	
187	第64図 PL23	C10 6層	磁器 皿	※10.8 △2.4	口縁部～ 体部	外面 施釉 内面 施釉	密	内外面 灰白色	良好	
188	第64図 PL23	C14 6層	須恵器 坏	※13.5 △3.5	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
189	第64図 PL23	C14 6層	須恵器 甗	— △2.5	体部	外面 回転ナデ後格子キザミ・3条の沈線 内面 回転ナデ	密	外面 褐灰色 内面 黒褐色	良好	
190	第64図 PL23	C15 6層	須恵器 高坏	— △11.9	坏部～ 脚部	外面 回転ナデ、脚部2条の沈線 内面 ナデ、回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	2方透かし
191	第64図 PL23	C9 6層	瓦 平瓦	※7.6 △13.3		外面 縄目タタキ・ナデ 内面 布目	密	内外面 灰黄色	良好	長さ△13.3、幅△7.6、厚さ2.5
192	第67図 PL24	C10 7層	土師器 皿	※8.2 1.4	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転系切り 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 にぶい橙色	良好	
193	第67図 PL24	B10 7層	土師器 坏	— △3.1	体部～ 底部	外面 ナデ、底部回転系切り 内面 回転ナデ	密	内外面 にぶい黄色	良好	
194	第67図 PL24	B9 7層	土師器 坏	— △1.3	底部	外面 回転ナデ、底部ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 明赤褐色	良好	
195	第67図 PL24	C8 7層	須恵器 皿	※8.8 1.4	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ・ヘラケズリ、底部回転系切り後ナデ 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 黄灰色	良好	
196	第67図 PL24	C8 7層	須恵器 坏	※9.9 3.1	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ・ナデ 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
197	第67図 PL24	B8 7層	須恵器 提瓶	— △4.1	肩部	外面 回転ナデ、摘みオサエ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰白色	良好	

表5 土器・土製品観察表

遺物 No	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
198	第67図 PL24	D4 7層	須恵器 甕	— △3.7	体部	外面 格子タタキ 内面 ハケ	密	外面 黒褐色 内面 暗赤色	良好	
199	第67図 PL24	B6 7層	須恵器 甕	— △5.5	体部	外面 格子タタキ・2条の沈線 内面 ハケ	密	内外面 灰白色	良好	
200	第67図 PL24	B12 7層	土師質土器 鍋	※26.2 13.7	口縁部～ 底部	外面 口縁部3条の凹線、体部ハケ後ミガキ 内面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ下半ケズリ	密	内外面 橙色	良好	
201	第67図 PL24	B11 7層	瓦質土器 鍋	※27.3 △5	口縁部～ 体部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ	密	内外面 褐灰色	良好	内外面煤付着
202	第67図 PL24	B5 7層	土師質土器 鍋	※26.2 △4.2	口縁部～ 体部	外面 ナデ・オサエ 内面 口縁部ナデ、体部ハケ	密	外面 にぶい赤褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	
203	第67図 PL24	B5 7層	土師質土器 鍋	※25.0 △4.2	口縁部～ 体部	外面 ハケ・ナデ 内面 ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
204	第70図 PL25	B12 8層	須恵器 坏	※11.8 △3.2	口縁部～ 底部	外面 口縁部1条の沈線、体部回転ナデ・ ナデ、底部静止糸切り 内面 回転ナデ	密	内外面 にぶい赤褐色	良好	
205	第70図 PL25	B12 8層	須恵器 坏	12 3.9	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 灰色	良好	
206	第70図 PL25	B12 8層	須恵器 坏	※12.5 4	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ・回転糸切り	密	内外面 にぶい赤褐色	良好	
207	第70図 PL25	C4 8層	須恵器 坏	※13.0 △4.0	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰色	良好	
208	第70図 PL25	B13 8層	須恵器 坏	※12.7 △3.6	口縁部～ 体部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 にぶい赤褐色	良好	
209	第70図 PL25	C13 8層	須恵器 坏	— △2.2	体部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ・ナデ	密	内外面 灰色	良好	
210	第70図 PL25	B11 8層	須恵器 坏	— △1.4	体部～ 底部	外面 回転ナデ、底部回転糸切り 内面 回転ナデ	密	外面 灰黄褐色 内面 黄灰色	良好	
211	第70図 PL25	C12 8層	土師器 坏	11.8 3.5	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	内外面赤彩
212	第70図 PL25	C11 8層	土師器 坏	※13.8 3.4	口縁部～ 底部	外面 ナデ、底部ヘラケズリ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
213	第70図 PL25	C15 8層	土師器 高台坏	— △2.4	体部～ 底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 明褐灰色 内面 灰褐色	良好	
214	第70図 PL25	C15 8層	土師器 高台皿	16.5 △3.5	坏部～ 脚部	外面 坏部ナデ・手持ちヘラケズリ、脚部 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 橙色	良好	高台内面以外赤彩
215	第70図 PL25	C12 8層	土師器 甕	22.4 20.5	口縁部～ 底部	外面 口縁部ナデ、頸部以下ハケ 内面 口縁部ナデ、頸部ケズリ、体部ケズリ後ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	外面一部煤付着
216	第72図 PL26	B8・9 9層	須恵器 坏	11.8 3.3	口縁部～ 底部	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	密	内外面 灰白色	良好	
217	第72図 PL26	B8 9層	土師器 小壺	6.1 2	口縁部～ 底部	外面 ナデ・オサエ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	
218	第72図 PL26	B8 9層	土師器 高坏	— △4.7	脚部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 浅黄褐色 内面 にぶい橙色	良好	
219	第72図 PL29	B10 9層	土製品 土馬	※5.0 △3.9	脚	外面 ナデ・オサエ 内面 —	密	外面 灰黄褐色 内面 —	良好	長さ△5.0、 高さ△3.9
220	第73図 PL26	B10 10層	弥生土器 甕	※27.3 △6.8	口縁部～ 体部	外面 口縁部ナデ、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面 ナデ	密	内外面 灰黄褐色	良好	
221	第73図 PL26	B9 10層	弥生土器 甕	※17.5 △5.0	口縁部～ 肩部	外面 口縁部ナデ、肩部ハケ後ナデ 内面 口縁部ナデ、肩部ナデ・ミガキ	密	内外面 褐灰色	良好	
222	第73図 PL26	B10 10層	弥生土器 甕	— △5.7	体部下 ～底部	外面 ナデ後ミガキ、底部ナデ 内面 ナデ	密	外面 浅黄色 内面 黄灰色	良好	
223	第73図 PL26	B13 10層	弥生土器 甕	— △6.4	体部下 ～底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	内外面 にぶい黄褐色	良好	外面一部黒斑
224	第73図 PL26	B11 10層	弥生土器 壺か甕	— △6.9	体部下 ～底部	外面 体部ハケ、底部ナデ・オサエ 内面 ナデ	密	外面 にぶい黄褐色 内面 黄灰色	良好	
225	第73図 PL26	B10 10層	弥生土器 壺か甕	— △4.8	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	密	外面 灰黄褐色 内面 灰褐色	良好	

表6 石器観察表

遺物 No	挿図・PL	遺構	層位	型 式	法 量				石 材	備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
S1	第12図・PL34	SK1	1層	石鎌	1.5	1.2	0.3	0.4	黒曜石	
S2	第12図・PL34	SK1	北東区2層	石鎌	△1.8	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S3	第12図・PL34	SK1	北東区1層	尖頭削器	3.2	2.5	1.1	4.9	黒曜石	
S4	第12図・PL34	SK1	1層	石核	7.5	4.7	2.9	126.0	頁岩	
S5	第12図・PL34	SK1	1層	石錘	6.2	△5.1	3.2	124.0	砂岩	
S6	第12図・PL34	SK1	1層	磨製石斧	△9.3	6.1	4.0	381.0	閃緑岩	敲石に再利用
S7	第12図・PL34	SK1	埋土	台石	8.0	7.9	4.0	349.0	砂岩	
S8	第17図・PL34	SD4	上層	石鎌	1.7	1.7	0.3	0.6	黒曜石	
S9	第17図・PL34	SD4	埋土	石鎌	1.8	1.5	0.4	0.5	黒曜石	
S10	第17図・PL34	SD4	埋土	石鎌	1.6	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
S11	第17図・PL34	SD4	埋土	石鎌	2.2	△1.4	0.3	0.4	黒曜石	
S12	第17図・PL34	SD4	埋土	石鎌	1.8	△1.4	0.4	0.5	サヌカイト	
S13	第17図・PL34	SD4	埋土	石鎌	0.9	0.9	0.2	0.1	黒曜石	
S14	第17図・PL34・41	SD4	上層	石鎌	1.4	1.1	0.4	0.6	黒曜石	断面四辺形

表6 石器観察表

遺物 No	挿図・PL	遺構	層位	型 式	法 量				石 材	備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
S15	第17図・PL34	SD4	上層	石鏃	12	△1.0	0.3	0.3	サヌカイト	
S16	第17図・PL34・41	SD4	埋土	石鏃	△1.5	△1.1	0.3	0.3	黒曜石	
S17	第17図・PL34	SD4	埋土	石鏃	2.1	1.5	0.2	0.8	サヌカイト	
S18	第17図・PL34	SD4	埋土	石鏃	2.9	2.8	0.7	3.7	黒曜石	
S19	第17図・PL34	SD4	埋土	削器	△3.5	3.0	0.9	10.2	黒曜石	
S20	第21図・PL35	SD5	上層	尖頭器	△2.6	△2.0	0.7	2.5	黒曜石	先端破片
S21	第21図・PL35	SD5	最下層	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.8	黒曜石	
S22	第21図・PL35	SD5	下層	石鏃	2.0	△1.6	0.4	0.7	黒曜石	
S23	第21図・PL35	SD5	最下層	石鏃	5.3	△1.5	0.5	1.0	黒曜石	
S24	第21図・PL35	SD5	上層	石鏃	2.6	△1.4	0.3	0.8	黒曜石	
S25	第21図・PL35	SD5	下層	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.7	サヌカイト	
S26	第21図・PL35	SD5	下層	石鏃	△1.8	1.4	0.3	0.8	サヌカイト	
S27	第21図・PL35	SD5	下層	石匙	3.2	6.7	0.6	15.4	サヌカイト	
S28	第21図・PL35	SD5	埋土	二次加工剥片	5.8	2.3	0.6	8.3	黒曜石	
S29	第21図	SD5	下層	石核	2.5	2.4	1.3	7.4	黒曜石	両極技法
S30	第21図・PL35・41	SD5-2	下層	石鏃	△2.2	1.7	0.3	0.9	黒曜石	
S31	第21図・PL35	SD5-2	下層	石鏃	△1.9	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	
S32	第21図・PL35	SD5-2	下層	石鏃	△2.3	△1.2	0.4	1.0	黒曜石	
S33	第21図・PL35	SD5-2	下層	石鏃	△1.8	△1.1	0.3	0.5	黒曜石	
S34	第21図・PL35	SD5-2	下層	搔器	6.2	3.6	0.5	16.0	サヌカイト	
S35	第21図	SD5-2	最下層	二次加工剥片	△2.9	2.0	0.8	3.4	黒曜石	
S36	第23図・PL35	SD6	下層	石鏃	2.1	1.6	0.5	1.1	サヌカイト	
S37	第23図・PL35	SD6	最下層	石鏃	1.8	△1.5	0.3	0.5	黒曜石	
S38	第23図・PL35	SD6	下層	石鏃	△1.5	1.5	0.2	0.3	黒曜石	
S39	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃	△1.2	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
S40	第23図・PL35・41	SD6	上層	石鏃	1.7	1.4	0.6	1.1	黒曜石	断面四辺形
S41	第23図・PL35	SD6	下層	石鏃	△1.0	0.9	0.3	0.3	黒曜石	
S42	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃	△0.9	△0.9	0.3	0.3	黒曜石	
S43	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.9	サヌカイト	
S44	第23図・PL35	SD6	下層	石鏃	△1.5	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	
S45	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃	2.1	1.3	0.5	1.1	黒曜石	
S46	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃未成品	2.0	1.3	0.5	1.4	黒曜石	
S47	第23図・PL35	SD6	下層	石鏃未成品	1.6	1.5	0.3	0.7	黒曜石	
S48	第23図・PL35	SD6	上層	石鏃未成品	2.4	△1.4	0.4	0.9	黒曜石	
S49	第23図・PL35	SD6	上層	楔形石器	△2.7	2.6	0.8	7.1	玉髄	
S50	第23図・PL35	SD6	下層	楔形石器	2.4	2.3	1.0	4.9	黒曜石	
S51	第23図・PL35	SD6	下層	削器	5.1	4.4	0.9	20.2	黒曜石	
S52	第23図	SD6	上層	剥片	7.8	4.9	1.9	50.5	黒曜石	
S53	第23図	SD6	上層	剥片	3.6	3.4	0.8	6.1	黒曜石	
S54	第24図	SD8	上層	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.7	黒曜石	
S55	第24図	SD8	上層	石鏃	2.1	△1.1	0.5	1.2	黒曜石	製作途中の事故品
S56	第24図・PL40	SD8	上層	凹石	9.6	7.6	4.1	374.0	デイサイト	
S57	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	2.4	1.4	0.5	1.1	サヌカイト	
S58	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	2.0	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
S59	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	2.1	1.7	0.4	0.8	黒曜石	
S60	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	△1.8	1.5	0.4	0.7	黒曜石	
S61	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	1.5	1.1	0.3	0.4	黒曜石	
S62	第30図・PL36・41	SD15	埋土	石鏃	△1.7	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
S63	第30図・PL36・41	SD15	埋土	石鏃	△1.4	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S64	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S65	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	△1.7	1.2	0.2	0.3	黒曜石	
S66	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	2.1	△1.0	0.4	0.6	黒曜石	
S67	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	△1.7	1.5	0.3	0.7	サヌカイト	
S68	第30図	SD15	埋土	石鏃	△1.0	△1.5	0.3	0.4	黒曜石	
S69	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	△2.6	△1.4	0.3	0.9	サヌカイト	
S70	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	△1.7	△1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S71	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	1.2	1.2	0.2	0.3	サヌカイト	
S72	第30図・PL36	SD15	埋土	石鏃	2.9	1.3	0.5	1.8	サヌカイト	
S73	第30図	SD15	埋土	石鏃	2.3	△1.1	0.3	0.7	サヌカイト	
S74	第30図	SD15	埋土	石鏃	△1.5	△0.9	0.2	0.3	黒曜石	
S75	第30図	SD15	埋土	石鏃未成品	2.5	1.8	0.5	1.9	黒曜石	
S76	第30図	SD15	埋土	削器	3.8	3.5	0.8	13.0	サヌカイト	
S77	第30図・PL38	SD15	埋土	楔形石器	2.9	1.9	1.2	5.6	黒曜石	
S78	第30図・PL38	SD15	埋土	楔形石器	2.6	2.4	1.3	8.3	黒曜石	
S79	第30図・PL38	SD15	埋土	楔形石器	2.0	2.3	1.1	5.2	黒曜石	
S80	第30図・PL38	SD15	埋土	楔形石器	4.9	3.8	0.9	19.0	サヌカイト	
S81	第30図・PL40	SD15	埋土	凹石	8.8	7.3	3.9	332.0	デイサイト	
S82	第32図・PL36	SD17	埋土	石鏃	1.5	1.0	0.2	0.3	黒曜石	
S83	第32図・PL36	SD17	埋土	石鏃	1.6	1.0	0.3	0.2	黒曜石	
S84	第35図・PL36	SD1	下層	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.5	黒曜石	
S85	第35図・PL36	SD1	下層	石鏃	△2.0	△1.3	0.3	0.4	黒曜石	
S86	第35図・PL36	SD1	下層	石鏃	2.3	△1.8	0.4	0.9	黒曜石	

表6 石器観察表

遺物 No	挿図・PL	遺構	層位	型 式	法 量				石 材	備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
S87	第35図	SD1	下層	石鏃	△2.1	△0.6	0.4	1.2	黒曜石	
S88	第35図	SD1	下層	石鏃	△1.5	2.2	0.3	1.1	黒曜石	
S89	第35図	SD1	下層	石鏃	△1.2	1.7	0.3	0.7	黒曜石	
S90	第35図	SD1	上層	石鏃	△1.4	△1.6	0.3	0.6	黒曜石	
S91	第35図・PL36	SD1	上層	石鏃	2.0	1.4	0.6	1.1	黒曜石	
S92	第35図・PL36	SD1	下層	石鏃	2.3	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	先端再加工
S93	第35図・PL36	SD1	上層	石鏃	1.0	1.1	0.3	0.2	黒曜石	
S94	第35図・PL36	SD1	上層	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
S95	第35図・PL36	SD1	埋土	石鏃	△1.5	1.2	0.2	0.3	黒曜石	
S96	第35図	SD1	上層	石鏃	△1.7	△1.3	0.4	0.5	黒曜石	
S97	第35図	SD1	下層	石鏃	△2.0	△1.3	0.3	0.5	黒曜石	
S98	第35図	SD1	埋土	石鏃未成品	2.3	1.9	0.5	1.4	黒曜石	
S99	第35図・PL38	SD1	下層	削器	4.0	6.2	1.3	27.0	サヌカイト	
S100	第35図・PL38	SD1	埋土	楔形石器	3.2	1.9	0.8	4.3	黒曜石	
S101	第35図	SD1	埋土	石核	4.8	4.7	2.1	40.8	黒曜石	
S102	第35図・PL39	SD1	中層	磨製石斧	△10.1	△6.5	4.5	482.0	閃緑岩	
S103	第35図・PL39	SD1	下層	石鏃	8.0	5.7	1.9	131.0	閃緑岩	
S104	第37図	SD2	埋土	石鏃	△1.7	1.1	0.4	0.7	サヌカイト	
S105	第38図	SD3	下層	石鏃未成品	△2.1	1.4	0.4	1.0	黒曜石	
S106	第38図	SD3	下層	二次加工剥片	3.1	5.9	0.7	13.2	黒曜石	
S107	第38図・PL39	SD3	埋土	石鏃	6.6	4.8	2.0	95.0	デイサイト	
S108	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	2.8	1.8	0.3	1.5	サヌカイト	
S109	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.7	黒曜石	
S110	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△1.7	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
S111	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.6	1.3	0.2	0.3	サヌカイト	
S112	第43図	SD12	埋土	石鏃	1.6	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
S113	第43図	SD12	埋土	石鏃	2.6	△1.9	0.4	1.2	黒曜石	
S114	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	2.4	△1.9	0.4	0.7	黒曜石	
S115	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△1.8	△1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S116	第43図・PL36・41	SD12	埋土	石鏃	2.0	△1.3	0.3	0.4	黒曜石	
S117	第43図・PL36・41	SD12	埋土	石鏃	1.8	△1.0	0.2	0.3	黒曜石	
S118	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.6	△1.1	0.2	0.4	黒曜石	
S119	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.8	△1.1	0.3	0.4	黒曜石	
S120	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.6	△1.3	0.3	0.4	サヌカイト	
S121	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.6	△1.3	0.3	0.4	サヌカイト	
S122	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.5	△1.3	0.4	0.6	サヌカイト	
S123	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.5	△1.7	0.5	1.0	黒曜石	
S124	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.8	△1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S125	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.7	黒曜石	
S126	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.3	△1.0	0.3	0.3	黒曜石	
S127	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	1.2	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S128	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△2.4	1.6	0.4	1.7	サヌカイト	
S129	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△1.7	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	
S130	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.4	△1.5	0.5	0.9	サヌカイト	
S131	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△2.3	1.9	0.4	1.4	黒曜石	
S132	第43図	SD12	埋土	石鏃	2.2	1.3	0.5	1.3	黒曜石	
S133	第43図・PL36	SD12	埋土	石鏃	△1.7	1.5	0.4	0.8	黒曜石	
S134	第43図	SD12	埋土	石鏃	△1.6	△1.0	0.3	0.3	黒曜石	
S135	第43図	SD12	埋土	石鏃未成品	2.4	△1.5	0.4	1.1	黒曜石	
S136	第43図・PL38	SD12	埋土	石鏃未成品	△2.0	1.9	0.7	3.1	黒曜石	
S137	第43図・PL38	SD12	埋土	石鏃未成品	1.9	2.4	0.3	1.2	黒曜石	
S138	第44図・PL38	SD12	埋土	削器	3.7	7.8	0.7	20.2	黒曜石	
S139	第44図・PL38	SD12	埋土	削器	4.3	2.3	8.9	8.1	黒曜石	
S140	第44図	SD12	埋土	石核	2.6	3.1	1.2	10.6	黒曜石	
S141	第44図	SD12	埋土	石核	3.5	4.5	2.0	33.0	黒曜石	
S142	第44図・PL38	SD12	埋土	二次加工剥片	3.5	2.8	1.2	8.2	玉髓	
S143	第44図	SD12	埋土	二次加工剥片	3.0	1.3	0.7	1.9	黒曜石	
S144	第44図・PL40	SD12	埋土	敲石	12.9	7.7	6.2	932.0	砂岩	
S145	第44図・PL40	SD12	埋土	砥石	△5.3	△3.5	△2.7	56.0	砂岩	
S146	第44図・PL36	SD12-2	埋土	石鏃	1.6	1.0	0.2	0.3	黒曜石	
S147	第44図・PL36・41	SD12-2	埋土	石鏃	△1.8	1.4	0.3	0.8	サヌカイト	
S148	第48図・PL38	SD14	埋土	尖頭器	△3.8	△1.5	0.5	2.7	サヌカイト	
S149	第48図・PL36・41	SD14	埋土	石鏃	△2.3	1.5	0.4	1.0	黒曜石	
S150	第48図・PL36	SD14	埋土	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.6	黒曜石	
S151	第48図・PL36	SD14	埋土	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
S152	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.5	△1.8	0.3	0.8	黒曜石	
S153	第48図	SD14	埋土	石鏃	2.1	△1.6	0.4	0.9	黒曜石	
S154	第48図・PL36・41	SD14	埋土	石鏃	2.5	△1.5	0.5	1.3	黒曜石	
S155	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.7	△1.3	0.3	0.5	黒曜石	
S156	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.7	△1.3	0.3	0.6	黒曜石	
S157	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.1	△1.3	0.4	0.4	黒曜石	
S158	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.7	△0.9	0.4	0.6	黒曜石	

表6 石器観察表

遺物 No	挿図・PL	遺構	層位	型 式	法 量			重量(g)	石 材	備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)			
S159	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.6	△1.2	0.3	0.5	サヌカイト	
S160	第48図・PL36	SD14	埋土	石鏃	2.0	1.8	0.6	1.5	黒曜石	
S161	第48図	SD14	埋土	石鏃	△1.8	△1.2	0.2	0.5	サヌカイト	
S162	第48図・PL38	SD14	埋土	楔形石器	2.6	2.1	1.1	4.7	黒曜石	
S163	第48図・PL39	SD14	埋土	磨製石斧	10.8	6.1	4.9	520.0	花崗閃緑岩	
S164	第48図・PL40	SD14	埋土	凹石	10.6	8.0	5.1	551.0	角閃石安山岩	
S165	第52図・PL36	SD9	埋土	石鏃	△1.6	1.3	0.3	0.5	サヌカイト	
S166	第52図・PL36	SD9	埋土	石鏃	1.3	1.1	0.2	0.2	黒曜石	
S167	第52図・PL36	SD9	埋土	石鏃	△1.6	1.4	0.4	0.7	サヌカイト	
S168	第52図	SD9	埋土	石鏃未成品	1.9	1.5	0.5	1.1	黒曜石	
S169	第55図・PL36	SD10	埋土	石鏃	2.4	1.6	0.4	1.1	黒曜石	
S170	第55図・PL36	SD10	埋土	石鏃	△2.2	1.6	0.3	0.6	サヌカイト	
S171	第55図・PL36	SD10	埋土	石鏃	1.3	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	
S172	第55図	SD10	埋土	石鏃	△1.9	1.8	0.4	1.3	黒曜石	
S173	第55図	SD10	埋土	石鏃未成品	2.2	1.5	0.5	1.5	黒曜石	
S174	第55図	SD10	埋土	石鏃未成品	1.9	1.9	0.5	2.0	黒曜石	
S175	第55図・PL38	SD10	埋土	楔形石器	3.3	2.9	0.7	5.9	黒曜石	
S176	第55図・PL41	SD10-2	埋土	石鏃	2.5	△1.7	0.5	1.2	黒曜石	
S177	第55図	SD10-2	埋土	石鏃	2.2	△1.4	0.3	0.7	黒曜石	
S178	第55図・PL39	SD10-2	埋土	磨製石斧	△10.8	5.2	3.6	336.0	閃緑岩	
S179	第57図・PL41	SD13	埋土	石鏃	1.5	0.9	0.2	0.3	黒曜石	断面四辺形
S180	第74図・PL37	G15	調査区南壁トレンチ	石鏃	3.1	2.0	0.4	2.0	黒曜石	先端再加工
S181	第74図・PL37	B9	9層	石鏃	2.9	△1.8	0.7	2.4	黒曜石	左側再加工
S182	第74図・PL37	H19	3層	石鏃	2.3	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	
S183	第74図・PL37	D区	表採	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
S184	第74図・PL37	C15	8層	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.7	サヌカイト	
S185	第74図・PL37	D9	2層	石鏃	1.6	1.7	0.4	0.8	黒曜石	
S186	第74図・PL37	H17	2層	石鏃	1.4	1.4	0.2	0.3	サヌカイト	
S187	第74図・PL37		表採	石鏃	△1.4	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
S188	第74図・PL37	B12	8層	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
S189	第74図・PL37	B10	9層	石鏃	△1.7	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S190	第74図・PL37		表土	石鏃	0.9	1.3	0.2	0.2	黒曜石	
S191	第74図・PL37	C11	6層	石鏃	1.8	△1.6	0.3	0.6	黒曜石	
S192	第74図・PL37	B13	8層	石鏃	△2.4	△1.8	0.5	1.3	黒曜石	
S193	第74図・PL37	B10	10層	石鏃	2.1	△1.8	0.4	0.9	サヌカイト	
S194	第74図・PL37	B区	2層	石鏃	2.0	△1.3	0.3	0.5	黒曜石	
S195	第74図・PL37	F18	6層	石鏃	1.9	△1.1	0.3	0.5	黒曜石	
S196	第74図・PL37	C区	表採	石鏃	1.6	△1.1	0.2	0.2	黒曜石	
S197	第74図	G19	3層	石鏃	1.5	△1.2	0.2	0.3	黒曜石	
S198	第74図・PL37	B~D区	清掃中	石鏃	1.7	△1.0	0.3	0.3	黒曜石	
S199	第74図・PL37	H19	2層	石鏃	1.4	△1.2	0.3	0.4	黒曜石	
S200	第74図・PL37・41	B区	2層	石鏃	△1.6	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
S201	第74図・PL37	B10	10層	石鏃	△1.6	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
S202	第74図	G18	3層	石鏃	△0.8	△1.2	0.2	0.2	黒曜石	
S203	第74図	B8	ベルト	石鏃	△1.0	△1.3	0.3	0.2	黒曜石	
S204	第74図	C10	6層	石鏃	△1.7	△1.4	0.3	0.6	黒曜石	
S205	第74図	C12	8層	石鏃	△1.4	△1.2	0.3	0.4	黒曜石	
S206	第74図・PL37	G18	3層	石鏃	△1.8	△1.5	0.4	0.9	黒曜石	
S207	第74図・PL37・41	B区	表土	石鏃	△1.5	△1.3	0.3	0.5	黒曜石	
S208	第74図・PL37	C11	6層	石鏃	△1.4	△1.0	0.2	0.3	黒曜石	
S209	第74図・PL37	C14	8層	石鏃	△2.5	△1.4	0.4	1.1	黒曜石	
S210	第74図	B区	表土	石鏃	△1.7	△1.3	0.4	0.7	黒曜石	
S211	第74図	G18	3層	石鏃	3.0	△1.6	0.4	1.8	黒曜石	
S212	第75図・PL37	G18	3層	石鏃	2.6	1.9	0.4	1.8	黒曜石	
S213	第75図・PL37	D12	表土	石鏃	2.3	2.0	0.4	1.5	鉄石英	
S214	第75図・PL37	H19	3層	石鏃	2.2	1.8	0.5	1.3	黒曜石	
S215	第75図・PL37	D10	2層	石鏃	2.3	△1.9	0.5	1.4	黒曜石	
S216	第75図・PL37	G19	3層	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.8	サヌカイト	
S217	第75図・PL37	G18	3層	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S218	第75図・PL37	C10	6層	石鏃	1.4	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
S219	第75図・PL37	H18	3層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.5	サヌカイト	
S220	第75図・PL37・41	G17	2層	石鏃	1.4	1.2	0.4	0.6	黒曜石	断面四辺形
S221	第75図・PL37	G19	3層	石鏃	1.2	1.2	0.3	0.4	黒曜石	
S222	第75図・PL37・41	G19	3層	石鏃	1.5	1.2	0.5	0.4	黒曜石	断面四辺形
S223	第75図・PL37	C9	2層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.3	黒曜石	右縁再加工
S224	第75図・PL37	B区	調査区南壁トレンチ	石鏃	1.5	△1.2	0.2	0.3	黒曜石	
S225	第75図・PL37	F16・G16	2層	石鏃	△1.4	1.4	0.4	0.6	黒曜石	
S226	第75図・PL37	B10	10層	石鏃	△1.1	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S227	第75図	F16	トレンチ	石鏃	1.5	△1.0	0.3	0.3	黒曜石	
S228	第75図・PL37	C14	2層	石鏃	1.2	△1.2	0.3	0.3	黒曜石	
S229	第75図・PL37	G18	3層	石鏃	1.4	△1.2	0.4	0.4	黒曜石	
S230	第75図	B12	8層	石鏃	1.7	△1.3	0.3	0.5	黒曜石	断面非対称形

表6 石器観察表

遺物 No	挿図・PL	遺構	層位	型 式	法 量				石 材	備 考
					長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
S231	第75図・PL37	G19	2層	石鏃	△1.3	△1.5	0.2	0.4	黒曜石	
S232	第75図	D13	2層	石鏃	△1.7	△1.3	0.3	0.6	黒曜石	
S233	第75図	C15	8層	石鏃	△1.9	△1.4	0.4	0.8	黒曜石	
S234	第75図	D9	2層	石鏃	△1.7	△1.5	0.4	1.0	黒曜石	
S235	第75図・PL37・41	H18	3層	石鏃	△1.9	△1.3	0.5	0.9	黒曜石	
S236	第75図・PL37	G18	3層	石鏃	2.7	1.6	0.4	1.3	サヌカイト	
S237	第75図・PL37	C9	6層	石鏃	1.9	1.5	0.6	1.1	黒曜石	
S238	第75図・PL37	C10	7層	石鏃	1.9	△1.6	0.5	1.5	黒曜石	
S239	第75図・PL37	A区ベルト	2層	石鏃	△1.8	1.3	0.3	0.7	サヌカイト	
S240	第75図	C15	トレンチ	石鏃未成品	2.2	2.0	0.6	2.3	黒曜石	
S241	第75図	F15	2層	石鏃未成品	2.3	1.7	0.6	2.3	サヌカイト	
S242	第75図	G18	3層	石鏃未成品	2.5	△1.6	0.2	0.8	黒曜石	
S243	第75図	C16	3層	石鏃未成品	2.7	2.0	0.5	1.8	黒曜石	断面非対称形
S244	第76図・PL38	H18	トレンチ	石匙	4.1	6.6	1.0	25.6	サヌカイト	
S245	第76図・PL38	F15	トレンチ	両面調整石器	6.1	2.7	0.9	22.0	サヌカイト	研磨あり
S246	第76図・PL38	C11	7層	削器	9.5	4.9	1.4	64.0	サヌカイト	
S247	第76図	B7	10層	削器	△3.6	△4.2	0.7	8.5	サヌカイト	
S248	第76図・PL38	B8	ベルト	削器	4.4	5.0	1.2	25.8	サヌカイト	
S249	第76図	F15	2層	二次加工剥片	4.1	△4.7	0.7	13.8	サヌカイト	
S250	第76図		排土	二次加工剥片	6.3	3.7	1.5	27.0	黒曜石	
S251	第76図	H19	3層	二次加工剥片	3.2	2.5	0.8	4.2	黒曜石	
S252	第76図	C14	8層	二次加工剥片	2.9	1.6	0.7	1.9	黒曜石	
S253	第77図・PL38	F15	8層	楔形石器	2.5	3.1	0.7	4.6	黒曜石	
S254	第77図・PL38	C11	6層	楔形石器	2.4	3.1	0.5	4.5	黒曜石	
S255	第77図・PL38	F15	8層	楔形石器	2.5	2.2	0.7	3.6	黒曜石	
S256	第77図・PL38	C14	8層	楔形石器	2.7	2.5	0.9	5.4	黒曜石	
S257	第77図・PL38	H19	3層	楔形石器	2.7	1.7	1.0	5.7	黒曜石	
S258	第77図・PL38	H18	3層	楔形石器	1.8	2.4	0.8	3.2	黒曜石	
S259	第77図・PL38	B区	調査区南壁トレンチ	楔形石器	3.9	2.2	1.0	6.8	黒曜石	
S260	第77図・PL38	C11	6層	楔形石器	4.3	1.5	0.7	3.2	黒曜石	
S261	第77図・PL38	H19	3層	楔形石器	2.4	1.7	0.6	2.2	黒曜石	
S262	第77図・PL38	G17	2層	楔形石器	2.2	1.5	0.6	2.8	水晶	
S263	第77図	H18	トレンチ	石核	2.7	2.3	1.1	5.6	黒曜石	
S264	第77図	H18	3層	石核	2.3	3.7	1.2	7.0	黒曜石	
S265	第77図	B区	調査区南壁トレンチ	石核	2.6	1.7	1.8	6.1	黒曜石	両極技法
S266	第77図	A区	A区	石核	2.5	5.1	3.6	35.8	黒曜石	
S267	第78図・PL39	B10	10層	磨製石斧	△10.0	6.2	5.0	500.0	花崗閃緑岩	
S268	第78図・PL39	A区トレンチ	2層	磨製石斧	△9.1	6.4	4.1	361.0	閃緑岩	
S269	第78図・PL39	B7	7層	磨製石斧	△16.5	6.1	4.7	638.0	砂岩	
S270	第78図	B10	9層	磨製石斧	△6.3	△4.0	△2.8	107.0	閃緑岩	
S271	第78図	C13	7層	石鏃	△7.3	△5.9	1.7	104.0	玄武岩	
S272	第79図・PL39	B5	2層	石鏃	13.0	4.9	2.1	233.0	砂岩	
S273	第79図・PL39	F18	調査区西壁トレンチ	石鏃	5.2	4.9	1.7	54.0	デイサイト	
S274	第79図・PL39	C12	トレンチ	石鏃	6.4	5.5	2.3	112.0	砂岩	
S275	第79図・PL39	G18	2層	石鏃	6.4	5.1	3.0	144.0	ホルンフェルス	
S276	第79図・PL39	C区	表土	石鏃	6.1	5.8	2.8	104.0	角閃石安山岩	
S277	第79図・PL39	B10	9層	石鏃	△5.4	5.0	1.7	71.0	角閃石安山岩	
S278	第79図・PL40	C10	7層	凹石	9.0	7.4	5.2	472.0	デイサイト	
S279	第79図・PL40	C10	6層	砥石	△5.9	△5.6	△4.9	221.0	花崗岩	
S280	第79図・PL40	B11	8層	砥石	△6.7	△5.6	3.2	236.0	花崗岩	
S281	第79図・PL40	A区	表土	硯	△4.5	△3.7	△0.9	12.6	頁岩	赤間硯

表7 金属製品観察表

遺物 No	挿図・PL	遺 構	層 位	種 類	法 量				備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
F1	第54図・PL28	SD10-1	埋土	棒状鉄製品	61.5	13.5	3.0	10.8	
F2	第57図	SD13	埋土	楔	38.0	19.0	4.0	13.6	
F3	第57図	SD13	埋土	刀子	95.0	8.0	1.5	3.5	
F4	第63図・巻頭図版2	B11	B区西壁トレンチ	鉄鏃	111.0	23.0	3.5	17.4	定角式
F5	第63図	C8	2層	刀子	82.0	11.0	1.5	6.4	
F6	第63図	C8	2層	鎌	52.0	13.0	1.0	2.6	
F7	第63図	C11	2層	釘	39.0	5.0	2.5	1.7	
F8	第63図	C8	2層	釘	△4.7	6.0	4.0	3.8	
F9	第63図	B7	2層	釘	186.0	28.0	11.0	124	
F10	第63図	C8	2層	板状鉄製品	△3.4	△2.9	2.0	8.6	
F11	第65図・巻頭図版2	C9	6層	小札	62.5	32.0	1.1	11.2	2列14孔
F12	第65図・巻頭図版2	C区	6層	鉄鏃	△54.0	18.0	3.5	7.5	定角式
F13	第65図・巻頭図版2	C11	6層	鉄鏃	△55.5	4.5	2.5	2.4	茎
F14	第65図・巻頭図版2	B9	6層	環状鉄製品	40.0	42.0	7.0	24.2	馬具
F15	第65図・PL27	C15	6層	紡錘車	150.0	47.5	4.0	42.2	

表7 金属製品観察表

遺物 No	挿図・PL	遺 構	層 位	種 類	法 量				備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
F16	第65図・PL27	B9	6層	鉄	1220	38.0	5.0	5.0	
F17	第65図・PL27	B11	6層	鉄斧	82.5	42.0	3.0	63.5	
F18	第65図・PL27	B14	6層	錐	△64.0	△65	3.0	45.2	
F19	第65図・PL27	B14	6層	鎌	△6.3	21.0	2.0	5.9	
F20	第65図・PL28	B10	6層	楔	47.5	16.0	4.0	15.6	
F21	第65図・PL28	C9	6層	釘	81.0	12.0	2.0	3.7	
F22	第65図・PL28	D14	6層	釘	62.0	7.5	4.0	3.1	
F23	第65図・PL28	C9	6層	釘	69.0	10.0	1.0	2.6	
F24	第65図・PL28	D13	6層	釘	50.0	9.0	2.5	4.7	
F25	第65図・PL28	C11	6層	釘	44.0	4.5	2.0	1.7	
F26	第65図・PL27	C10	6層	棒状鉄製品	102.0	6.5	4.0	9.1	工具か
F27	第65図・PL28	B9	6層	棒状鉄製品	△89.0	5.0	4.0	4.8	振じりあり
F28	第65図	B8	6層	棒状鉄製品	91.0	6.0	4.5	8.0	
F29	第66図	B10	6層	棒状鉄製品	71.5	3.0	3.0	2.5	
F30	第66図・PL28	C14	6層	棒状鉄製品	△60.0	5.5	3.5	5	
F31	第66図	C10	6層	板状鉄製品	△53.0	△30.0	4.5	14.6	
F32	第66図・PL28	B10	6層	板状鉄製品	△18.0	25.0	2.0	3.3	
F33	第68図・巻頭図版2	B14	7層	鉄鎌	158.0	10.0	10.0	18.6	鬮頭式
F34	第68図	C13	7層	錐	△60.0	△33.0	4.5	43.8	
F35	第68図	B11	7層	不明鉄製品	△74.0	13.0	2.0	5.6	
F36	第68図	C14	7層	棒状鉄製品	90.0	13.0	6.5	27.2	
F37	第70図	D15	8層	釘	80.0	7.0	4.0	14.8	
F38	第72図・巻頭図版2	C9	9層	引手	177.0	43	27.0	63	
M1	第63図	C8	2層	鉄砲玉	13.0	13.0	13.0	11.6	鉛
M2	第63図	F18	2層	鉄砲玉	11.0	11.0	11.0	6.4	鉛
M3	第63図	C9	2層	煙管	42.0	10.0	8.5	3.8	真鍮
M4	第63図	B10	2層	煙管	37.0	10.0	2.0	2.5	真鍮
M5	第65図・PL27	C9	6層	匙	145.5	17.0	1.5	4.5	真鍮鍍銀

表8 木製品観察表

遺物 No	挿図・PL	遺 構	層 位	種 類	法量 (cm)			備 考
					口径・長さ	高さ・幅	底径・厚さ	
W1	第29図・PL30	SD15	埋土	板状木製品	長さ△36.5	幅4.0	厚さ0.9	下端部を両側からカット
W2	第29図	SD15	埋土	板状木製品	長さ△14.5	幅4.5	厚さ0.5	下端部を両側からカット
W3	第45図・PL32	SD12	埋土	箸	長さ△21.8	幅0.7	厚さ0.7	
W4	第45図	SD12	埋土	漆器皿	口径—	高さ△1.5	底径8.8	内外面黒色漆
W5	第49図・PL31	SD14	埋土	容器	長さ51.4	幅9.7	厚さ0.8	樹皮による縦じ痕3ヶ所
W6	第49図	SD14	埋土	容器	長さ27.5	幅8.1	厚さ0.8	台形状。穿孔、樹皮による縦じ痕1ヶ所あり。容器の側板か底板と思われる
W7	第49図	SD14	埋土	曲物	長さ△31.5	幅5.3	厚さ0.7	底板。左側に樹皮による縦じ痕
W8	第49図	SD14	埋土	曲物	長さ18.2	幅6.3	厚さ0.4	底板
W9	第49図	SD14	埋土	曲物	長さ9.9	幅△16.6	厚さ0.7	側板。内面曲げ細工用の格子状線刻
W10	第49図・PL31	SD14	埋土	板状木製品	長さ11.4	幅7.2	厚さ0.7	容器側板か。右側1孔
W11	第49図	SD14	埋土	建築部材	長さ△9.5	幅4.2	厚さ3.8	ホゾ穴1孔
W12	第49図・PL30	SD14	埋土	人形?	長さ6.0	幅1.1	厚さ0.9	上部に2段の削り込み
W13	第50図・PL31	SD9	埋土	漆器皿	口径△11.0	高さ1.9	底径—	内外面黒色漆、菊模様赤色漆
W14	第54図・PL30	SD10-1	埋土	動物形代	長さ14.5	幅3.7	厚さ0.4	鳥形か馬形
W15	第54図	SD10-2	埋土	漆器皿	口径—	高さ△0.8	底径8.0	内外面黒色漆
W16	第54図・PL31	SD10	埋土	曲物	長さ△16.8	幅5.2	厚さ0.6	底板
W17	第54図	SD10-2	埋土	板状木製品	長さ△11.1	幅2.5	厚さ0.6	下部に2孔。字は認められない
W18	第54図・PL33	SD10-2	埋土	板状木製品	長さ△23.5	幅2.6	厚さ0.5	下部に2孔。字は認められない
W19	第57図・PL33	SD13	埋土	不明	長さ11.0	幅4.2	厚さ0.9	板状。8孔
W20	第57図	SD13	埋土	曲物	長さ△14.9	幅4.9	厚さ0.7	底板
W21	第62図・PL33	C8	2層	木筒	長さ13.8	幅2.3	厚さ0.3	表「□□□□地」裏「□□山老□□」
W22	第62図・PL33	B9	2層	火鑽白	長さ26.8	幅3.2	厚さ0.9	
W23	第62図	B13北壁トレンチ	2層	板状木製品	長さ△12.0	幅1.5	厚さ0.7	下端部を片側からカット
W24	第62図	B11	2層	棒状木製品	長さ12.3	幅0.6	厚さ0.3	上端に被熱痕
W25	第62図・PL33	D8	2層	不明	長さ7.8	幅11.7	厚さ1.5	台形状。上部2孔。下部部2ヶ所の切込
W26	第66図・PL31	B12	6層	曲物	長さ15.7	幅6.6	厚さ0.9	底板
W27	第66図・PL32	D13	6層	下駄	長さ△17.2	幅8.7	厚さ2.4	連歯式
W28	第66図・PL33	C9	6層	板状木製品	長さ△10.7	幅2.6	厚さ0.5	両辺に><の切込。右半部に2孔。字は認められない
W29	第66図	B11	6層	棒状木製品	長さ9.1	幅1.2	厚さ1.1	下端に被熱痕。中位に3本の線刻
W30	第66図	B11	6層	棒状木製品	長さ15.0	幅1.4	厚さ1.1	下端に被熱痕
W31	第66図	B11	6層	棒状木製品	長さ16.7	幅1.5	厚さ0.5	下端に被熱痕
W32	第68図・PL32	B8	7層	箸	長さ29.0	幅1.1	厚さ0.6	
W33	第68図	B12	7層	漆器椀	口径—	高さ△2.9	底径△8.3	内外面黒色漆
W34	第68図	C9	7層	漆器皿	口径—	高さ△0.7	底径△8.6	内外面黒色漆
W35	第68図	B13	7層	容器	長さ△17.3	幅7.9	厚さ0.7	側板
W36	第68図・PL32	C13	7層	糸巻	長さ△12.3	幅3.9	厚さ1.2	横木
W37	第68図・PL32	C14	7層	下駄	長さ18.1	幅8.5	厚さ2.1	差歯式

表 8 木製品観察表

遺物 No	挿図・PL	遺 構	層 位	種 類	法量 (cm)			備 考
					口径・長さ	高さ・幅	底径・厚さ	
W38	第68図・PL30	C13	7層	板状木製品	長さ△12.9	幅3.8	厚さ0.4	側縁を両面から鋭利に削る
W39	第68図	C13	7層	板状木製品	長さ△21.0	幅4.0	厚さ0.5	
W40	第68図	C13	7層	板状木製品	長さ△13.7	幅2.4	厚さ0.4	
W41	第68図	C13	7層	板状木製品	長さ△10.0	幅3.2	厚さ0.5	
W42	第68図	C13	7層	板状木製品	長さ△8.2	幅2.7	厚さ0.4	
W43	第68図	C13	7層	板状木製品	長さ△15.1	幅3.0	厚さ0.5	
W44	第68図	B13	7層	板状木製品	長さ17.6	幅3.0	厚さ0.3	
W45	第68図	C11	7層	棒状木製品	長さ△11.0	幅1.4	厚さ0.6	
W46	第68図	C12	7層	板状木製品	長さ△14.3	幅2.0	厚さ0.7	左側に1孔。下端に被熱痕
W47	第70図	B12	8層	曲物	長さ△11.6	幅3.4	厚さ0.5	底板。縁に割付の線刻
W48	第70図	B13	8層	曲物	長さ△14.3	幅6.6	厚さ0.7	底板。下端部被熱痕
W49	第70図	B13	8層	曲物	長さ△6.9	幅△4.5	厚さ0.6	底板。右側に5ヶ所の刻み
W50	第70図	C14	8層	曲物	長さ△15.0	幅△4.8	厚さ0.8	底板。左側に1ヶ所穿孔あり
W51	第70図	C15	8層	曲物	長さ22.9	幅5.2	厚さ0.5	底板
W52	第70図・PL31	B13	8層	曲物	長さ△23.7	幅4.2	厚さ0.5	底板。下端部被熱痕
W53	第70図・PL32	C15	8層	茶杓状製品	長さ22.3	幅0.8	厚さ0.4	竹製
W54	第71図・PL30	B14	8層	人形	長さ△21.8	幅1.7	厚さ0.9	
W55	第71図・PL30	B12	8層	動物形代	長さ△10.1	幅△1.9	厚さ0.5	左半部欠損。鳥形、馬形、蛇形等と思われる
W56	第71図・PL30	B12	8層	陽物	長さ△14.3	幅3.3	厚さ2.3	
W57	第71図・PL30	B13	8層	人形か陽物	長さ19.6	幅1.7	厚さ1.4	
W58	第71図・PL30	C15	8層	舟形	長さ45.1	幅7.7	高さ3.6	軸先に波切板を立てる切込。船尾に穿孔。
W59	第71図	B12	8層	板状木製品	長さ△17.5	幅3.0	厚さ0.9	下端部を両側からカット
W60	第71図	B12	8層	板状木製品	長さ△21.0	幅3.1	厚さ1.4	下端部を両側からカット
W61	第71図・PL30	B12	8層	板状木製品	長さ△21.6	幅2.1	厚さ1.3	下端部を両側からカット
W62	第71図	B12	8層	板状木製品	長さ△11.6	幅2.0	厚さ1.0	下端部を両側からカット
W63	第71図	B12	8層	板状木製品	長さ△21.9	幅3.2	厚さ0.5	下端部カット
W64	第71図	B13	8層	板状木製品	長さ22.1	幅3.7	厚さ1.2	下端部カット
W65	第71図・PL30	B12	8層	板状木製品	長さ△19.3	幅2.4	厚さ0.9	下端部を片側からカット
W66	第71図	C11	8層	板状木製品	長さ△12.3	幅2.0	厚さ0.3	下端部を片側からカットし、横方向に3本の線刻
W67	第71図・PL33	B12	8層	板状木製品	長さ△26.0	幅3.3	厚さ0.3	上部に1ヶ所穿孔。字は認められない
W68	第71図	B13	8層	板状木製品	長さ△13.5	幅4.1	厚さ0.6	
W69	第72図・PL30	B11・C11	9層上面	陽物	長さ12.8	幅2.6	厚さ2.1	
W70	第72図	B8	9層	板状木製品	長さ△10.6	幅1.9	厚さ1.3	下端部を両側からカット
W71	第72図	B8	9層	板状木製品	長さ△11.5	幅1.8	厚さ0.6	下端部を片側からカット
W72	第72図・PL30	B8	9層	板状木製品	長さ△30.4	幅2.2	厚さ1.1	下端部を片側からカット
W73	第72図・PL30	B8	9層	板状木製品	長さ△24.8	幅2.8	厚さ0.9	下端部を両側からカット
W74	第72図	B9	9層	板状木製品	長さ△14.9	幅5.1	厚さ0.6	下端部を両側からカット
W75	第72図	B8	9層	板状木製品	長さ△10.6	幅1.9	厚さ0.6	
W76	第72図	B11・C11	9層	曲物	長さ△12.7	幅3.1	厚さ0.5	底板
W77	第73図	B10	10層	不明	長さ25.7	幅4.8	厚さ1.6	
W78	第73図	B11	10層上面	曲物	長さ△12.3	幅3.3	厚さ0.6	底板
W79	第73図・PL33	B11	10層上面	不明	長さ18.2	幅2.3	厚さ0.7	上部に横方向の削り込み
W80	第73図	C区北排水路	10層	板状木製品	長さ△16.4	幅2.5	厚さ0.9	板状。下端部を両側からカット
W81	第73図	C区	10層検出面	板状木製品	長さ△12.0	幅2.5	厚さ0.7	下端部を両側からカット

表 9 歯骨観察表

遺物 No	挿図・PL	遺 構	層 位	種 類	大きさ (mm)			備 考
					長さ	幅	厚さ	
B1	第49図	SD14	埋土	骨	174.5	56.0	26	馬
B2	第68図	C14	7層	歯	△53.5	29.5	25.5	馬

An aerial photograph of a landscape. In the background, a large, rounded mountain peak rises above a range of smaller hills. The middle ground is dominated by a dense forest. In the foreground, a large, cleared area is visible, showing signs of construction or land development. This area includes several rectangular plots, a road, and a tall, lattice-structured tower. The overall scene is captured in a monochromatic, slightly desaturated style.

PLATE



B・C・D区全景（上が西）



1 遺跡全景（北西から）



2 A区完掘状況（南西から）



1 SD 5・6 検出状況 (西から)



2 SD 5・6 完掘状況 (南西から)



3 A区第2遺構面土器出土状況 (南西から)



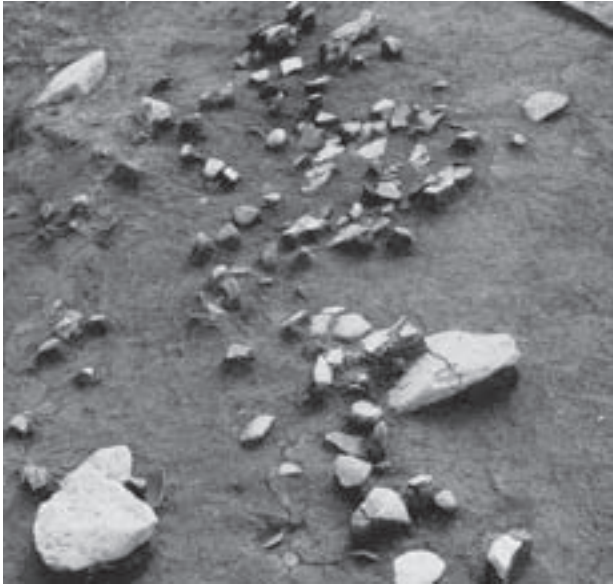
4 SD 1～3 検出状況 (東から)



5 SD 1～3 完掘状況 (東から)



6 A区第1遺構面完掘状況 (北から)



1 SK 1 上面土器出土状況（北東から）



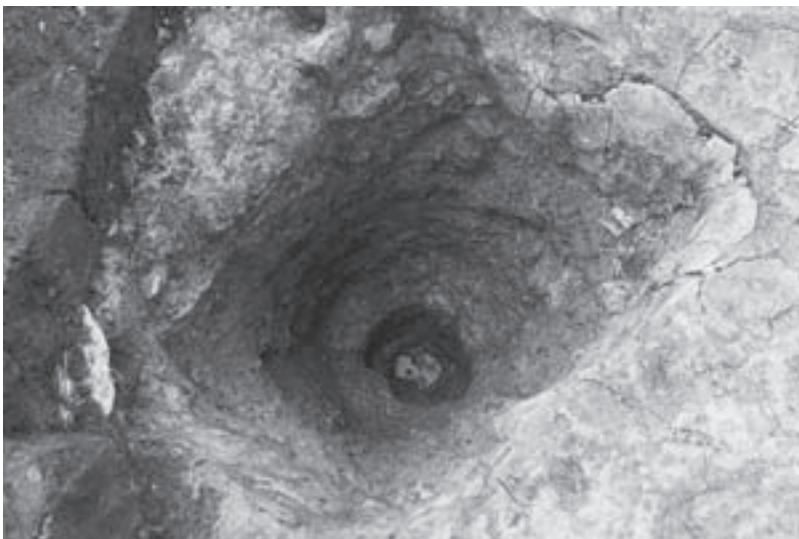
2 SK 1 土器出土状況（北から）



3 SK 1 完掘状況（北から）



4 SK 2 完掘状況（北から）



5 SK 3 完掘状況（東から）



1 B・C・D区SD14~19完掘状況（東から）



2 B区SD14・15完掘状況（東から）



1 C区SD15・16完掘状況（北東から）



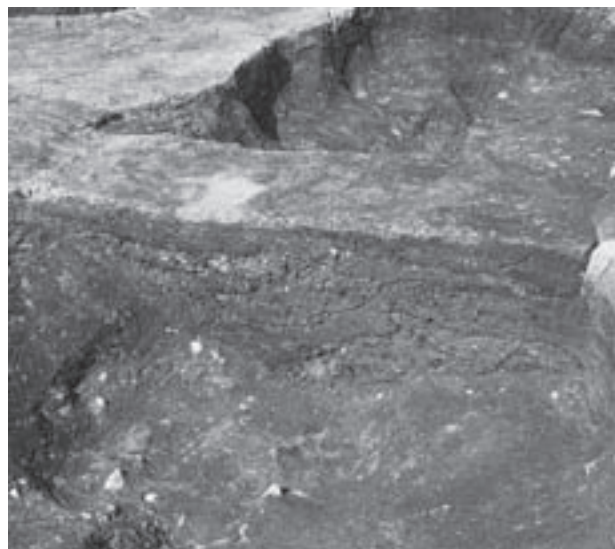
2 C区SD15土層断面（東から）



3 SD 8 完掘状況（北から）



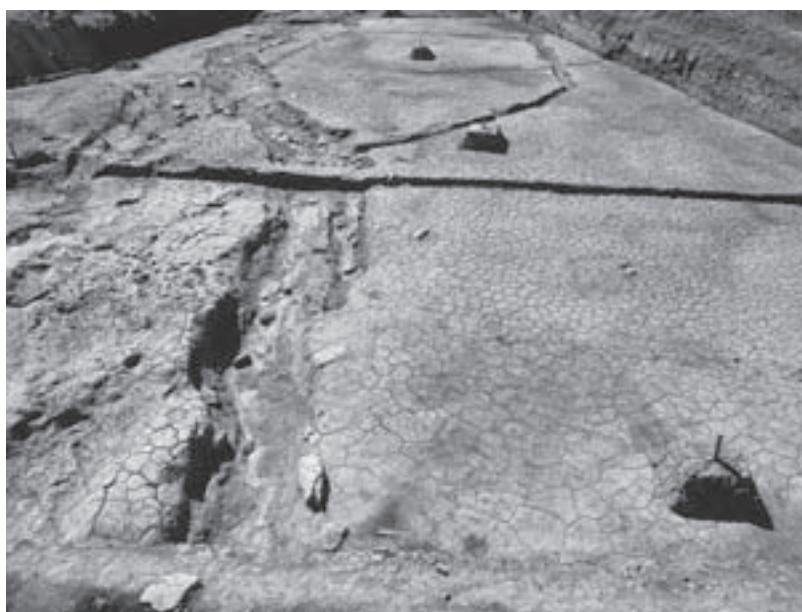
1 B区SD12完掘状況（北東から）



2 SD12土層断面（南から）



3 D区SD12完掘状況（西から）



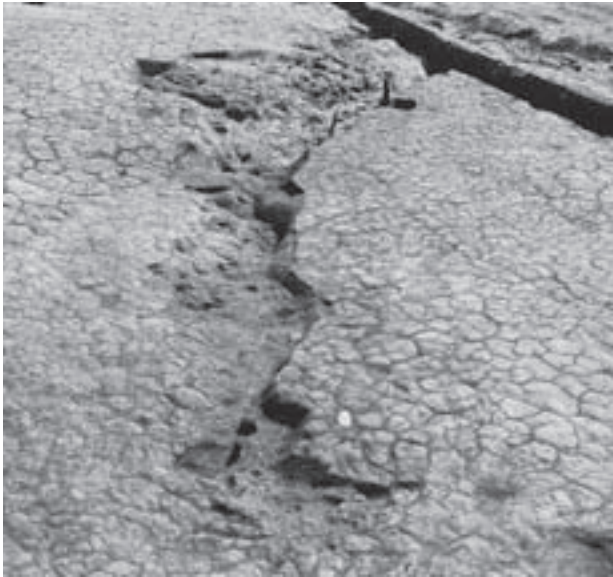
4 C区SD12完掘状況（東から）



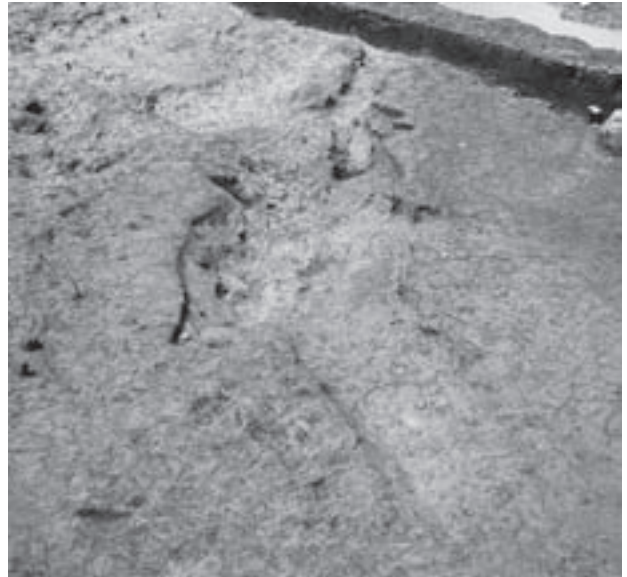
1 SD 1 完掘状況 (北から)



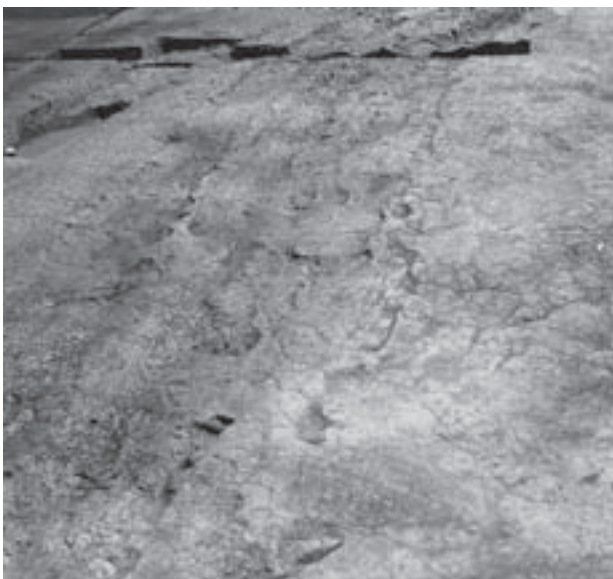
2 B区SD11完掘状況 (東から)



3 B区SD 9 完掘状況 (北東から)



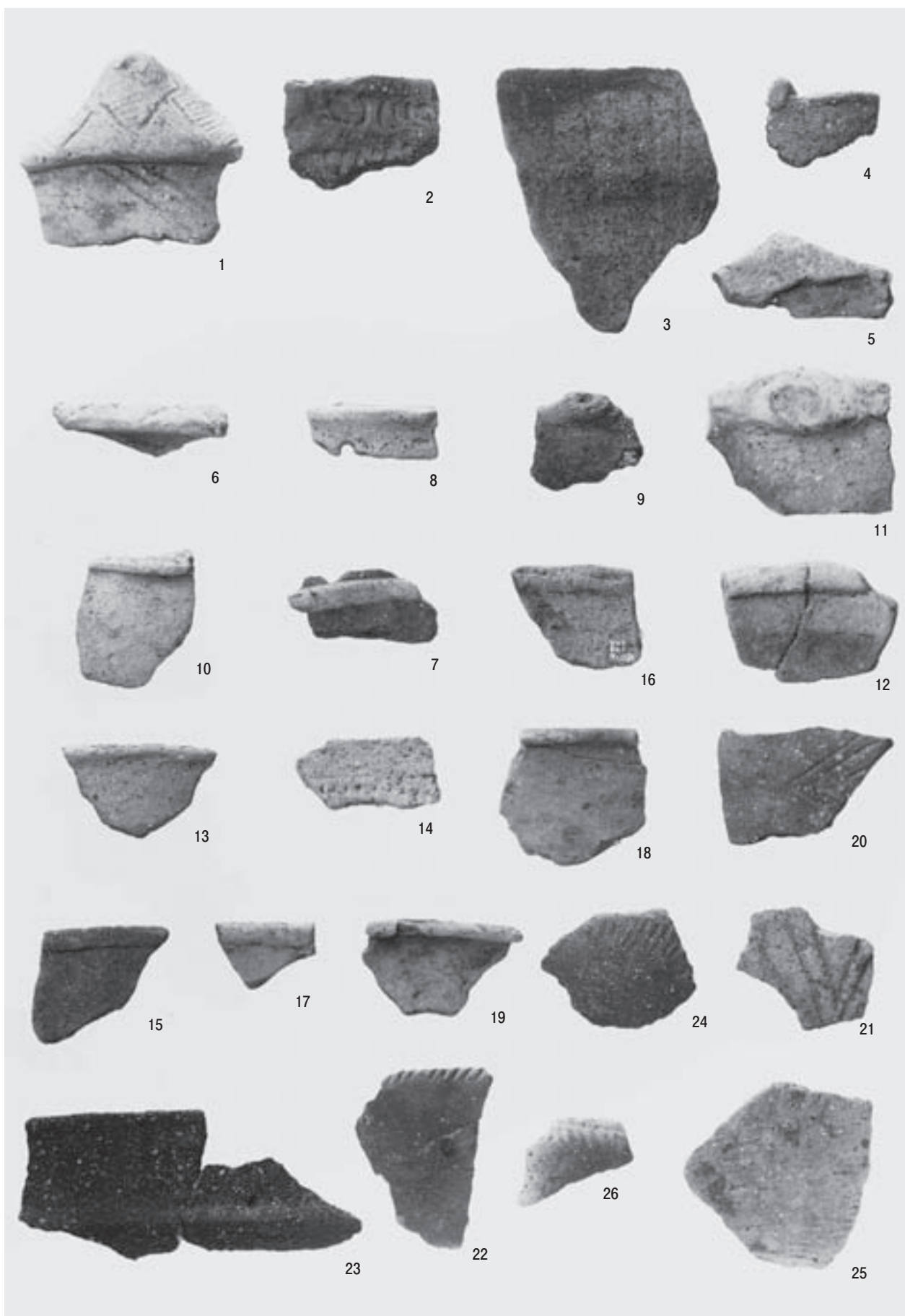
4 B区SD10完掘状況 (北東から)



5 D区SD 9・10完掘状況 (西から)



6 SD 7 完掘状況 (南から)



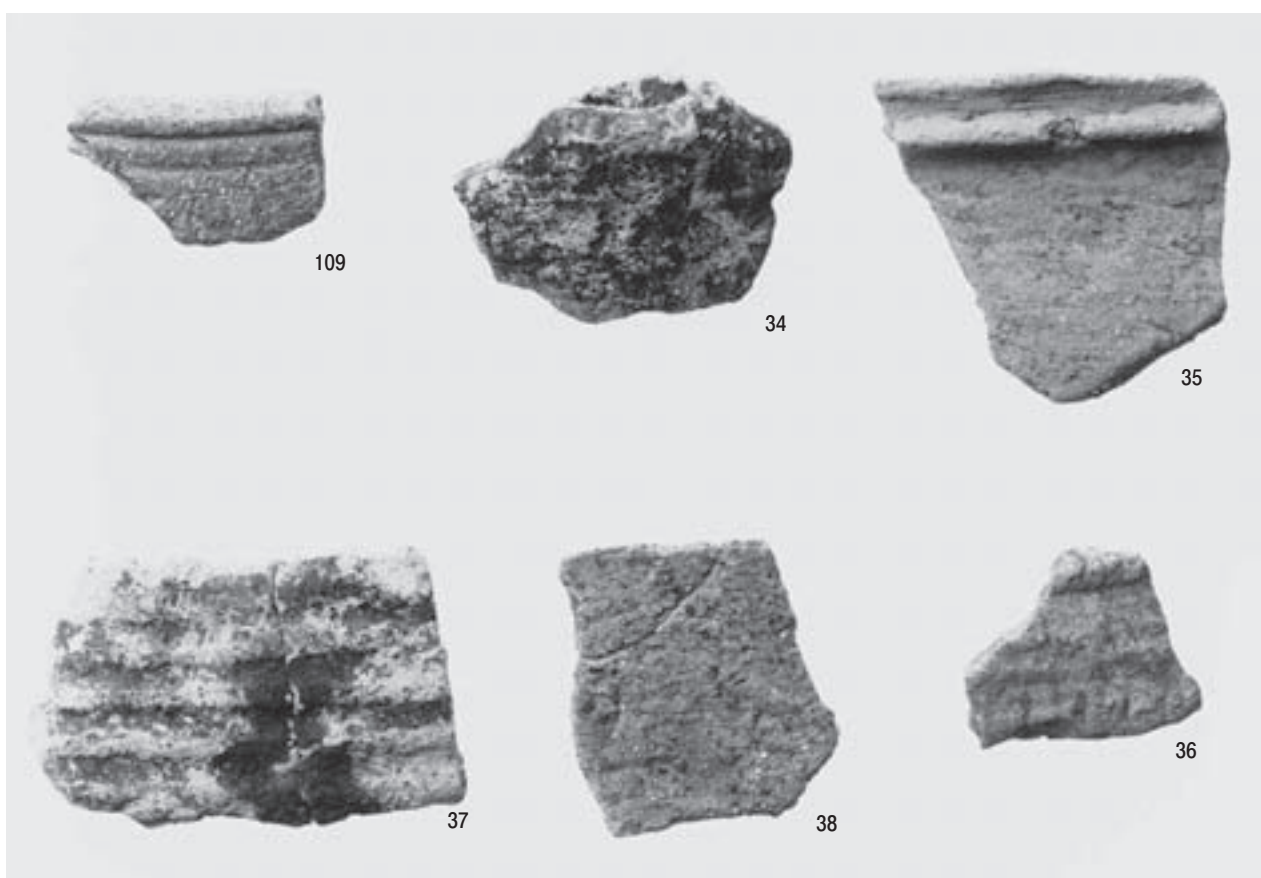
SK 1 出土土器



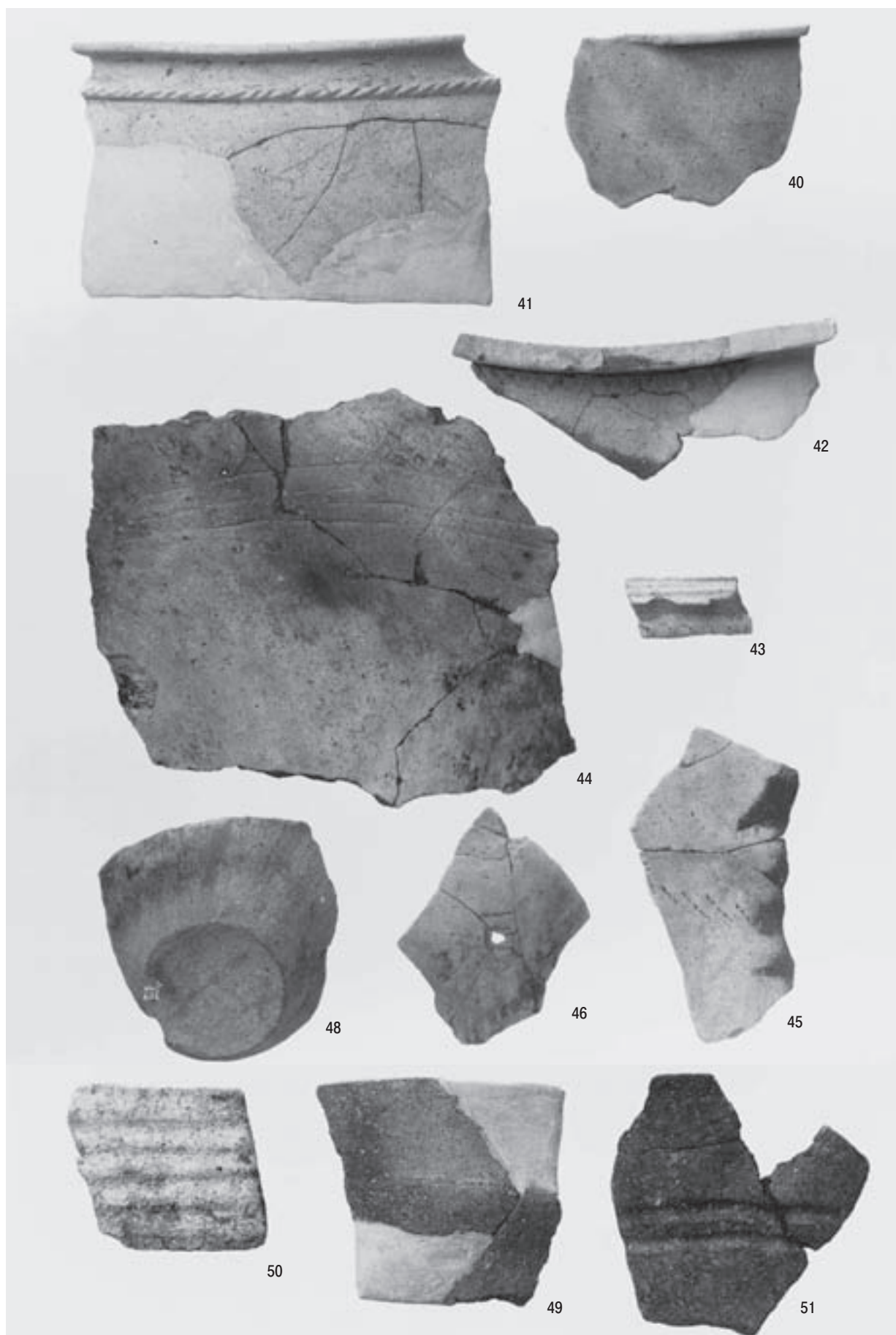
SK 1 出土土器



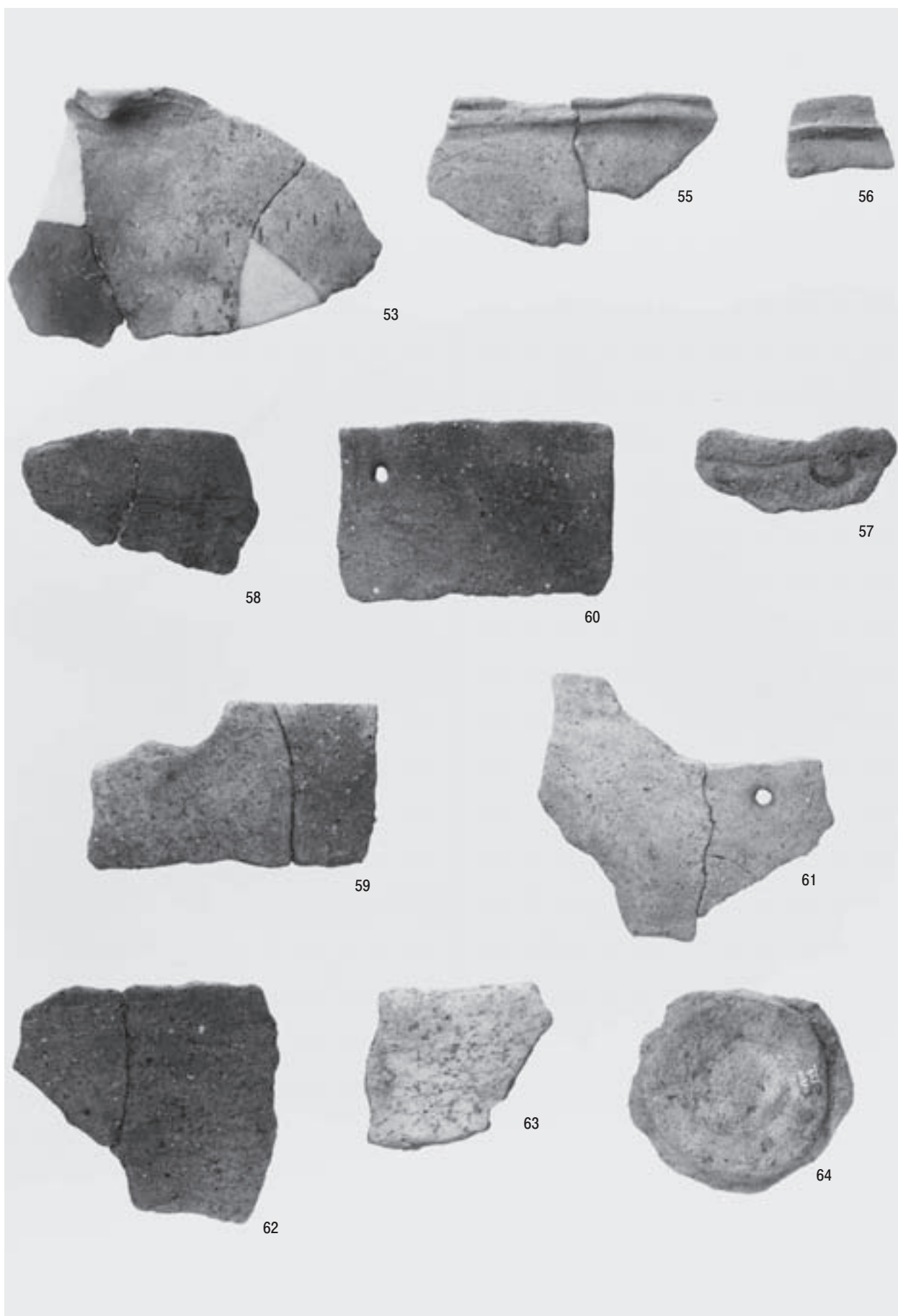
1 SK 2 · 3 出土土器



2 SD 2 · 4 出土土器



SD 5 出土土器



SD 6 出土土器



1 SD 5 出土土器



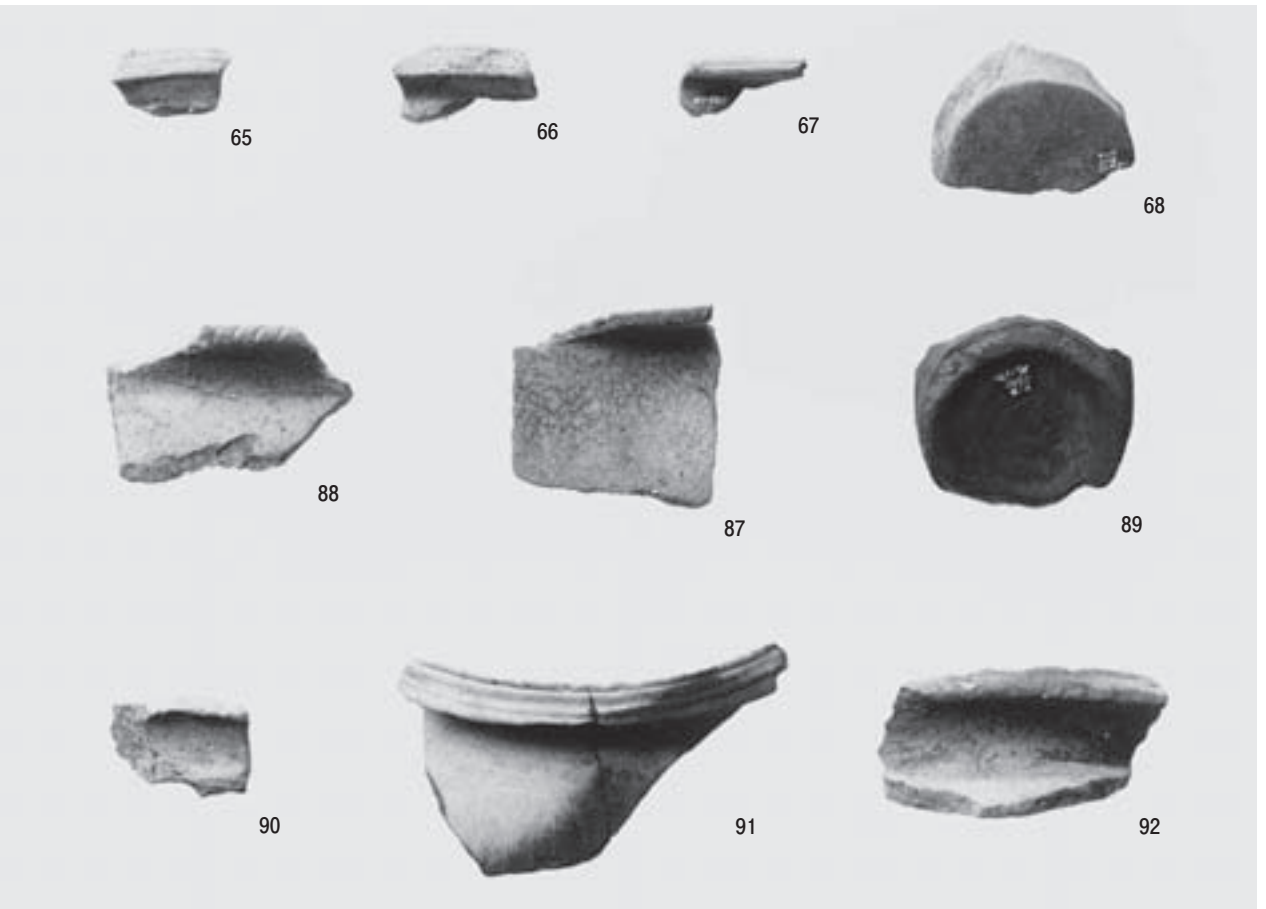
2 SD 5 出土土器



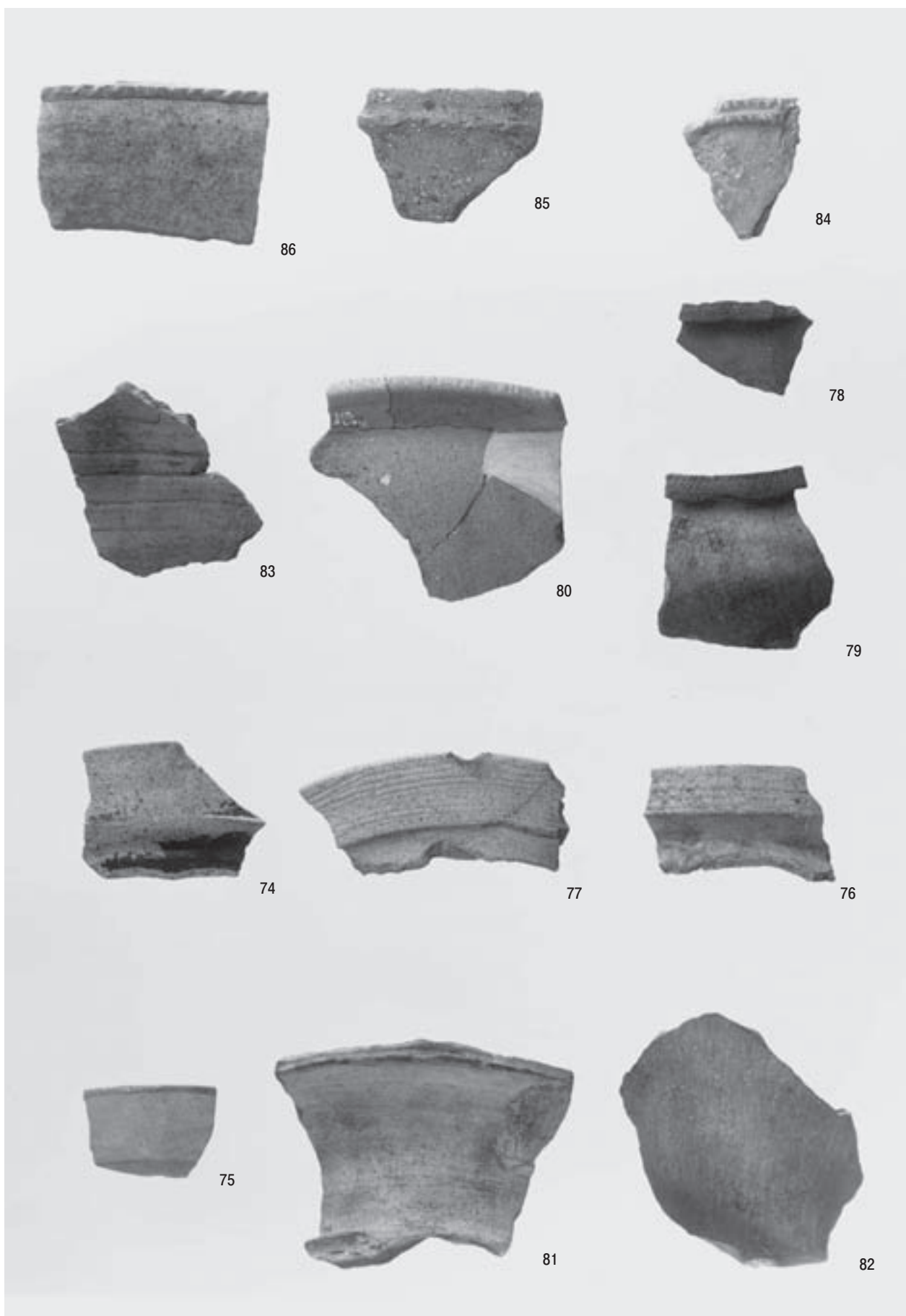
3 SD 6 出土土器



4 SD 6 出土土器



5 SD 8 · 16 · 17 · 19 出土土器



SD15出土土器



1 SD15出土土器



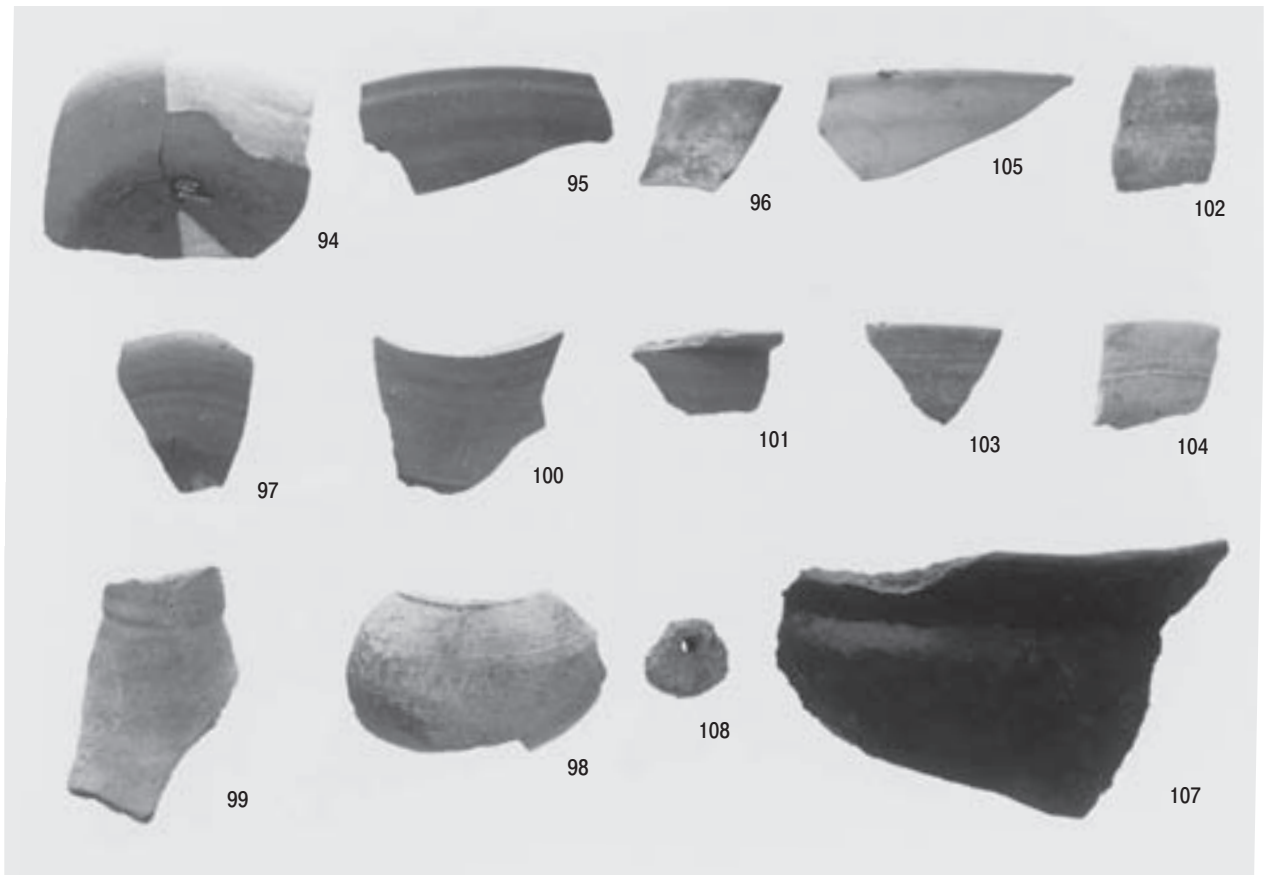
2 SD15出土土器



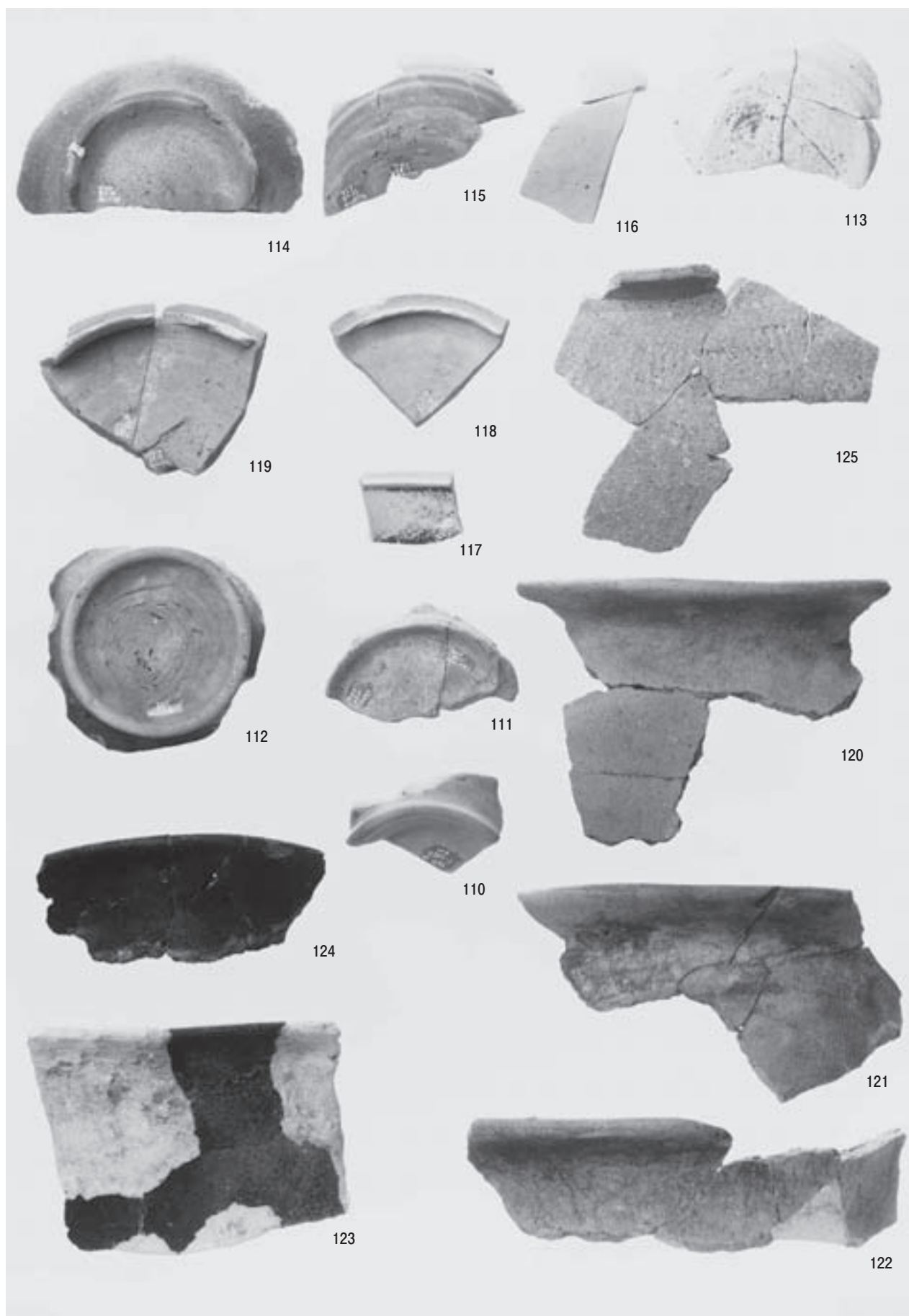
3 SD 1 出土土器



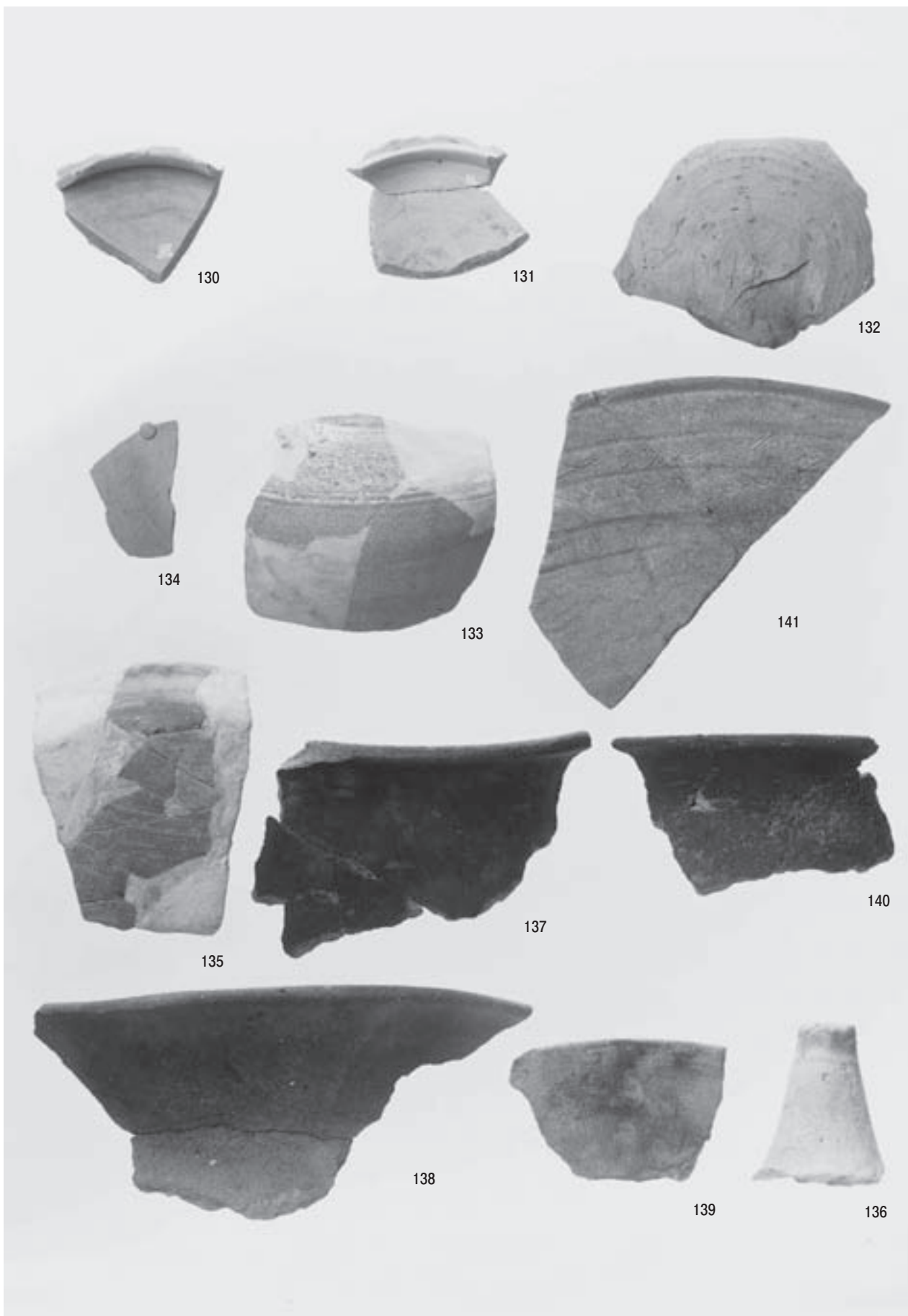
4 SD 1 出土土器



5 SD 1 出土土器



SD12出土土器



SD14出土土器



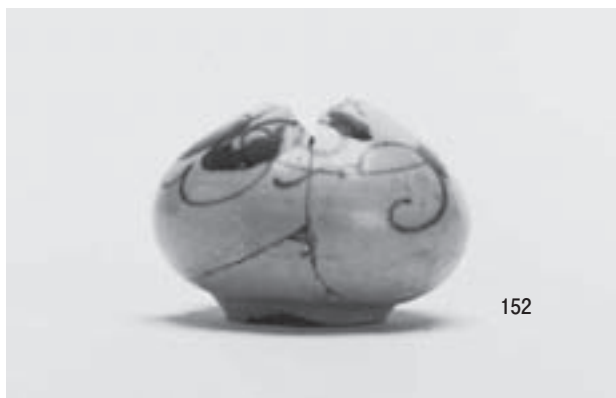
1 SD12出土土器



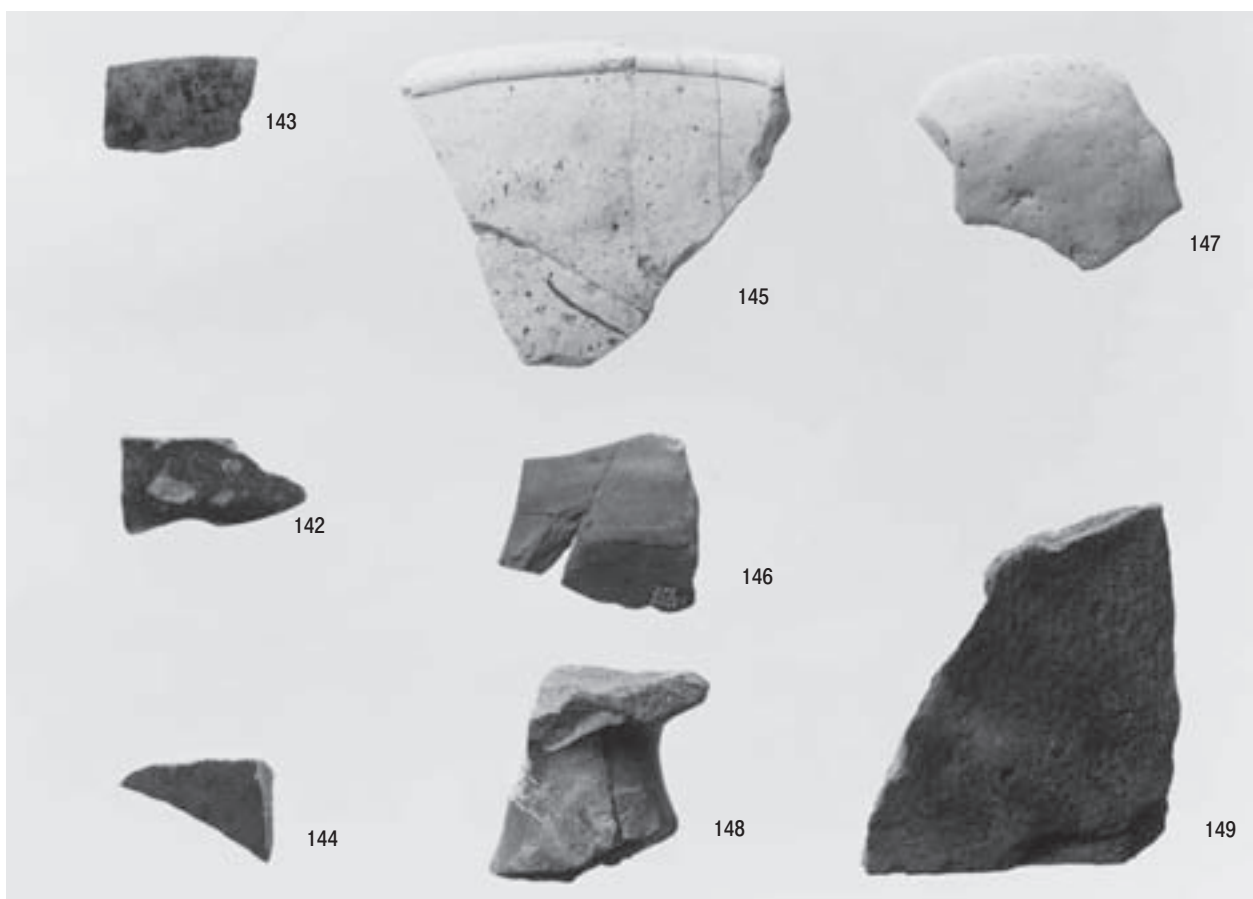
2 SD14出土土器



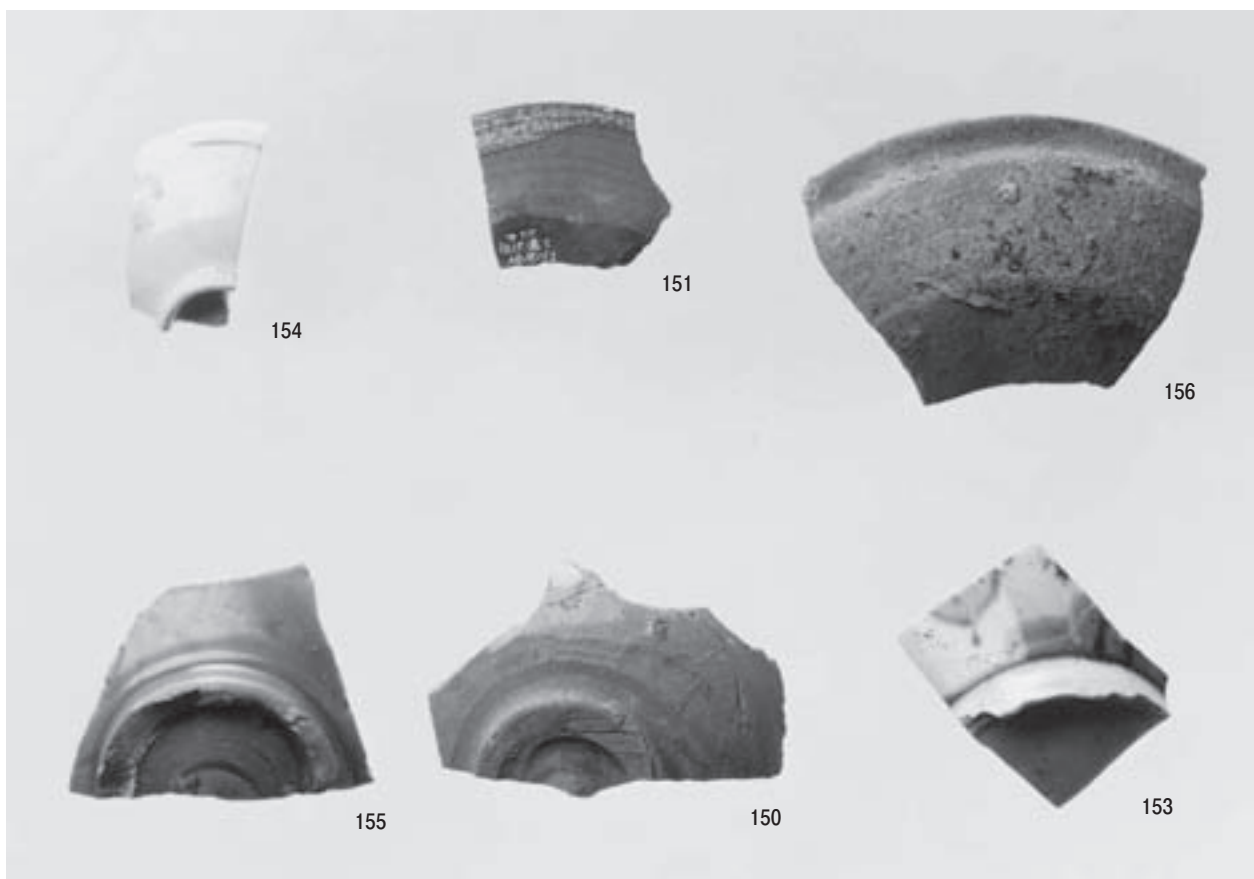
3 SD14出土土器



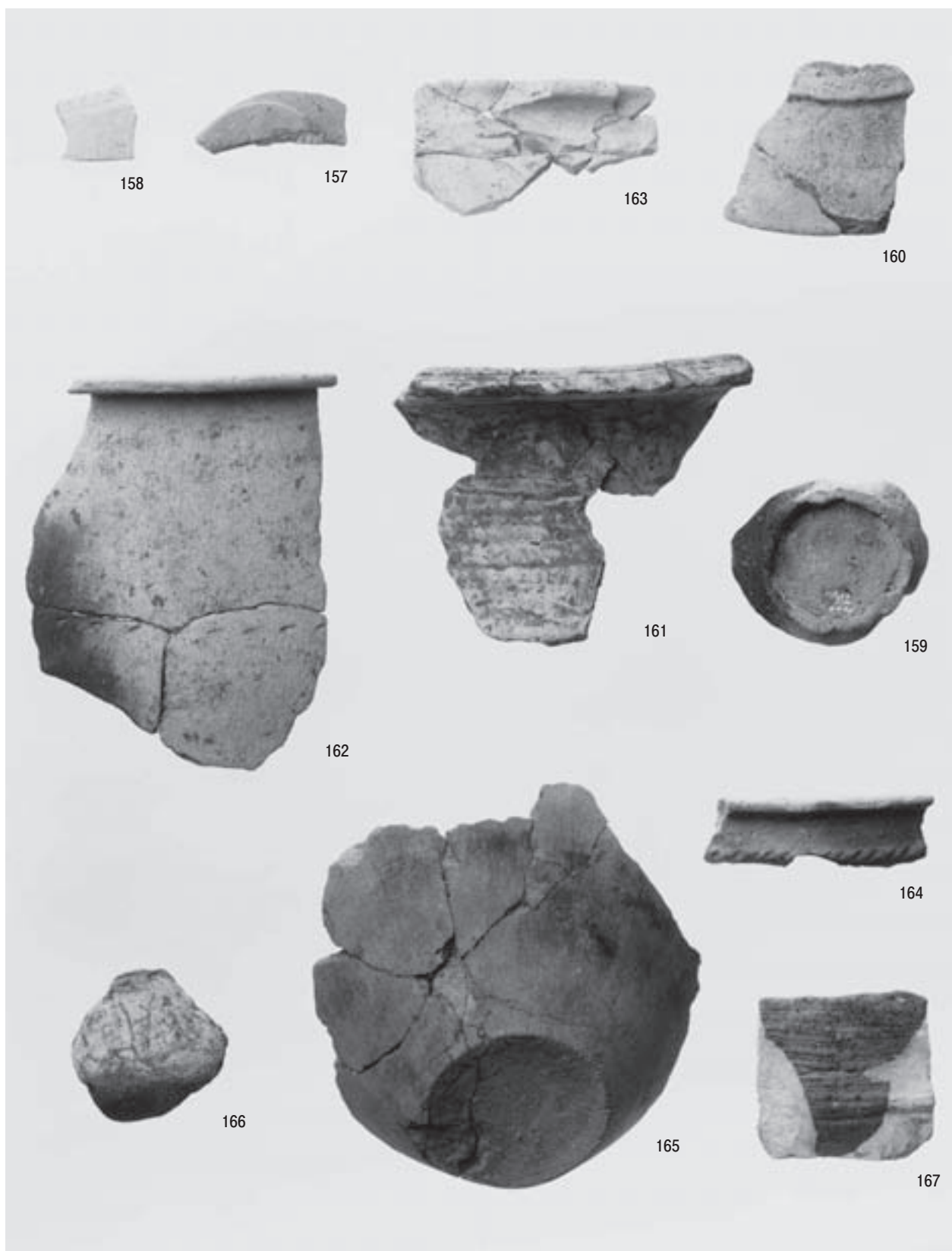
4 SD13出土土器



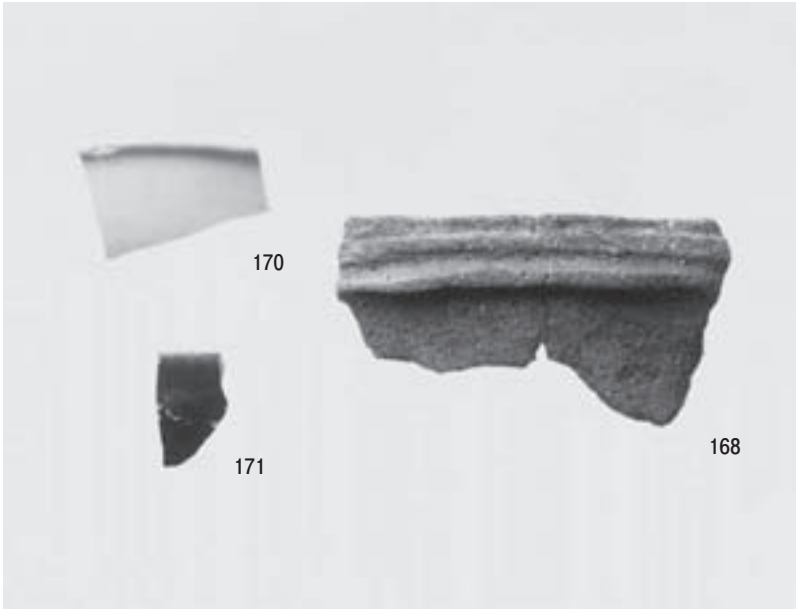
1 SD9・10出土土器



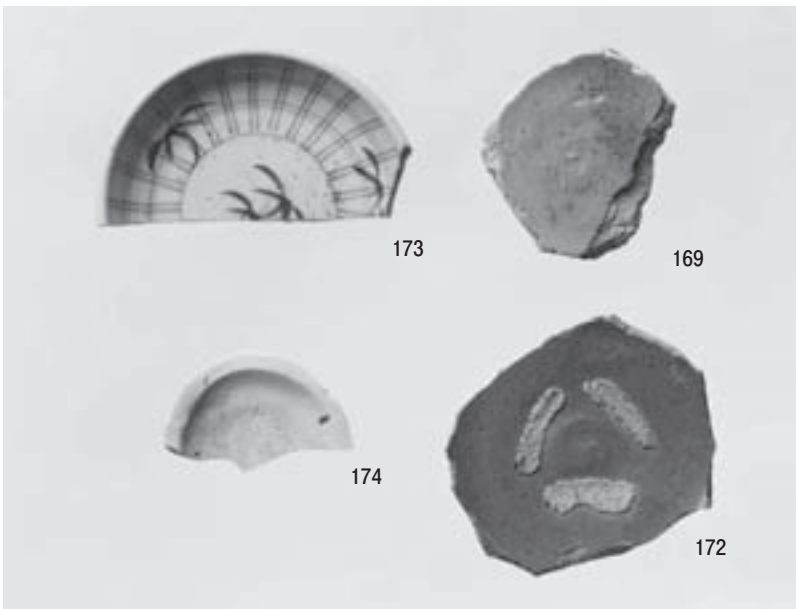
2 SD13出土土器



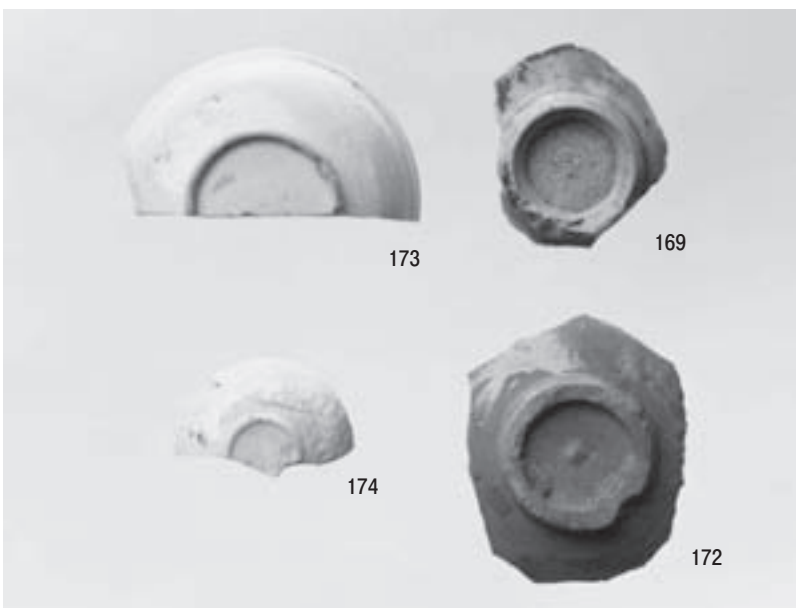
A区包含層出土土器



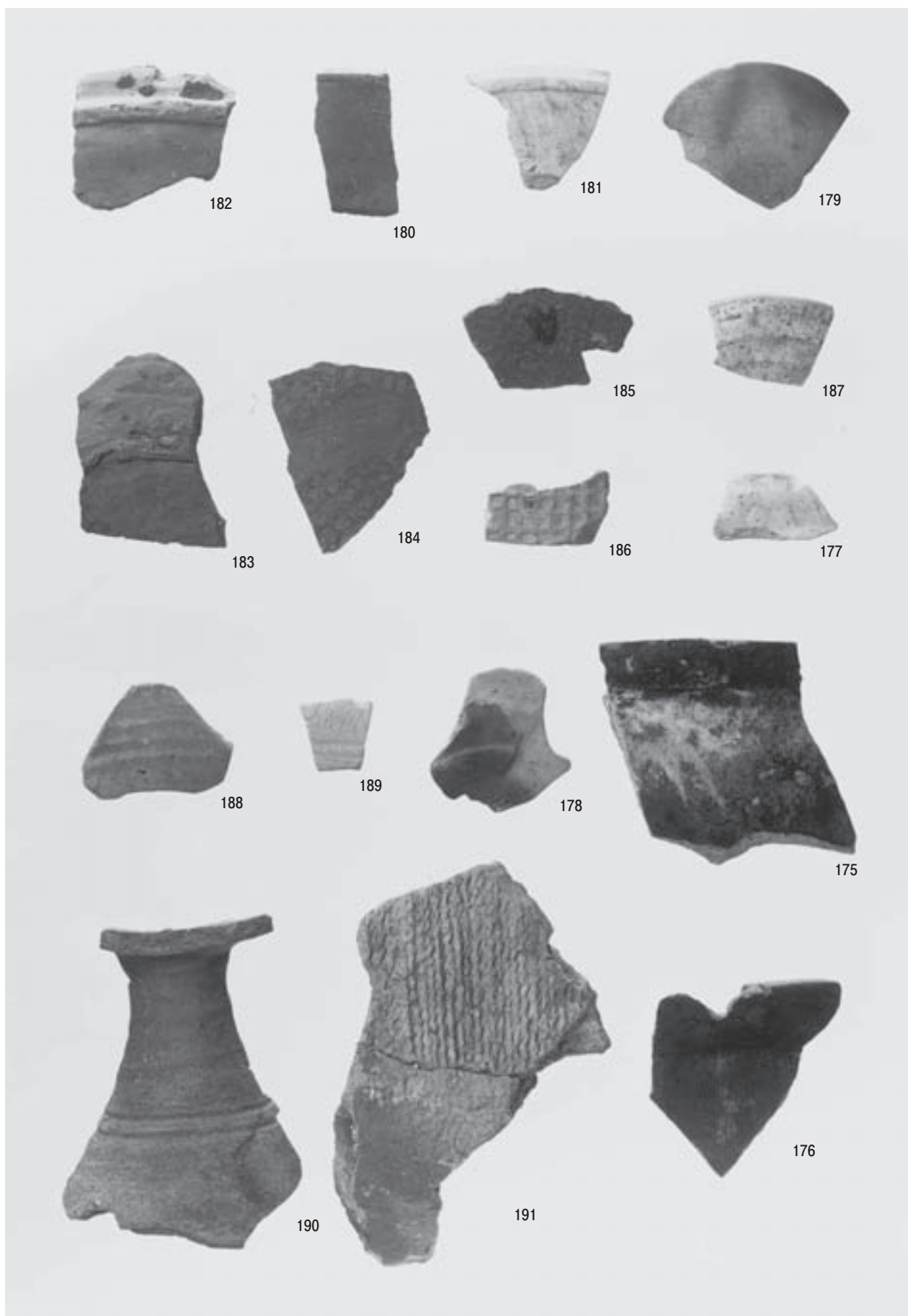
1 2層出土土器



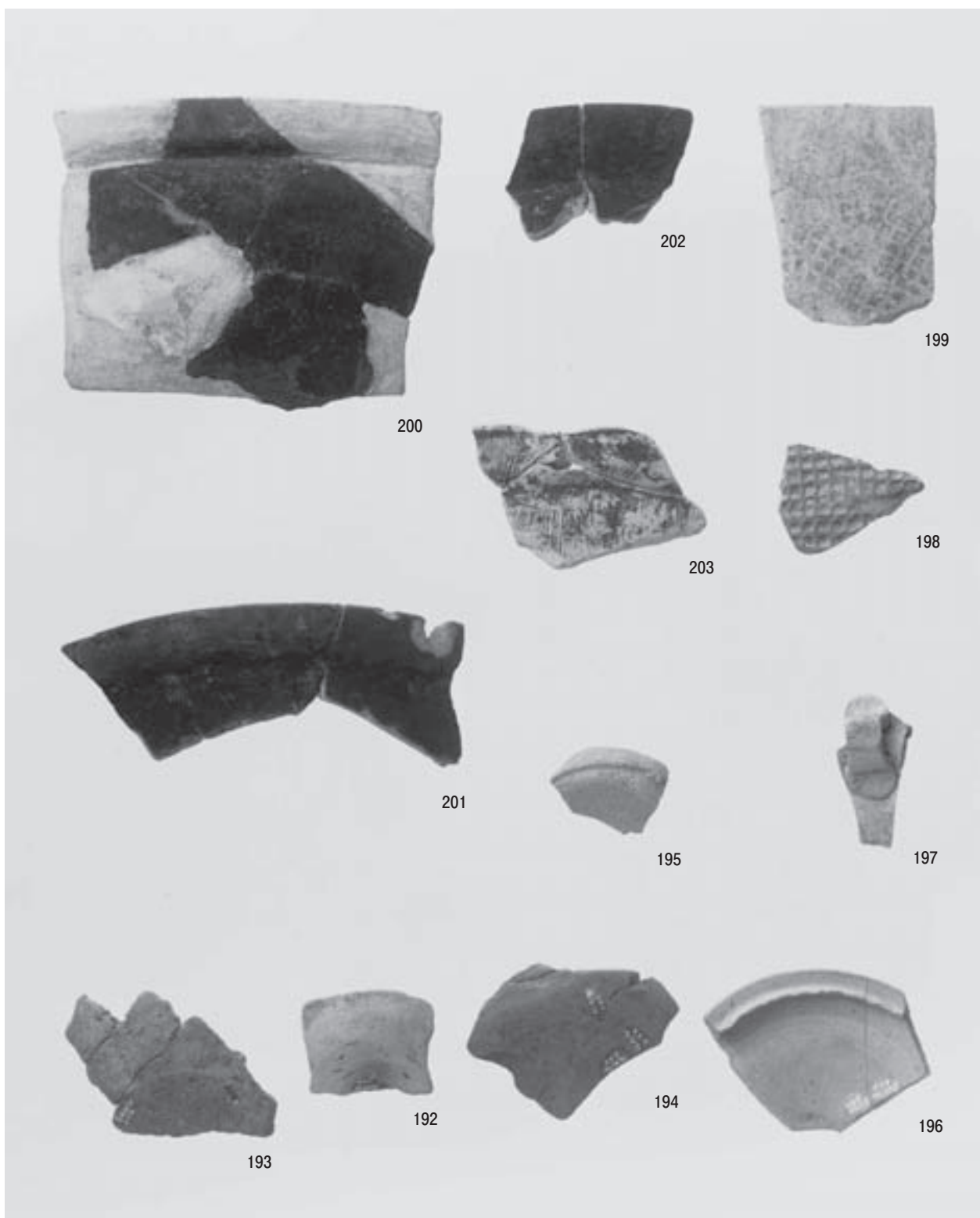
2 2層出土土器 (表)



3 2層出土土器 (裏)



6層出土土器



7層出土土器



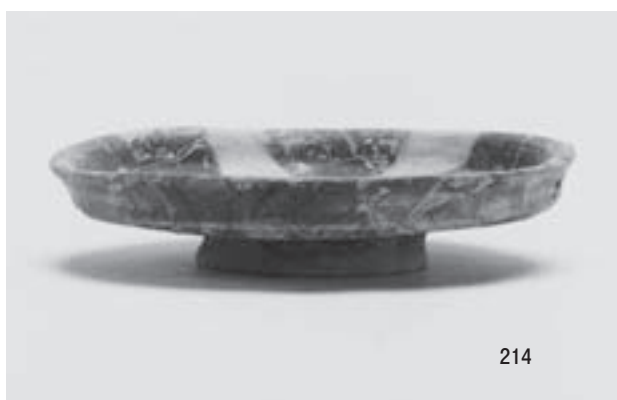
205

1 8層出土土器



211

2 8層出土土器



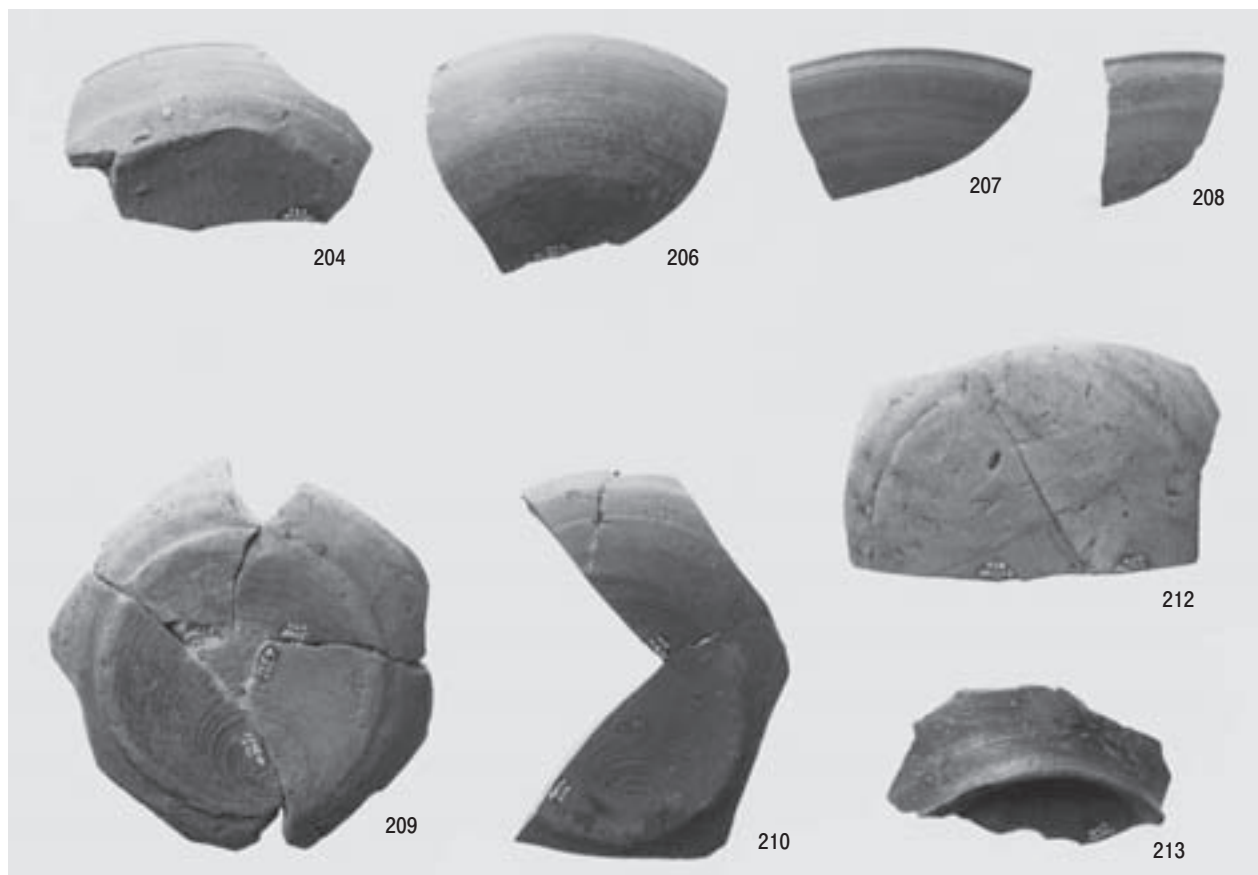
214

3 8層出土土器



215

4 8層出土土器



204

206

207

208

212

209

210

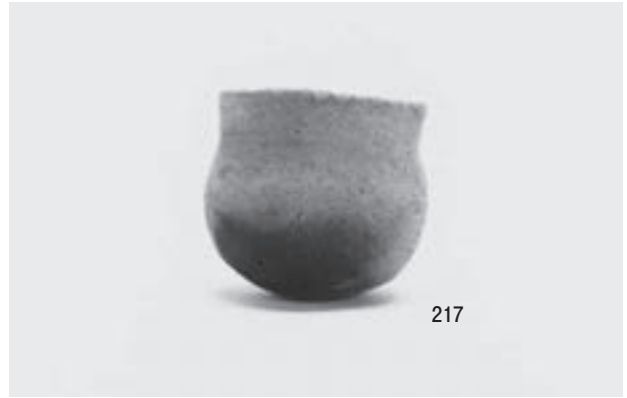
213

5 8層出土土器



216

1 9層出土土器



217

2 9層出土土器



218

3 9層出土土器



220

221

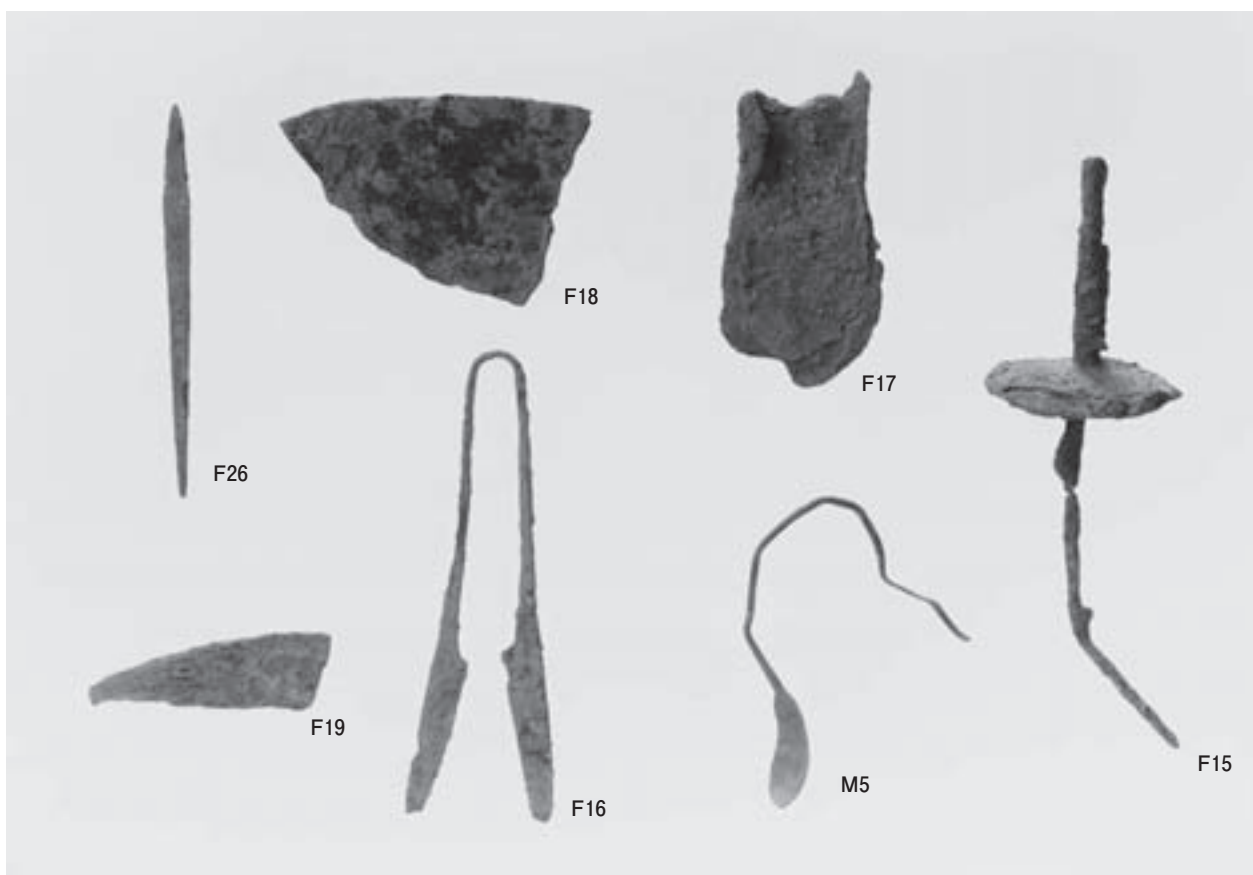
222

223

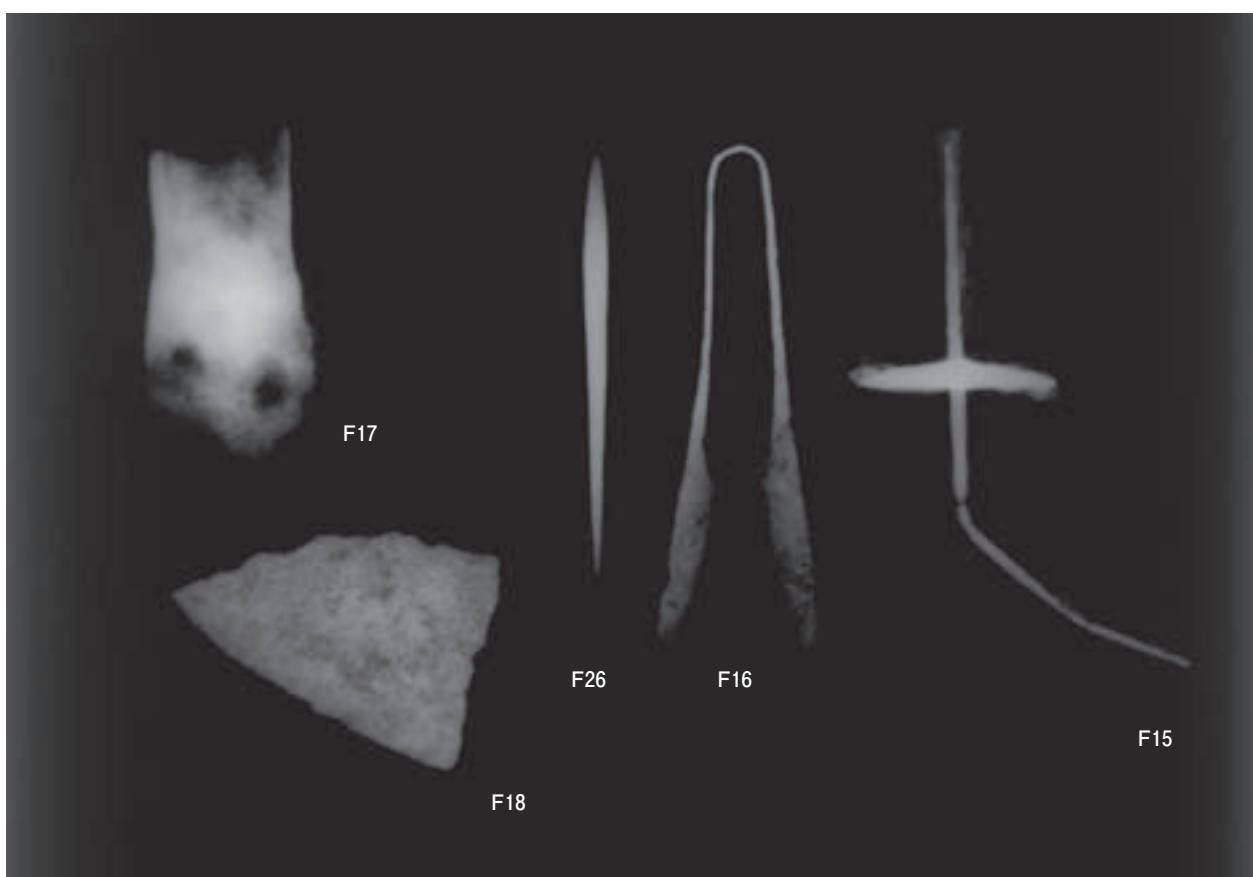
224

225

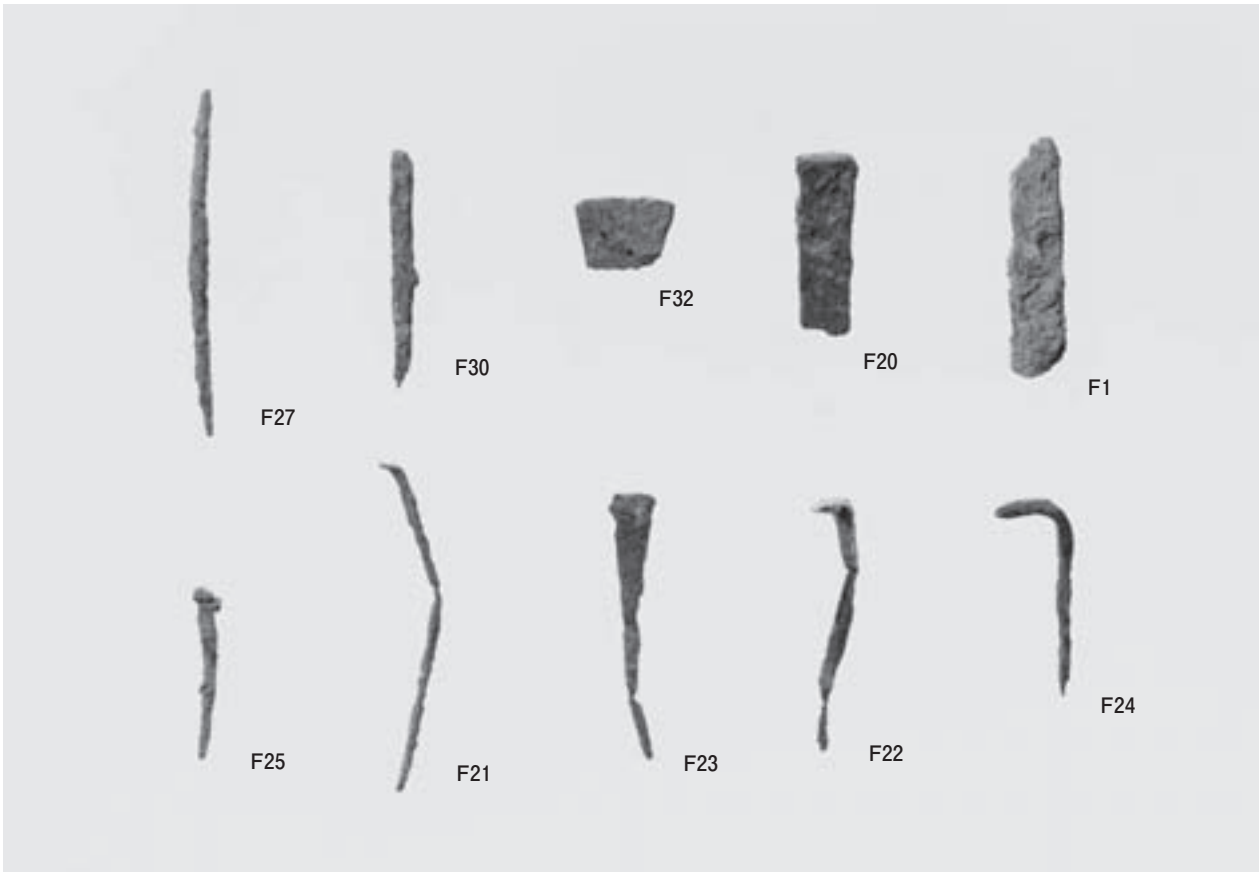
4 10層出土土器



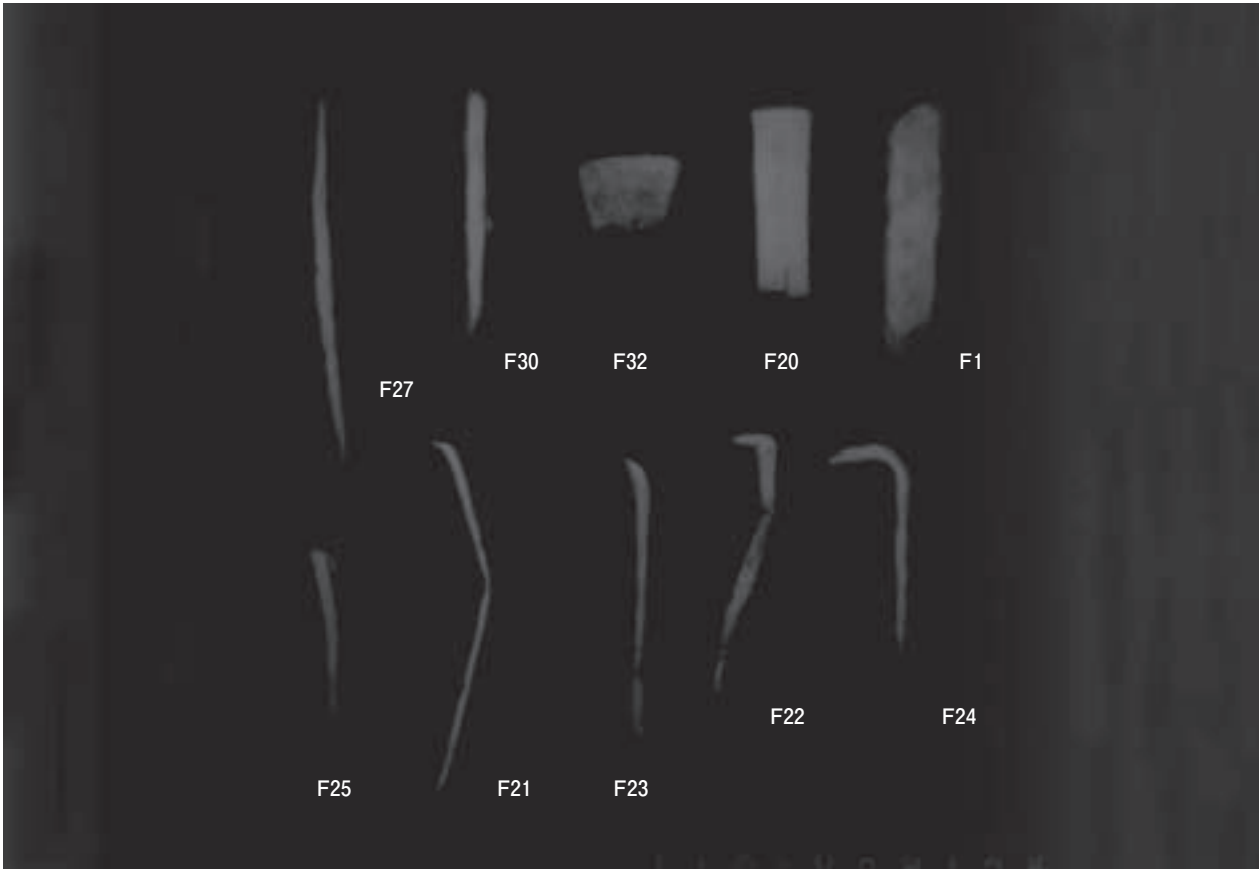
1 包含層出土金属製品



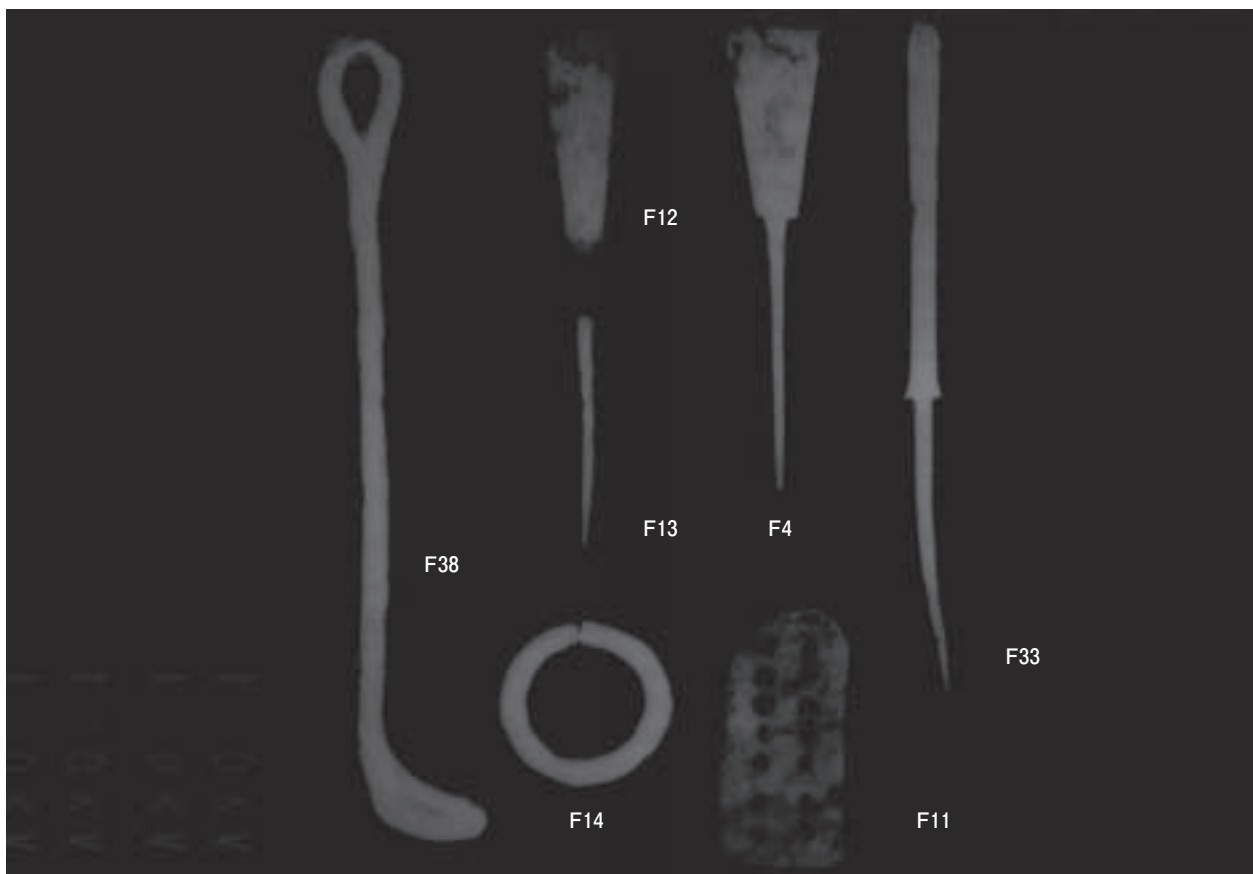
2 包含層出土金属製品X線写真



1 包含層出土鉄製品



2 包含層出土鉄製品X線写真



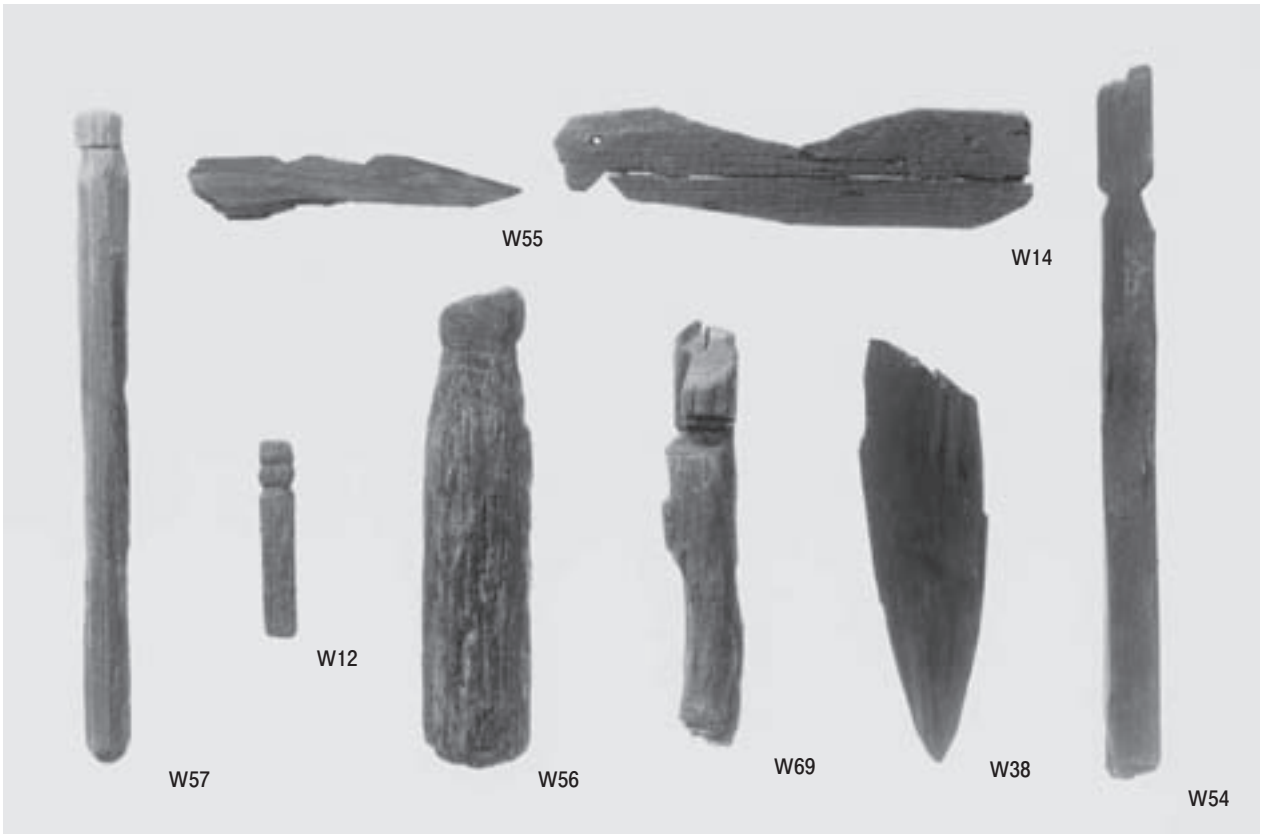
1 包含層出土鉄製品X線写真



2 土馬



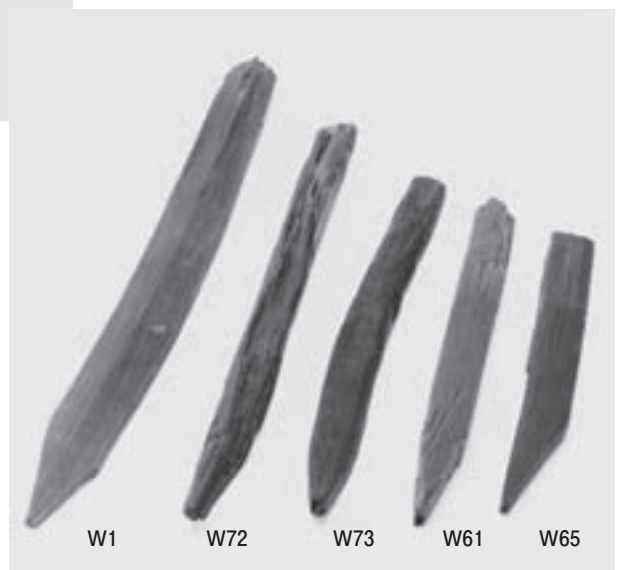
3 127内面



1 木製祭祀具



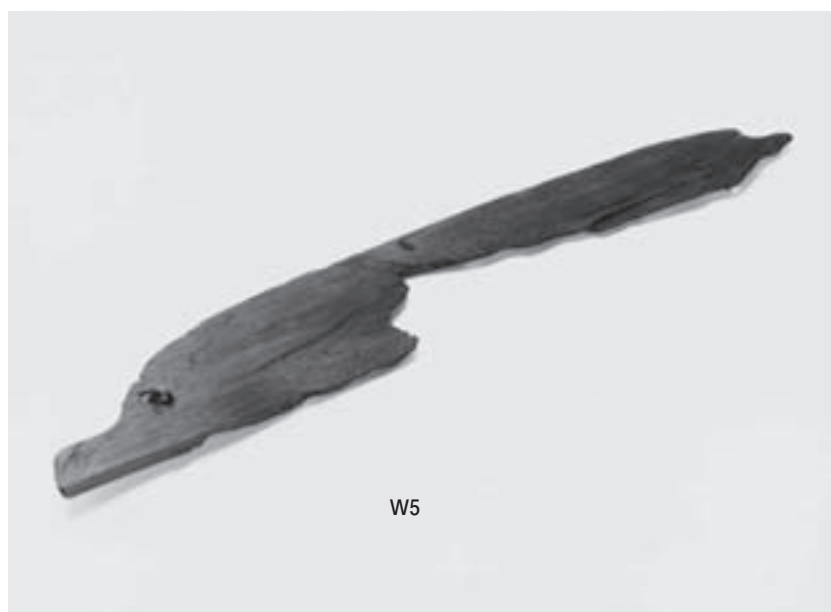
2 舟形木製品



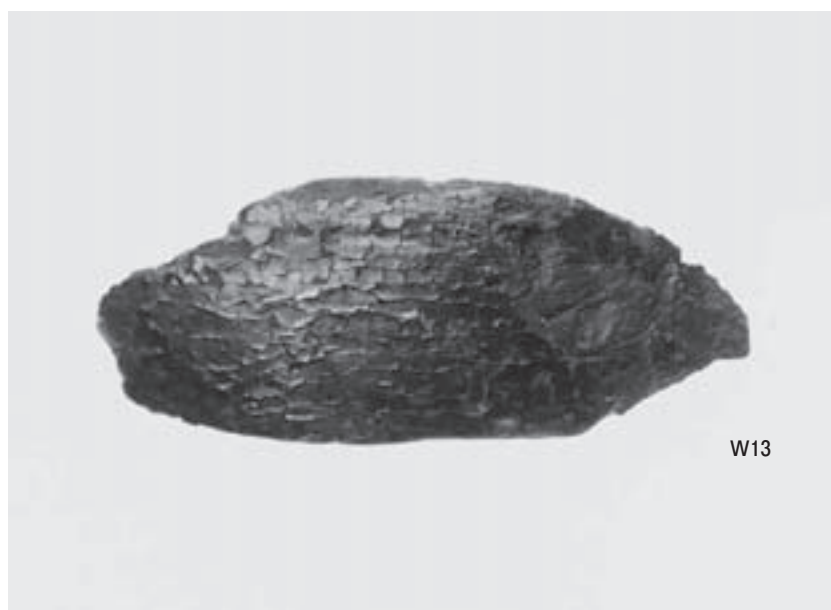
3 板状木製品



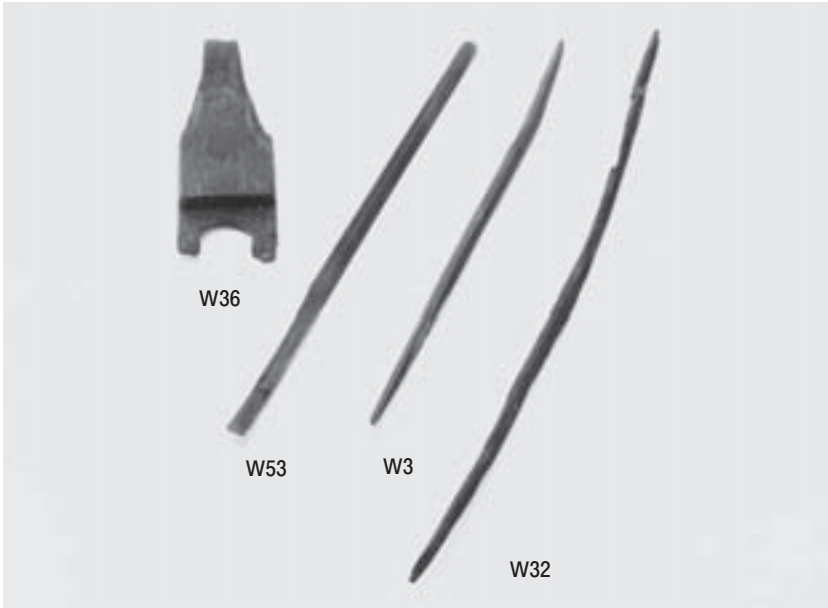
1 曲物



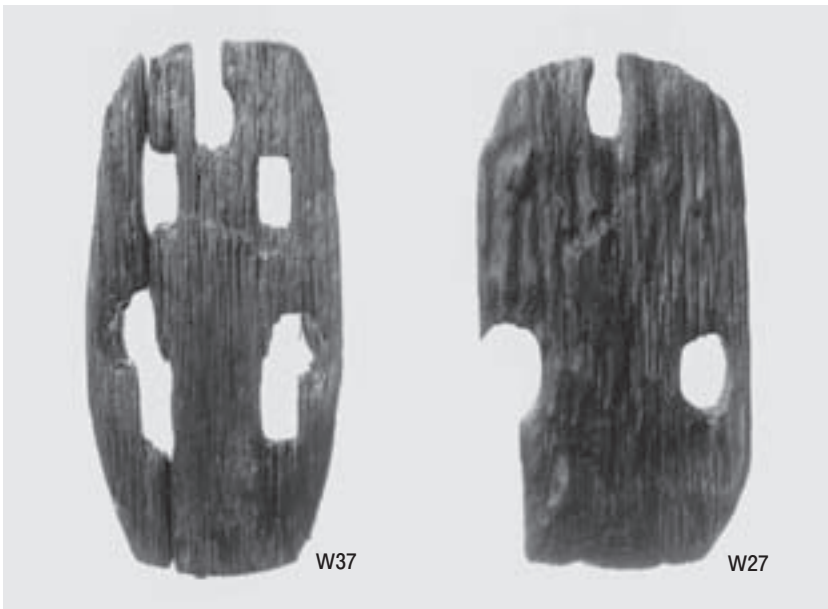
2 容器



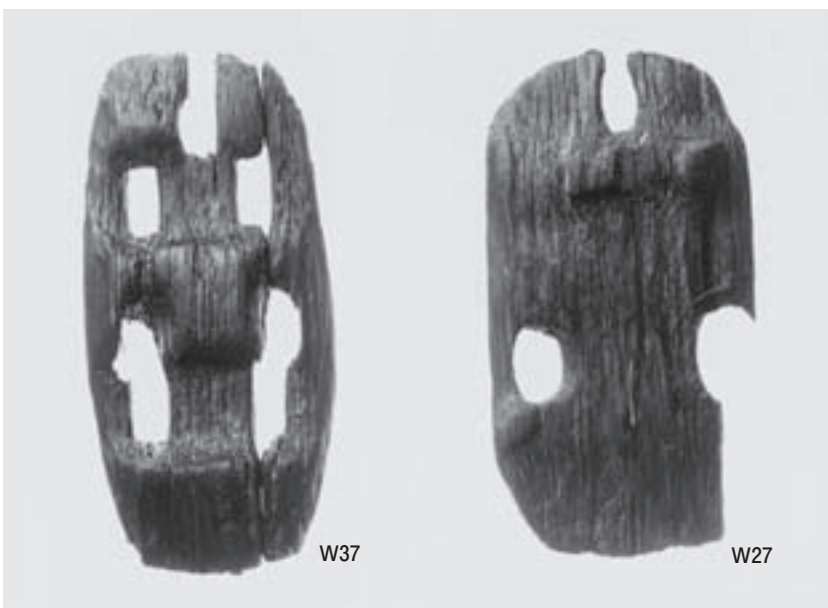
3 漆器椀



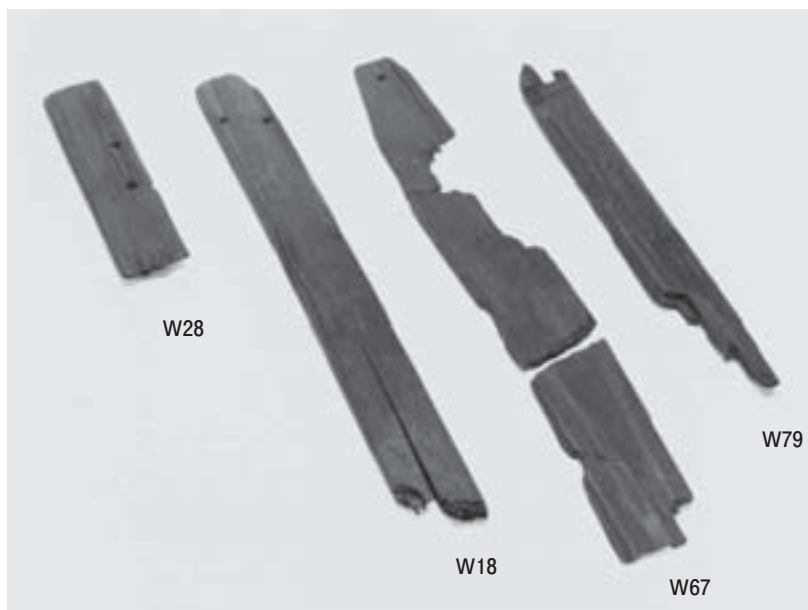
1 木製生活具



2 下駄 (表)



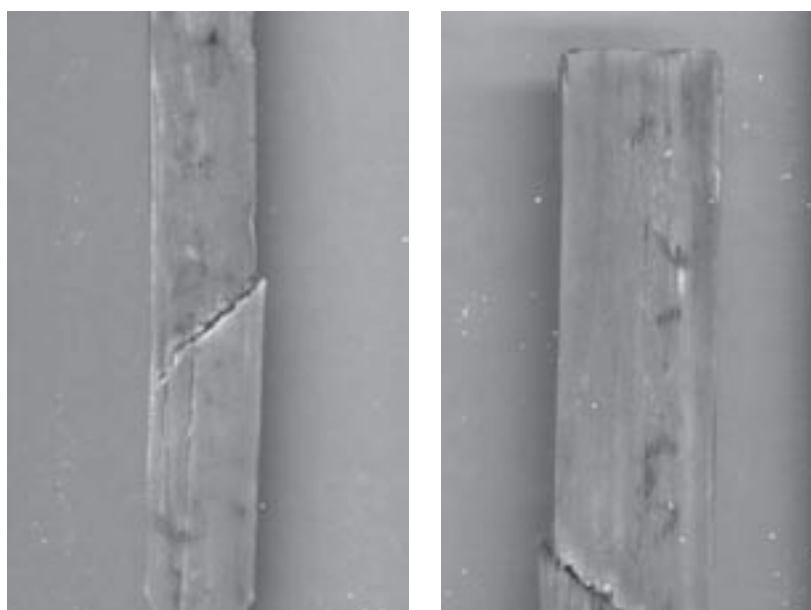
3 下駄 (裏)



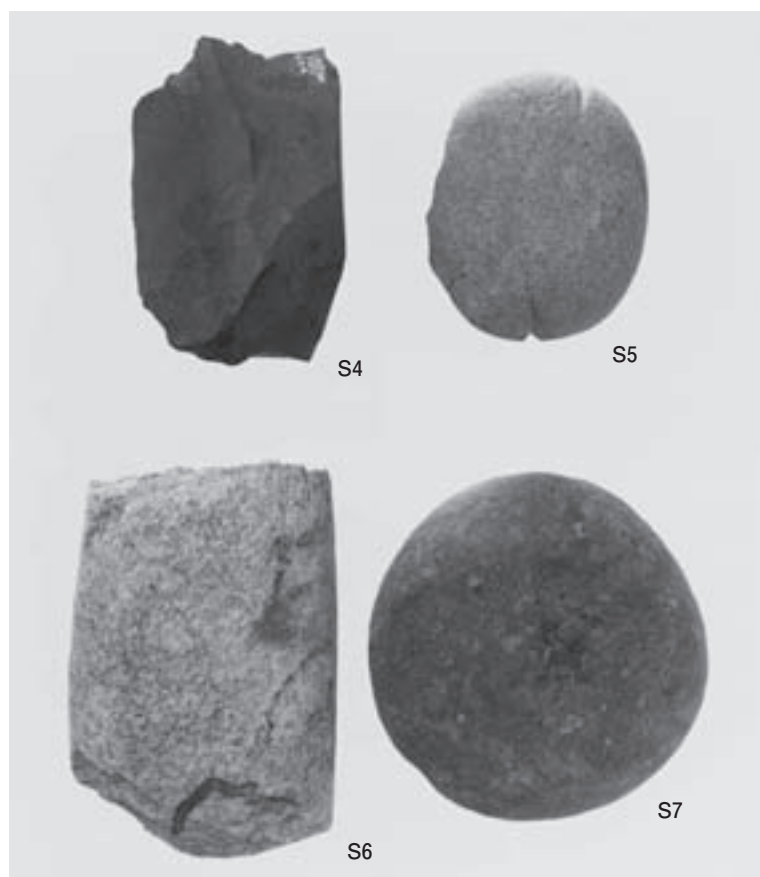
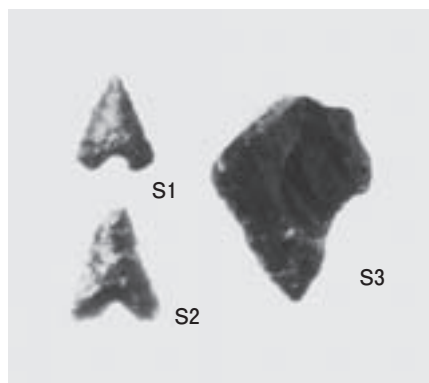
1 板状木製品



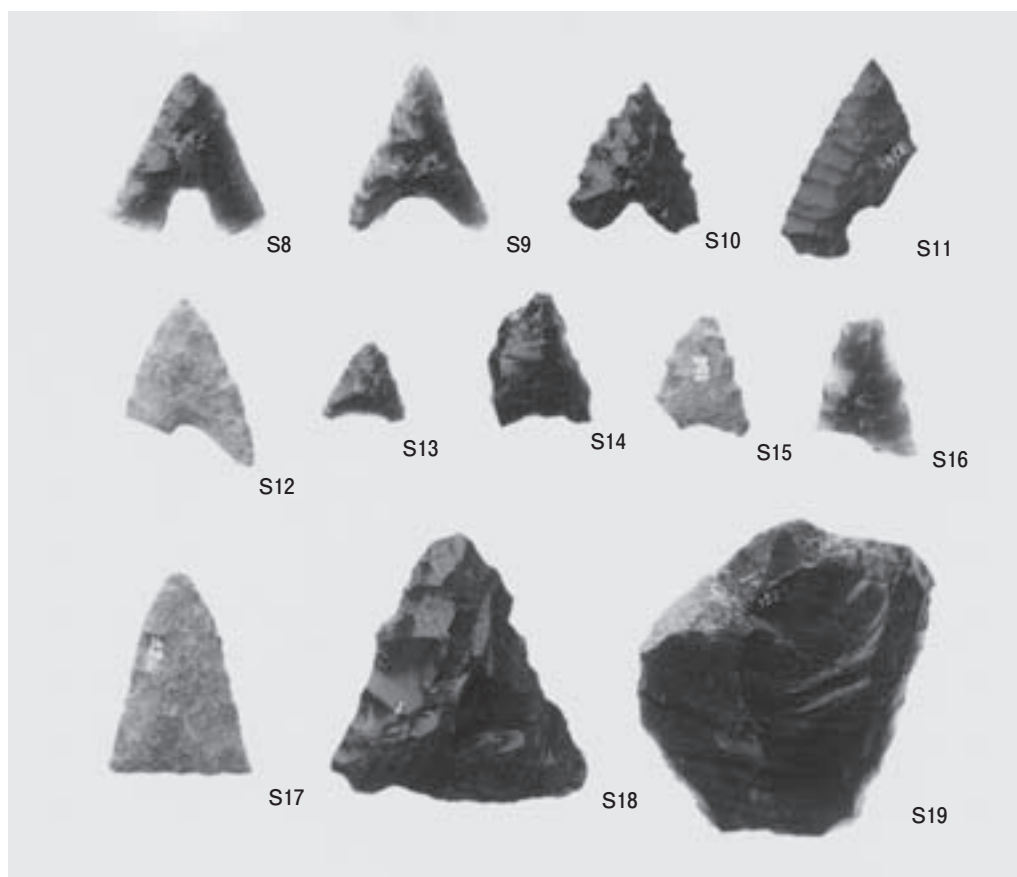
2 SD13・2層出土木製品



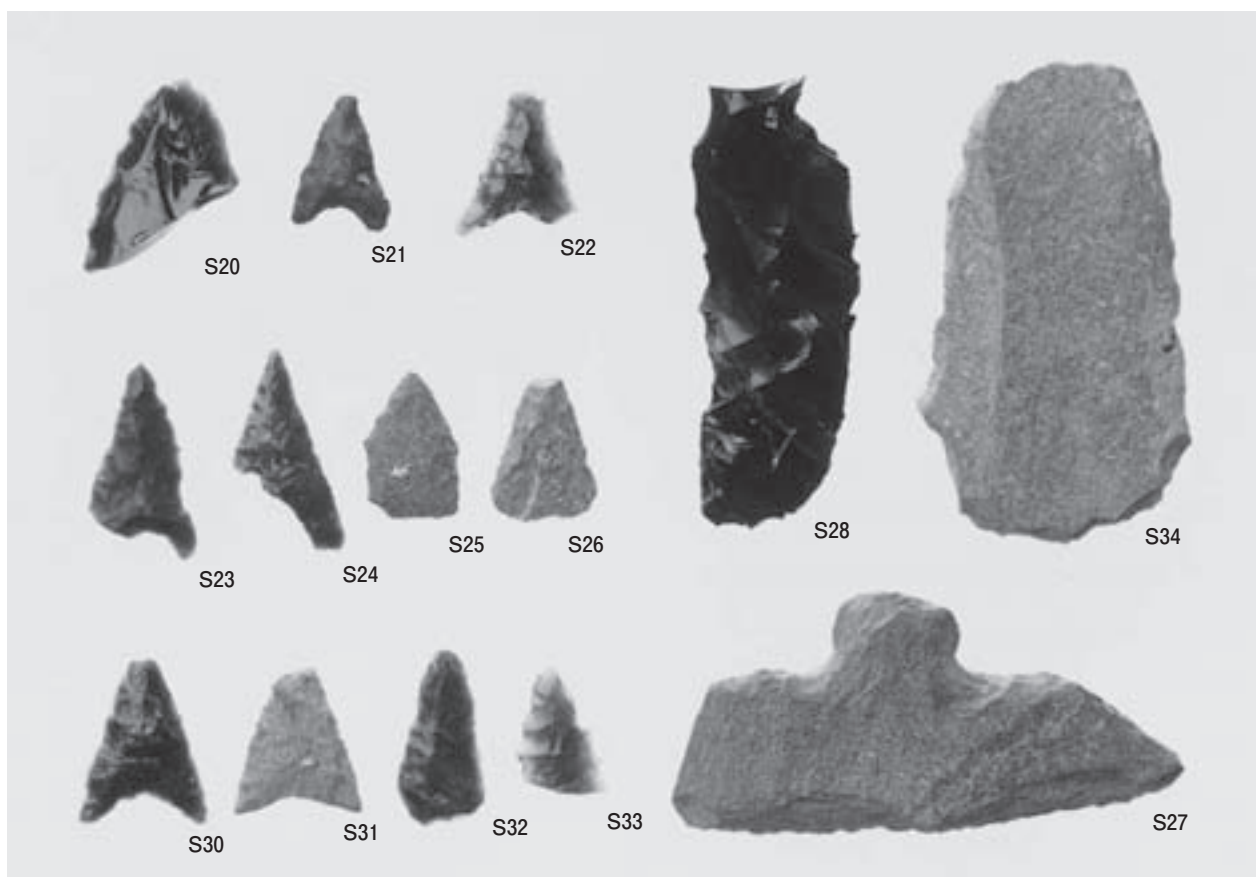
3 W21 (左:表 右:裏)



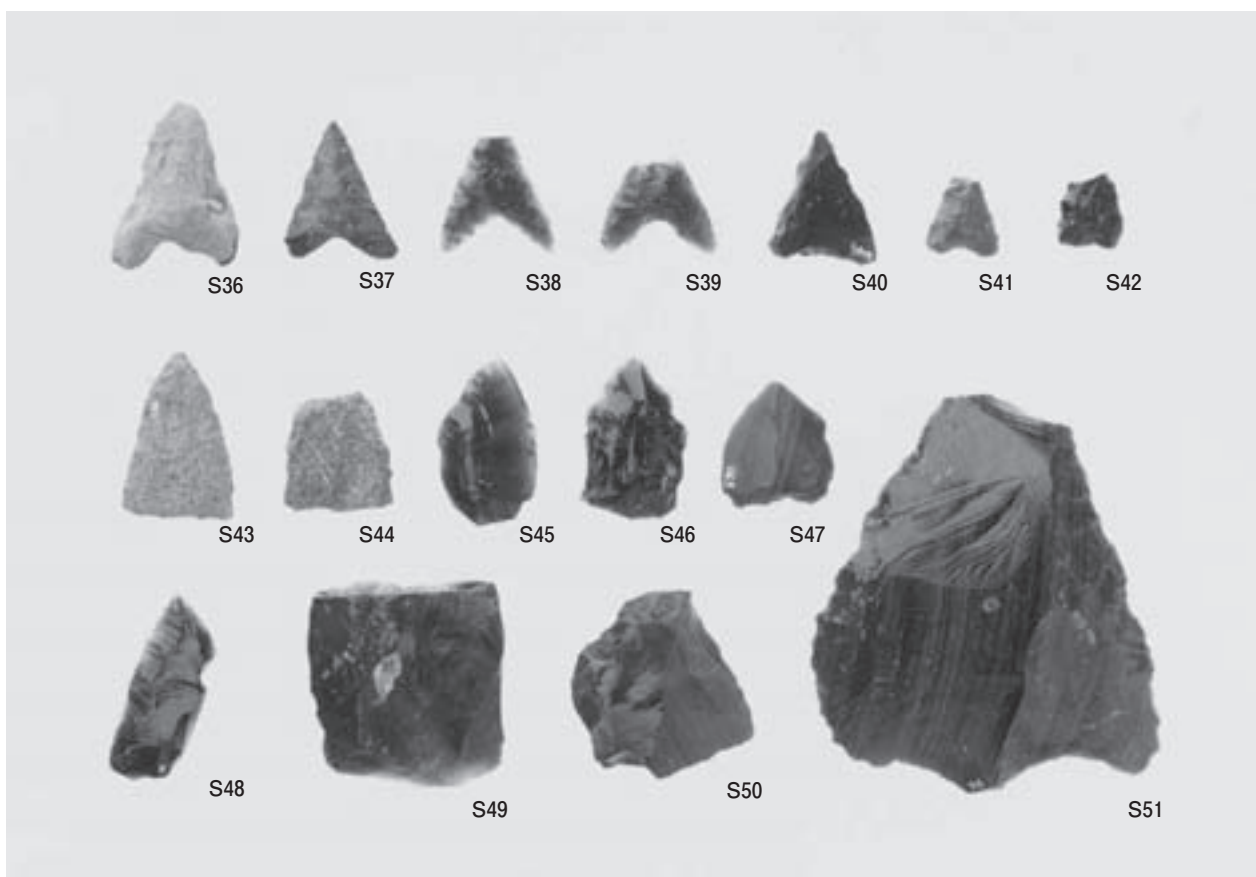
1 SK 1 出土石器



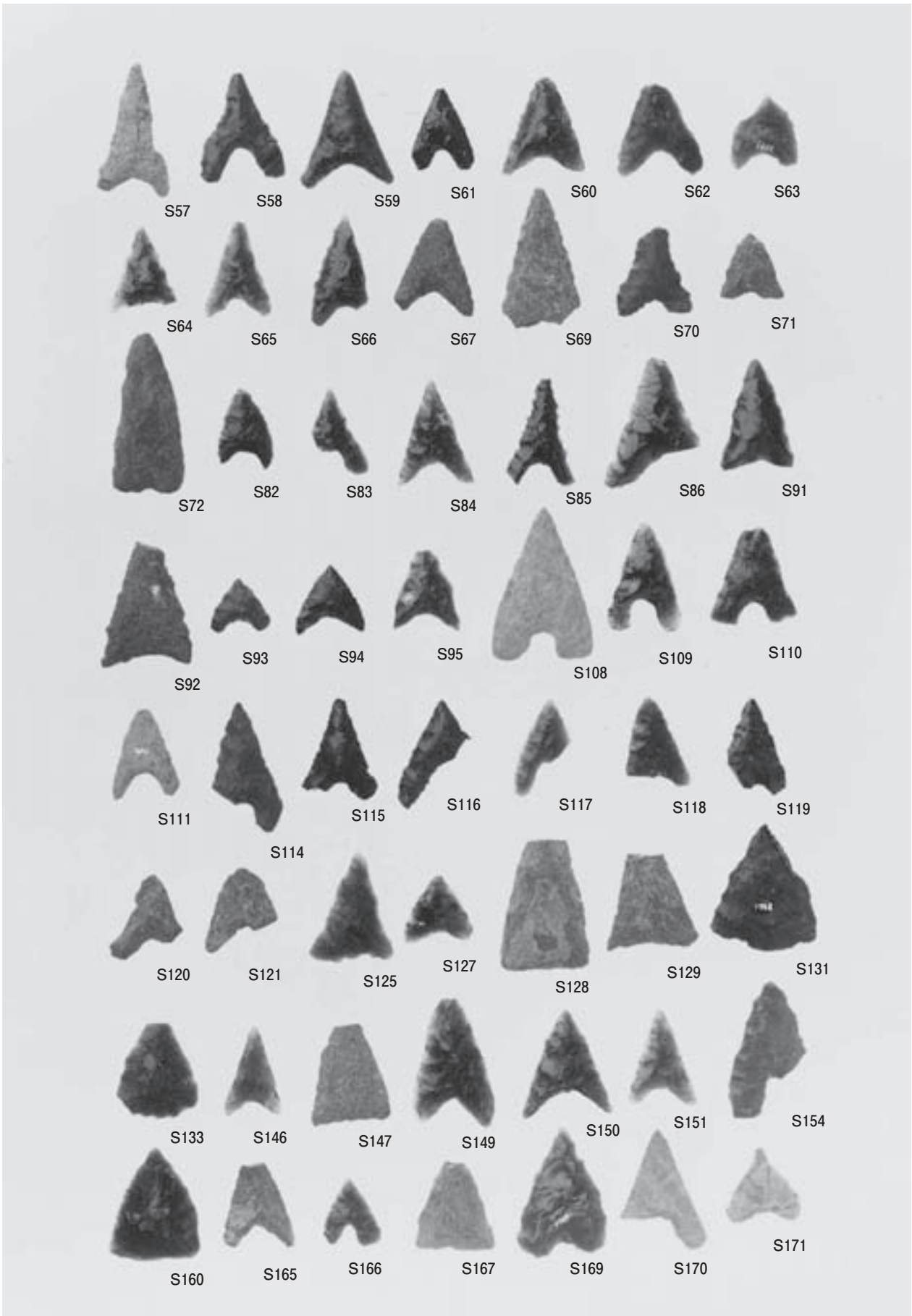
2 SD 4 出土石器



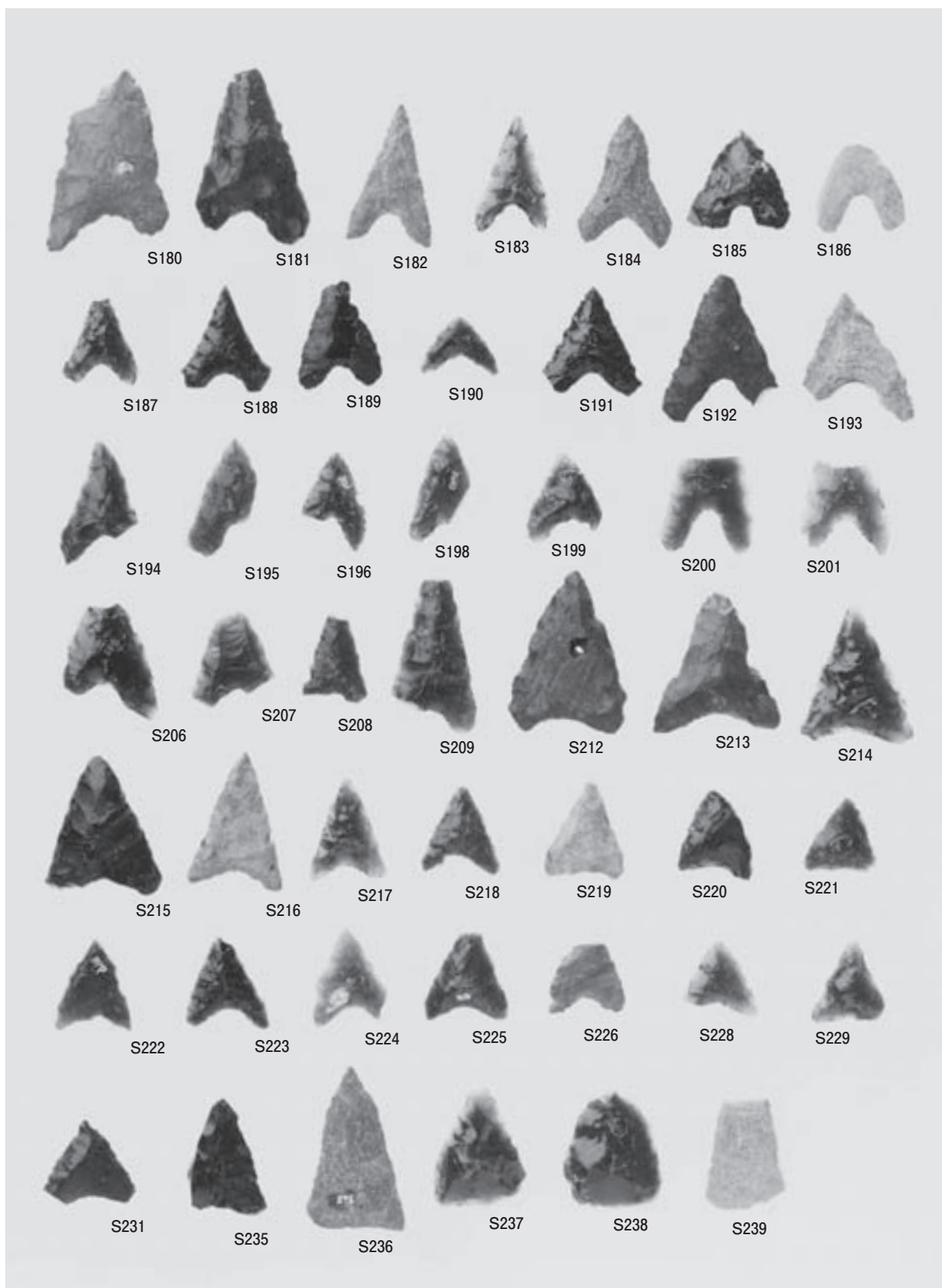
1 SD 5 出土石器



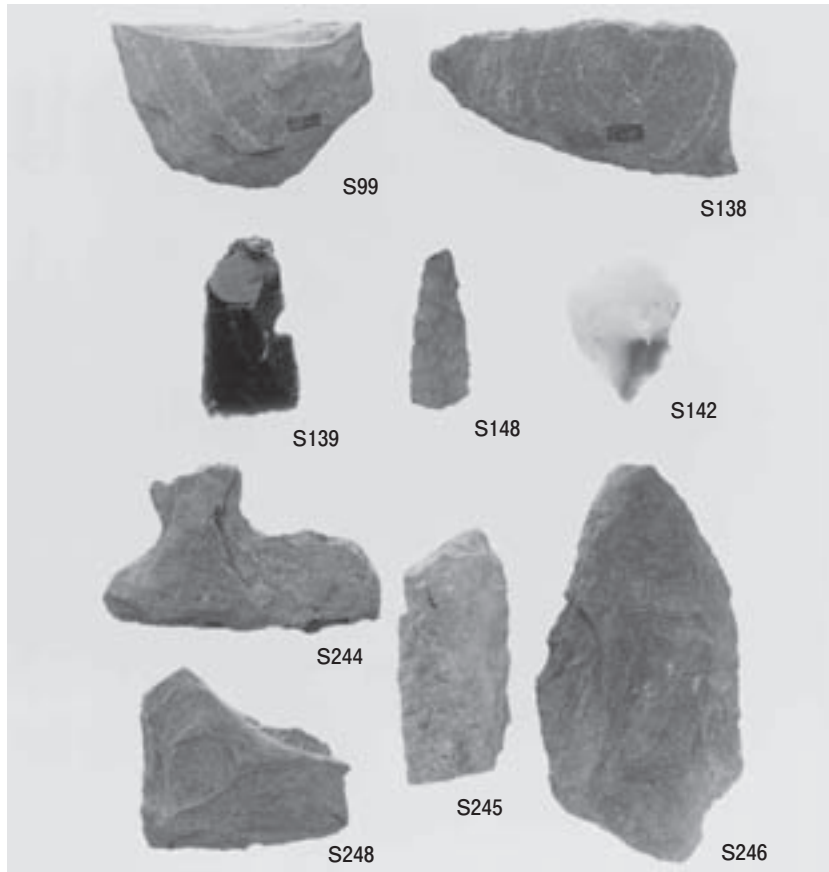
2 SD 6 出土石器



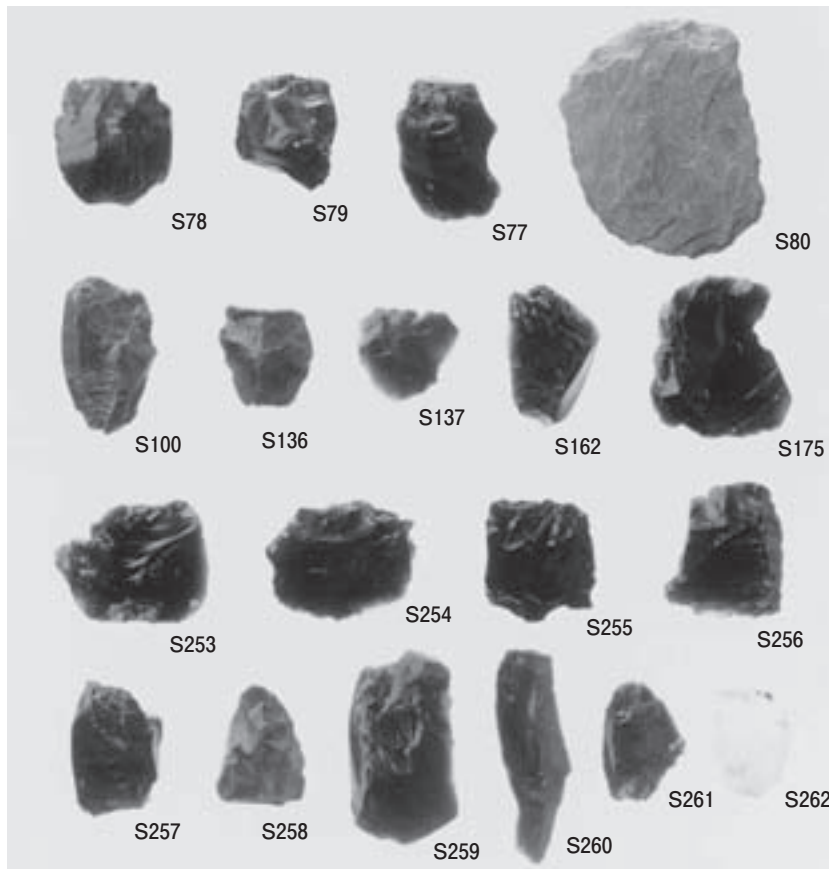
石鏃



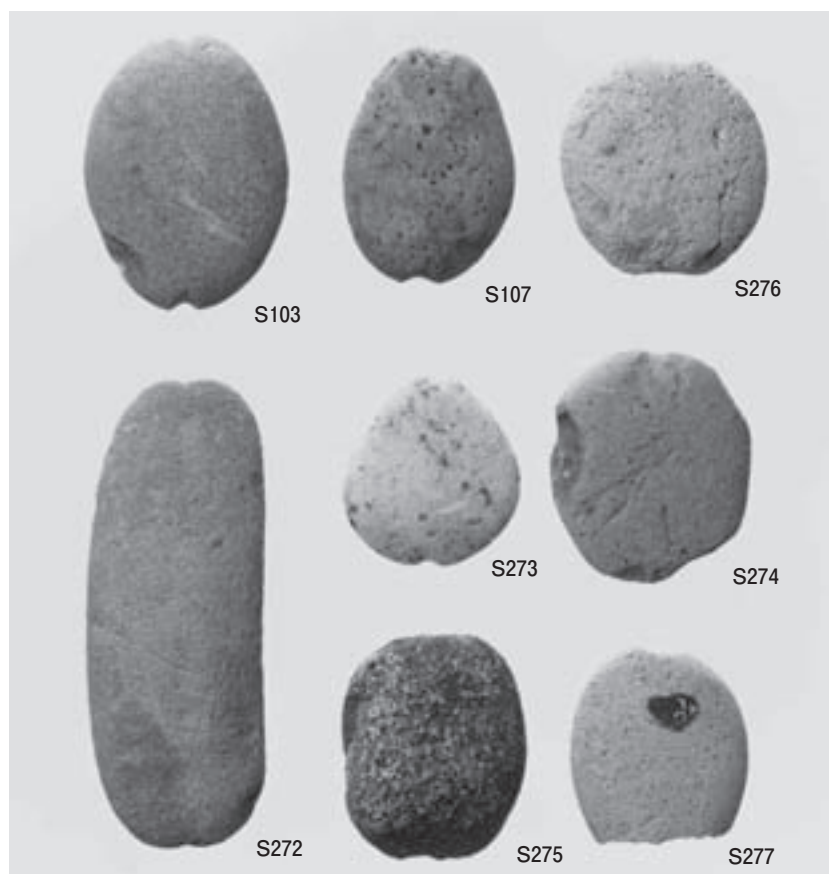
石鏃



1 石匙・削器等



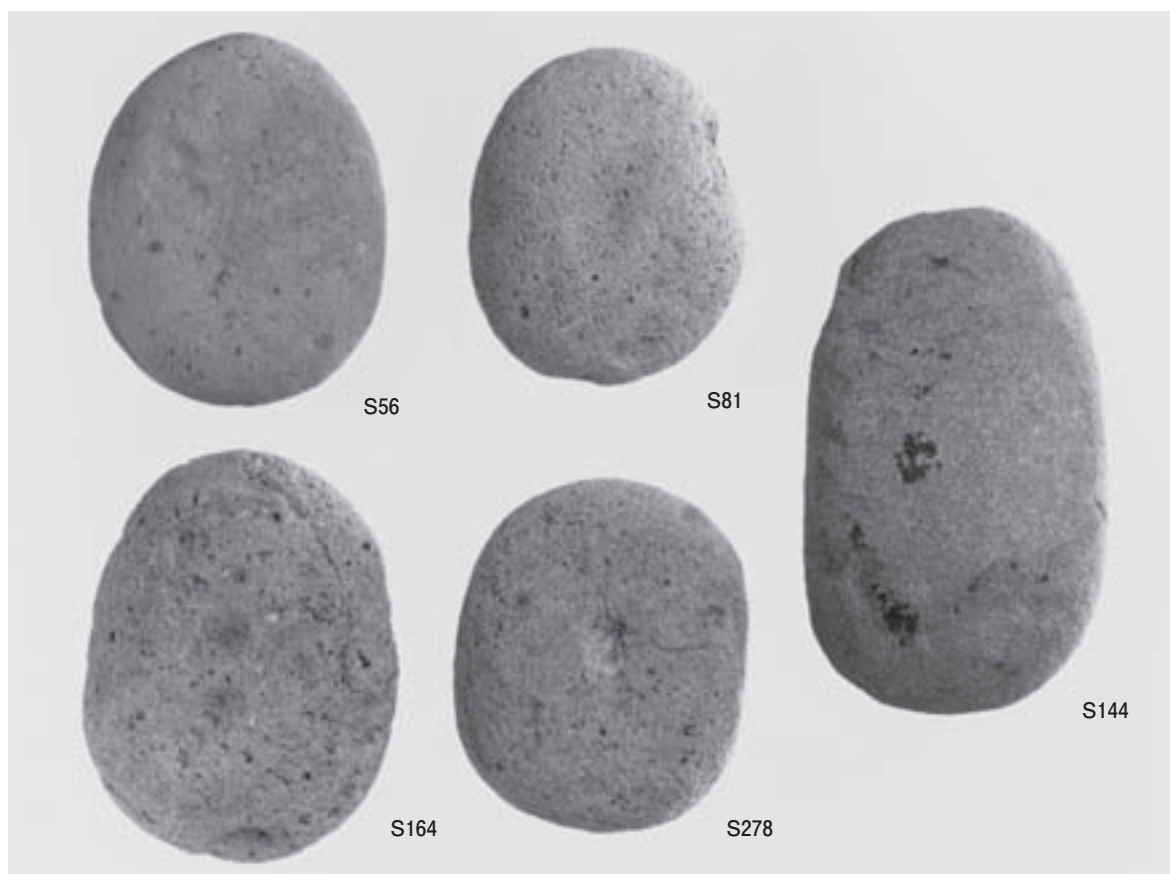
2 楔形石器・石鏃未成品



1 石錘



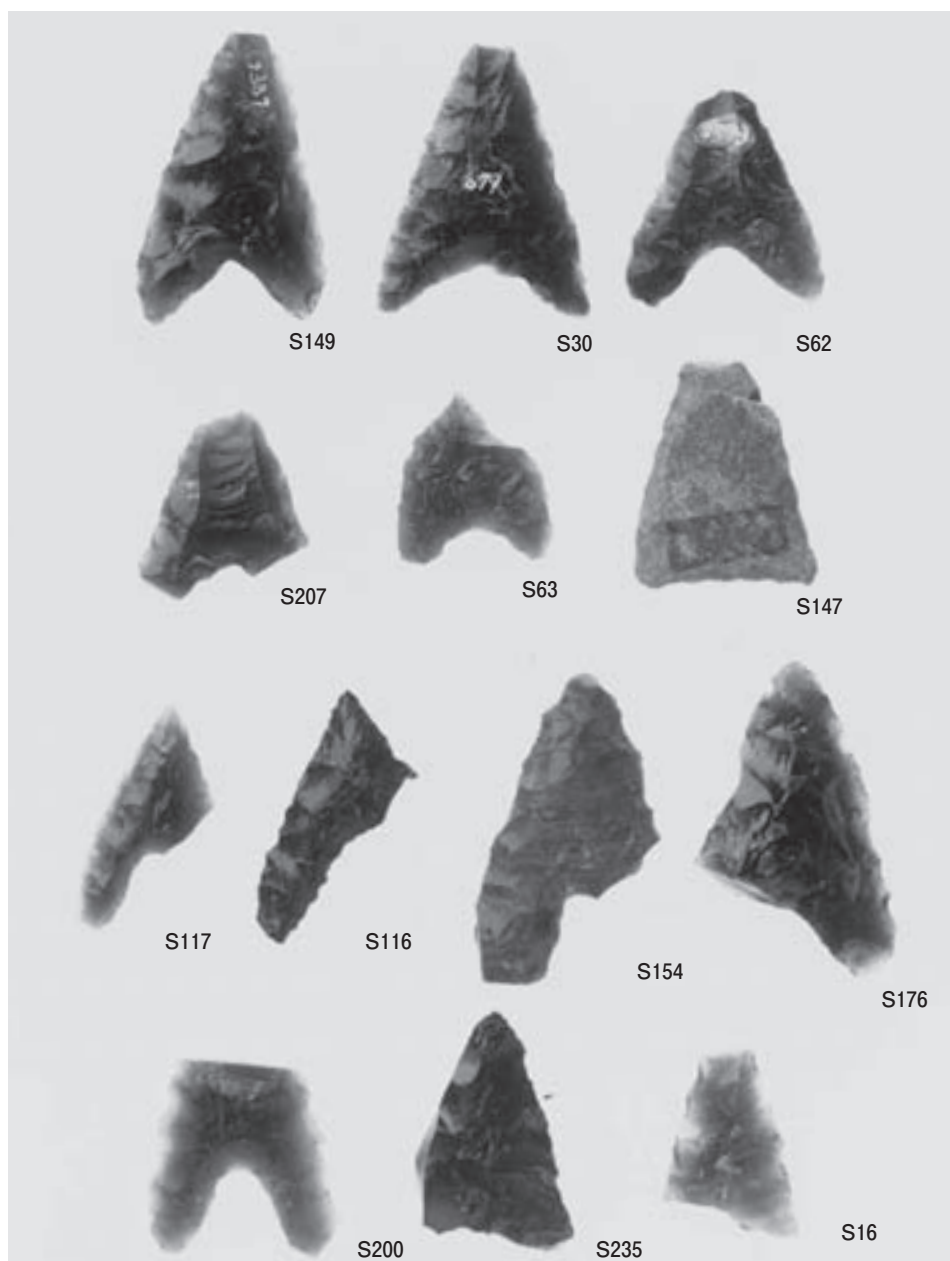
2 磨製石斧



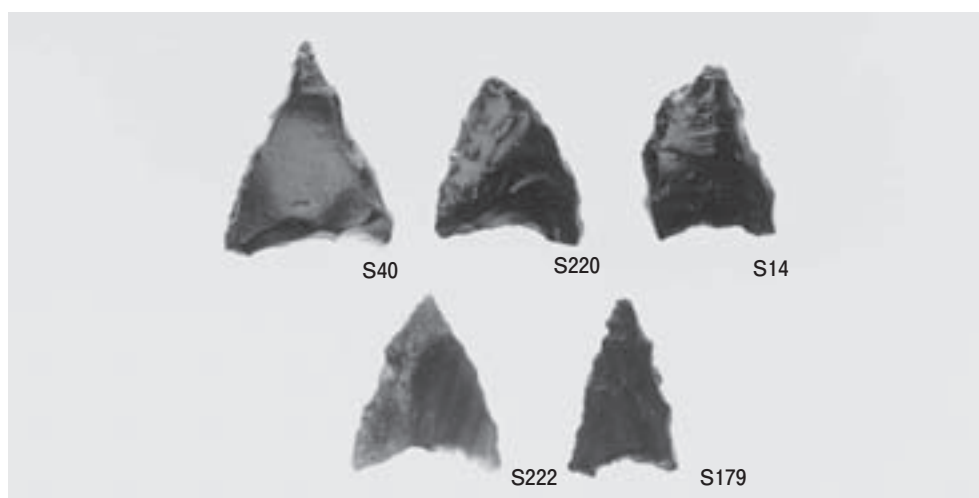
1 凹石・敲石



2 砥石・硯



1 使用によって破損した石鏃



2 初心者が製作した石鏃

報告書抄録

ふりがな	さかちようまえたいせき							
書名	坂長前田遺跡							
副書名	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	115							
編著者名	野口良也、高橋章司							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話 (0857) 51-7552							
発行年月日	2011（平成23）年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかちようまえたいせき 坂長前田遺跡	とっとりけんさいほくぐんほう 鳥取県西伯郡伯耆町 さかちようまえたいせき 坂長字前田2342番地ほか	31371	1-377	35° 22' 37"	133° 24' 10"	20090223 ～ 20091028	9,519㎡	一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
坂長前田遺跡	その他	縄文時代		土坑 落とし穴 自然流路		縄文土器、石器		
		弥生時代		自然流路		弥生土器		
		古墳時代 ～ 近世		土坑 溝		土師器、須恵器、鉄製品、木製品		
要約	坂長前田遺跡では縄文時代後期から近世までの遺構が検出された。縄文時代後期の遺構として、土坑、落とし穴が確認されたほか、多量の石鏃が出土した。古墳時代から近世の遺構は、土坑、溝が認められる。遺構埋土や遺物包含層中からは木製形代など多くの木製祭祀具が出土し、古代、中世における本地域の祭祀の一端が窺われる。また、遺物包含層中からであるが、平安時代末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札の出土は、当該期における本地域の政治的状況を窺い知る際に重要なものである。							

鳥取県教育文化財団調査報告書115
一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県西伯郡伯耆町

坂 長 前 田 遺 跡

発 行 2011年 3月28日
編 集 財団法人鳥取県教育文化財団 調査室
〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地
電話 (0857) 51-7552
発行者 財団法人鳥取県教育文化財団
印 刷 勝美印刷株式会社